

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第131集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

矢田遺跡 III

平安時代住居跡編 (3)

1 9 9 2

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

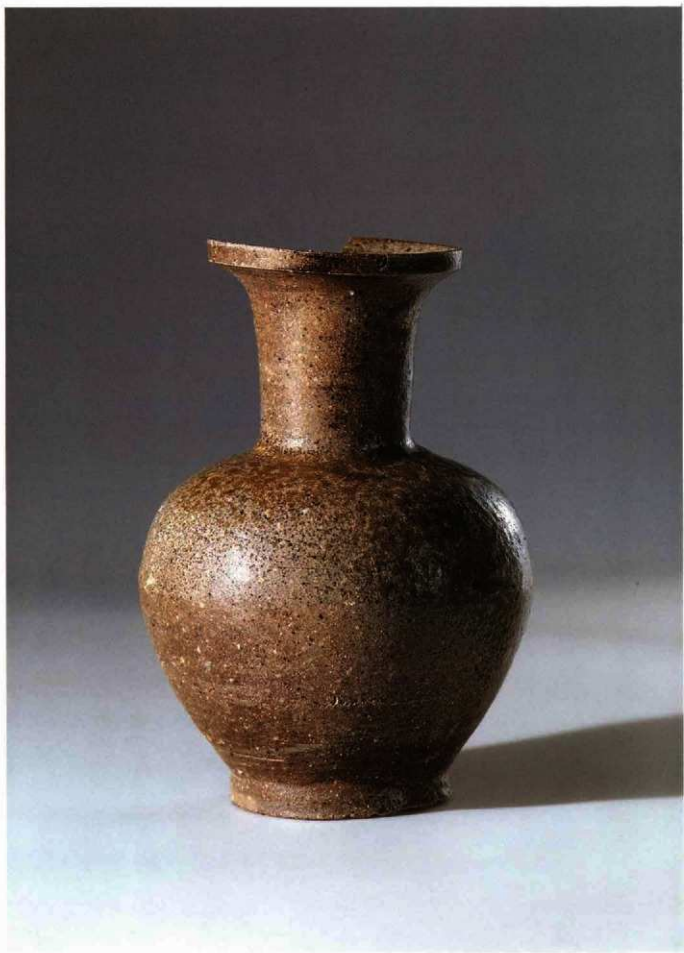
助群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第131集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

矢田遺跡 III

平安時代住居跡編 (3)

1 9 9 2

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



465号住居跡出土花瓶

序

長野県、群馬県の熱い期待の中、上信越自動車道建設工事は平成4年度中の供用開始を目指して、着々と進行しております。矢田遺跡のあります吉井地区も橋梁工事丘陵の掘削工事が進み周辺の景観も大きく変貌してまいりました。

矢田遺跡を含むこの地域は、国指定史跡の「多胡碑」や「続日本紀」の関連記事から、「上野国多胡郡八(矢)田郷」にあたるのではないかと推定されておりました。発掘調査の結果、「八田郷」と刻書された紡錘車をはじめ数々の文字資料の出土があり、当初の推定が証明されたという貴重な遺跡であります。

矢田遺跡は吉井インターチェンジ(仮称)に在り、広大な面積を持ち、大規模な古代の集落跡も出現したことから、発掘調査は昭和61年度から平成3年度半ばに及ぶ長期間にわたりました。したがって、整理事業も平成元年度よりのべ9年という長い期間が設定され、既に報告書を2巻刊行してきました。

本報告書が県民各位・研究者・各教育機関等で広く活用され、この地域の歴史を解明していく一助となることができれば幸いに存じます。

また、発掘調査・整理事業を行うにあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・吉井町教育委員会をはじめ多くの方々からいただきました御指導・御援助に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺 弘 之

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「^{みづいせき}矢田遺跡」の発掘調査報告書である。本書は、平安時代住居跡編（3）で、矢田遺跡の調査成果の分冊の3である。
- 2 矢田遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田の周辺に所在し、大字名を遺跡名に採用している。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者
 - (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年4月1日～平成2年8月27日、平成3年11月5日～11月26日
調査担当者 鬼形芳夫（昭和61年度、専門員、現高崎市教育委員会事務局文化財保護係長）
依田治雄（平成3年度、課長）
中沢 悟（昭和61年度～平成3年度、主任調査研究員）
春山秀幸（昭和62・63年度、調査研究員、現藤岡市立東中学校教諭）
関口功一（昭和63・平成元年度、調査研究員、現桐生市立商業高等学校教諭）
内木真琴（昭和61・62年度、現群馬県立高崎北高等学校教諭）
富田一仁（平成元・2年度、調査研究員）
関口博幸（平成2年度、調査研究員）
 - (2) 整理 整理期間 平成3年4月1日～平成4年3月31日、整理担当者 富田一仁
 - (3) 事務 常務理事 白石保三郎（昭和61～63年度）、邊見長雄
事務局長 井上唯雄（昭和61・62年度）、松本浩一
管理部長 大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄（昭和62～平成2年度）、佐藤 勉
調査研究部長 上原啓巳（昭和61～63年度）、神保侑史
関越道上越線調査事務所所長 井上 信（昭和61～63年度）、高橋一夫（平成元・2年度）
阿部千明（平成3年4月～11月）、松本浩一（兼務）
総括次長 片桐光一（昭和61～平成元年度）、大澤友治
次 長 原田恒弘（昭和62年度）、徳江 紀（昭和63～平成2年度）
課 長 長谷部達雄（昭和61年度）、鬼形芳夫（昭和63年度～平成2年度）、依田治雄
庶務課 係長代理 黒澤重樹（昭和61～63年度）、宮川初太郎（平成元・2年度）
主任 国定 均（昭和63～平成元年度）、笠原秀樹
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、田中智恵美、高田千恵
- 6 報告書作成関係者
編 集 富田一仁
本文執筆 第1章 第1節 依田治雄、第2節 富田、第2章 富田、第3章 鬼形芳夫・中沢 悟・内木真琴・春山秀幸・関口功一・富田一仁・関口博幸
(分担は、住居跡の事実記載の末尾に明示した)

第4章 第1節 小林昌二、第2節 関 和彦、第3節 高島英之、第4節 富田
遺構写真 鬼形芳夫、依田治雄、中沢 悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一、富田一仁、 関口博幸
遺物保存処理 関 邦一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師） 小材浩一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員）
遺物写真 佐藤元彦（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）
遺物観察 富田一仁
整理補助 秋元経子、遠藤栄子、酒井史恵、下山弥生、高橋幸子、温井久子、堀米弘美
委託関係 【航空写真】 鶴青高館 【遺構測量、遺構・遺物トレース】 鶴淵設 【石材鑑定】 陣内主一氏にそれぞれ委託した。

- 7 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。
- 8 報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、50音順）

吉井町教育委員会、石井克巳、井上唯雄、井上 太、岩本次郎、内田憲治、大平 聡、唐沢保之、小林昌二、小森哲也、小森紀男、志村 哲、陣内主一、鈴木靖民、関 和彦、大工原 豊、田熊清彦、東野治之、仲山英樹、野田嶺志、平川 南、前沢和之、前原 豊、松田 猛、丸山治雄、宮下健司、宮瀧文二、茂木 努、茂木由行、森田 梯、矢野健一、若狭 敏

9 発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、(故) 新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井 緑、新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚 房、伊倉茂登子、井田松寿、今井 好、浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸 啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、栗原 清、黒沢敦子、黒沢京子、黒沢 治、小島八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀 大、紫藤カタル、紫藤 孝、霧崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水桂子、清水千代、白井精一、神保恵子、神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田 嵩、高田三枝子、高橋千恵子、高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃 満、寺尾克代、中村いち、棚島静子、棚島豊純、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、林 敏子、原口葉子、平田 昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、丸山圭子、三ヶ島富二郎、三木時一、宮下恵子、村上繁代、望月登代子、百瀬美子、森 利子、森 基司、矢田部喜代美、山崎孝子、湯淺安代、吉田良子、吉田たづ子、(故) 吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子 （敬称略、50音順）

上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。

凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。

住居跡—1/60、竈・貯蔵穴等付属施設—1/30を原則に、基準としてスケールを配している。

- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表す。

- 3 遺構実測図の方位記号は、座標北を示す。(国土地標第IX系)

- 4 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。

土器については、坏・埴・皿等は1/3、甕・羽釜・甕・壺等は1/4、瓦1/4、紡錘車・土鍾1/3、砥石・鉄製品1/3を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。

- 5 遺構及び遺物実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

(遺構)  遺構下部  焼土  灰  粘土

(遺物)  灰軸陶器施軸部分  黒色処理部分

その他の場合はその都度示す。

遺構図面に関しては、必要に応じ遺物分布のドット図を作成したが、シンボル・マークは下記のことを示す。

● 土器 △ 石 ▲ 鉄製品 ■ 瓦 ★ 石製品 ☆ 鉄製紡錘車

- 6 出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。

- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。

- 8 住居跡の面積値は、プランメーターで3回計測し、その平均値を用いている。

- 9 住居跡の時期区分の基準となる土器の年代観は、基本的に(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「清里・陣場遺跡」(1981年)に拠る。

- 10 本文中の石材名は、陣内主一氏の鑑定による。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
抄 録	

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過	依田治雄・富田一仁	3
第2章 地理的環境及び歴史的環境		8
第3章 平安時代の遺構と遺物		
	鬼形芳夫・依田治雄・中沢 悟・内木真琴 春山秀幸・関口功一・富田一仁・関口博幸	
第1節 概 要		11
第2節 竪穴住居跡と出土遺物		15
第4章 若干の考察及びまとめ		
第1節 物部の分布とその意味について	新潟大学 小林昌二	241
第2節 矢田遺跡と養蚕	共立女子第二高校 関 和彦	249
第3節 矢田遺跡出土の平安期における文字資料について	高島英之	256
第4節 小 結		275

写真図版	
付 図	

挿 図 目 次

第 1 図	矢田遺跡調査区及びグリッド配置図	第 60 図	454号住居跡実測図 (1)
第 2 図	矢田遺跡と周辺主要道路	第 61 図	454号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第 3 図	矢田遺跡周辺図	第 62 図	457号住居跡実測図 (1)
第 4 図	矢田遺跡遺構分布図	第 63 図	457号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第 5 図	51号住居跡実測図 (1)	第 64 図	459号住居跡実測図 (1)
第 6 図	51号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第 65 図	459号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第 7 図	51号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 66 図	461号住居跡実測図
第 8 図	51号住居跡出土遺物実測図 (3)	第 67 図	461号住居跡出土遺物実測図
第 9 図	52号住居跡実測図 (1)	第 68 図	464号住居跡実測図及び出土遺物実測図 (1)
第 10 図	52号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第 69 図	464号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 11 図	52号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 70 図	465号住居跡実測図 (1)
第 12 図	55号住居跡実測図 (1)	第 71 図	465号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)
第 13 図	55号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第 72 図	465号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 14 図	57号住居跡実測図 (1)	第 73 図	465号住居跡出土遺物実測図 (3)
第 15 図	57号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第 74 図	475号住居跡実測図
第 16 図	57号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 75 図	475号住居跡出土遺物実測図 (1)
第 17 図	60号住居跡実測図及びび出土遺物実測図	第 76 図	475号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 18 図	63号住居跡実測図 (1)	第 77 図	476号住居跡実測図 (1)
第 19 図	63号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第 78 図	476号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第 20 図	63号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 79 図	477号住居跡実測図及びび出土遺物実測図 (1)
第 21 図	63号住居跡出土遺物実測図 (3)	第 80 図	477号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 22 図	64号住居跡実測図 (1)	第 81 図	477号住居跡出土遺物実測図 (3)
第 23 図	64号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第 82 図	479号住居跡実測図 (1)
第 24 図	64号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 83 図	479号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第 25 図	66号住居跡実測図	第 84 図	482号住居跡実測図 (1)
第 26 図	66号住居跡出土遺物実測図	第 85 図	482号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)
第 27 図	69号住居跡実測図	第 86 図	482号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 28 図	69号住居跡出土遺物実測図	第 87 図	483号住居跡実測図
第 29 図	70号住居跡実測図及びび出土遺物実測図	第 88 図	483号住居跡出土遺物実測図
第 30 図	71号住居跡実測図及びび出土遺物実測図 (1)	第 89 図	495号住居跡実測図 (1)
第 31 図	71号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 90 図	495号住居跡実測図 (2)
第 32 図	72号住居跡実測図及びび出土遺物実測図	第 91 図	495号住居跡出土遺物実測図 (1)
第 33 図	73号住居跡実測図	第 92 図	495号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 34 図	74号住居跡実測図及びび出土遺物実測図	第 93 図	495号住居跡出土遺物実測図 (3)
第 35 図	151号住居跡実測図及びび出土遺物実測図 (1)	第 94 図	512号住居跡実測図 (1)
第 36 図	151号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 95 図	512号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)
第 37 図	154号住居跡実測図 (1)	第 96 図	512号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 38 図	154号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)	第 97 図	513号住居跡実測図 (1)
第 39 図	154号住居跡出土遺物実測図 (2)	第 98 図	513号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)
第 40 図	181号住居跡実測図	第 99 図	513号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 41 図	181号住居跡出土遺物実測図	第100図	514号住居跡実測図及びび出土遺物実測図
第 42 図	223号住居跡実測図及びび出土遺物実測図	第101図	515号住居跡実測図 (1)
第 43 図	244号住居跡実測図 (1)	第102図	515号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図
第 44 図	244号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図	第103図	517号住居跡実測図 (1)
第 45 図	313号住居跡実測図	第104図	517号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)
第 46 図	313号住居跡出土遺物実測図	第105図	517号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 47 図	398号住居跡実測図 (1)	第106図	519号住居跡実測図及びび出土遺物実測図 (1)
第 48 図	398号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図	第107図	519号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 49 図	428号住居跡実測図 (1)	第108図	525号住居跡実測図及びび出土遺物実測図
第 50 図	428号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図	第109図	526号住居跡実測図 (1)
第 51 図	430号住居跡実測図 (1)	第110図	526号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)
第 52 図	430号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)	第111図	526号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 53 図	430号住居跡出土遺物実測図 (2)	第112図	530号住居跡実測図 (1)
第 54 図	435号住居跡実測図及びび出土遺物実測図	第113図	530号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図
第 55 図	449号住居跡実測図	第114図	531号住居跡実測図及びび出土遺物実測図
第 56 図	449号住居跡出土遺物実測図	第115図	532号住居跡実測図 (1)
第 57 図	451号住居跡実測図 (1)	第116図	532号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)
第 58 図	451号住居跡実測図 (2) 及びび出土遺物実測図 (1)	第117図	532号住居跡出土遺物実測図 (2)
第 59 図	451号住居跡出土遺物実測図 (2)	第118図	534号住居跡実測図及びび出土遺物実測図

第119回	535号住居跡実測図 (1)	第181回	662号住居跡実測図 (1)
第120回	535号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第182回	662号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第121回	535号住居跡出土遺物実測図 (2)	第183回	663号住居跡実測図
第122回	549号住居跡実測図 (1)	第184回	663号住居跡出土遺物実測図 (1)
第123回	549号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第185回	663号住居跡出土遺物実測図 (2)
第124回	554号住居跡実測図	第186回	664号住居跡実測図
第125回	554号住居跡出土遺物実測図	第187回	664号住居跡出土遺物実測図 (1)
第126回	563号住居跡実測図 (1)	第188回	664号住居跡出土遺物実測図 (2)
第127回	563号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第189回	667号住居跡実測図 (1)
第128回	563号住居跡出土遺物実測図 (1)	第190回	667号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)
第129回	563号住居跡出土遺物実測図 (3)	第191回	667号住居跡出土遺物実測図 (2)
第130回	568号住居跡実測図及び出土遺物実測図	第192回	670号住居跡実測図 (1)
第131回	570号住居跡実測図 (1)	第193回	670号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第132回	570号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第194回	675号住居跡実測図
第133回	570号住居跡出土遺物実測図 (2)	第195回	675号住居跡出土遺物実測図
第134回	570号住居跡出土遺物実測図 (3)	第196回	676号住居跡実測図 (1)
第135回	585号住居跡実測図 (1)	第197回	676号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第136回	585号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第198回	679号住居跡実測図 (1)
第137回	586号住居跡実測図	第199回	679号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)
第138回	590号住居跡実測図 (1)	第200回	679号住居跡出土遺物実測図 (2)
第139回	590号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第201回	679号住居跡出土遺物実測図 (3)
第140回	595号住居跡実測図 (1)	第202回	684号住居跡実測図 (1)
第141回	595号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第203回	684号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)
第142回	596号住居跡実測図 (1)	第204回	684号住居跡出土遺物実測図 (2)
第143回	596号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第205回	697号住居跡実測図及び出土遺物実測図
第144回	596号住居跡出土遺物実測図 (2)	第206回	704号住居跡実測図 (1)
第145回	596号住居跡出土遺物実測図 (3)	第207回	704号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図
第146回	600号住居跡実測図 (1)	第208回	711号住居跡実測図 (1)
第147回	600号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第209回	711号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)
第148回	600号住居跡出土遺物実測図 (2)	第210回	711号住居跡出土遺物実測図 (2)
第149回	608号住居跡実測図及び出土遺物実測図 (1)	第211回	711号住居跡出土遺物実測図 (3)
第150回	608号住居跡出土遺物実測図 (2)	第212回	716号住居跡実測図 (1)
第151回	621号住居跡実測図	第213回	716号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)
第152回	622号住居跡実測図 (1)	第214回	716号住居跡出土遺物実測図 (2)
第153回	622号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第215回	720号住居跡実測図
第154回	624号住居跡実測図	第216回	747号住居跡実測図及び出土遺物実測図 (1)
第155回	624号住居跡出土遺物実測図	第217回	747号住居跡出土遺物実測図 (2)
第156回	646号住居跡実測図及び出土遺物実測図 (1)	第218回	12・145号住居跡出土遺物実測図
第157回	646号住居跡出土遺物実測図 (2)	第219回	矢田遺跡遺構分布図
第158回	647号住居跡実測図 (1)	第220回	矢田遺跡鳥居前土塼等高級図
第159回	647号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)	第221回	矢田遺跡小支谷分布図
第160回	647号住居跡出土遺物実測図 (2)	第222回	馬井峯遺跡
第161回	647号住居跡出土遺物実測図 (3)	第223回	西組遺跡
第162回	647号住居跡出土遺物実測図 (4)	第224回	10C前半の矢田遺跡
第163回	647号住居跡出土遺物実測図 (5)	第225回	「北馬 馬手 為朝名」という習書のある紡績車
第164回	651号住居跡実測図	第226回	9世紀前半・後半代の集落
第165回	651号住居跡出土遺物実測図 (1)	第227回	10世紀前半・後半代の集落
第166回	651号住居跡出土遺物実測図 (2)	第228回	9世紀前半代出土文字資料
第167回	651号住居跡周辺遺構復原図	第229回	9世紀後半代出土文字資料 (1)
第168回	652号住居跡実測図 (1)	第230回	9世紀後半代出土文字資料 (2)
第169回	652号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第231回	10世紀前半代出土文字資料 (1)
第170回	653号住居跡実測図及び出土遺物実測図 (1)	第232回	10世紀前半代出土文字資料 (2)
第171回	653号住居跡出土遺物実測図 (2)	第233回	10世紀後半代出土文字資料
第172回	654号住居跡実測図 (1)	第234回	文字瓦
第173回	654号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図	第235回	町字紡績車・標印
第174回	656号住居跡実測図 (1)		
第175回	656号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図 (1)		
第176回	656号住居跡出土遺物実測図 (2)		
第177回	657号住居跡実測図 (1)		
第178回	657号住居跡実測図 (2) 及び出土遺物実測図		
第179回	661号住居跡実測図及び出土遺物実測図 (1)		
第180回	661号住居跡出土遺物実測図 (2)		

表 目 次

<p>第1表 整理工程表</p> <p>第2表 住居跡一覧表</p> <p>第3表 51号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第4表 52号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第5表 55号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第6表 57号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第7表 60号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第8表 63号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第9表 64号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第10表 66号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第11表 69号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第12表 70号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第13表 71号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第14表 72号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第15表 74号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第16表 151号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第17表 154号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第18表 181号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第19表 223号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第20表 244号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第21表 313号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第22表 398号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第23表 428号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第24表 430号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第25表 435号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第26表 449号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第27表 451号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第28表 454号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第29表 457号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第30表 459号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第31表 461号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第32表 464号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第33表 465号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第34表 475号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第35表 476号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第36表 477号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第37表 479号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第38表 482号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第39表 483号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第40表 495号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第41表 512号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第42表 513号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第43表 516号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第44表 515号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第45表 517号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第46表 519号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第47表 525号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第48表 526号住居跡出土遺物観察表</p>	<p>第49表 530号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第50表 531号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第51表 532号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第52表 534号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第53表 535号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第54表 549号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第55表 554号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第56表 563号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第57表 568号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第58表 570号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第59表 585号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第60表 590号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第61表 595号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第62表 596号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第63表 600号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第64表 608号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第65表 622号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第66表 624号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第67表 646号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第68表 647号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第69表 651号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第70表 652号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第71表 653号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第72表 654号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第73表 656号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第74表 657号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第75表 661号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第76表 662号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第77表 663号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第78表 664号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第79表 667号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第80表 670号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第81表 675号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第82表 676号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第83表 679号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第84表 684号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第85表 697号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第86表 704号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第87表 711号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第88表 716号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第89表 747号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第90表 12・145号住居跡出土遺物観察表</p> <p>第91表 物部分布表</p> <p>第92表 矢田遺跡出土 平安時代文字資料一覧表</p> <p>第93表 墨書土器の部位・方向別の点数</p> <p>第94表 時期別の墨書土器の層位とその点数</p> <p>第95表 古代焼印出土例一覧</p>
--	---

圖 版 目 次

- 卷面圖版 465号住居跡出土花瓶
圖版1 矢田遺跡全景航空写真
圖版2 第7次調査区航空写真・第8次調査区航空写真・
第9次調査区航空写真
圖版3 51・52・55・57号住居跡
圖版4 57・63・64・66・69号住居跡
圖版5 70・71・72号住居跡
圖版6 151・154号住居跡
圖版7 154・181・223・244号住居跡
圖版8 244・313・318・396号住居跡
圖版9 398・428・430・435号住居跡
圖版10 435・449・451・454号住居跡
圖版11 454・457・459号住居跡
圖版12 461・464号住居跡
圖版13 464・465号住居跡
圖版14 465・475・476号住居跡
圖版15 477・479・482・483号住居跡
圖版16 495・512・513号住居跡
圖版17 513・514・515・517号住居跡
圖版18 517・519・525・526号住居跡
圖版19 530・531・532号住居跡
圖版20 532・535号住居跡
圖版21 535・549号住居跡
圖版22 554・563・568号住居跡
圖版23 570・585号住居跡
圖版24 585・586・590号住居跡
圖版25 595・596号住居跡
圖版26 595・596・600・608・621・622号住居跡
圖版27 622・624・646・647号住居跡
圖版28 646・647・651・652号住居跡
圖版29 653・654・656号住居跡
圖版30 656・657・661号住居跡
圖版31 662・663・664号住居跡
圖版32 667・670号住居跡
圖版33 675・676・679号住居跡
圖版34 679・684号住居跡
圖版35 697・704・711号住居跡
圖版36 711・716号住居跡
圖版37 716・720・747号住居跡
圖版38 51・52・53号住居跡出土土器
圖版39 57・90・63・64・66・69・71号住居跡出土土器
圖版40 72・151・154号住居跡出土土器
圖版41 154・181・244・313・398号住居跡出土土器
圖版42 428・430・435・449・451号住居跡出土土器
圖版43 454・457・459・461・464号住居跡出土土器
圖版44 465・475号住居跡出土土器
圖版45 475・476・477号住居跡出土土器
圖版46 479・482・483・495号住居跡出土土器
圖版47 495・512号住居跡出土土器
圖版48 513・514・515・517・519・526号住居跡出土土器
圖版49 530・531・532・534・535号住居跡出土土器
圖版50 535・549・554・563号住居跡出土土器
圖版51 563・568・570・585号住居跡出土土器
圖版52 590・595・596号住居跡出土土器
圖版53 596・600・608・622・624・646号住居跡出土土器
圖版54 646・647号住居跡出土土器
圖版55 651・652・653・654・658号住居跡出土土器
圖版56 656・657・661・662号住居跡出土土器
圖版57 663・664・667・670号住居跡出土土器
圖版58 675・679・684・697号住居跡出土土器
圖版59 711・716号住居跡出土土器
圖版60 716・747号住居跡出土土器
圖版61 瓦 (1)
圖版62 瓦 (2)
圖版63 瓦 (3)
圖版64 瓦 (4)
圖版65 土鏃・石製紡錘車
圖版66 磁石等
圖版67 鉄製品 (1)
圖版68 鉄製品 (2)・文字資料 (1)
圖版69 文字資料 (2)
圖版70 文字資料 (3)
圖版71 文字資料 (4)

抄 録

1 遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の調査は、昭和61年4月1日から開始され、平成3年11月26日を以て終了した。蒲川によって生成された東西方向に連なる河岸段丘面は、群馬県下でも有数の遺跡地帯として知られており、本遺跡に隣接する地域にも各時代の遺跡の存在が知られ、徐々にその内容が明らかになりつつある。

これまで本遺跡付近は、北方1.5kmにある「多胡碑」や「続日本紀」との関連から、「和名類聚抄」郷名の「上野国多胡郡八(矢)田郷」に比定されてきた。今回の調査は、史料上の問題としての「八(矢)田郷」について、より具体的に考古学的アプローチが行われたという意義がある。調査の成果には、これに対応する集落の存在、「八田郷」「物部郷長」の線刻のある紡錘車をはじめとする各種の文字資料出土などがあり、調査規模の大きさと相俟って、今後分析が進展すれば、集落の時期的展開など当地の古代史研究の発展に寄与するところ大となるであろう。

2 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
竪穴住居跡	縄文中期	3	加曾利E3、埋甕(屋外)7、土壌が検出されている
	古墳前期	5	遺物は少量である
	古墳後期～平安	約 740	
独立柱建物跡		約 20	
住居状遺構		約 30	
溝		約 70	
井 戸		約 20	

この他、土器廃棄場2、粘土探掘場1、小鍛冶3、方形居館址1、ピット多数などがある。また、整理作業の進捗に伴って、総量に若干の上下はあるものと予想される。

◎本報告は、上記のうち平安時代の竪穴住居跡91軒を対象としている。

3 ま と め

吉井町大字矢田の台地上に広がる広い平坦面および緩傾斜面には、縄文時代前期の遺物の散布が知られ、同中期の集落の存在が判明している。調査範囲では、弥生時代の遺構は知られていないが、古墳時代前期には再び集落が形成される。安定的に集落が営まれるのは同後期からで、奈良・平安時代まで継続する。吉井町教育委員会による北側の接続道路部分(椿谷戸遺跡)・南側の圃場整備関連の調査(柳田遺跡)でも同様の所見が得られており、集落の範囲は台地の先端まで広がっていた。

本報告中では、多数の土器をはじめとし、「物Ⅱ・八田」「八」と線刻のある石製紡錘車を含む合計39点の文字資料が含まれている。

今後の整理の成果も含め、より詳細な地域史研究にとっての、膨大な基礎資料の一端が提示されるものと期待される。

や 矢 た 田 い 遺 せき 跡 III

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過

第1節 発掘調査に至る経緯

上信越自動車道（関越自動車道上越線）は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡JCTから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

藤岡市～長野市間の基本計画が昭和47年に決定してから、整備計画策定のための関連公共事業調査（昭和49年）をはじめとし、文化財に関する調査は昭和55～56年に行われている。昭和49年には基本計画ルートに対する文化財の基本的な考え方、即ち文化財保護法の遵守・指定文化財の扱い・文化財に対しては県教委と協議すること等を示し、昭和55～56年にかけての調査は想定されるルートを中心に埋蔵文化財包蔵地の面積を約100万㎡とした。以後、日本道路公団による計画は進捗し、昭和56～57年にかけて路線の発表があった。昭和59年11月、道路公団より県教委に対し分布調査の依頼があり、それをうけ文化財保護課は調査を実施、同60年3月、発掘想定面積を約100万㎡とする回答を行っている。その後、上越線地域埋蔵文化財調査計画の策定が行われ、調査実施年度は昭和61～66年の6年間（後、修正があり昭和65年度＝平成2年度までの5年間に変更）、藤岡市～富岡市の約76万㎡を群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、他は市町村で調査会を組織し実施することになった。

昭和61年4月、県埋蔵文化財調査事業団は多野郡吉井町雨陽台に、上越線の埋蔵文化財発掘調査を担当する「関越道上越線調査事務所」を開所し調査に入った。

矢田遺跡は、羽田倉遺跡・田窪遺跡・内匠下高瀬遺跡と同じく昭和61年当初から調査を行っている。吉井インターチェンジ（仮称）にあたる当遺跡は、インター中心部・それにつながる東側本線部分と西側本線部分及び料金所方向に向かう北側部分の約9万㎡にわたる広大な面積を占めるが、地形等からみて一つの遺跡としたものである。調査期間は約5年を見込み、インター中心部から北側方面、そしてインター東側本線部分へと進む大まかな計画を立て、建設工事の進展があればそれぞれに対応することで公団と協議を行った。

調査はS T A No109～111にかけてのインターにつながる東側部分から開始された。進捗につれ次々と住居跡が出現し、大規模な集落跡が展開することが確実となった。最終的に古墳時代後期から平安時代に至る竪穴住居跡を中心に740軒余を調査した。

矢田遺跡の整理は遺物・遺構ともに膨大な量であることから、のべ9年の期間が必要であるとし、平成元年度より毎年継続して行うこととした。整理の基本方針として、地域を区切ることが困難なため、時代別（地域を加味する）に実施し、最終整理で全体をまとめることとしている。

今年度で3年間整理を実施し、平安時代の住居跡の整理は終了となる。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

本調査区は、吉井インター・チェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事に測量杭のSTANo106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標 $X = +26,800$ 、 $Y = -75,000$ を原点として5m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定水準点の移動は、(株)測設が実施した。なお発掘調査は、地形及び道路等の条件から、便宜的に第1次調査区～第12次調査区に区分し、ほぼこれに応じて進行した。

2 調査の経過

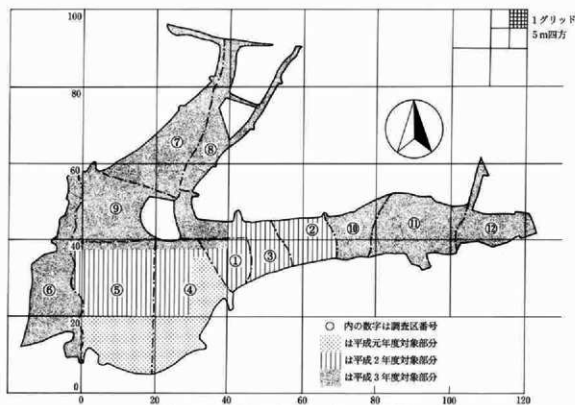
①発掘調査

発掘調査は1986～91年度の都合六年度に亘って行われたが、未買取地の取得状況との関連や、全体の調査工程との関係で若干の前後関係があり、中山(多胡蛇黒)遺跡等の調査を行っていた時期などもある。従って、調査自体に丸六年を費やした訳ではないが、「調査日誌」だけでもB5ファイル5冊にもなり、残念ながらかなりの部分を削除せざるを得なかった。以下、「調査日誌(抄録)」を掲出してみる。

調査日誌(抄)

◎1986年度の調査

5月21日 現場作業の開始、第1次調査区の表土掘削開始。



第1図 矢田遺跡調査区及びグリッド配置図

- 29日 発掘作業員の雇用を始める。
- 6月2日 第1次調査区の調査を開始する。
- 7月1日 第1次調査区と並行して、第2次調査区の調査を開始する。
- 9月10日 第1・2次調査区の空撮を行う。
- 22日 第4次調査区の調査を開始する。
- 10月6日 第3次調査区の調査を開始する。
- 24日 第2次調査区の調査を終了する。
- 12月11日 第3・4次調査区の空撮を行う。
- 1月9日 第4次調査区79号住居跡から「八田郷」と線刻された石製紡錘車が出土する。
- 3月12日 第4次調査区の空撮を行う。
- 14日 現地見学会（～15日）、2日間で1200名程の見学者が訪れる。
- 25日 1986年度の調査を終了する。

◎1987年度の調査

- 4月15日 1987年度の調査を開始する。
- 5月8日 第4次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
- 6月11日 第4次調査区188号住居跡から「八中寸真」の文字瓦が出土する。
- 10月2日 第4次調査区の空撮を行う。
- 7日 第5次調査区の調査を開始する。
- 11月6日 吉井町郷土資料館特別展開催に伴い、矢田遺跡出土の文字瓦を展示する。
- 1月21日 第4次調査区の調査を終了する。
- 3月8日 第5次調査区の空撮を行う。
- 12日 現地見学会（～13日）、2日間で655名程が見学を訪れる。
- 25日 1987年度の調査を終了する。

◎1988年度の調査

- 4月15日 1988年度の調査を開始する。
- 6月7日 第6次調査区の調査を開始する。
- 7月19日 第7次調査区の調査を開始する。
- 10月8日 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団創立10周年記念事業の一環として、本遺跡において道跡見学会を実施する。総数7,685名にのぼる見学者が訪れる。
- 27日 第5次調査区の空撮を行う。
- 11月7日 第5次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
- 14日 第6次調査区の旧河川・石組遺構の調査を終了する。
- 12月1日 第5次調査区の調査を進める。
- 18日 第10次調査区の調査を開始する。
- 2月13日 第8次調査区の表土掘削を開始する。
- 23日 第7次調査区の空撮を行う。
- 28日 第9次調査区の表土掘削を開始する。
- 3月24日 1988年度の調査を終了する。

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過

◎1989年度の調査

- 4月10日 1989年度の調査を開始する。
 7月10日 第7次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 9月26日 第8次調査区（北側部分）の空撮を行う。
 12月21日 第8次調査区の空撮を行う。
 22日 第9次調査区の679号住居跡から「物」（部）・八」と線刻された石製紡錘車が検出される。
 1月8日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 2月27日 第11次調査区の表土掘削を開始する。
 3月9日 第9次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 23日 1989年度の調査を終了する。

◎1990年度の調査

- 4月9日 1990年度の調査を開始する。
 5月1日 第11次調査区の728号住居跡から「八田」と線刻された石製紡錘車が検出される。
 11日 第8・10次調査区の空撮を行う。
 14日 矢田遺跡の調査と並行して中山遺跡の表土掘削を開始する。
 16日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 21日 第10次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 6月18日 第11次調査区の空撮を行う。
 20日 第11次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 21日 第11次調査区の50-88グリッドAT層下から、矢田遺跡で初めて黒曜石製の台形椀石器が1点検出される。

第1表 整理工程表

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
分類・復元		■												
実測				■										
拓本							■							
トレース		●	● 保存処理				■							外注
版下作成								■						
写真撮影				●		●	●							
写真版下作成								■						
図面作成		■												
トレース					■					■				外注
版下作成								■						
写真版下作成								■						
土器観察表									■					
本文						■								
その他										■	★	■		校正・収載

- 7月2日 第11次調査区に330㎡の旧石器本調査区を設定して、本日より6日まで調査を行う。AT層下からチャート・安山岩製の台形椽石器2点を含む総数14点の石器が検出された。
- 8月27日 第12次調査区の空中写真撮影を実施(生活の痕跡無し)。未買収地関連で調査不能の地点を残して調査を一旦中断し、機材を取り纏めて多胡蛇黒(中山)遺跡の調査に入る。

◎1991年度の調査

- 11月5日 未買収地関連の調査を開始する。
- 11日 743号住居跡(奈良)が検出される。
- 12日 旧石器試掘調査を開始する。
- 26日 空撮を行う。矢田遺跡の全調査を終了する。

②整理作業

本年度の整理作業は、前年度の作業をうけて平成2年4月1日から、吉井町南陽台の上越線事務所内の整理棟で、担当1名・補助員7名で行われた。その概要は以下の通りである。

4月上旬	整理作業諸準備
4月中旬～6月下旬	遺物の分類・接合及び復元 遺構図面修正 鉄製品保存処理 遺物写真撮影
7月上旬～10月上旬	土器・瓦・石製品・鉄製品実測、拓本 トレース(遺構・遺物)外注
10月中旬～12月下旬	レイアウト 図面・写真版下作成 原稿執筆 遺物観察表作成 石材鑑定
1月20日	入札
1月24日	入稿
1月下旬以降	校正・収蔵等諸作業

第2章 地理的環境及び歴史的環境

地理的環境及び歴史的環境については、既刊の報告書「矢田遺跡」[矢田遺跡II]において、詳述されているので、本報告書では遺跡の立地も含め、本遺跡と同じ平安時代の集落跡を中心に、周辺に所在する主な遺跡を概観することとどめたい。

矢田遺跡は、群馬県南西部の多野郡吉井町大字矢田字天王原他に所在する。本遺跡の北方には鍋川が東流する。この鍋川は長野県境に源を発し、甘楽郡南牧村、下仁田町、富岡市、甘楽町、多野郡吉井町を経て、藤岡市上落合付近で鮎川を合わせ、高崎市倉賀野町で利根川支流の烏川に合流する。鍋川右岸域においては顕著な河岸段丘が発達しており、大きく分けて上位と下位の段丘面に分けられる。河床面からの比高差は、下位段丘面で10～15mを、上位段丘面で50～60mを測る。

本遺跡は上位段丘面上の多胡丘陵東部に位置し、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北にのびる台地上に存在し、標高は150～160m前後を測る。この台地も実際には細かい侵食をうけ、南北や東西方向の小支谷が形成され、複雑な地形を呈している。なお調査の結果、矢田遺跡西縁を画する西谷川は、谷の中央部付近を蛇行する旧河川の流路が確認されており、現在の台地縁辺を刻む流れは、人為的な流路の変換であることが明らかになっている。

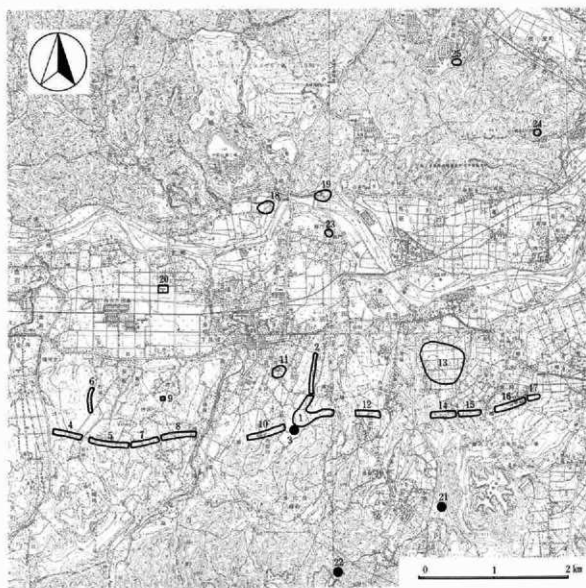
矢田遺跡において安定的に集落が営まれるのは古墳時代後期からで、奈良・平安時代まで継続する。同様な所見は、吉井町教育委員会調査による椿谷戸遺跡(2)や柳田遺跡(3)でも得られており、集落の範囲は台地最奥部から先端部まで広がることが判明している。平安時代の集落跡に限ると、270軒以上の竪穴住居跡が検出されている矢田遺跡をはじめとして、上越線関連で長根羽田倉遺跡(5)、神保富士塚遺跡(7)、多胡蛇黒遺跡(10)、黒熊八幡遺跡(15)等多くの遺跡が認められ、鍋川右岸の上位段丘面上を中心に濃密な分布をもつが、該期には下位段丘面へ拡大する傾向が窺える。

ところで、群馬県下では火山噴出物を鍍層とした調査・研究が進展しており、天仁元年(1108年)降下とされる浅間Bテフラに覆われた水田遺構が県内各地で発見されているが、鍋川流域でも条理型の方面地割りに規制された水田を始め、長根羽田倉遺跡・黒熊八幡遺跡では谷戸を利用した水田が確認されている。

窯跡としては、矢田遺跡背後の丘陵に瓦・須恵器を生産する吉井・藤岡窯跡群があり、下五反田窯跡(21)、末ノ沢窯跡(22)等多くがある。

また、矢田遺跡の北方1.5kmの下位段丘面には、多胡碑(23)が所在する。周知のように「多胡碑」は、「山ノ上碑」(24)・「金井沢碑」(25)と合わせて上野三碑と呼称され、さらに日本三古碑の一つにも数えられている。時期的に最も古い「山ノ上碑」が辛巳歳(681年)、新しい「金井沢碑」が神龜三年(726年)と近い年代の中で建碑されているが、該期の金石文は全国的にも稀であるのにもかかわらず、これら三碑が近接して所在することは、本地域の特色と言える。

なお、自然地理的環境及び中世以降の歴史的環境については、次の報告書以降で適宜取り上げる。また、遺跡の層序についても前報告と同様であるので割愛したい。



- | | |
|-------------|-----------|
| 1 矢田遺跡 | 14 黒熊中西遺跡 |
| 2 椿谷戸遺跡 | 15 黒熊八幡遺跡 |
| 3 柳田遺跡 | 16 黒熊築崎遺跡 |
| 4 長根安坪 | 17 白石根岸遺跡 |
| 5 長根羽田倉 | 18 富岡遺跡 |
| 6 西脇場遺跡 | 19 川橋遺跡 |
| 7 神保富士塚遺跡 | 20 道六神遺跡 |
| 8 神保植松遺跡 | 21 下五反田遺跡 |
| 9 折茂東遺跡 | 22 末ノ沢遺跡 |
| 10 多胡蛇黒遺跡 | 23 多胡碑 |
| 11 川内遺跡 | 24 山ノ上碑 |
| 12 多比良造部野遺跡 | 25 金井沢碑 |
| 13 黒熊遺跡群 | |

第2図 矢田遺跡と周辺主要遺跡



第3図 矢田遺跡周辺図

第3章 平安時代の遺構と遺物

第1節 概 要

本報告では、第4・5次調査区の北端部分、第6～12次調査区全体を扱う(第1図)。過年度対象地域で漏れた住居跡も含め、整理対象住居軒数は91軒を数える。今回で平安時代の住居跡に関する報告が完結することになる。

前報告同様、傾斜面に構築された住居のなかには、稀に良好な残存状態を示すものもあるが、大半は残存状況が不良で、痕跡のみ確認されたものも少なくなく、様々な事情で既に消失されてしまった住居跡も少なくないものと思われる。

報告書中の住居跡の概略は以下の通りである(第2表)。なお、矢田遺跡全体の遺構分布及び遺構番号に関しては、付図を参照されたい。

第2表 住居跡一覧表

住居No.	平面形	規模(cm)	面積(m ²)	壁高(cm)	主軸方向	カマド	貯蔵穴	柱穴	周溝	備 考
51	長方形	384×321	12.25	30	N-73°E	東	○	—	—	墨書土器3
52	長方形	402×333	13.96	20	N-86°E	東・石組	—	—	—	
55	長方形	?×294	8.64	13	N-83°E	東・石組	○	—	—	
57	—	375×?	7.74以上	30	N-89°E	東・石組	○?	—	—	
60	長方形	300×333	9.54	17	N-112°E	東	—	—	—	
63	正方形	330×354	10.99	27	N-90°E	東	○	—	—	
64	長方形	291×414	11.44	21	N-107°E	東	○	—	—	墨書土器3
66	—	?×378	8.01以上	18	?	—	—	—	—	
69	長方形	306×231	6.75以上	12	N-81°E	東?	—	—	—	
70	長方形	342×297	9.36	15	N-84°E	東	○	—	—	
71	—	?×?	9.72以上	7	N-90°E	東	○	—	—	
72	—	?×318	5.58以上	15	N-75°E	東	○	—	—	
73	—	294×309	8.82	—	?	—	—	—	—	
74	—	?×300	3.87以上	—	?	—	—	—	—	
151	長方形	246×309	7.65	9	N-92°E	東	○	—	—	
154	長方形	351×435	14.95	28	N-92°E	東・石組	○	—	—	
181	—	?×384	8.91以上	12	N-105°E	東・石組	○?	—	—	
223	—	?×?	1.08以上	2	N-84°E	東	○	—	—	
244	—	291×?	4.77以上	16	?	—	○	—	—	
313	長方形	351×270	8.64	27	?	—	—	—	—	
398	長方形	426×372	15.31	26	N-99°E	東・石組	○	—	—	灰輪埴
428	正方形	324×333	10.54	14	N-102°E	東	○	—	—	灰輪埴
430	長方形	243×315	7.38	28	N-104°E	東	—	—	—	
435	正方形	291×291	7.56	14	N-32°E	北	—	—	—	
449	長方形	309×372	10.81	20	N-85°E	東	—	—	—	
451	長方形	399×354	13.87	28	N-77°E	東・石組	○	—	—	
454	長方形	381×297	11.08	31	N-78°E	東	○	—	—	
457	長方形	429×357	15.13	15	N-102°E	東	—	—	—	
459	長方形	315×399	12.97	15	N-89°E	東	—	—	—	
461	長方形	444×342	14.50	18	N-64°E	東	—	—	—	灰輪埴・墨書土器2
464	長方形	276×336	8.91	30	N-93°E	東	○	—	—	灰輪埴・墨書土器
465	長方形	405×381	15.04	38	N-99°E	東	○	○	—	
475	長方形	309×399	13.06	14	N-91°E	東・石組	○	—	—	灰輪長煎室・灰輪埴2
476	正方形	318×321	10.36	26	N-84°E	東	○	—	—	灰輪埴
477	長方形	366×282	9.63	16	?	—	—	—	—	灰輪埴
479	正方形	267×258	6.75	22	N-95°E	東・石組	○	—	—	
482	長方形	315×288	9.36	12	N-85°E	東・石組	○	—	—	墨書土器2
483	正方形	384×408	15.85	9	N-89°E	東	○	—	—	

第3章 平安時代の遺構と遺物

住居No	平面形	規模 (cm)	面積 (㎡)	壁高 (cm)	主軸方向	カマド	貯蔵穴	柱穴	周溝	備	考
495	長方形	411×360	14.32	29	N-80°E	東・石組	○	—	—		
512	長方形	288×406	11.80	11	N-93°E	東	—	—	—		
513	長方形	507×411	18.82	17	N-95°E	東・石組	—	—	—	墨書土器	
514	長方形	249×303	7.11	21	N-91°E	東	—	—	—		
515	長方形	297×402	11.62	25	N-96°E	東・石組	○	—	—	灰釉甕・灰釉耳皿・刻書土器	
517	長方形	270×309	8.61	23	N-95°E	東	○	—	—		
519	長方形	264×375	9.45	14	N-91°E	東・石組	○	—	—	墨書土器	
525	長方形	234×282	5.85	3	N-73°E	東	—	—	—		
526	長方形	294×345	9.81	15	N-82°E	東	—	—	—	刻字紡錘車	
530	長方形	297×384	16.99	9	N-97°E	東	—	—	—	灰釉甕	
531	正方形	354×336	11.75	7	N-13°E	北	—	—	—	灰釉甕	
532	長方形	309×474	13.65	25	N-103°E	東	○	—	—	刻書土器	
534	—	312×?	5.04以上	10	?	—	—	—	—		
535	正方形	468×462	20.36	16	N-92°E	東2	—	—	—		
549	正方形	363×387	13.19	8	N-96°E	東	○	—	—		
554	—	?×?	6.21以上	10	N-64°E	東	○	—	—		
563	長方形	591×534	30.58	13	N-117°E	東2?	—	—	—	灰釉甕・墨書土器2・刻書土器	
568	—	300×?	8.10以上	3	N-117°E	東	—	—	—		
570	長方形	237×219	4.77	5	N-86°E	東・石組	○	—	—	灰釉甕・墨書土器4	
585	長方形	420×360	15.40	15	N-95°E	東	○	—	—		
586	—	?×?	7.65以上	6	N-96°E	東	○	—	—		
590	長方形	321×408	12.52	27	N-115°E	東・石組	—	—	—	刻書土器	
595	—	339×?	8.55以上	33	N-129°E	東	—	—	—	灰釉甕3・墨書土器	
596	正方形	291×300	8.15	36	N-129°E	東	—	—	—	灰釉甕・墨書土器2	
600	長方形	423×363	14.90	29	N-82°E	東・石組	○	—	—	墨書土器	
608	正方形	264×288	7.29	10	?	—	—	—	—	文字瓦	
621	—	?×?	3.78以上	10	N-94°E	東	—	—	—		
622	長方形	396×306	11.71	14	N-92°E	東	—	—	—		
624	正方形	273×255	7.02	26	N-97°E	東・石組	—	—	—		
646	正方形	310×297	9.65	31	?	東	○	—	—	灰釉甕	
647	正方形	384×390	14.38	33	N-90°E	東	—	—	—	墨書土器・桃印	
651	長方形	360×411	14.50	26	N-102°E	東	—	—	—		
652	長方形	303×396	11.80	21	N-93°E	東	○	—	—		
653	長方形	285×390	11.26	16	?	—	—	—	—		
654	正方形	357×369	13.06	9	N-103°E	東	○	—	—	灰釉甕	
656	長方形	366×321	11.62	33	N-105°E	東・石組	○	—	—		
657	長方形	309×345	10.58以上	14	N-98°E	東	○	—	—	灰釉甕	
661	正方形	285×282	8.10	—	N-75°E	東	○	—	—	灰釉甕	
662	—	312×?	10.58	6	N-80°E	東	○	—	—		
663	長方形	279×345	9.59	17	N-117°E	東・石組	○	—	—	墨書土器	
664	長方形	330×396	12.88	24	N-125°E	東	○	—	—		
667	長方形	348×397	12.97	36	N-16°E	北	—	—	—	灰釉甕	
670	長方形	249×336	7.79	12	N-104°E	東	○	—	—		
675	—	273×?	8.37以上	16	N-107°E	東	—	—	—	墨書土器	
676	—	?×?	2.43以上	11	N-116°E	東	—	—	—		
679	正方形	495×537	10.63	45	N-95°E	東2	—	○	○	墨書土器・刻字紡錘車	
684	長方形	393×288	7.25	40	N-101°E	東・石組	○	—	—		
697	長方形	249×306	26.21	37	N-90°E	東	—	—	—		
704	—	?×?	6.68以上	11	N-7°E	北	—	—	—		
711	—	312×?	5.90以上	42	N-20°E	北	○	—	—	墨書土器3	
716	正方形	363×348	12.43	60	N-93°E	東	—	—	—	灰釉甕・墨書土器	
720	長方形	210×297	6.17	18	N-120°E	東	—	—	—		
747	—	?×?	?	?	?	東?	—	—	—		

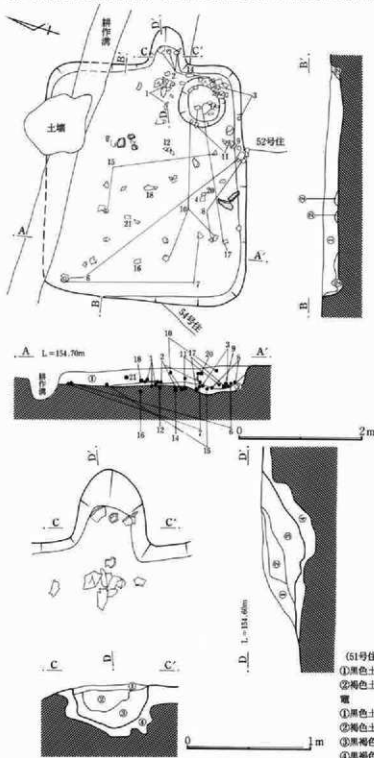


第4図 矢田遺跡遺構分布図

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

51号住居跡 (第5~8図、第3表、図版3・38・61・68)

本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、46・47-30・31グリッドに位置する。52号住居跡(平安)の北西隅と54号住居跡(古墳)の北壁を切って構築され、東西方向の耕作溝と土壌によって東壁と西壁の一部が破壊されている。



第5図 51号住居跡実測図(1)

平面形は東西3m84cm・南北3m21cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-73°-Eを示す。壁高は30cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面には、竈前を中心に薄く貼床を施したと思われるが、あまり明瞭ではない。掘り方調査で、南壁から西壁付近に掘り込みが認められたが、柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅69cm・奥行57cm・深さ35cmを測る。覆土の状態のわりに残存状況は不良で、構築材と見られるものが殆ど検出されていない。

貯蔵穴は、竈右脇にあり、径75cm・深さ19cmを測る円形を呈する。

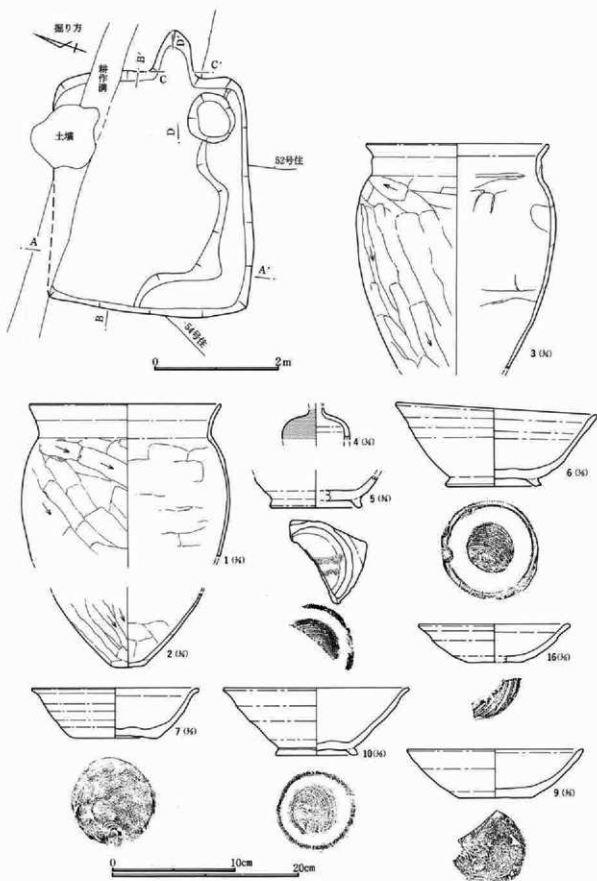
遺物は比較的多く、竈前・貯蔵穴付近を中心に分布しているが、種類に乏しい。煮沸具は、コ字状口縁土器器臺で羽釜は伴わないようである。そうした中では、「主」と認める墨書土器をはじめ、合計三点の墨書土器の出土が注意される。

他に藁編石状の点紋緑泥片岩1個(0.3kg)が検出されている。(中沢)

(51号住居跡)

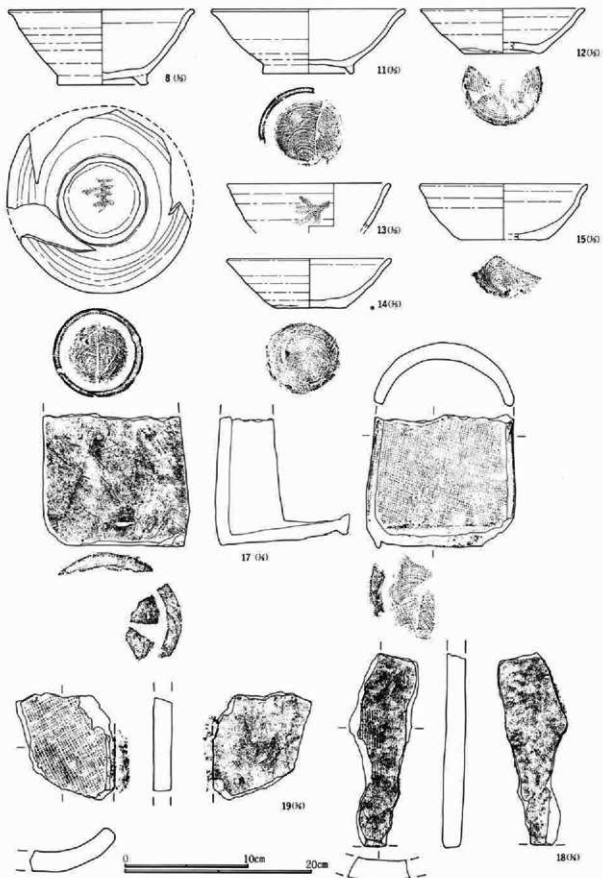
- ①黒色土 炭と焼土粒を少量含む。
- ②褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒色土の混入土層。
- 竈
- ①黒色土 ローム細粒を少量含む。
- ②褐色土 ローム粒と黒色土の混入土層。
- ③黒褐色土 焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。
- ④黒褐色土 微量の焼土粒を含む。

第3章 平安時代の遺構と遺物



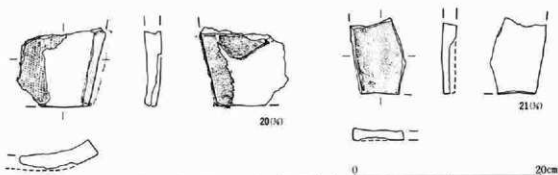
第6図 51号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第7図 51号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第8図 51号住居跡出土遺物実測図(3)

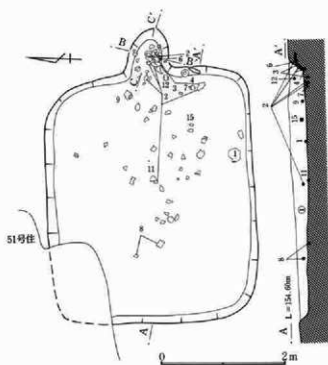
第3表 51号住居跡出土遺物観察表

押印番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (H)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
6-1 38	土師器 甕	床面直上 瓦残存	口(20.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③赤褐色	輪轆成形後、口辺横無で、体部外面斜方向彫削り。内面彫削で。	
6-2	土師器 甕	床面-2 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③赤褐色	輪轆成形後、外面下半斜方向彫削り。内面彫削で。	
6-3 38	土師器 甕	床面-5 瓦残存	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形後、口辺横無で、体部外面彫削り。内面彫削で。	
6-4 38	須志器 壺	床面+20 破片	口— 底— 高—	①粗、黒色鉱物・白色細粒 ②還元焰、硬質 ③暗緑灰色、内面灰色	ロクロ成形。	外面自然軸
6-5 38・68	須志器 高台付埴 瓦	覆土 破片	口— 底(7.2) 高—	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③淡黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	底部外面に墨書
6-6 38	須志器 高台付埴 瓦	床面直上 ほぼ完形	口15.8 底7.0 高6.1	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
6-7	須志器 埴 瓦	床面直上 瓦残存	口(13.0) 底(6.6) 高(3.9)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
7-8 38・68	須志器 高台付埴 瓦	床面直上 瓦残存	口(14.8) 底7.0 高5.9	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	墨書土器
6-9	須志器 埴 瓦	床面直上 瓦残存	口(13.8) 底6.0 高3.8	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。	
6-10 38	須志器 高台付埴 瓦	床面-4 瓦残存	口(14.4) 底6.4 高(5.3)	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
7-11	須志器 高台付埴 瓦	床面-4 瓦残存	口(15.2) 底(7.1) 高(5.1)	①粗、石英粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
7-12	須志器 埴 瓦	床面-2 瓦残存	口(12.8) 底(6.0) 高(3.5)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。	
7-13 68	須志器 埴 瓦	覆土 小破片	口(12.9) 底— 高—	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	ロクロ成形。	墨書土器
7-14	須志器 埴 瓦	床面-5 瓦残存	口(13.0) 底5.6 高3.9	①粗、黒色鉱物粒やや多 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
7-15	須志器 埴 瓦	床面直上 瓦残存	口(13.0) 底(6.6) 高(4.4)	①粗、白色細砂粒・黒色鉱物粒少 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

押田番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②地成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
6-16 61	須恵部 坏	床面-7 破片	口(11.8) 底(4.2) 高(3.6)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
7-17 61	軒丸瓦	床面直上 破片	長 — 幅 — 厚 1.7	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	側端の面取り2。	
7-18 61	平瓦	床面+5 小破片	長 — 幅 — 厚 2.1	①粗、石英・黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	一枚造りか。	
7-19 61	平瓦	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 2.0	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。側端の面取り2。	
8-20	平瓦	床面+21 小破片	長 — 幅 — 厚 1.7	①粗、石英・黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	一枚造りか。	18と同一個体か
8-21	平瓦	床面+12 小破片	長 — 幅 — 厚 1.5	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	一枚造りか。	

52号住居跡(第9～11図、第4表、図版3・38)



(52号住居跡)

①黒褐色土 ローム粒・1m内外の白色礫石粒・焼土粒を少量、
炭を雜に含む。

第9図 52号住居跡実測図(1)

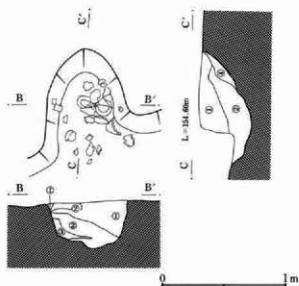
本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、46-31・32グリッドに位置する。周辺には住居跡が所在するもの、同時期の住居跡に限れば東側と西側は空閑地になっている。53号住居跡(古墳)の北西隅を切って構築され、前出の51号住居跡(平安)によって北西隅を破壊されている。壁は緩やかに立ち上がっており、最大で20cmが残存している。

平面形は東西4m02cm・南北3m33cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-86°-Eを示す。床面は、黄褐色ローム(地山)を直接叩き締めており、貼床は認められない。貯蔵穴・柱穴・周溝等の付属施設も検出されていない。

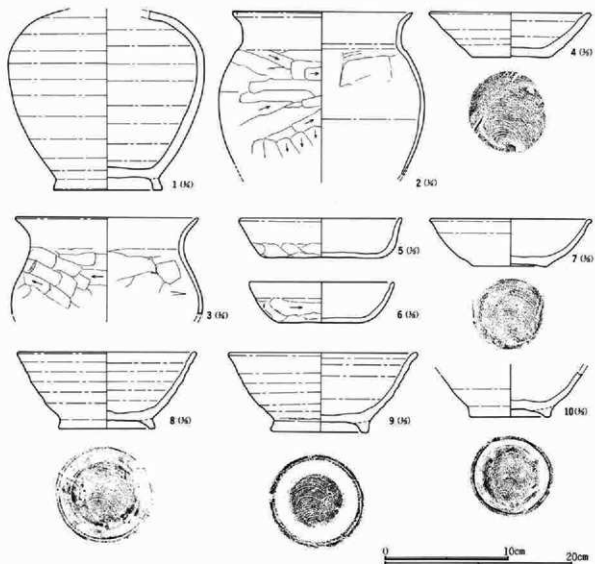
竈は東壁中央や南寄りであり、幅78cm・奥行66cm・深さ42cmを測る。深さは充分であるが残存状況は不良である。

遺物は、竈を中心に分布しているが、全体量・個体の残存率ともに低く、流れ込みと考えられる物もある。(内木)

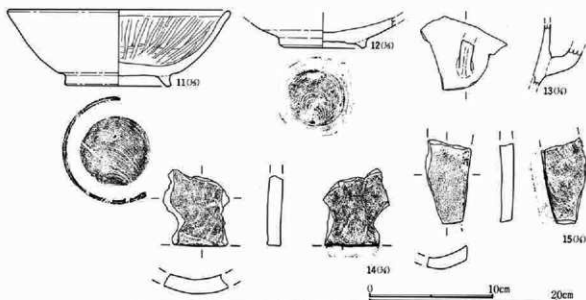
第3章 平安時代の遺構と遺物



- ①黒褐色土 黒色土・焼土粒・焼土ブロックの混入土層。
 ②赤褐色土 焼土粒を主体とし、黒色土を少量含む。
 ③黒褐色土 黒色土層中にローム粒を多量に含む。
 ④黒色土 黒色土層中に炭を多量に含む。



第10図 52号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第11図 52号住居跡出土遺物実測図(2)

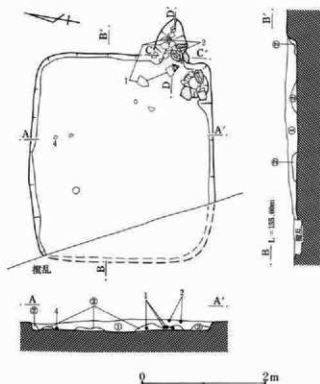
第4表 52号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
10-1 38	須恵器 壺	床面直上 片残存	口 — 底(11.4) 高 —	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
10-2 38	土師器 壺	床面-5 片残存	口(21.0) 底 — 高 —	①膏、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面荒撫で。	
10-3	土師器 壺	床面-5 破片	口(19.2) 底 — 高 —	①膏、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面荒撫で。	
10-4 38	須恵器 坏	床面-2 ほぼ完形	口 12.4 底 6.7 高 3.8	①膏、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
10-5 38	土師器 坏	壺内覆土 完形	口 12.8 底 9.4 高 3.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面下半磨削り。	
10-6	土師器 坏	壺内+10 片残存	口(11.6) 底(6.6) 高 3.2	①膏、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面下半磨削り。	
10-7	須恵器 埴	床面-6 片残存	口(12.4) 底 5.9 高 3.7	①膏、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
10-8 38	須恵器 高台付埴	床面-2 片残存	口(14.2) 底(7.5) 高 6.0	①膏、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
10-9 38	須恵器 高台付埴	床面+5 ほぼ完形	口 14.7 底 7.5 高 6.2	①粗、長石・石英粒 ②酸化焰、やや軟質 ③外面黒色、内面暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	外面いよし焼成
10-10	須恵器 高台付埴	覆土 片残存	口 — 底 6.4 高 —	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
11-11 38	須恵器 片残存	床面直上 片残存	口(17.8) 底(8.5) 高 6.0	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	内面黒色処理
11-12	須恵器 高台付埴	床面+14 破片	口 — 底(6.2) 高 —	①膏、褐色鉱物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

採回番号 図版番号	土器類別	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
11-13 38	須恵器 甌?	覆土 小破片	口— 底— 高—	①胎土、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪轆成形でロクロ使用。	銅型土器かも?
11-14	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.5	①胎土、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③黄灰色	一枚造りか。	
11-15	平瓦	床面+5 小破片	長— 幅— 厚 1.4	①胎土、白色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	一枚造りか。	

55号住居跡 (第12・13図、第5表、図版3・38)

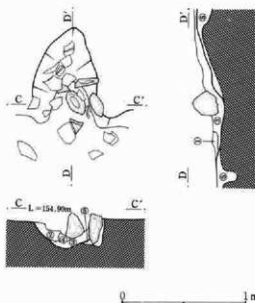


本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、44・45-31グリッドに位置する。南側には57号住居跡(平安)・71号住居跡(平安)等が隣接する。

平面形は、水道管敷設による攪乱で西壁が破壊されているため、東西方向は不明だが、南北2m94cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-83°-Eを示す。壁高は13cmを測る。床面は、竈前を中心に薄く貼床を施しているが、あまり明瞭でない。掘り方には、二時期に亘るものも含め、不整形なピット四基が検出されているが、その機能等

(55号住居跡)

- ①黒褐色土 1m内外の白色軽石粒を多量に含む。
- ②褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒褐色土の混入土層。
- ③黒褐色土 黒褐色土層中に炭を多量に含む。
- ④赤褐色土 焼土層。
- ⑤黒褐色土 ローム細粒を少量含む。
- ⑥褐色土 ロームを主体とした層、少量の黒色土を含む。
- ⑦褐色土 ローム粒を主体とし、黒色土を稀に混入する。



第12図 55号住居跡実測図(1)

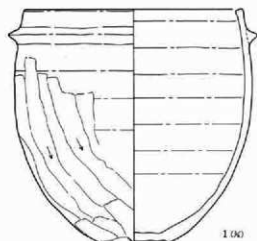
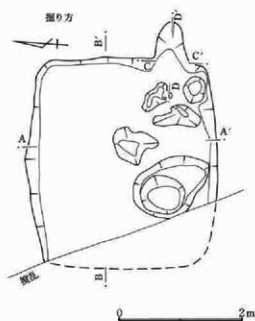
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

については不明である。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅57cm・奥行57cm・深さ24cmを測る。右袖石が残存するものの、残存状況は不良で、用材と思われる石材は破損した状態で貯蔵穴付近に散乱している。比較的大型の羽釜破片を含み、本来は羽釜を補強材とした石組構造であったと思われる。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径39cm・深さ20cmを測る円形を呈する。南壁を突塊状に掘り残しており、住居外へ若干張り出す形になっている。

遺物は、竈内部とその付近を中心に出土しているが、種類が乏しい上、個々の残存率も低く、園化できた物も少ない。(中沢)



第13図 55号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第5表 55号住居跡出土遺物観察表

種別番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (容)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
13-1 38	羽釜 釜	床面+2 片残存	口(23.2) 底(7.1) 高24.5	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄い褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面縦筋有り。	

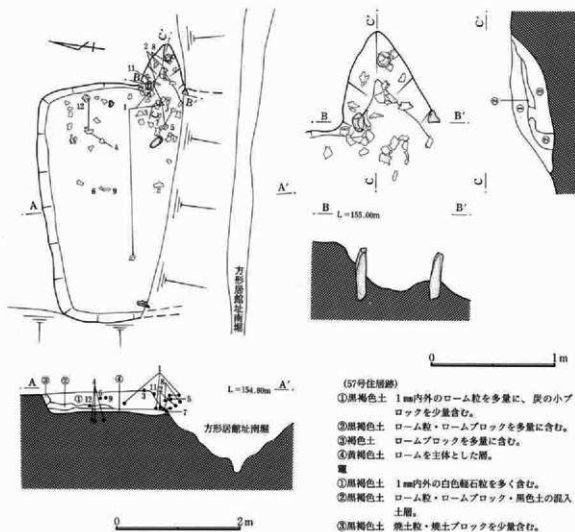
第3章 平安時代の遺構と遺物

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
13-2	須恵器 羽蓋	竈内+11 小破片	口 (19.6) 底 — 高 —	①骨、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面磨削。	
13-3	須恵器 埴	床面直上 破片	口 — 底 (8.8) 高 —	①骨、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
13-4 38	須恵器 坏	床面+2 瓦残存	口 (8.6) 底 (4.6) 高 3.0	①粗、黒色鉱物細粒少 ②酸化焰、硬質 ③鈍い褐色	ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	

57号住居跡 (第14~16図、第6表、図版3・4・39・66・67)

本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、43-30・31グリッドに位置する。南側に隣接する58号住居跡 (古墳) の北壁を切って構築されたと思われるが、1号方形居跡址に本住居跡の南半部を破壊されているため判断としない。

規模は、東西3m75cmを測り、方形を呈するものと思われるが、上記の理由により、南北方向の長さは確認



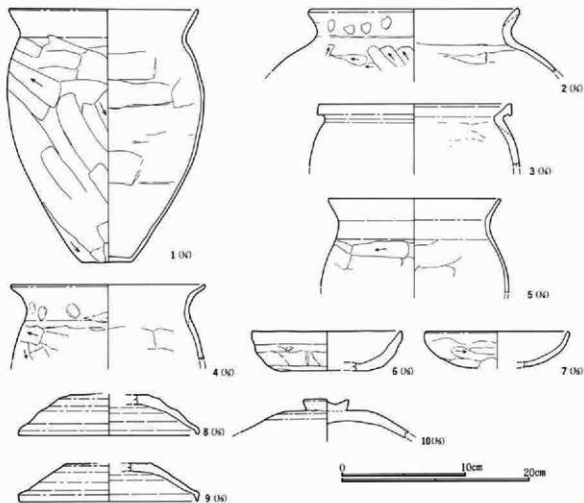
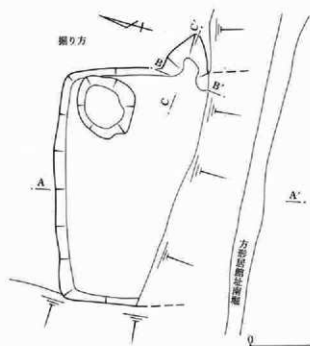
第14図 57号住居跡実測図 (1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

できない。主軸方向はN-89°-Eを示す。壁高は30cmを測る。床面には、竈前を中心に全体に貼床を施す。掘り方には、北東隅に径90cm・深さ36cmを測るピットが一基検出されたのみである。遺物の集中度などから貯蔵穴の可能性もあるが確証はない。柱穴・壁溝等については、検出されていない。

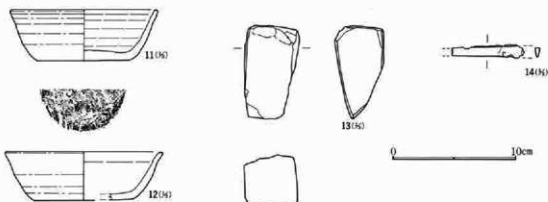
竈は東壁にあり、幅75cm・奥行72cm・深さ39cmを測る。両袖石が残存するものの、残存状況は不良である。

遺物は、竈を中心にやや多く検出されているが、概して個体の残存率は低い。確認されている範囲では煮沸具はコ字状口縁の土師器壺のみである。(鬼形)



第15図 57号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



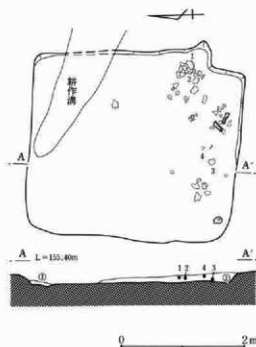
第16図 57号住居跡出土遺物実測図(2)

第6表 57号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
15-1 39	土器 甕	床面+8 ほぼ完形	口 20.0 底 5.0 高 26.5	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。内面磨撫で。	
15-2	須恵器 甕	壺内+9 破片	口(22.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。内面磨撫で。	
15-3	須恵器 甕	床面+32 小破片	口(20.6) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪横成形後、口辺横撫で。内面撫で。	
15-4	土器 甕	床面-12 破片	口(20.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。内面撫で。	
15-5	土器 甕	床面+22 破片	口(18.1) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。内面撫で。	
15-6 39	土器 坏	床面+20 1/4残存	口(12.0) 底(7.0) 高(3.1)	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面磨削り。	
15-7	土器 坏	床面+4 破片	口(11.4) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒多 ②還元焰、軟質 ③黄褐色、断面鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半~底部磨削り。	
15-8 39	須恵器 蓋	壺内+20 1/4残存	横— 口(14.2) 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄褐色	クロコ成形後、頂部磨削り。	
15-9 39	須恵器 蓋	床面+21 1/4残存	横— 口(14.2) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	クロコ成形後、頂部回転磨削り。	
15-10 39	須恵器 蓋	覆土 1/4残存	横(3.6) 口— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	クロコ成形後、頂部回転磨削り。摺貼付。	
16-11 39	須恵器 坏	壺内+27 1/4残存	口(11.4) 底(7.2) 高 4.0	①粗、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部余切り。未調整。	
16-12	須恵器 坏	床面+7 破片	口(12.6) 底(7.6) 高(3.8)	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	クロコ成形。	
16-13 66	石製品 砥石	覆土 破片	長(7.2) 幅 4.2	厚 3.8 重 175.0		両面を使用。
16-14 67	敷製品 刀子	覆土	長(5.9) 幅 6.9	厚 0.3 重 4.3		

60号住居跡 (第17図、第7表、図版39)

本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、42-32グリッドに位置する。先行する59号住居跡(古墳)の西壁を一部切り込んで構築され、耕作溝によって東壁を若干破壊されている。



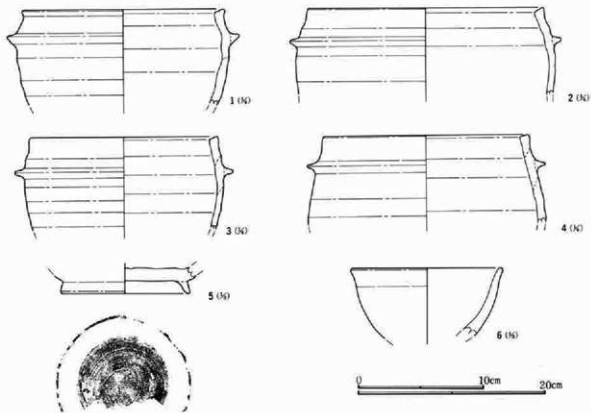
平面形は東西3m00cm・南北3m33cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-112°-Eを示す。壁高は17cmを測る。残存状況が不良で断定はできないが、東壁が竈の南側と北側とで揃わず、棚状の構造物があったかもしれない。基本的に掘り方は無く、黄褐色ローム(地山)を叩き締めて床面としていたと思われる。貯蔵穴・柱穴・壁溝等は検出されていない。

竈は東壁の南寄りであり、幅48cm・奥行36cm・深さ12cmを測る。煙道部は住居の主軸より南東方向に傾いていたものと思われる。

遺物は、竈前と南壁周辺とにやや集中するが、残存率は低い。煮沸具には羽釜を伴う。(鬼形)

(60号住居跡)

①暗褐色土 軽石・ロームブロックを多量に含み、やや締まりに欠ける。



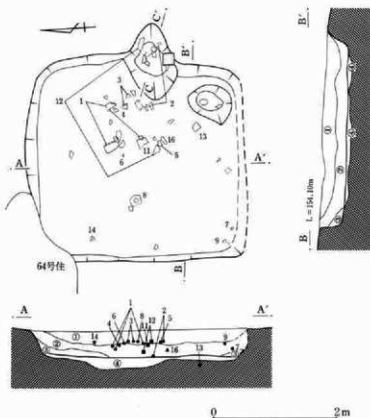
第17図 60号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第7表 60号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
17-1 39	須恵器 羽釜	床面+5 破片	口(21.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪積成形でロクロ使用。	
17-2	須恵器 羽釜	床面+5 小破片	口(25.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	輪積成形でロクロ使用。	
17-3	須恵器 羽釜	床面+2 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色、一部黒変	輪積成形でロクロ使用。	
17-4	須恵器 羽釜	床面+7 破片	口(21.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③外面橙色、内面黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
17-5 39	須恵器 高台付埴	覆土 小破片	口— 底(16.3) 高—	①青、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	転用碗の可能性あり
17-6	須恵器 埴	覆土 破片	口(12.0) 底— 高—	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、軟質 ③暗褐色	ロクロ成形。	

63号住居跡 (第18～21図、第8表、図版4・39・61・65・66・67)

本住居跡は、第3次調査区北西部の比較的大きな支谷に面した北東方向の緩斜面にあり、43-40グリッドに位置する。64号住居跡(平安)によって北西隅が破壊されている。



第18図 63号住居跡実測図(1)

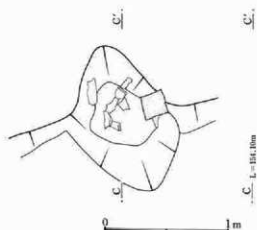
南壁周辺が黒色土中にかかるため、プラン確認には不安が残るが、平面形は東西3 m30cm・南北3 m54cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示すものと思われる。壁高は残存状況の良い北壁で27cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は、竈前を中心に薄く貼床を施し、掘り方には、ピット一基が確認された。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあ

(63号住居跡)

- ①暗褐色土 黒色土を斑点状に含み、やや締まりに欠ける。
- ②暗黄褐色土 ロームブロック・粘土粒を少量含む。やや締まりに欠ける。
- ③暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- ④茶褐色土 ロームを主体とした層。
- ⑤暗赤褐色土 焼土粒を少量含む。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

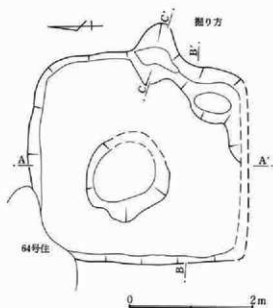


り、幅84cm・奥行63cm・深さ39cmを測る。

貯蔵穴は、径69cm・深さ16cmを測る円形を呈する。

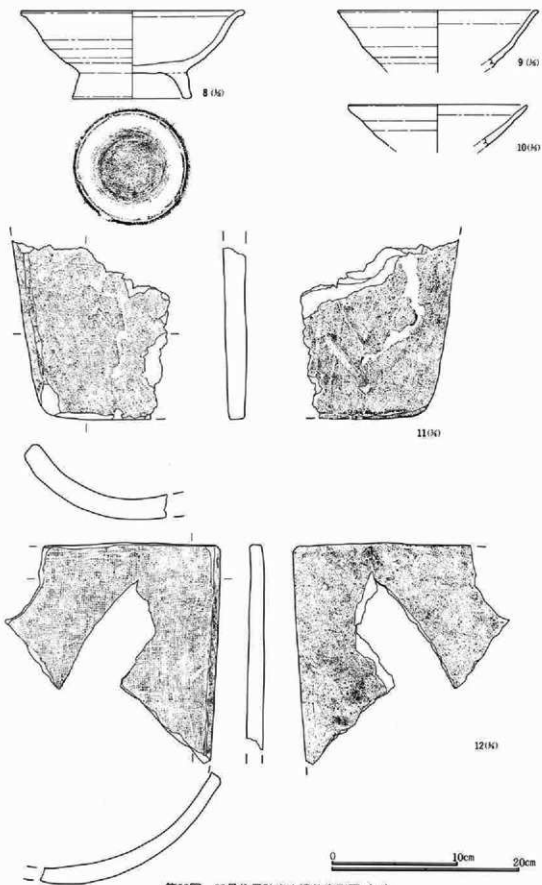
遺物は、出土位置が高いものが多く注意を要する。煮沸具には羽釜を含まないようである。

他に萬編石状の絹雲母石墨片岩2個(計0.4kg)が検出されている。(鬼形)

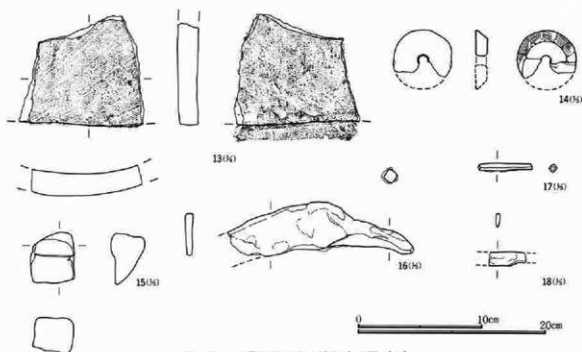


第19図 63号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第20図 63号住居跡出土遺物実測図(2)



第21図 63号住居跡出土遺物実測図(3)

第8表 63号住居跡出土遺物観察表

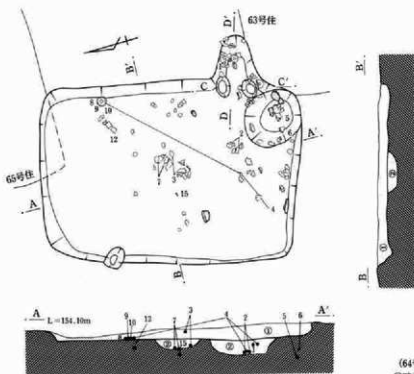
調査番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②胎成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
19-1 39	須恵器 大甕	床面+10 破片	口(48.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	輪轆成形でロクロ使用。	
19-2	土師器 甕	床面+2 小破片	口(19.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面横方向莖削り。内面荒撫で。	
19-3	土師器 甕	床面+24 小破片	口(20.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面上部横方向莖削り。内面撫で。	
19-4	土師器 甕	床面+18 破片	口(21.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面上部横方向莖削り。内面撫で。	
19-5	土師器 甕	床面+20 破片	口(18.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面莖削り。内面荒撫で。	
19-6	須恵器 樽 脚	床面+18 破片	口— 底(9.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙褐色	輪轆成形で横撫で。	
19-7	須恵器 坏	床面+10 破片	口(13.0) 底(7.2) 高(4.2)	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③浅黄褐色	ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
20-8 39	須恵器 高台付埴 瓦	床面+24 瓦残存	口(17.2) 底 9.4 高 6.9	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
20-9	須恵器 埴 瓦	床面+17 破片	口(15.8) 底— 高—	①粗、石灰・黒色鉱物粒少 ②酸化焰、硬質 ③鈍い橙褐色	ロクロ成形。	
20-10	須恵器 坏	覆土 破片	口(14.0) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒少 ②酸化焰、やや軟質 ③灰色、一部黒変	ロクロ成形。	
20-11 61	平瓦	床面+16 破片	長— 幅— 厚 2.3	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造り。狭端面側端面の面取り2。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
20-12 61	平瓦	床面+6 破片	長— 幅— 厚1.9	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造り。広端面側面の面取り2。	
21-13 61	平瓦	床面-12 小破片	長— 幅— 厚(2.3)	①粗、石英・雲母 ②還元焰、硬質 ③鈍い褐色	一枚造りか。	
21-14 65	石製品 紡錘車	床面+21 写残存	径 4.5/3.2 厚 1.5	孔径 0.8 重 19.7	穿孔は狭面から。側面に製作時の磨痕。広面狭面ともに強い磨減。	滑石片岩
21-15 66	石製品 硯石	破片	長(4.1) 幅(3.2)	厚 2.8 重 57.1	二面を使用。	流紋岩
21-16 67	鉄製品 刀子	床面+10 破片	長(14.9) 幅 3.8	厚 0.6 重 153.0		
21-17 67	鉄製品 釘	破片	長(4.3) 幅 0.5	厚 0.5 重 3.1		
21-18 67	鉄製品 刀子	破片	長(2.9) 幅 1.0	厚 0.3 重 2.9		

64号住居跡 (第22~24図、第9表、図版4・39・66・67・68)

本住居跡は、第3次調査区北西部の緩斜面にあり、44-39グリッドに位置する。西側に1号溝が走り、東側は比較的大きな支谷によって限られている。切り合い関係としては、65号住居跡(古墳)の南西隅と前出の63号住居跡(平安)の北東隅を若干切って構築されている。



平面形は東西2m91cm・南北4m14cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-107°-Eを示す。壁高は21cmを測る。床面は黄褐色ローム(地山)を叩き締めており、床下には竈前のピットの他、西壁と南壁付近から柱穴状のピット等が検出されたが、対になると見られる物がなく、柱穴になる可能性は低い。

竈は東壁中央南寄りにあ

(64号住居跡)

- ①暗褐色土 黒色土を斑点状に含み、やや締まりに欠ける。
- ②暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、締まりに欠ける。

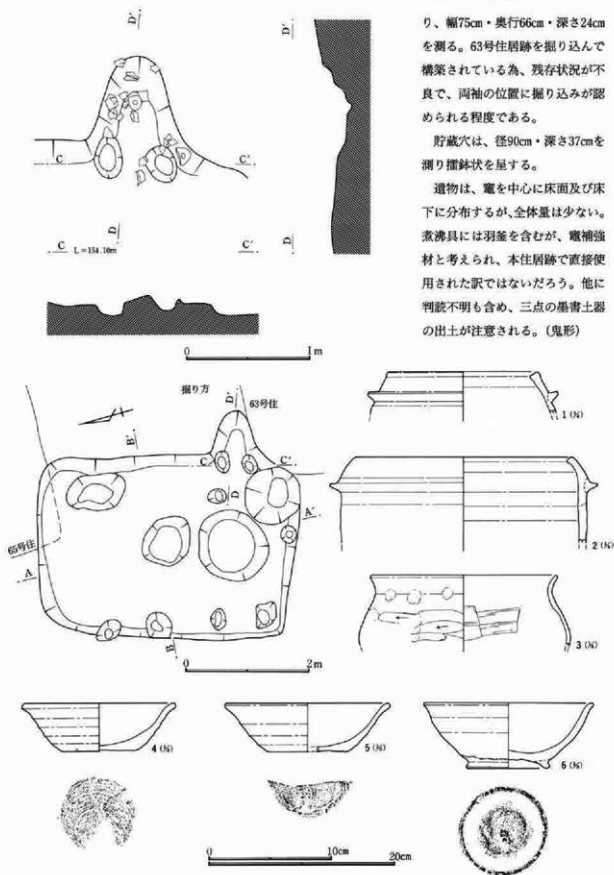
第22図 64号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

り、幅75cm・奥行66cm・深さ24cmを測る。63号住居跡を掘り込んで構架されている為、残存状況が不良で、両袖の位置に掘り込みが認められる程度である。

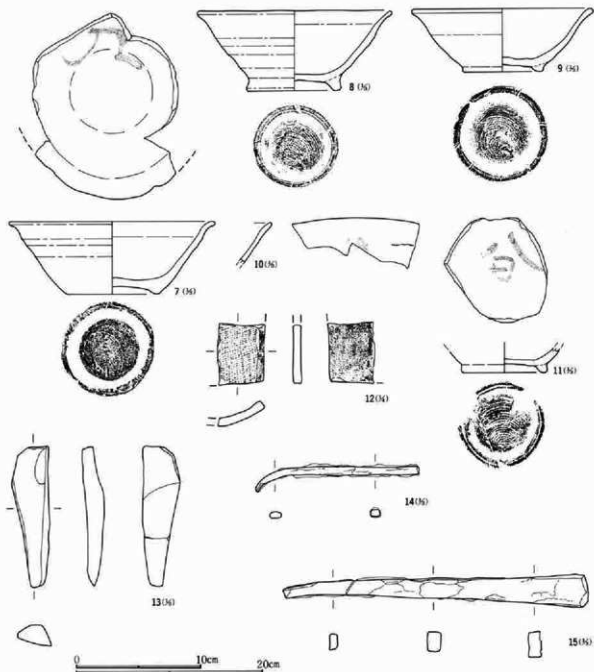
貯蔵穴は、径90cm・深さ37cmを測り楕円状を呈する。

遺物は、竈を中心に床面及び床下に分布するが、全体量は少ない。煮沸具には羽釜を含むが、竈補強材と考えられ、本住居跡で直接使用された訳ではないだろう。他に判読不明も含め、三点の墨書土器の出土が注意される。(鬼形)



第23図 64号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



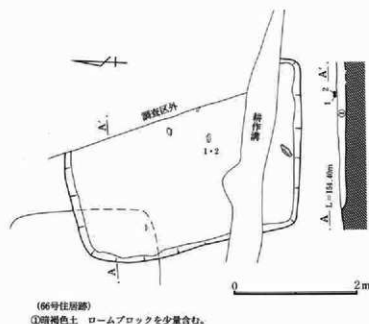
第24図 64号住居跡出土遺物実測図(2)

第9表 64号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
23-1	須恵器 羽蓋	甕内-5 破片	口(15.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	輪横成形でロクロ使用。	
23-2	須恵器 羽蓋	床面-16 小破片	口(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形でロクロ使用。	
23-3	土師器 壺	床面-8 破片	口(19.5) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③赤褐色	輪横成形後、口辺横漕で、体部外面磨削り。 内面荒漕で。	

探検番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
23-4	須恵器 坏	床面-15 为残存	口(11.9) 底 5.9 高 3.8	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
23-5	須恵器 坏	貯蔵穴内 +2 为残存	口(13.0) 底(6.2) 高(3.8)	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
23-6	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +18 为残存	口(13.2) 底 6.4 高 5.2	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
24-7 39・68	須恵器 高台付埴	床面-12 为残存	口(16.2) 底(7.3) 高(5.7)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	黒書土器
24-8 39	須恵器 高台付埴	床面+2 为残存	口(14.1) 底 6.3 高 5.0	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
24-9 39	須恵器 高台付埴	床面+2 ほぼ完形	口 15.0 底 7.3 高 6.3	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
24-10 68	須恵器 坏	床面+2 破片	口(13.7) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形。	体部外面黒書
24-11 39・68	須恵器 高台付埴	覆土 破片	口 — 底(6.5) 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	黒書土器
24-12	平瓦	床面-10 破片	長 — 幅 — 厚 0.8	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	一枚造りか。	
24-13 66	石製品 砥石	覆土 破片	長 11.1 厚 1.6 幅 2.9 重 70.0		中砥、四面を使用。	黒紋岩
24-14 67	鉄製品 箱?	覆土	長 13.0 厚 0.4 幅 0.9 重 32.5			
24-15 67	鉄製品	床面-2	長 24.2 厚 1.0 幅 2.0 重 176.5			

66号住居跡 (第25・26図、第10表、図版4・39)



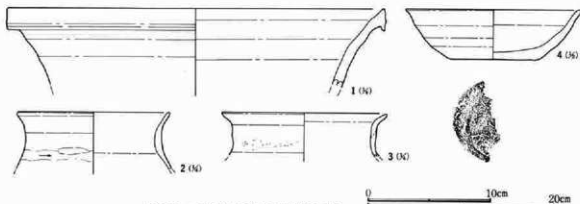
第25図 66号住居跡実測図

本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、47-31・32グリッドに位置する。69号住居跡(平安)の北東隅を切って構築され、東西方向の耕作溝によって分断される。

調査区外にかかる為、東西方向は不明であるが、南北は3m78cmを測る。主軸方向は不明である。壁高は18cmを測る。基本的に掘り方は無く、ローム(地山)を叩き締めて床面としていたと思われる。竈・貯蔵穴等に関する情報は得られていない。

遺物も見べきものが無く、流れ込みの可能性が高い。(鬼形)

第3章 平安時代の遺構と遺物

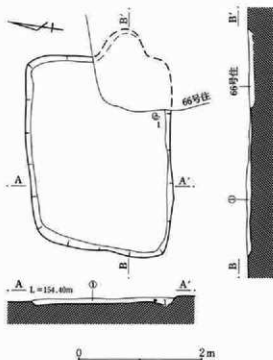


第26図 66号住居跡出土遺物実測図

第10表 66号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
26-1 39	須恵器 大 壺	床面+16 破片	口(40.2) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	ロクロ成形。	
26-2	土師器 壺	床面+16 小破片	口(16.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪横成形後、口辺調整で。	
26-3	土師器 壺	覆土 小破片	口(17.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	輪横成形後、口辺調整で。	
26-4	須恵器 坏	覆土 瓦残存	口(14.0) 底(7.0) 高 3.9	①普、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	外面に厚付着

69号住居跡 (第27・28図、第11表、図版4・39)



第27図 69号住居跡実測図

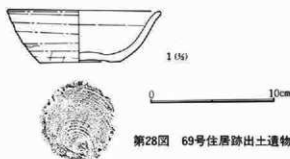
本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、47-31グリッドに位置する。前出の66号住居跡に北東隅を破壊される。

不確定な要素が伴うが、平面形は東西3m06cm・南北2m31cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-81°-Eを示す。壁高は12cmを測るが、残存状況は極めて不良である。基本的に掘り方は無く、ローム(地山)を叩き締めて床面としていたと思われる。

竈は、僅かに残る焼土の分布から、東壁中央南寄りにあったと思われる。貯蔵穴等に関する情報も、得られていない。(鬼形)

(69号住居跡)

①黒褐色土 ロームブロックを稀に含む。



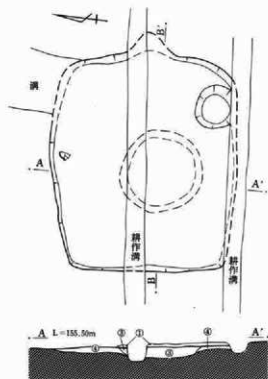
第28図 69号住居跡出土遺物実測図

第11表 69号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器種別 種	出土状況 残存状況	流量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
28-1 39	須恵器 坏	床面+1 ほぼ完形	口(12.0) 底 6.3 高 4.0	①粗、褐色胎物粒 ②還元焼、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	

70号住居跡 (第29図、第12表、図版5)

本住居跡は、第4次調査区北端の平坦面にあり、40・41—34・35グリッドに位置する。表土が流失した上に、東西方向の二条の耕作溝と南北方向の溝(番号なし)等による破壊が著しく、本住居跡本来の覆土は僅かなものであった。



平面形は東西3m42cm・南北2m97cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-84°-Eを示す。壁高は15cmを測る。床面には、貼床を施していたと思われるが、掘り方には、本来の規模は明らかではないが、径132cm・深さ24cmを測る竈前のピット一基が検出された。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央にあり、半壊状態であるが幅69cm・奥行30cm・深さ30cmを測る。

貯蔵穴は、径69cm・深さ15cmを測る円形を呈する。

遺物は極めて少なく、図化できたのは僅かに一点のみである。煮沸具には羽釜を含まないようである。(鬼形)

(70号住居跡)

- ①暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- ②暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
- ③暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- ④暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

第29図 70号住居跡実測図及び出土遺物実測図



第12表 70号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (長)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
29-1	須志器 坏	覆土 小破片	口(14.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化岩、軟質 ③鈍い褐色	ロクロ成形。	

71号住居跡 (第30・31図、第13表、図版5・39・65)

本住居跡は、第3次調査区北西部の平坦面にあり、43・44-31・32グリッドに位置する。北側に55号住居跡(平安)、西側に57号住居跡(平安)が隣接する。1号方形居館址に住居跡の南半部を破壊され、東西方向の耕作溝に寸断される。残存状況は極めて不良で、竈周辺と東壁の一部のみ掘り方段階で確認された。

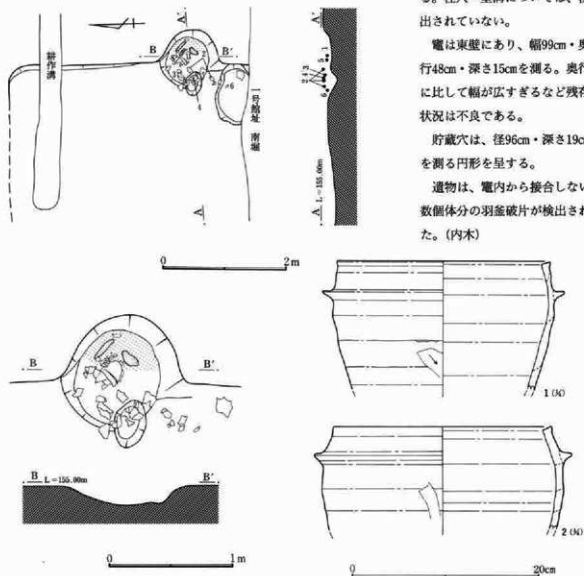
上記の理由により、詳細な規模は明らかではない。主軸方向はN-90°-Eを示すと思われる。僅かに残る

東壁の掘り込みも7cm程度である。柱穴・壁溝については、検出されていない。

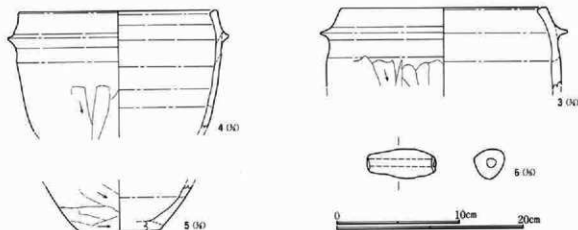
竈は東壁にあり、幅99cm・奥行48cm・深さ15cmを測る。奥行に比して幅が広すぎるなど残存状況は不良である。

貯蔵穴は、径96cm・深さ19cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈内から接合しない数個体分の羽釜破片が検出された。(内木)



第30図 71号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)



第31図 71号住居跡出土遺物実測図(2)

第13表 71号住居跡出土遺物観察表

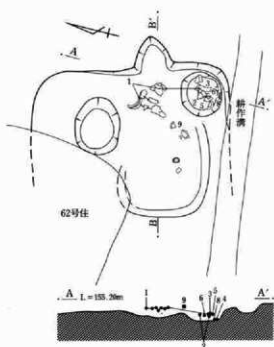
検出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
30-1 39	須恵器 羽 釜	竈内+6 破片	□(22.5) 底 — 高 —	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。	
30-2	須恵器 羽 釜	竈内+10 小破片	□(23.2) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。	
31-3	須恵器 羽 釜	竈内+8 小破片	□(21.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面磨削り。	
31-4	須恵器 羽 釜	竈内+15 破片	□(21.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面下方向磨削り。	
31-5	須恵器 羽 釜	竈内+3 破片	□ — 底 (8.6) 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。外面下半部一横方向磨削り。	
31-6 65	土 甕	床面+5 完形	長 5.4 径 2.3/1.0 孔径 0.7 重 27.7	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	棒状工具巻き付け。	

72号住居跡(第32図、第14表、図版5・40)

本住居跡は、第3次調査区北西部の緩斜面にあり、42・43—36グリッドに位置する。東側には1号溝が南北に走る。62号住居跡(古墳)を切って構築される。耕作溝に寸断される他、表土の流失が著しく、残存状況は極めて不良である。竈周辺を含む住居跡の東半部のみ、掘り方段階で確認された。

西壁が完全に流失している為、東西方向は不明であるが、規模は南北3m18cmを測る。主軸方向はN-75°-Eを示す。貯蔵穴付近の壁高は15cmを測る。床面に関する情報は得られていないが、床下から不明瞭な掘り込みと、径90cm・深き12cmを測るピット一基が検出された。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあるが、僅かに焼土の散布が認められるのみで残存状況は不良である。規模は

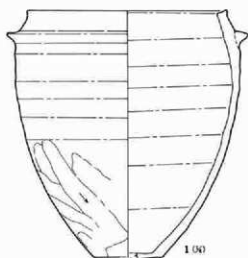


幅63cm・奥行45cm・深さ12cmを測る。

貯蔵穴は、径69cm・深さ15cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈前と貯蔵穴内を中心に分布する。全体量は少なく、種類に乏しいが、個体の残存率は高い。煮沸具には羽釜を含む。(内木)

0 2m



1 00



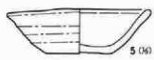
2 00



3 00



4 00



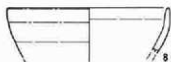
5 00



6 00



7 00



8 00



9 00



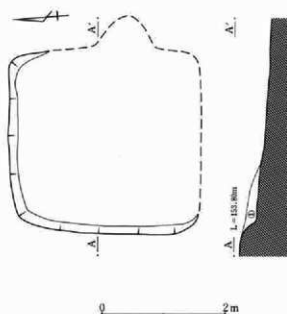
0 10cm 20cm

第32図 72号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第14表 72号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器種別 種類	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
32-1 40	須恵器 羽蓋	床面+10 片残存	口(21.2) 底(7.2) 高26.0	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③鈍い黄褐色	輪横成形でロクロ使用、体部外面下半覆削り。	
32-2	須恵器 羽蓋	床面+6 破片	口(21.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③鈍い黄褐色	輪横成形でロクロ使用。	
32-3	須恵器 羽蓋	床面+8 破片	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焙、やや硬質 ③灰褐色	輪横成形でロクロ使用。	
32-4 40	須恵器 坏	床面+2 ほぼ完形	口(12.5) 底5.8 高3.9	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焙、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
32-5 40	須恵器 坏	床面+6 ほぼ完形	口(11.3) 底5.0 高3.5	①粗、黒色鉱物粒少 ②酸化焙、やや軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
32-6	須恵器 瓶	床面+6 破片	口— 底(11.6) 高—	①粗、石英・砂粒 ②還元焙、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面底部一部自然蝕
32-7	須恵器 坏	覆土 小破片	口(11.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③褐色	ロクロ成形。	
32-8	須恵器 塊	床面+2 小破片	口(12.8) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物細粒 ②還元焙、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形。	内外面一部黒炭
32-9	平瓦	床面+10 小破片	長— 幅— 厚2.1	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焙、硬質 ③灰色、断面褐色	一枚造りか。	

73号住居跡 (第33図)



第33図 73号住居跡実測図

本住居跡は、第3次調査区北西部の北東方向の緩斜面にあり、42-40グリッドに単独で位置する。表土の流失が進行し、残存状況は極めて不良である。

規模は、東西2m94cm・南北3m09cmを測り、方形を呈するものと思われる。焼土の散布が若干認められるが、竈の正確な位置はわからず、主軸方向も不詳である。貯蔵穴・柱穴・壁溝も検出されていない。

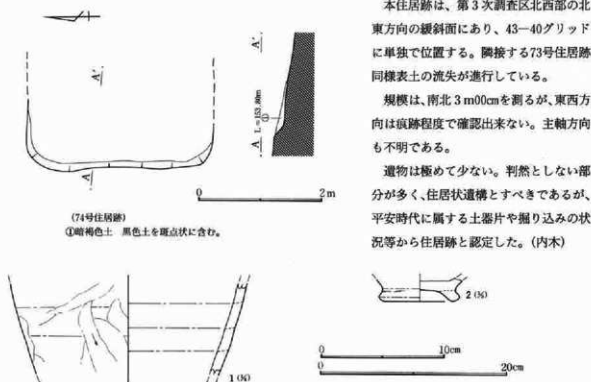
遺物にも見るべきものはなく、図化できない。本来住居状遺構とすべきであるが、掘り込みの状況や若干の焼土の散布に住居跡を想像させるものがあるので、平安期の住居跡と認定した。(内本)

(73号住居跡)

①暗褐色土 黒色土を斑点状に含む。

第3章 平安時代の遺構と遺物

74号住居跡 (第34図、第15表)



第34図 74号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第15表 74号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器類別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
34-1	須恵器 羽 釜	覆土 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③淡黄色	輪轆成形でロクロ使用、体部外面下半部削り。	外面保付着
34-2	須恵器 高台付埴	覆土 破片	口 — 底 (5.4) 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③淡黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	

151号住居跡 (第35・36図、第16表、図版6・40)

本住居跡は、第3次調査区北西端の平坦面にあり、49-28・29グリッドに位置する。南東方向には住居跡がまがまって所在するが、同時期に限れば、やや孤立する傾向にある。南北方向に走る耕作溝に竈の煙道部を、土壌に北壁の一部を破壊され、残存状況は不良である。

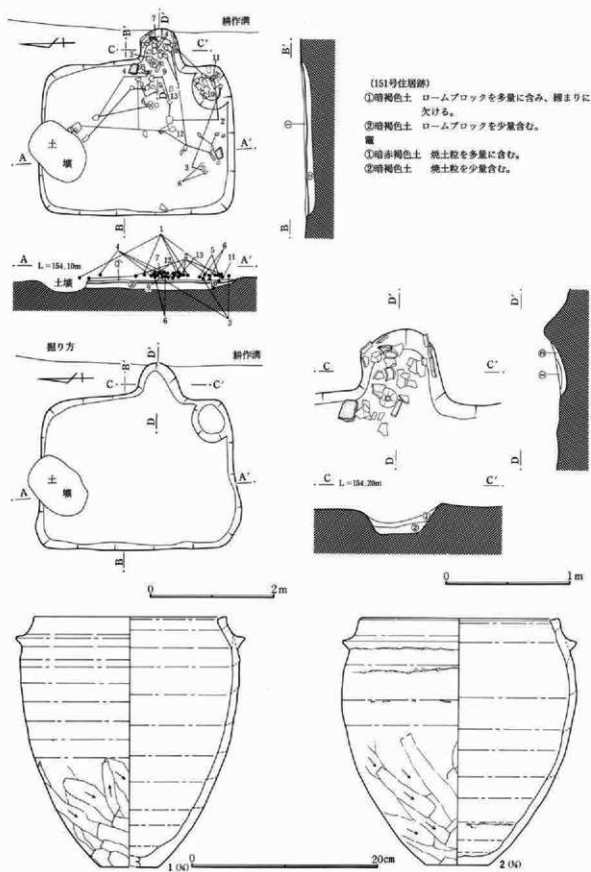
平面形は東西2m46cm・南北3m09cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-92°-Eを示す。壁高は最大で9cmを測る。床面は、竈前を中心に貼床を施す。掘り方には通常見られる竈前のビットや、柱穴・壁溝等は、検出されておらず、比較的平坦である。

竈は東壁中央やや南寄りであり、幅66cm・奥行45cm・深さ18cmを測る。

貯蔵穴は、径69cm・深さ11cmを測る円形を呈する。

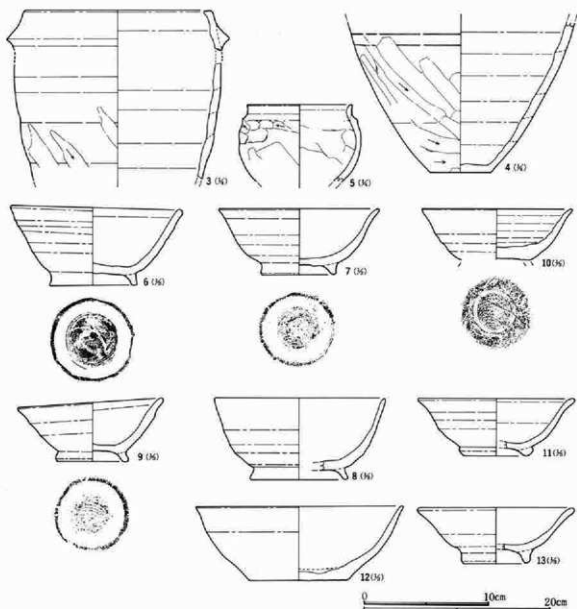
遺物は、竈・貯蔵穴付近を中心に分布するが、種類に乏しい。煮沸具には羽釜を含む。浮いた状態で検出される遺物が多く、注意を要する。(鬼形)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第35図 151号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第36図 151号住居跡出土遺物実測図(2)

第16表 151号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
35-1 40	須恵器 羽釜	床面+6 瓦残存	口(24.0) 底(6.2) 高(26.5)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半筒削り。	
35-2 40	須恵器 羽釜	床面+5 瓦残存	口(20.6) 底(6.6) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半斜方向削り。	
36-3	須恵器 羽釜	床面+4 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半斜方向削り。	
36-4 40	須恵器 羽釜	床面+10 瓦残存	口— 底(6.4) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半斜方向削り。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

探検番号 図版番号	土器種類 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
36-5 40	土師器 小型壺	床面+7 瓦残存	口(10.8) 底 一 高 一	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪楕成形後、口辺横撫で。体部外面上位斜方向置削り。内面上位撫で。	内面は黒炭残りが悪い
36-6 40	須恵器 高台付埴	床面+4 ほぼ完形	口(13.2) 底 6.4 高 6.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	ロクロ成形後、高台貼付。	
36-7 40	須恵器 高台付埴	床面+12 瓦残存	口(12.8) 底 6.0 高 5.2	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
36-8	須恵器 高台付埴	覆土 瓦残存	口(13.5) 底 7.1 高(6.4)	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③暗褐色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
36-9 40	須恵器 高台付埴	床面+8 ほぼ完形	口 10.5 底 5.8 高 4.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗赤褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
36-10 40	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +1 瓦残存	口(11.9) 底 一 高 一	①粗、黒色鉱物粒多 ②酸化焰、やや軟質 ③外面橙色、内面黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。内面ロクロ目状に置削り。	高台割離
36-11	須恵器 高台付埴	床面+7 瓦残存	口(12.4) 底(5.0) 高(4.5)	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
36-12	須恵器 埴	床面+6 瓦残存	口(16.4) 底(7.8) 高 5.8	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
36-13	須恵器 高台付埴	床面+9 瓦残存	口(12.2) 底(5.0) 高(4.4)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色、断面褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	

154号住居跡 (第37～39図、第17表、図版6・7・40・41・66)

本住居跡は、第4次調査区北端の西向き緩斜面にあり、40・41-28グリッドに単独で位置する。周囲には隣接する住居跡はなく、やや離れる傾向にある。

平面形は、東西3m51cm・南北4m35cmを測る長方形を呈する。プラン確認時より実際には、東壁が50cm程内側に入っていた。主軸方向はN-92°Eを示す。壁高は最大で28cmを測る。床面は、竈前を中心に貼床を施す。掘り方には、少なくとも二時期以上に亘ると思われる竈前のビットが三基検出された。最大のもので径129cm・深さ37cmを測る。柱穴・壁溝については、検出されていない。

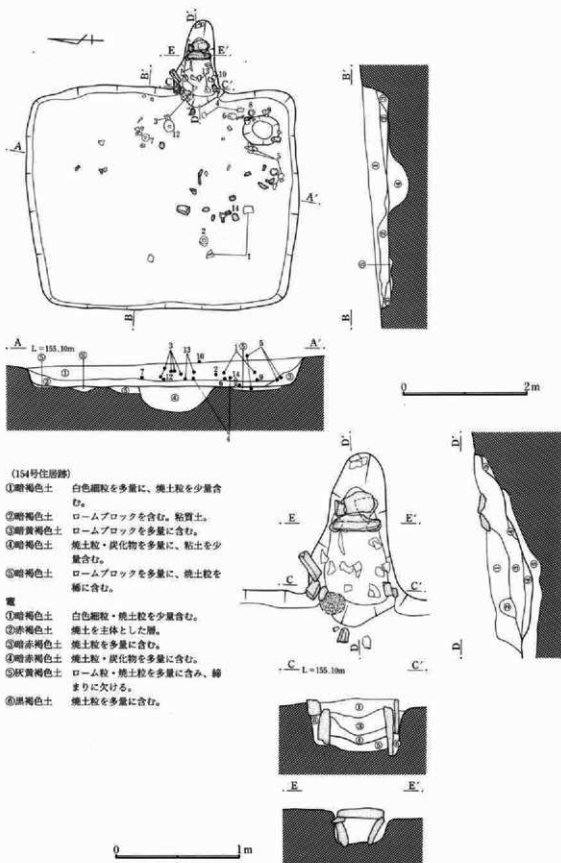
竈は東壁中央やや南寄りであり、幅72cm・奥行(屋外長)108cm・深さ45cmを測る。燃焼部には両軸石が残存し、左袖付近に粘土が検出された。焚き口先端部の支脚が据えられたと思われる位置には、二箇所の掘り込みが認められる。煙道部は燃焼部より一段高く、住居外に張り出す。両脇に石を据え、その上にやや長めの石が置かれている。構築材と思われる石材が破損・散乱し、残存状況は決して良いとは言えないが、今回報告する中では、後出する398号住居跡とともに竈の構造がある程度推定できる資料ではある。

貯蔵穴は、径57cm・深さ20cmを測る円形を呈する。

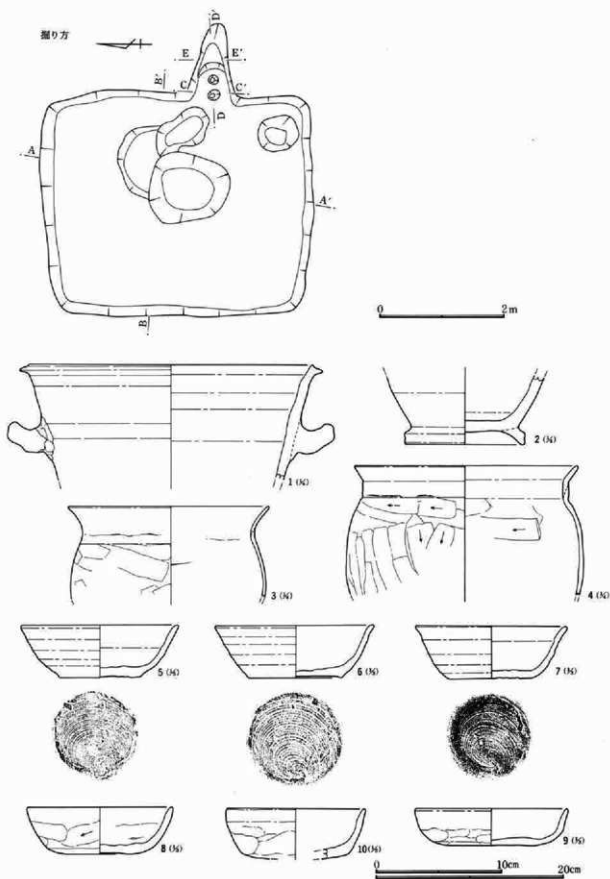
遺物は竈を中心に床面上に分布するが、全重量は少なく、個体の残存率も低い。検出された煮沸具は、甌とコ字状口縁土師器甕のみで羽釜は含まれていない。

他に、黒縹石状の石墨緑泥片岩3個・絹雲母石墨片岩2個・点紋絹雲母石墨片岩1個・紅縹絹雲母石墨片岩1個・緑泥片岩1個(計2.0kg)が検出されている。(内木)

第3章 平安時代の遺構と遺物

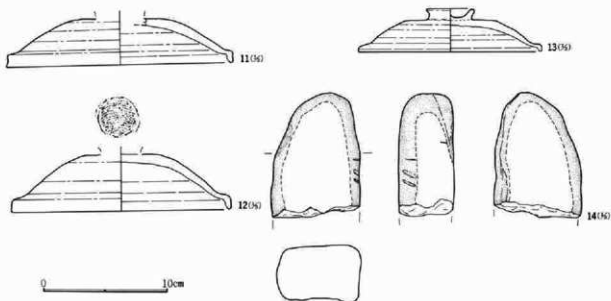


第37図 154号住居跡実測図(1)



第38図 154号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



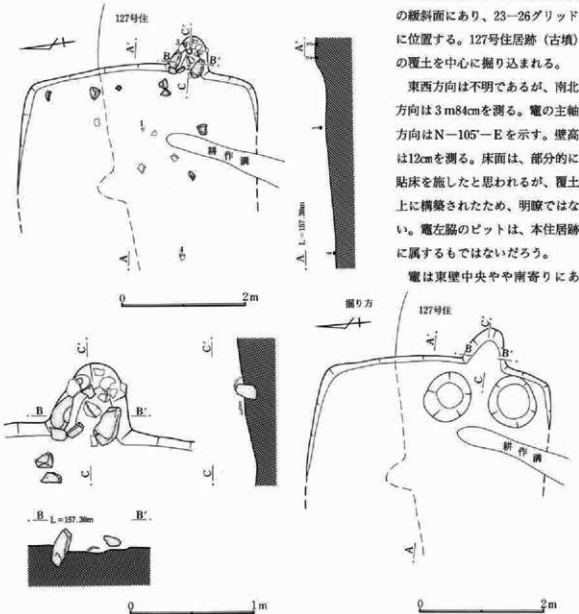
第39図 154号住居跡出土遺物実測図(2)

第17表 154号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器類別	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
38-1 40	須恵器 甕	床面+21 破片	口(30.0) 底— 高—	①青、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪轆成形でロクロ使用。内面撫で。	
38-2 41	須恵器 壺	床面+16 破片	口— 底 12.6 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
38-3 41	土師器 壺	床面+12 破片	口(21.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面直削り。	
38-4 41	土師器 壺	床面+10 破片	口(13.5) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面直削り。 内面撫で。	
38-5 41	須恵器 坏	床面-1 ほぼ完形	口(12.6) 底 6.4 高 4.1	①青、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③褐色、一部黒変	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	内面の一部を除き 吸戻により黒変
38-6 41	須恵器 坏	床面+10 完形	口 12.8 底 7.4 高 4.1	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
38-7 41	須恵器 坏	床面+11 ほぼ完形	口 12.0 底 6.6 高 4.2	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
38-8 41	土師器 坏	床面+2 完形	口 11.6 底 5.0 高 3.7	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面下半～底部直削り。	
38-9	土師器 坏	床面+8 瓦残存	口(12.0) 底(7.0) 高 2.9	①青、雲母・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面下半～底部直削り。	
38-10	土師器 坏	竈内+35 小破片	口(11.0) 底(5.6) 高(3.0)	①青、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面直削り。	
39-11	須恵器 甕	覆土 瓦残存	横— 口(18.0) 高 3.6	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面黄灰色	ロクロ成形後、頂部直削り。顔貼付。	顔刺摩

押込番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
39-12 41	須恵器 蓋	床面+8 ほぼ完形	横 一 口 17.2 高 一	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	ロクロ成形後、頂部荒削り。焼貼付。	焼刺離
39-13 41	須恵器 蓋	竈内+9 片残存	横 3.8 口 (14.5) 高 3.4	①滑、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、頂部荒削り。焼貼付。	
39-14 66	石製品 砥石 破片	床面+10	長 (9.7) 厚 4.6 幅 7.1 重 412.0		完底。三面を使用。	砂岩

181号住居跡 (第40・41図、第18表、図版7・41)



第40図 181号住居跡実測図

本住居跡は、第4次調査区中央の緩斜面にあり、23-26グリッドに位置する。127号住居跡(古墳)の覆土を中心に掘り込まれる。

東西方向は不明であるが、南北方向は3m84cmを測る。竈の主軸方向はN-105°-Eを示す。壁高は12cmを測る。床面は、部分的に貼床を施したと思われるが、覆土上に構築されたため、明瞭ではない。竈左脇のピットは、本住居跡に属するものではないだろう。

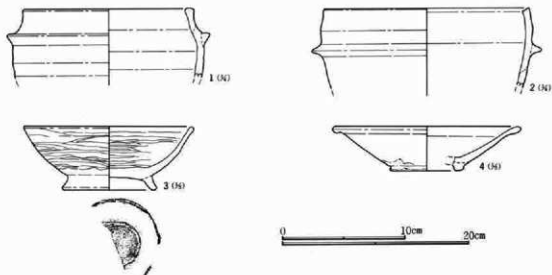
竈は東壁中央やや南寄りにあ

第3章 平安時代の遺構と遺物

り、幅63cm・奥行48cm・深さ9cmを測る。左袖石が残存するが、原位置を保っていない。接合しない数個体分の羽釜破片が検出されることから、本来は羽釜を補強材に用いた石組構造であったと思われる。

貯蔵穴は、竈右脇の径81cm・深さ25cmを測るピットが該当すると思われる。

遺物は、竈を中心に分布するが、全重量は少なく、個体の残存率も低い。(内木)



第41図 181号住居跡出土遺物実測図

第18表 181号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
41-1 41	須恵器 羽釜	床面+5 破片	口(17.9) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄褐色	輪模成形後、ロクロ使用。	
41-2	須恵器 羽釜	竈内+12 小破片	口(21.8) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色、内面鈍い浅黄色	輪模成形後、ロクロ使用。	
41-3 41	須恵器 高台付埴	竈内+12 互残存	口(13.3) 底(6.9) 高5.0	①青、褐色鉱物細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。内外面荒磨き。	
41-4	須恵器 高台付皿	床面直上 破片	口(14.6) 底(5.4) 高(3.5)	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	

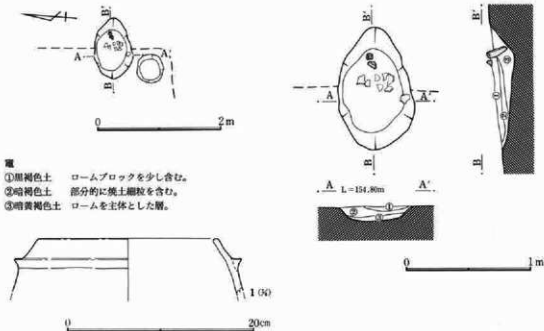
223号住居跡(第42図、第19表、図版7)

本住居跡は、第5次調査区東端の緩斜面にあり、27・28—20グリッドに単独で位置する。表土流失が著しく、竈周辺のみ確認された。破線は下場を示す。竈から想定される主軸方向はN-84°-Eを示す。

残存する竈の掘り込みは、幅57cm・奥行48cm・深さ18cmを測る。

貯蔵穴は、径45cm・深さ4cmを測る。

遺物には、見るべきものがなく、回収できたのは1点のみである。(鬼形)

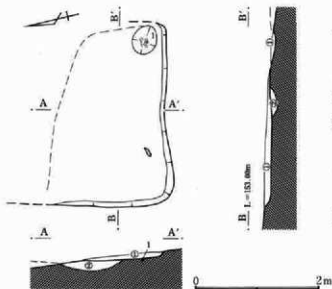


第42図 223号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第19表 223号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	流量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
42-1	須恵器 羽蓋	竈内-2 破片	口(19.0) 底— 高—	①胎土、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色、断面褐色	輪横成形でロクロ使用。	

244号住居跡 (第43・44図、第20表、図版7・8・41)



第43図 244号住居跡実測図 (I)

本住居跡は、第9次調査区北東端の緩斜面にあり、41-19グリッドに単独で位置する。

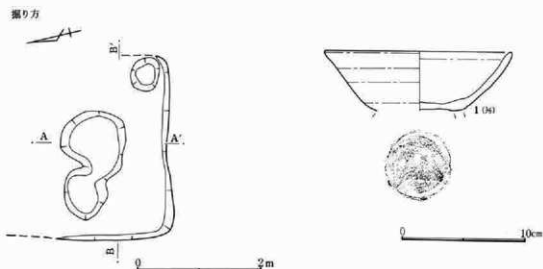
平面形は、表土掘削の際に住居跡の北側部分を削平してしまったため、南北方向は不明だが、東西2m91cmを測る方形を屋上と思われる。壁高は16cmを測る。

竈は検出されていないが、貯蔵穴は、東南隅にある径45cm・深さ16cmを測るピットが該当すると思われる。床下にある掘り込みは、本来二時期に亘るものであろう。(内木)

(244号住居跡)

- ①暗褐色土 ローム粒を多量に、焼土粒を稀に含む。
②暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

第3章 平安時代の遺構と遺物

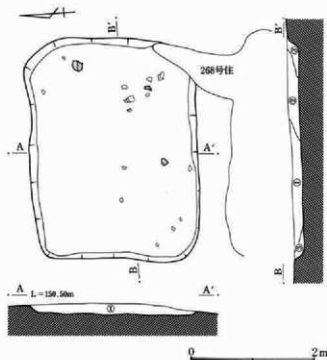


第44図 244号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第20表 244号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
44-1 41	須恵器 高台付埴 瓦	貯蔵穴内 +15 瓦残存	□ 14.6 底 高	①粗、黒色鉱物粒多 ②還元焼、やや硬質 ③黄灰色	右回転口クロ成形後、底部未切り、高台貼付。	高台剥離

313号住居跡 (第45・46図、第21表、図版8・41)

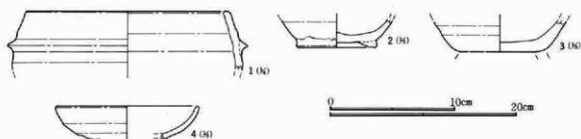


第45図 313号住居跡実測図

本住居跡は、第5次調査区南端の東西に入る谷に面した緩斜面にあり、11-10グリッドに位置する。268号住居跡「矢田遺跡」で報告)に南東隅を破壊される。

平面形は、東西3m51cm・南北2m70cmを測る長方形を呈するが、主軸方向は不詳である。壁高は最大で27cmを測る。基本的に掘り方はなく、黄褐色ローム(地山)を叩き締めて床面としていたと思われる。竈・貯蔵穴等については、検出されていない。住居状遺構とすべきかもしれない。(春山)

- (313号住居跡)
- ①暗褐色土 軽石(〜3mm)・ローム粒(〜5mm)・炭化物(〜6mm)を含む。
 - ②暗褐色土 ①層に比し、軽石・ローム粒・炭化物を多く含む。
 - ③暗黄褐色土 ②層に比し、ローム粒を多く含む。



第46図 313号住居跡出土遺物実測図

第21表 313号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 国際番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
46-1 41	須恵器 羽釜	不明 小破片	口(21.6) 底— 高—	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	輪横成形でロクロ使用。	
46-2	須恵器 高台付埴	不明 破片	口— 底(6.2) 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
46-3	須恵器 高台付埴	不明 小破片	口— 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒多 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	高台剝離
46-4	須恵器 坏	不明 小破片	口(11.2) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	ロクロ成形。	

398号住居跡 (第47・48図、第22表、図版8・9・41・65)

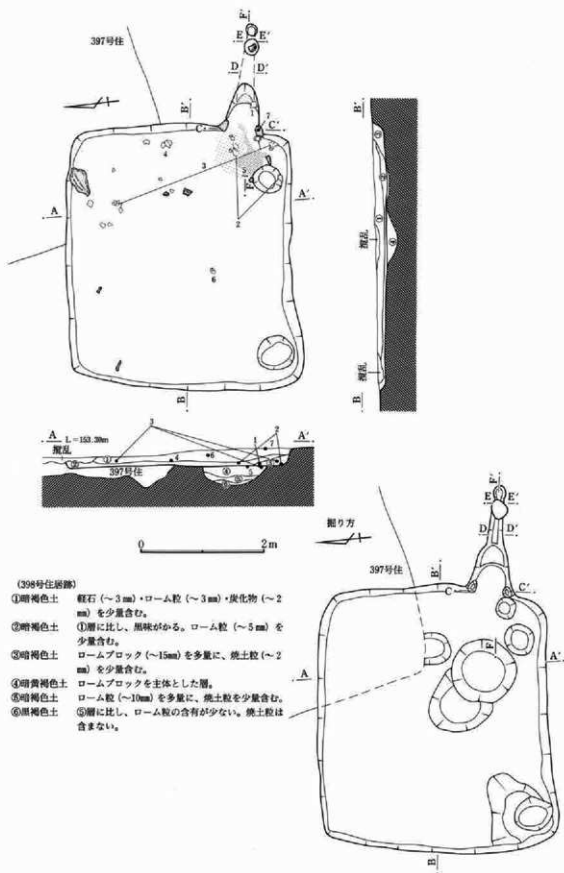
本住居跡は、第5次調査区北端の平坦面にあり、39-14・15グリッドに位置する。舌状台地の縁辺部分にあたり、各時代を通じて住居跡の分布密度は低く、同時期を中心とした住居跡が散在的に所在する。397号住居跡(古墳)の南西隅の覆土を切って構築され、耕作による攪乱を数箇所受けている。今回報告する中では、煙道部の残存状況が最も良好であるが、傾斜の関係で、西壁の残りは悪い。

平面形は、東西4m26cm・南北3m72cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-99°-Eを示す。壁高は最大で26cmを測る。床面は、竈周辺を中心に貼床を施すが、重複する部分ではやや軟弱であった。掘り方には、時期差のある竈前のピットを含め、五基以上のピットが認められた。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁の南隅近くにあり、幅54cm・奥行171cm(煙道長93cm)・深さ39cmを測る。構築材としては、両袖石のみが原位置で残存していた。燃焼部と煙道部との間に明瞭な段をなす。燃焼面の焼土化が著しく、使用の痕跡を推定させ、竈前には現状で3cm程度の厚さを測る焼土粒と灰の分布がみられた。燃焼部内部には、数個体分の接合しない羽釜破片が含まれており、掘り方に埋め込まれた状態の物もあったので、本来は羽釜を補強材に用いた石組構造であったと思われる。

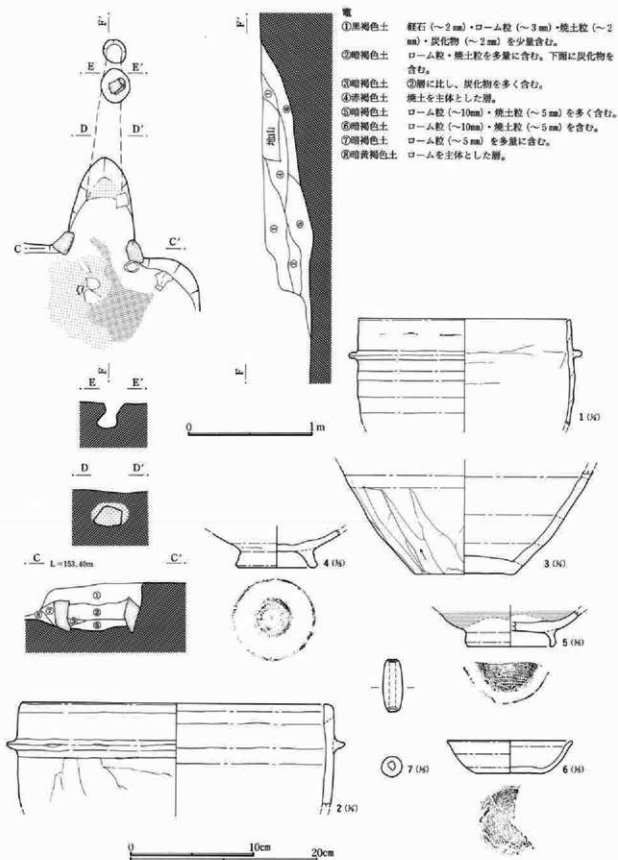
貯蔵穴は、竈右脇のピットが該当すると考えられ、径48cm・深さ15cmを測る円形を呈している。

遺物は、竈周辺を中心に床面上に分布するものの、密度は薄く、残存率も低い。竈関係の羽釜を除くと灰袖陶器の埴・土師質の小皿・土甕がみつまっている程度で、出土遺物に見るべき物はない。(春山)



第47図 398号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第48図 398号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

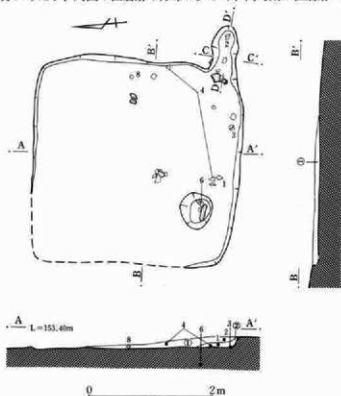
第3章 平安時代の遺構と遺物

第22表 398号住居跡出土土物観察表

採回番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
48-1 41	須恵器 羽 蓋	竈内+2 破片	口(22.5) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪積成形でロクロ使用。内面整で。	外面傷付着
48-2 41	須恵器 羽 蓋	床面直上 破片	口(32.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い赤褐色	輪積成形でロクロ使用。外部外面整削り。内面整で。	
48-3 41	須恵器 羽 蓋	床面+2 破片	口— 底 10.4 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪積成形でロクロ使用。外部外面下部上方向整削り。	
48-4 41	須恵器 高台付埴	床面+4 破片	口— 底 6.0 高—	①粗、雲母・褐色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③外面暗赤色、内面灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面黒味がかかる
48-5 41	灰釉陶器 高台付埴	床面直上 破片	口— 底 (6.7) 高—	①普、粉と含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
48-6 41	須恵器 小 皿	床面+16 片残存	口(10.0) 底 (5.0) 高 2.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③洗黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
48-7 65	土 鍋	床面+26 完形	長 4.0 径 1.6/0.8 孔径0.5 重 8.9	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	榊状工具巻き付け。	

428号住居跡 (第49・50図、第23表、図版9・42・67)

本住居跡は、第5次調査区北端の平坦面にあり、40-17グリッドに単独で位置する。舌状地上の縁辺部分にあたり、周囲の住居跡の分布は少なく、同時期の住居跡に関しても散在的である。



第49図 428号住居跡実測図(1)

傾斜の関係で残存状況は不良であるが、平面形は東西3m24cm・南北3m33cmを測る正方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-102°-Eを示す。壁高は最大で14cmを測る。床面は、ローム(地山)を叩き締めており、基本的に掘り方は認められない。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は、東壁の南隅近くであり、幅51cm・奥行78cm・深さ21cmを測る。破損した石材は認められるものの、本来の構造は明らかではない。

貯蔵穴は、南西隅近くであり、径57cm・深さ29cmを測る円形を呈する。

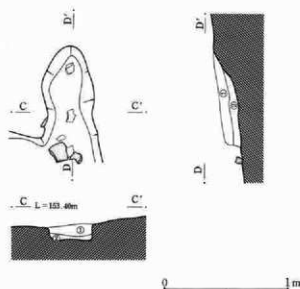
遺物は、住居跡南半部を中心に分布

(428号住居跡)

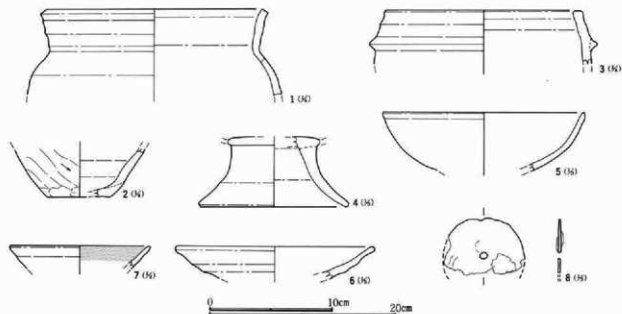
- ①暗褐色土 ローム粒(～3mm)を少量含む。
- ②暗褐色土 ローム粒(～5mm)を多量に含む。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

するが、全重量は少なく、個体の残存率も低い。煮沸具には土釜・羽釜を含む。鉄製品には、紡錘車の紡輪が認められる。他に蘭縞石状の点紋網雲母石墨片岩1個(0.35kg)が検出されている。(春山)



- ①黒褐色土 白色軽石(〜3mm)・ローム粒(〜3mm)を含む。
 ②黒褐色土 ローム粒(〜3mm)・焼土粒(〜3mm)を多量に含み、炭化物(〜2mm)を少量含む。



第50図 428号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第23表 428号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
50-1 42	須恵器 壺	床面+3 破片	□(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化病、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺無磨で。	
50-2	須恵器 羽釜	窠内+11 破片	□— 底(6.8) 高—	①粗、砂粒多 ②酸化病、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形でロクロ使用。外面下半部磨り。	
50-3	須恵器 羽釜	床面直上 破片	□(20.6) 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②酸化病、硬質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。	

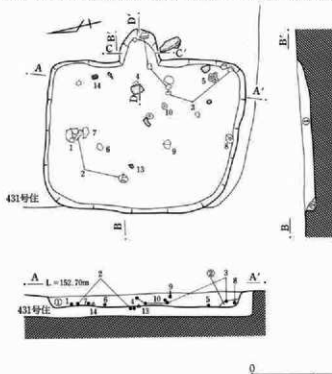
第3章 平安時代の遺構と遺物

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
50-4 42	須恵器 高台付埴	床面+1 破片	口— 底(12.0) 高—	①粗、黒色鉱物粒多 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
50-5	土師器 埴	覆土 破片	口(16.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③黄褐色	ロクロ成形。	
50-6	土師器 高台付? 皿	貯蔵穴内 —21 破片	口(15.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色、断面赤褐色	ロクロ成形。	
50-7 42	灰釉陶器 埴?	覆土 破片	口(10.0) 底— 高—	①滑、黒色鉱物・白色細砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
50-8 67	鉄製品 紡錘車	床面直上	径(6.4) 厚0.2	孔径0.5 重17.2		

430号住居跡(第51~53図、第24表、図版9・42)

本住居跡は、第7次調査区南西端の平坦面にあり、59・60-10グリッドに位置する。周囲に同時期の住居跡はなく、孤立した形になっている。431号住居跡(奈良)の覆土中に構築される。430号住居跡が構築された段階では、431号住居跡が未だ完全には埋没しきっておらず、意図的に掘削量の少なくて済む占地をした可能性はある。

431号住居跡の覆土中に構築されている為、プラン確認にやや不安は残るが、平面形は東西2m43cm・南北3m15cmを測る歪んだ長方形を呈し、主軸方向はN-104°-Eを示す。壁高は最大で28cmを測る。床面の状況は、上記の理由により明瞭ではないが、貼床があったと思われる。掘り方は、重複住居の覆土中のため確認できなかった。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。



竈は東壁中央やや北寄りにあり、幅63cm・奥行45cm・深さ21cmを測る。住居跡内外に用材とみられる棒状の石材や破損した石材が認められるが、原型を窺い知る残存状況ではない。

遺物は、床面を中心に分布し、量的には並であるが、残存率は低い。煮沸具にはコ字状口縁土師器甕が認められる。石製品としては、穿孔のある定形化した物も含め、砥石が二点検出された。(春山)

(430号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを稀に含み、やや締まりに欠ける。
- ②暗黄褐色土 ロームブロックを含み、やや締まっている。

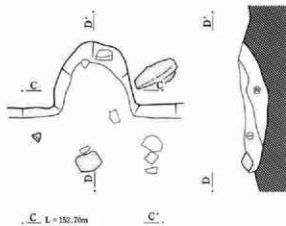
第51図 430号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

■

①暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを稀に含み、締まりに欠ける。

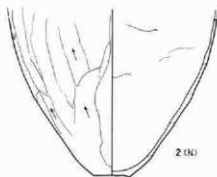
②暗黄褐色土 焼土粒を多量に含み、やや締まりに欠ける。



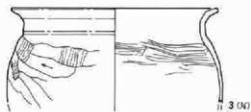
C L=152.7cm



1 (No)



2 (No)



3 (No)



4 (No)



5 (No)



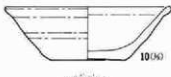
6 (No)



7 (No)



8 (No)



10 (No)

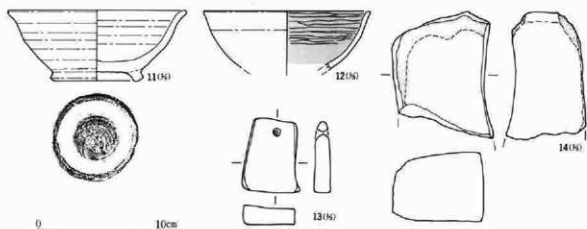


9 (No)



第52図 430号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第53図 430号住居跡出土遺物実測図(2)

第24表 430号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
52-1 42	土器 甕	床面+2 破片	口(21.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺擴張で。体部外面張り。内面黒塗で。	
52-2 42	土器 甕	床面-2 破片	口— 底(4.0) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪横成形。体部外面張り。内面黒塗で。	
52-3 42	土器 甕	床面+4 破片	口(21.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③暗赤褐色	輪横成形後、口辺擴張で。体部外面張り。内面黒塗で。	
52-4	土器 小型甕	床面-2 破片	口(11.8) 底— 高—	①青、砂粒 ②還元焰、軟質 ③赤褐色	輪横成形後、口辺擴張で。外面張り。	
52-5 42	須恵器 高台付埴	床面+2 片残存	口(13.2) 底 6.4 高 5.0	①青、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
52-6	須恵器 高台付埴	床面+4 片残存	口 13.3 底— 高—	①細、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	外面に保付着 高台刺摩
52-7	須恵器 高台付埴	床面+3 片残存	口(13.4) 底(6.1) 高 3.3	①青、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
52-8 42	須恵器 高台付埴	床面+5 片残存	口 15.3 底— 高—	①青、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台刺摩
52-9 42	須恵器 高台付皿	床面+15 片残存	口(13.4) 底— 高—	①粗、曹母・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台刺摩
52-10	須恵器 坏	床面+7 片残存	口(13.1) 底 4.9 高 4.2	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
53-11 42	須恵器 高台付埴	覆土 片残存	口(14.1) 底 6.5 高 5.7	①青、石英・砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
53-12 42	土器 埴	覆土 破片	口(13.2) 底— 高—	①青、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形。	内面黒色処理
53-13	石製品 砥石	床面直上 破片	長 5.8 厚 1.5 幅 4.6 重 65.0		中砥。全面使用。	濃紋岩
53-14	石製品 砥石	床面+5 破片	長 10.0 厚 6.3 幅 8.2 重 650.0		中砥。四面使用。	砂岩

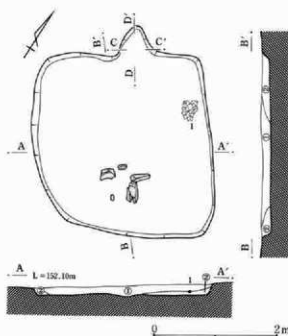
435号住居跡 (第54図、第25表、図版9・10・42)

本住居跡は、第5次調査区最北端の緩斜面にあり、40-11グリッドに単独で位置する。北側には東西方向の支谷が入り、本住居跡と支谷の間の傾斜面には、同時期の住居跡は全く検出されていない。

平面形は東西2m91cm・南北2m91cmを測る歪んだ正方形を呈し、主軸方向はN-32°-Eを示す。壁高は14cmを測るが、概して残存状況は不良である。床面はローム(地山)を叩き締められており、基本的に掘り方は認められない。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は北壁ほぼ中央にあり、幅57cm・奥行42cm・深さ12cmを測るが、痕跡に近い。

遺物は、東壁付近から土師器壺の胴部のみが検出された。石材の検出状況と合わせ注意を要する。(春山)



(435号住居跡)

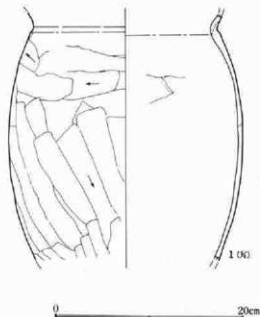
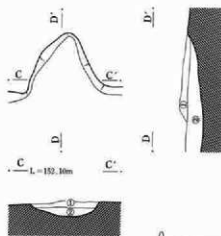
①暗褐色土 ローム粒(〜3mm)を少量含む。

②暗褐色土 ローム粒を多量に含む。

竈

①暗褐色土 焼土粒(〜2mm)・炭化物(〜2mm)を少量含む。

②暗褐色土 焼土粒を稀に含む。



第54図 435号住居跡実測図及び出土遺物実測図

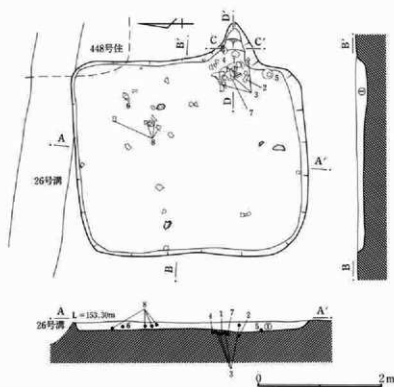
第25表 435号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器 類	出土状況 残存状況	流量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
54-1 42	土 器 壺	床面+5 互残存	□ —	①粗、砂粒 ②酸化剤、軟質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口辺横削で。体部外面上半段削り。下半段方向削削り。内面直削で。	

449号住居跡 (第55・56図、第26表、図版10・42)

本住居跡は、第7次調査区中央寄りの平坦面にあり、61-18グリッドに位置する。周囲には、南東方向に同時期の住居跡が比較的まとまって所在するが、他の方向での分布密度は低い。448号住居跡(古墳)の南西隅を切って構築され、26号溝によって北東隅を破壊される。

平面形は、東西3m09cm・南北3m72cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Eを示す。

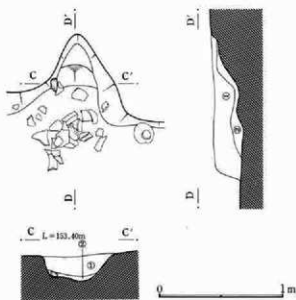


壁高は最大で20cmを測る。床面は、ローム(地山)を叩き縮めており、基本的に掘り方は認められない。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅78cm・奥行54cm・深さ18cmを測る。燃焼部と煙道部との間に明瞭な段をなす。概して残存状況は不良で、本来の構造は明らかではない。

遺物は、竈を中心に分布するが、全体量は少なく、個体の残存率も低い。煮沸具には羽釜を含むようであるが、補強材との分別は難しい。

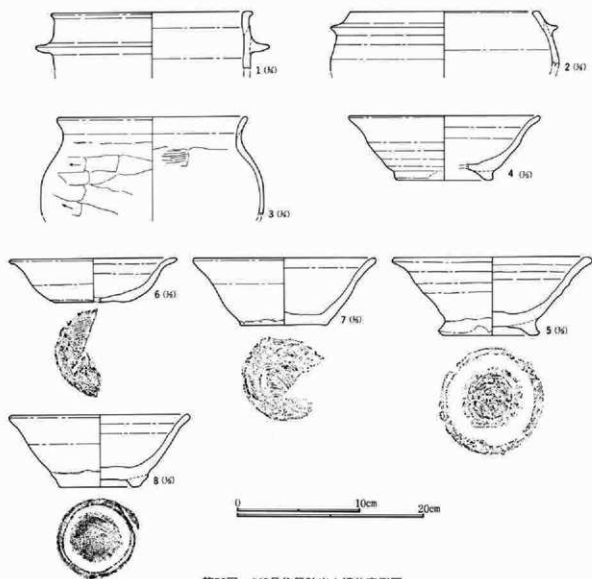
(春山)



(449号住居跡)

- ①暗褐色土 ローム粒(～2mm)・ロームブロックを含む。
- 竈
- ①暗褐色土 ローム粒(～10mm)を含む。
- ②暗褐色土 ローム粒(～5mm)・焼土粒(～5mm)・粘土粒(～3mm)を含む。

第55図 449号住居跡実測図



第56図 449号住居跡出土遺物実測図

第26表 449号住居跡出土遺物観察表

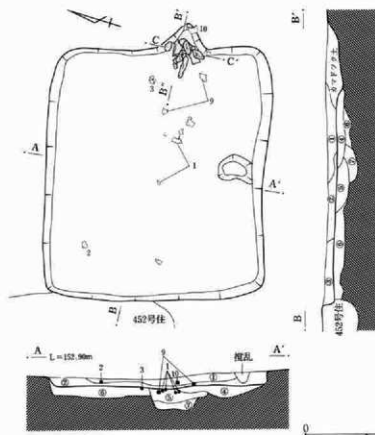
発掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
56-1	須恵系 羽釜	床面-5 破片	□(21.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化層、やや軟質 ③鈍い橙色	輪横成形後、ロクロ使用。	
56-2	須恵系 羽釜	床面-4 破片	□(20.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化層、やや硬質 ③浅黄色	輪横成形後、ロクロ使用。	
56-3 42	土師系 甕	床面-5 破片	□(20.0) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化層、やや軟質 ③赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面横方向磨削り。内面寛撫で。	
56-4	須恵系 高台付埴	甕内-2 片残存	□(15.2) 底 (7.0) 高 (5.1)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化層、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
56-5 42	須恵系 高台付埴	床面+1 ほぼ完形	□ 15.4 底 7.2 高 6.2	①粗、砂粒 ②酸化層、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
56-6	須恵器 埴	床面+5 瓦残存	□(13.0) 底 (6.0) 高 (3.4)	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③淡黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
56-7 42	須恵器 埴	床面-4 瓦残存	□(14.4) 底 (7.0) 高 5.3	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
56-8 42	須恵器 高台付埴	床面+2 瓦残存	□(14.0) 底 6.4 高 5.7	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	

451号住居跡 (第57～59図、第27表、図版10・42・61)

本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、66-26グリッドに位置する。周囲には古墳時代の住居跡が重複密集しているが、同時期の住居跡に限ると極めて散在的である。452号住居跡(古墳)の一部を切って構築される。すぐ南には450号住居跡(古墳)が隣接する。



平面形は東西3 m99cm・南北3 m54cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-77°-Eを示す。壁高は最大で28cmを測る。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施す。掘り方には、竈の掘り込みと竈前の明瞭なピット二基が検出された。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅72cm・奥行36cm・深さ36cmを測る。補強材に瓦を用いていたようだが、廃棄の時点で完全に破壊され、原型をとどめていない。

貯蔵穴は南壁沿いにあり、径51 cm・深さ25cmを測る。

遺物は少なく、残存率も低い。

(香山)

(451号住居跡)

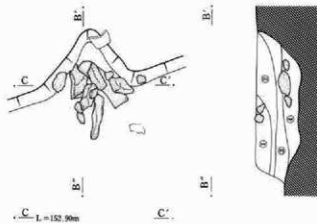
- ①暗褐色土 白色軽石(～3mm)・ローム粒(～3mm)を少量含む。
- ②暗褐色土 ①層に比し、ローム粒の含有が多い。
- ③暗褐色土 ローム粒・焼土粒(～3mm)・炭化物(～3mm)を含む。
- ④暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土 ローム粒(～10mm)を多量に含む。
- ⑥暗褐色土 ロームブロック(～50mm)を含む。
- ⑦暗褐色土 粘質で、やや茶色がかかる。

第57図 451号住居跡実測図(1)

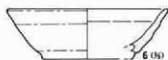
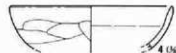
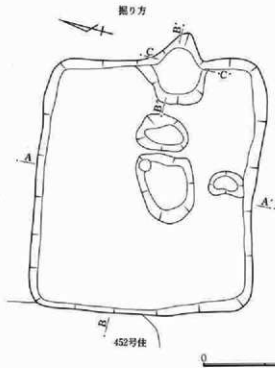
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

■

- ①暗褐色土 ローム粒(～3mm)・炭化物(～2mm)を含む。
 ②暗褐色土 炭化物(～2mm)・焼土粒(～2mm)を少量含む。
 ③暗褐色土 ローム粒(～5mm)・焼土粒(～3mm)を多量に含む。
 ④暗赤褐色土 ローム粒(～7mm)・焼土粒(～5mm)を多量に含む。



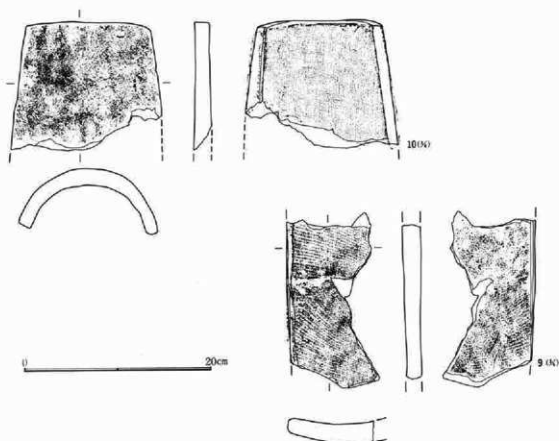
0 1m



0 10cm 20cm

第58図 451号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第59図 451号住居跡出土遺物実測図(2)

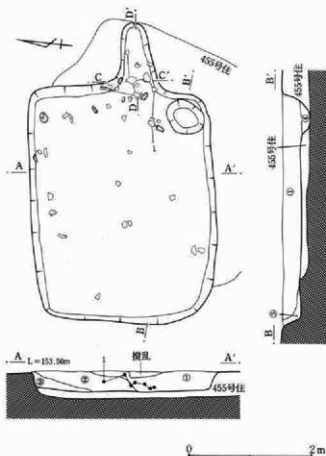
第27表 451号住居跡出土遺物観察表

押印番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
58-1 42	土師器 壺	床面-5 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面横方向掘削り。内面撫で。	
58-2	須恵器 壺	床面+5 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪横成形でロクロ使用。	
58-3	土師器 坏	床面-2 写残存	口(10.8) 底 5.0 高 3.3	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半部削り。	
58-4	土師器 坏	覆土 破片	口(12.7) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半部削り。	
58-5	土師器 坏	覆土 破片	口(10.8) 底(6.4) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半部削り。	
58-6	須恵器 坏	覆土 破片	口(12.5) 底(7.0) 高(4.0)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
58-7	須恵器 坏	覆土 破片	口(10.6) 底(5.6) 高(3.9)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
58-8	須恵器 蓋	覆土 破片	柄— 口(13.8) 高—	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形。	

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
59-9 61	平瓦	床面+1 小破片	長— 幅— 厚2.0	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	一枚造りか。側端の圓取り2。	
59-10 61	丸瓦	竈内+6 破片	長— 幅— 厚1.7	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造り。側端の圓取り2。	

454号住居跡 (第60・61図、第28表、図版10・11・43)

本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、59・60-20グリッドに位置する。南側に羽釜を伴う同時期の住居跡が比較的密集・重複して所在するが、東側は空地になっている。455号住居跡(奈良)の西壁を切って構築され、一部地山を掘り込んでいる部分もある。



(454号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石(～2mm)・ローム粒(～2mm)・焼土粒(～2mm)を少量含む。
 ②暗褐色土 ローム粒(～10mm)を多量に、焼土粒(～2mm)を稀に含む。
 ③暗褐色土 ②層に比し、やや色調暗い。
 ④暗黒褐色土 ローム粒(～2mm)を少量含む。

第60図 454号住居跡実測図(1)

平面形は東西3m81cm・南北2m97cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-78°-Eを示す。壁高は最大で31cmを測る。床面は、竈周辺を中心に貼床を施す。掘り方には、他住居跡の覆土を掘り込むため明瞭ではないが、径114cm・深さ22cmを測るピットが一基検出されている。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。

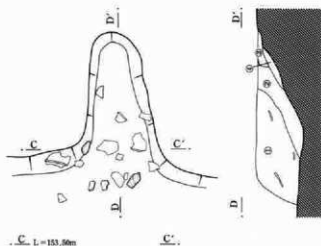
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅75cm・奥行93cm・深さ39cmを測る。煙道部分まで比較的よく残るが、全体としては残存状況は不良で、本来の構造は明瞭ではない。

貯蔵穴は、径57cm・深さ27cmを測る円形を呈する。

遺物はやや少なく、竈周辺と床面上に疎に分布し、残存率も低い。竈内部に羽釜が一個体検出されたが、量からみて電構築材ではないようである。

(中沢)

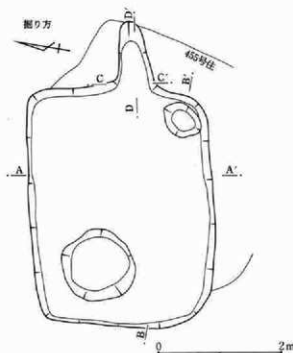
第3章 平安時代の遺構と遺物



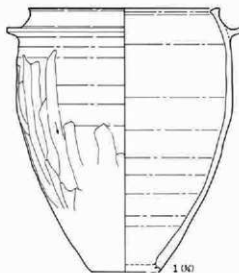
C. L = 153.50m



0 1m



- ①暗褐色土 白色輝石(〜2mm)・ローム細粒(〜1mm)・
 焼土粒(〜2mm)を少量含む。
 ②暗褐色土 ①層に比し、焼土粒の含有が多い。
 ③赤褐色土 焼土を主体とした層。
 ④褐色土 ロームを主体とした層。



0 10cm 20cm

第61図 454号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第28表 454号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	流量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
61-1 43	須恵器 羽 蓋	床面+4 片残存	口(20.4) 底(7.0) 高(27.8)	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面縦方向型削り。	
61-2	須恵器 坏	覆土 破片	口(11.6) 底— 高—	①滑、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	

457号住居跡 (第62・63図、第29表、図版11・43)

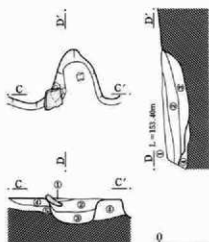
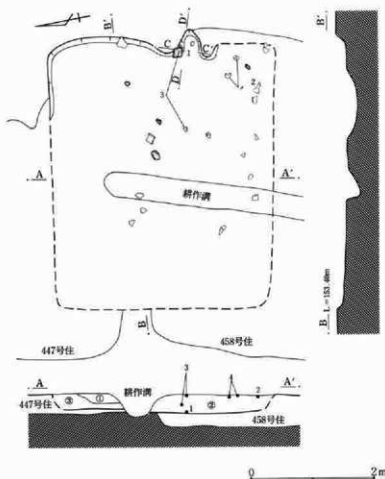
本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、58-18・19グリッドに位置する。447号住居跡(奈良)・457号住居跡(奈良)を切って構築され、一部地山を掘り込んでいる部分もある。南北方向の耕作溝が深く及ぶ。

重複住居跡の覆土中の為、壁の立ち上がりを充分追及出来ず、不確定な要素があるが、平面形は東西4m29

cm・南北3m57cmを測る長方形を呈するものと思われる。竈から想定される主軸方向はN-102°-Eを示す。壁高は最大で15cmを測る。床面は、竈周辺を中心に貼床を施すと思われるが、あまり明瞭ではない。他の住居跡の覆土中になる為、掘り方も不明瞭で、径117cm・深さ24cmを測るピットが一基検出されたのみである。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設の実態は不明である。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅48cm・奥行36cm・深さ27cmを測るが、原型を窺い知るような残存状況ではなかった。

遺物は少なく、個体の残存率も低い。浮いた状態で検出されたものが多く、注意を要する。(春山)



(457号住居跡)

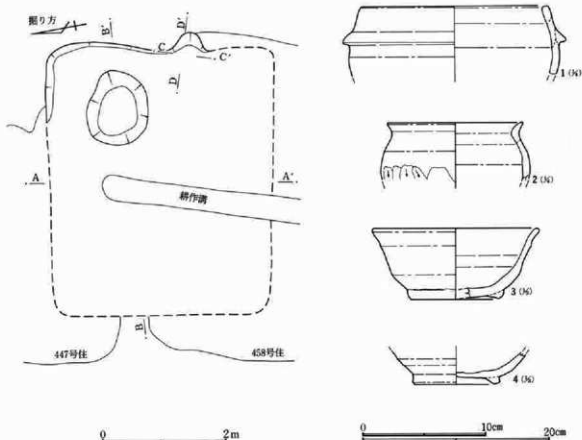
- ①黒褐色土 軽石(～2mm)・ローム粒(～3mm)を少量含む。
 ②暗褐色土 ローム粒(～5mm)を多量に、軽石を少量含む。
 ③暗褐色土 ローム粒を多量に、炭化物(～2mm)を少量含む。

竈

- ①暗褐色土 軽石(～2mm)・ローム粒(～2mm)・焼土粒(～2mm)を少量含む。
 ②暗赤褐色土 ローム粒(～3mm)・焼土粒(～3mm)を多量に含む。
 ③暗赤褐色土 焼土粒(～5mm)・炭化物(～3mm)を多量に含む。
 ④黒褐色土 ローム粒(～5mm)・焼土粒を多量に含む。
 ⑤暗褐色土 ローム粒(～3mm)を多量に含む。

第62図 457号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



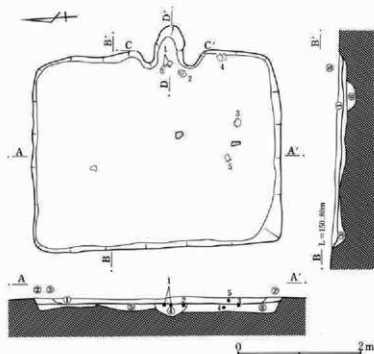
第63図 457号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第29表 457号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
63-1 43	須恵器 羽蓋	竈内+2 破片	□(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色、内面黄褐色	輪横成形でロクロ使用。	
63-2 43	土器 甕	床面+20 破片	□(14.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横削で、体部外面直削り。	
63-3	須恵器 高台付埴	床面+9 与残存	□(13.2) 底(7.0) 高(5.6)	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り、高台貼付。	
63-4	須恵器 高台付埴	床面+23 破片	□— 底(6.4) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り、高台貼付。	

459号住居跡 (第64・65図、第30表、図版11・43)

本住居跡は、第8次調査区東寄りの緩斜面にあり、66—40・41グリッドに単独で位置する。北側には、重複する675号住居跡(平安)・676号住居跡(平安)が隣接し、西側には、ほぼ同時期に所在したと思われる622

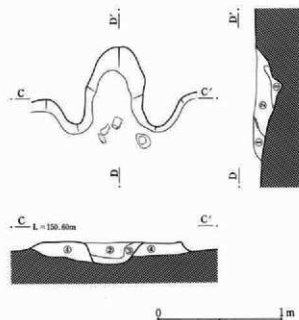


号住居跡(平安)が所在する。同時期に所在した住居跡に限れば、その分布は極めて薄く、622号住居跡以外では、10グリッド以上離れて所在している。

平面形は東西3m15cm・南北3m99cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-89°-Eを示す。壁高は最大で15cmを測る。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施す。掘り方には、竈前のピットの他、三基が検出された。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、確認されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅48cm・奥行57cm・深さ21cmを測り、両袖が残存していた。

遺物は、竈を中心に床面上に散漫に分布するが、量的に少なく、個体の残存率も低い。(中沢)



(459号住居跡)

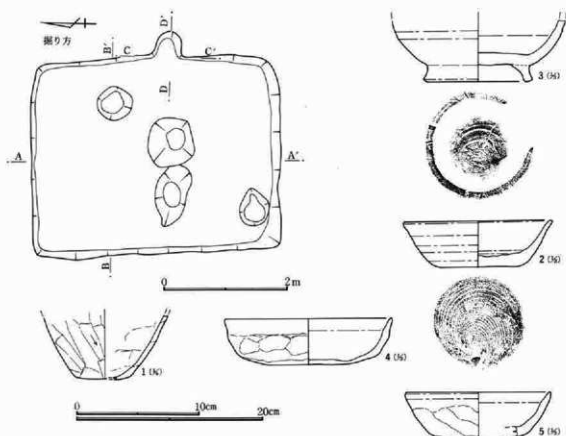
- ①暗褐色土 1mm内外の白色軽石粒と焼土粒を少量含む。
- ②暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- ③褐色土 ロームブロックを主体とした層。
- ④黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒を少量含む。
- ⑤黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- ⑥暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とした層。

竈

- ①暗褐色土 1mm内外の白色軽石粒を少量含む。
- ②暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に、焼土粒を稀に含む。
- ③褐色土 ロームを主体とし、黒褐色土を少量含む。
- ④褐色土 ロームを主体とした層。

第64図 459号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第65図 459号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第30表 459号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
65-1	土師器 壺	室内-2 破片	口 - 底 (4.0) 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪轆成形後、外面下半部方向段削り。内面直 撫で。	
65-2 43	須恵器 坏	床面-1 瓦残存	口(13.8) 底 6.0 高 3.6	①粗、黒色鉱物粒多 ②還元焰、硬質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
65-3 43	須恵器 高台付埴 破片	床面-1 破片	口 - 底 8.0 高 -	①粗、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	外面黒灰
65-4 43	土師器 坏	床面-5 瓦残存	口(13.1) 底(10.8) 高 3.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面指押さえ。底 部直削り。	
65-5	土師器 坏	床面+4 破片	口(11.5) 底 (7.9) 高 (3.6)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面直削り。	

461号住居跡 (第66・67図、第31表、図版12・43・68)

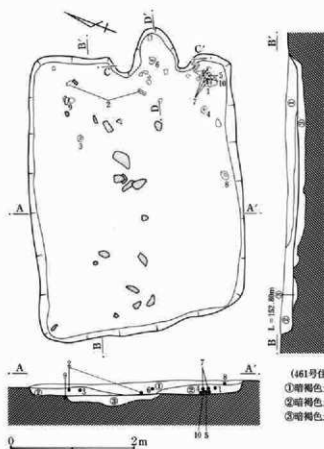
本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、67・68-22・23グリッドに単独で位置する。南方には各時代を通じて住居跡の分布が見られない空間地が認められる。周囲には、矢田遺跡では検出数の少ない掘立柱建物跡が比較的多く検出されている。

平面形は東西4m44cm・南北3m42cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-64°-Eを示す。壁高は18cmを

測る。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施し、掘り方では、住居跡の西側部分に顕著な段差が認められた。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

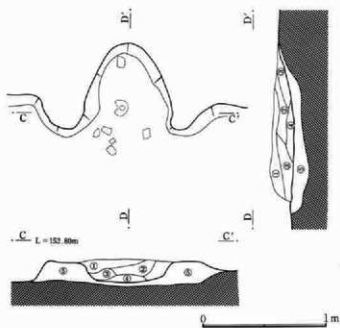
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅72cm・奥行66cm・深さ12cmを測る。

遺物は、住居跡の東側と西側で土器と石材が分離する形で検出されている。二点の墨書土器の出土が注意される。(中沢)



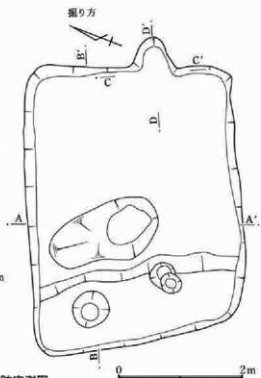
(461号住居跡)

- ①暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- ②暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(～20mm)を多量に含む。
- ③暗褐色土 ロームブロック(～30mm)を多量に含む、やや締まっている。



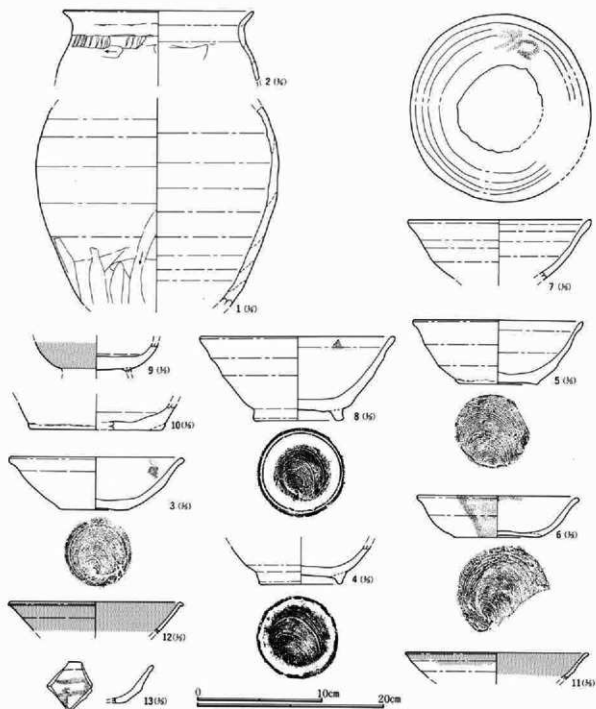
竈

- ①暗褐色土 1m内外の白色軽石粒を少量含む。
- ②暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- ③暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
- ④暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。



第66図 461号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



第67図 461号住居跡出土遺物実測図

第31表 461号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
67-1 43	須志御 甕?	床面+5 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元培灰味、硬質 ③灰褐色	輪積成形でクロロ使用。体部外面下半削り。	
67-2 43	土師器 壺	床面+2 破片	口(20.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元培、軟質 ③鈍い褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面削り。 内面荒撫で。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

棟号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
67-3 43	須恵器 埴	床面+6 完形	口13.6 底5.6 高4.1	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	灯明皿。内面に 油煙少量付着
67-4	須恵器 高台付埴	床面+2 破片	口— 底6.6 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
67-5 43	須恵器 埴	床面+2 片残存	口(13.4) 底6.2 高5.0	①粗、石英粒多 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	一部黒変
67-6 43	須恵器 坏	竈内+5 片残存	口(12.6) 底(6.8) 高3.2	①粗、石英粒多 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	灯明皿。内面に 油煙少量付着
67-7 43・68	須恵器 坏	竈内+3 片残存	口(14.4) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	クロコ成形。	墨書土器
67-8 43	須恵器 高台付埴	床面+12 片残存	口(15.2) 底7.0 高5.6	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。高台貼付。	内面に油煙少量 付着
67-9 43	須恵器 高台付埴	床面-2 破片	口— 底— 高—	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	クロコ成形後、高台貼付。	高台割離
67-10	須恵器 埴	床面+3 破片	口— 底(10.6) 高—	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	クロコ成形後、底部糸切り。回転調整。	
67-11	灰輪陶器 埴	覆土 破片	口(14.4) 底— 高—	①粗、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	クロコ成形。	
67-12	灰輪陶器 埴	覆土 破片	口(13.6) 底— 高—	①粗、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	クロコ成形。	
67-13 68	須恵器 坏	覆土 破片	口— 底— 高—	①粗、炭母 ②酸化焰、やや硬質 ③残黄色	クロコ成形。	体部内面墨書

464号住居跡 (第68・69図、第32表、図版12・13・43・68)

本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、63-23グリッドに位置する。周囲には北側に482号住居跡(平安)と12号掘立柱建物跡が隣接し、南側には同時期の住居跡がまともして所在する。東側は古墳時代には住居跡が占地をするが、同時期の住居跡は認められない。あるいは何らかの遺構があったのかもしれない。489号住居跡(古墳)の北東隅を切って構築される。

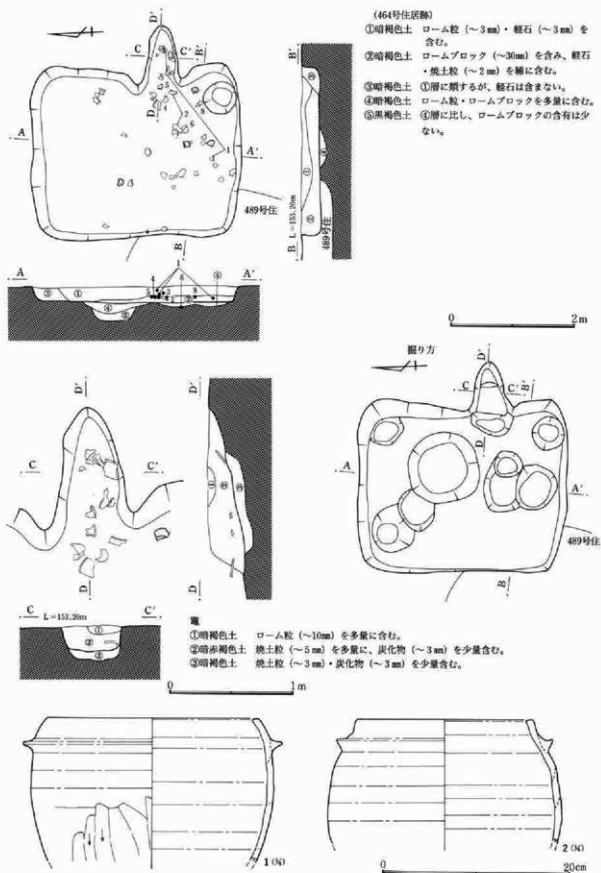
平面形は東西2m76cm・南北3m36cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-93°-Eを示す。壁高は最大で30cmを測り、平安時代の住居跡としては、残存状況は比較的良好である。床面は、竈前を中心に貼床を施す。掘り方には、電構築時の掘り込みや、最大で径111cm・深さ33cmを測るピットを含む、明瞭な六基のピットが検出された。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行84cm・深さ21cmを測る。両袖が残存するようであるが、石材は全く検出されていない。

貯蔵穴は、径51cm・深さ16cmを測る円形を呈する。

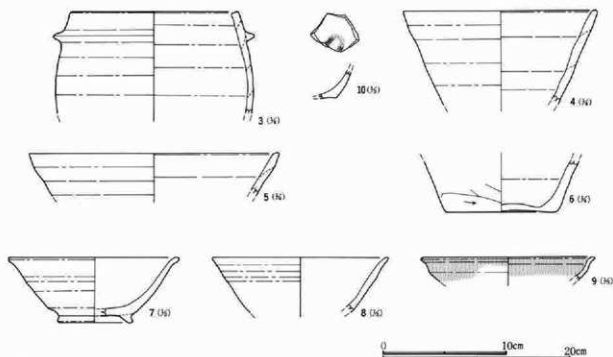
遺物は、竈周辺を中心に分布する。量的には並であるが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。そうした中では接合しない羽釜破片の出土が目立つ。(春山)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第68図 464号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第69図 464号住居跡出土遺物実測図(2)

第32表 464号住居跡出土遺物観察表

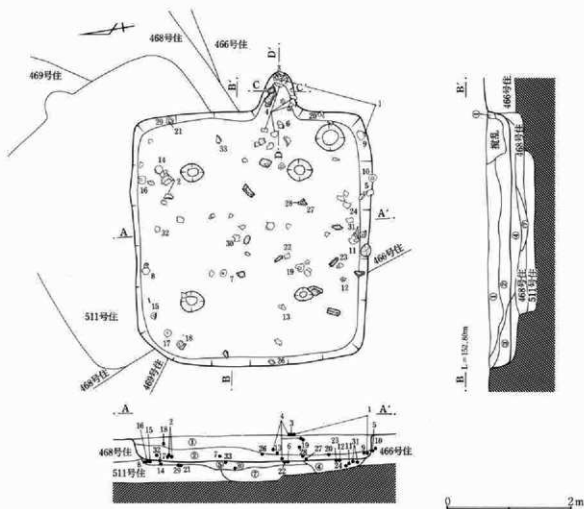
探跡番号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	流量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
68-1 43	須恵器 羽釜	床面+4 破片	口(22.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪積成形でロクロ使用。体部外面縦方向異削り。	
68-2 43	須恵器 羽釜	床面+5 破片	口(18.5) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
69-3	須恵器 羽釜	竈内+12 破片	口(17.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	輪積成形でロクロ使用。	
69-4 43	須恵器 鉢	床面+5 破片	口(20.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪積成形でロクロ使用。	
69-5	須恵器 鉢	床面+6 破片	口(26.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	輪積成形でロクロ使用。	
69-6	須恵器 甕	床面+5 破片	口(11.5) 底(11.5) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪積成形でロクロ使用。外面下半異削り。	
69-7	須恵器 高台付埴 瓦残存	覆土 高台付埴	口(13.4) 底(5.6) 高(5.1)	①粗、黒色結物粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
69-8	須恵器 坏	床面+6 破片	口(13.8) 底— 高—	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	ロクロ成形。	
69-9	灰釉陶器 埴	覆土 破片	口(13.4) 底— 高—	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
69-10 68	須恵器 坏	覆土 破片	口— 底— 高—	①粗、白色結物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部糸切り。	底部内面墨書

465号住居跡 (第70～73図、第33表、図版13・14・44)

本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、67-27・28グリッドに位置する。466号(古墳)・468号(奈良)・469号(古墳)・511号(古墳)住居跡の覆土を中心に掘り込んで構築される。

平面形は、東西4m05cm・南北3m81cmを測る整った長方形を呈し、主軸方向はN-99°-Eを示す。壁高は最大で38cmを測る。床面は、竈前を中心に厚く粘床を施していたと思われる。掘り方には、重複住居中にもかかわらず、竈前の径108cm・深さ41cmを測る明瞭なピットが検出された。壁溝については、検出されていないが、柱穴が4箇所確認されている。規模は径27～39cm・深さ27～36cmを測る。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅66cm・奥行57cm・深さ45cmを測る。原位置を保つと思われる石材の遺存はないが、内部の煙道部寄りにコ字状口縁土師器甕の口縁部が残存しており、あるいは煙道に再利用され



(465号住居跡)

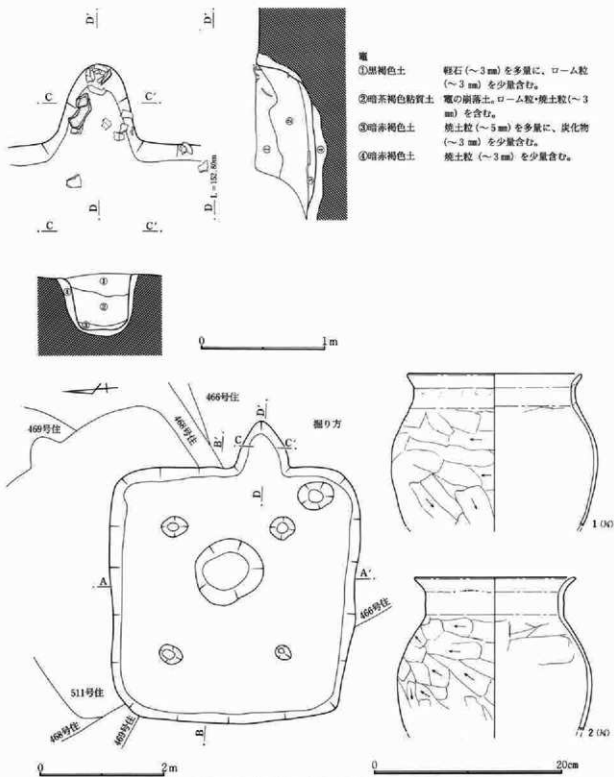
- ①暗褐色土 軽石(～3mm)を多量に、ローム粒(～3mm)・焼土粒(～3mm)を少量含む。
- ②暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
- ③暗褐色土 ローム粒(～10mm)を多量に、炭化物(～3mm)を少量含む、締まっている。
- ④暗茶褐色土 ローム粒・炭化物を含む。
- ⑤暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を含み締まっている。
- ⑥暗褐色土 ロームブロック(～30mm)を含む。
- ⑦黒褐色土 ローム粒(～5mm)を含む、粘質土。

第70図 465号住居跡実測図(1)

た物であるかも知れない。

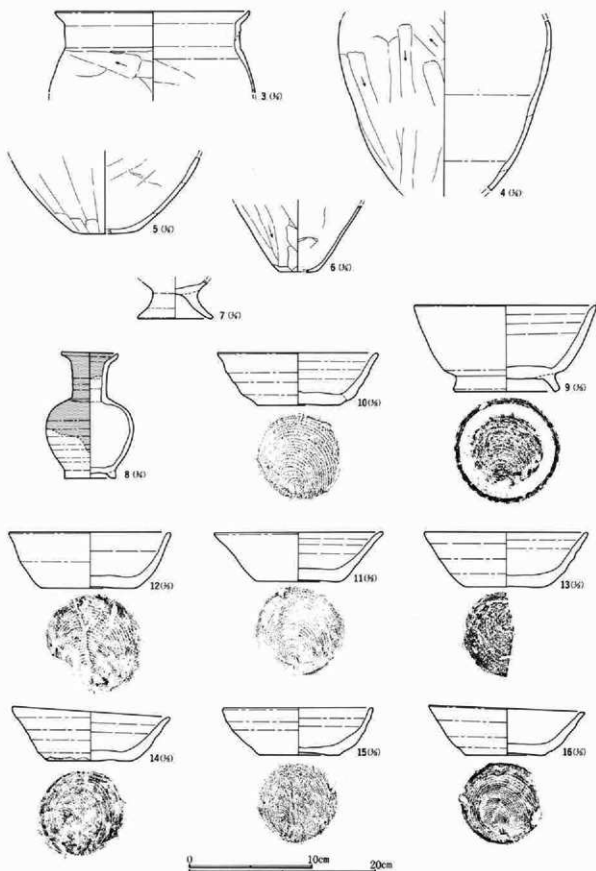
貯蔵穴は、径36cm・深さ26cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈周辺を中心に床面上に一様に分布する。壺類・坏類が多く検出されているが、片口型の坏や花瓶も出土している。他に薄編石状の絹雲母石墨片岩1個(0.25kg)が検出されている。(春山)



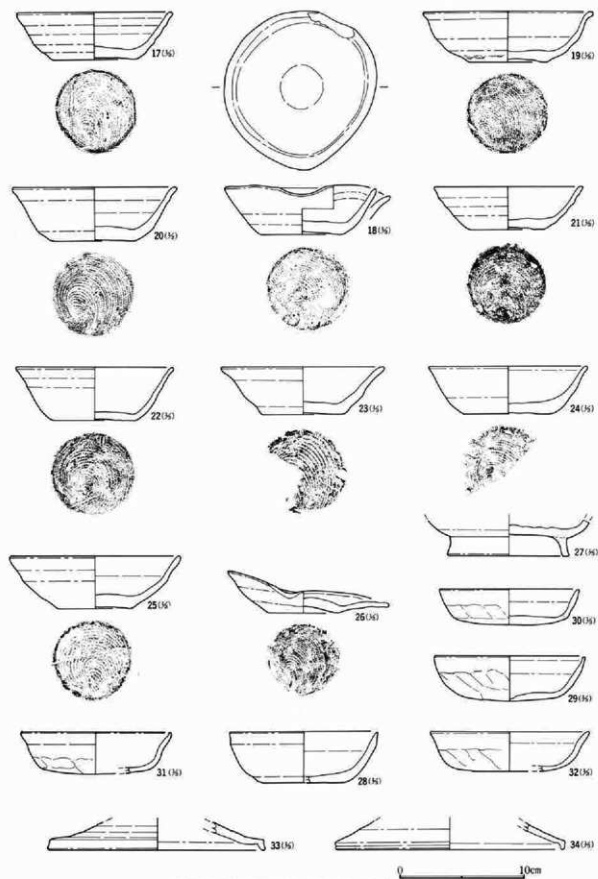
第71図 465号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第72図 465号住居跡出土遺物実測図(2)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第73図 465号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 平安時代の遺構と遺物

第33表 465号住居跡出土遺物観察表

拝見番号 図版番号	土器類別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
71-1 44	土 師 器 壺	床面+8 瓦残存	口(18.3) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	輪積成形後、口辺無縁で。体部外面磨削り。	
71-2 44	土 師 器 壺	床面+4 瓦残存	口(17.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪積成形後、口辺無縁で。体部外面磨削り。 内面無縁。	
72-3	土 師 器 壺	甕内+38 破片	口(20.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪積成形後、口辺無縁で。体部外面磨削り。 内面無縁。	
72-4	土 師 器 壺	床面+17 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪積成形後、体部外面磨削り。	
72-5	土 師 器 壺	床面+10 破片	口— 底(7.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪積成形後、外面下半部磨削り。内面無縁。	
72-6	土 師 器 壺	床面-2 破片	口— 底(3.9) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪積成形後、外面磨削り。内面無縁。	
72-7 44	須 恵 器 台付壺	床面+5 破片	口— 底 7.8 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	輪積成形後、外面無縁で。内面無縁。	
72-8 44	須 恵 器 長頸壺 (花彫)	床面-3 ほぼ完形	口 5.9 底 5.4 高 13.2	①粗、黒色鉱物粒やや多 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	自然釉
72-9 44	須 恵 器 高台付壺	床面+7 完形	口 14.6 底 8.0 高 6.8	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰青色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
72-10	須 恵 器 環	床面+14 瓦残存	口(12.6) 底 6.6 高 4.1	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
72-11 44	須 恵 器 環	床面-5 瓦残存	口 13.2 底 6.5 高 3.9	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
72-12	須 恵 器 壺	床面-2 瓦残存	口(12.8) 底 7.4 高 4.4	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
72-13	須 恵 器 環	床面+9 瓦残存	口(12.8) 底(6.1) 高 4.3	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形。	一部黒変 磨耗が著しい
72-14 44	須 恵 器 環	床面-5 完形	口 12.3 底 6.6 高 3.9	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
72-15 44	須 恵 器 環	床面-4 ほぼ完形	口 11.7 底 6.2 高 3.7	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
72-16 44	須 恵 器 環	床面-1 ほぼ完形	口(12.4) 底 6.4 高 3.6	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
73-17	須 恵 器 環	床面直上 瓦残存	口(12.1) 底 6.6 高 3.7	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
73-18 44	須 恵 器 環 (片口?)	床面+24 ほぼ完形	口 12.0 底 6.4 高 3.6	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。 口辺を片口状につくる。	
73-19	須 恵 器 壺	床面+20 瓦残存	口(13.2) 底 6.2 高 4.0	①粗、石英粒多 ②還元焰弱味、やや軟質 ③灰青色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
73-20	須 恵 器 環	床面+5 瓦残存	口(12.9) 底(6.5) 高 4.2	①粗、石英粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

神回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
73-21	須恵器 環	床面-4 片残存	口(11.6) 底 6.0 高 3.4	①粗、石英粒少 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
73-22	須恵器 環	床面-1 片残存	口(12.3) 底(6.5) 高 4.2	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
73-23	須恵器 環	床面-2 片残存	口(12.8) 底(6.3) 高 3.7	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
73-24	須恵器 環	床面-10 片残存	口(12.3) 底(7.0) 高 4.7	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
73-25	須恵器 環	覆土 片残存	口(13.3) 底 6.0 高 4.1	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
73-26 44	須恵器 皿	床面+10 片残存	口 13.1 底 5.6 高 1.7	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。 口辺を片口状に造る？。	蓋が著しい
73-27	須恵器 高台付埴	床面+1 破片	口 — 底(9.6) 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
73-28	須恵器 環	床面+4 片残存	口(11.8) 底(6.6) 高(4.0)	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	底部全面手持ち調整。	奈良か
73-29	土師器 環	床面-5 片残存	口(11.8) 底 — 高 3.6	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③明赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半～底部磨削り。	
73-30	土師器 環	床面-10 片残存	口(11.0) 底(9.0) 高 2.8	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半～底部磨削り。	
73-31	土師器 環	床面-4 片残存	口(12.0) 底 — 高(3.3)	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半磨削り。	
73-32	土師器 環	床面+7 破片	口(12.6) 底 — 高(3.1)	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半磨削り。	
73-33 44	須恵器 蓋	床面-2 破片	口(17.0) 高 —	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	ロクロ成形。	
73-34	須恵器 蓋	覆土 破片	口(18.2) 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	

475号住居跡 (第74～76図、第34表、図版14・44・45・65・67)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、62・63-33グリッドに位置する。南側に同時期の住居跡がまわって所在するが、他方向には見られない。476号住居跡(平安)の覆土を切って構築される。

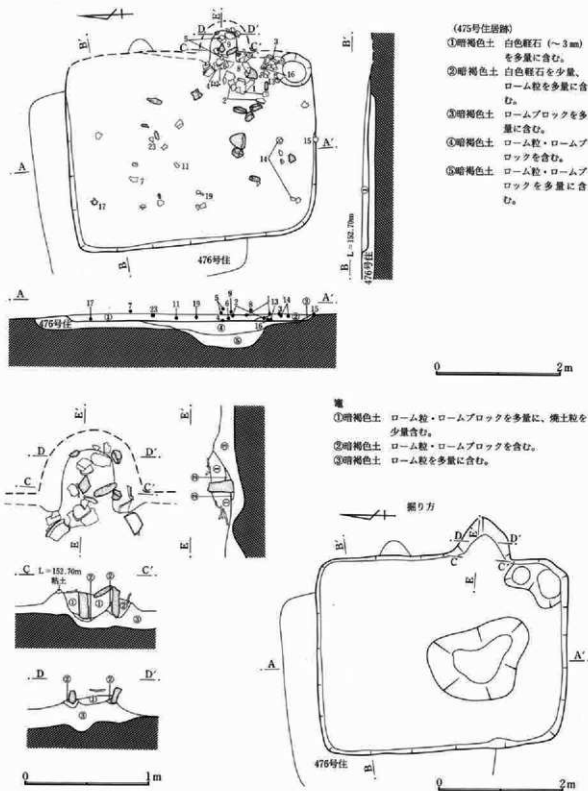
平面形は東西3m09cm・南北3m99cmを測る長方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-91°-Eを示す。壁高は最大で14cmを測る。床面は、竈前を中心に貼床を施す。掘り方には、476号住居跡の覆土中の為、明瞭ではないが、竈前の不整形のピットと貯蔵穴右脇に壁を測る掘り込みが認められた。

竈は東壁中央やや南寄りにあったと思われる、現状で幅81cm・奥行45cm・深さ24cmを測る。石材が残存し、粘土の付着した羽釜破片が数個体検出されることから、本来は羽釜破片を粘土で固めた石組構造であったと

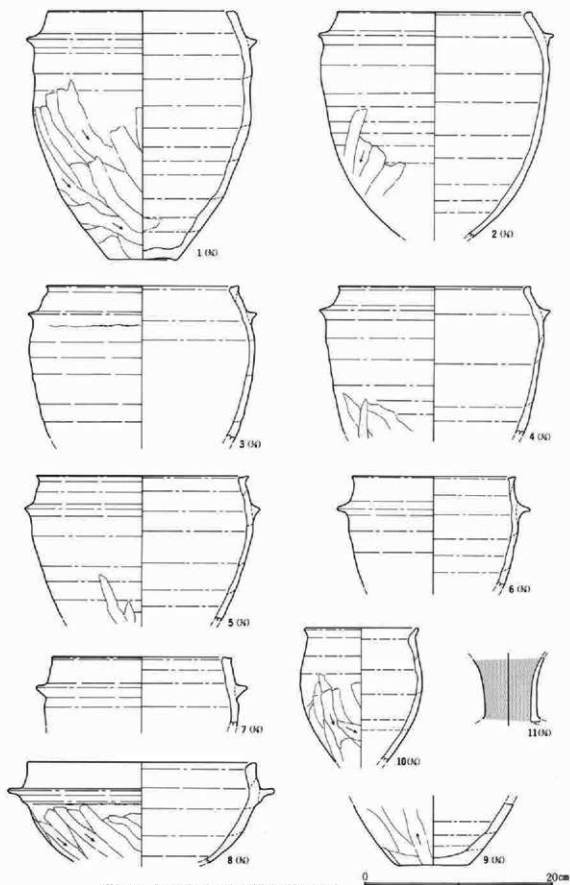
思われる。

貯蔵穴は、径54cm・深さ14cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈周辺を中心に比較的多く出土している。煮沸具には羽釜を含む。(中沢)

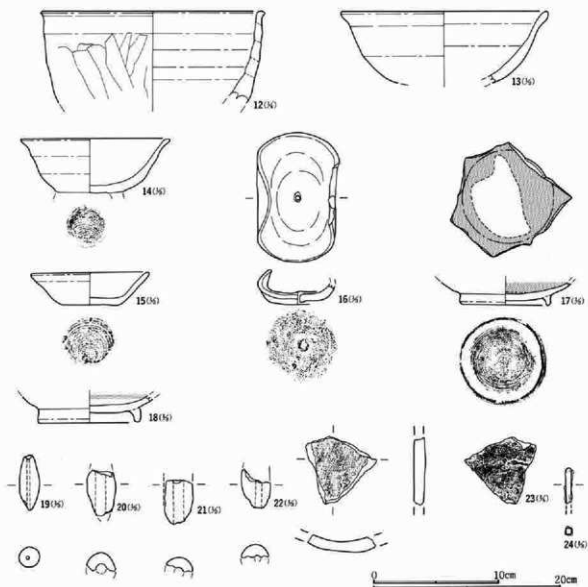


第74図 475号住居跡実測図



第75図 475号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第76図 475号住居跡出土遺物実測図(2)

第34表 475号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
75-1 44	須恵器 羽蓋	床面+7 瓦残存	口(19.8) 底(7.6) 高26.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い赤褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面下半部削り。	
75-2 44	須恵器 羽蓋	床面+3 瓦残存	口(20.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面下半部方向削り。	
75-3	須恵器 羽蓋	床面+8 破片	口(20.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面一部削り。	
75-4	須恵器 羽蓋	床面+2 破片	口(20.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面一部削り。	
75-5	須恵器 羽蓋	竈内+10 破片	口(22.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面一部削り。	

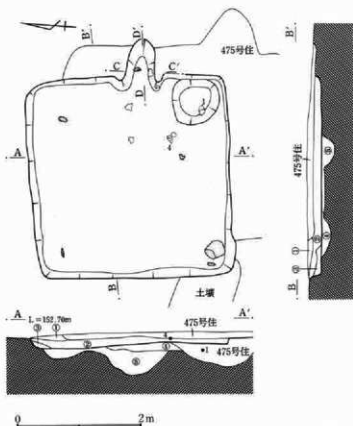
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

編年番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
75-6	須恵器 羽蓋	床面+3 破片	口(17.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙色	輪横成形でロクロ使用。	
75-7	須恵器 羽蓋	床面+12 破片	口(19.0) 底— 高—	①骨、石英・黑色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	輪横成形でロクロ使用。	
75-8 45	須恵器 羽蓋	床面+15 片残存	口(24.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪横成形でロクロ使用。外面下半斜方向篋削り。跨は指頭で摘み、撫でを放ち取り。	
75-9	須恵器 羽蓋	甕内+11 破片	口— 底(7.4) 高—	①骨、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪横成形でロクロ使用。外面下半斜方向篋削り。	
75-10 45	土師器 小型壺	覆土 片残存	口(12.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面篋削り。	内面に厚を受け 出雲。一部熱を 受ける
75-11 45	灰釉陶器 長頸壺	床面+4 破片	口— 底— 高—	①細、黑色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	型式不明
76-12	須恵器 鉢	覆土 破片	口(23.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色、断面黄灰色	輪横成形でロクロ使用。体部外面篋削り。	
76-13	須恵器 埴	床面+2 片残存	口(16.6) 底— 高—	①粗、雲母 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	ロクロ成形。	
76-14 45	須恵器 高台付罐	床面+5 片残存	口(12.0) 底— 高—	①粗、黑色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	高台制罐
76-15 45	須恵器 環	床面+16 完形	口 9.4 底 4.4 高 3.1	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
76-16 45	須恵器 耳皿	床面+2 片残存	口 10.1 底 5.6 高 2.8	①粗、黑色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。	底部に内→外へ 穿孔
76-17 45	灰釉陶器 高台付罐	床面+3 破片	口— 底 7.2 高—	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部余切り。回転調整。高台貼付。	三ヶ月型高台貼 付。刷毛目
76-18 45	灰釉陶器 高台付罐	覆土 破片	口— 底(8.2) 高—	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部篋削り。高台貼付。	虎渡山
76-19 65	土師 鉢	床面+4 ほぼ完形	長 4.5 孔径 0.3 重 8.2	①細、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	棒状工具巻き付け。	
76-20 65	土師 鉢	覆土 破片	長— 径— 孔径 0.8 重 9.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	棒状工具巻き付け。	
76-21 65	土師 鉢	覆土 破片	長— 径— 孔径 0.8 重 10.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	棒状工具巻き付け。肩部磨き。	
76-22 65	土師 鉢	覆土 破片	長— 径— 孔径— 重 4.5	①細、砂粒・雲母 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	棒状工具巻き付け。	
76-23	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.2	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	一枚造りか。	
76-24 67	鉄製品	覆土 破片	長(2.8) 幅 0.6 厚 0.7 重 3.5			

476号住居跡 (第77・78図、第35表、図版14・45)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、63-33グリッドに位置する。切り合い関係としては、本住居跡埋没後に、前出の475号住居跡(平安)が構築されている。土壌に南西隅を破壊される。

平面形は東西3m18cm・南北3m21cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-84°-Eを示す。壁高は最大で



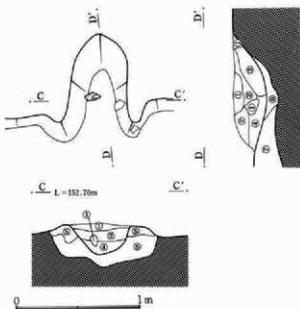
26cmを測る。475号住居跡に破壊されている部分もあるが、床面は竈前を中心にして厚く貼床を施す。掘り方には、竈前のピットの他、ピット一基と、住居跡西側部分に不整形の掘り込みが確認された。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅48cm・奥行60cm・深さ27cmを測るが、残存状況は不良である。

貯蔵穴は、径75cm・深さ30cmを測る円形を呈する。

遺物は、床面上に散漫に分布し、全重量も少なく、個体の残存率も低い。煮沸具には羽釜を含まない。覆土中にはあるが、灰粘陶器境が二点検出されている。他に蕪編石状の網雲母石墨片岩1個(0.24kg)が検出されている。

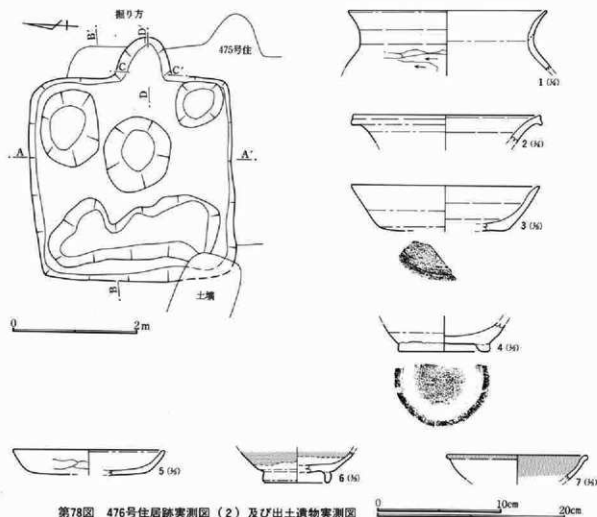
(中沢)



(476号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石(〜3mm)を多量に含む。
 - ②黒褐色土 ローム粒を少量含む。
 - ③暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
 - ④暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 - ⑤暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 竈
- ①暗褐色土 白色軽石を多量に含む。
 - ②暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含む。
 - ③赤色土 焼土粒を主体とした層。
 - ④暗褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。
 - ⑤黒褐色土 焼土粒を稀に含む。
 - ⑥赤褐色土 焼土粒・ローム粒を多量に含む。
 - ⑦暗褐色土 ローム粒を主体とした層。

第77図 476号住居跡実測図(1)



第28図 476号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第35表 476号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
78-1	土師器 壺	床面+4 小破片	口(20.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③橙色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面上部横方向裏削り。内面撫で。	
78-2	須志器 壺	覆土 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③暗黄灰色、新黄灰色	輪轆成形でロクロ使用。	粘土の付着あり
78-3	須志器 罎	覆土 破片	口(14.8) 底— 高(3.5)	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部回転裏削り。	
78-4	須志器 高台付埴	貯蔵穴内 —10 破片	口— 底(7.0) 高—	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
78-5	土師器 罎	覆土 小破片	口(11.8) 底— 高(2.0)	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い橙色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面下半部削り。	
78-6 45	灰釉陶器 高台付埴	覆土 小破片	口— 底(5.0) 高—	①細、珩ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
78-7	灰釉陶器 埴	覆土 小破片	口(11.0) 底— 高—	①細、珩ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	

477号住居跡 (第79~81図、第36表、図版15・45・67)

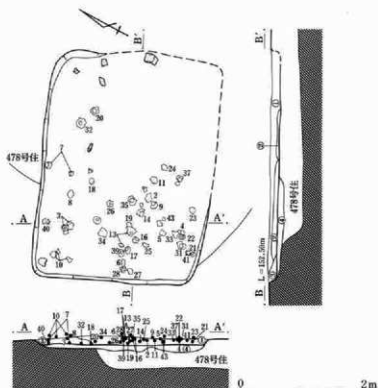
本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、63-34グリッドに位置する。478号住居跡(古墳)の覆土を切って構築される。結果として地山を掘り込んでいるのは住居跡西側の一部である。

東壁と南壁が殆ど流失し残存状況は極めて不良である。主軸方向は不詳であるが、平面形は東西3m66cm・

南北2m82cm程度を測る長方形を呈していたと思われる。壁高は残存する西壁で16cmを測る。床面は、貼床を施していたと思われるが、明瞭には検出されなかった。478号住居跡の覆土中の為、ピット等については、検出されていない。貯蔵穴・柱穴・壁溝についても、検出されていないが、本来なかったものと思われる。

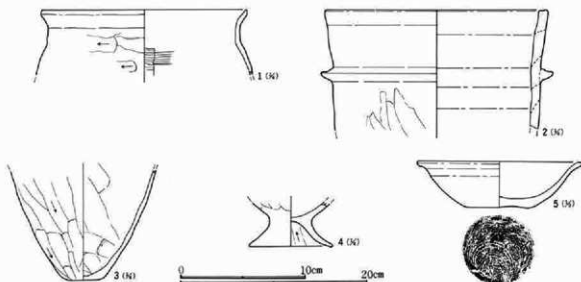
竈は東壁にあったと思われるが、痕跡すら残っていない。東壁付近に破損した石材が散乱するが、甕用材であるかどうか疑わしい。

遺物は、僅かに残る住居跡西半部に集中して分布する。一括して廃棄された可能性があるが、確証はない。皿類の出土が目立つ。他に磨礪石状の網罟母石墨片岩1個(0.71kg)が検出されている。(中沢)



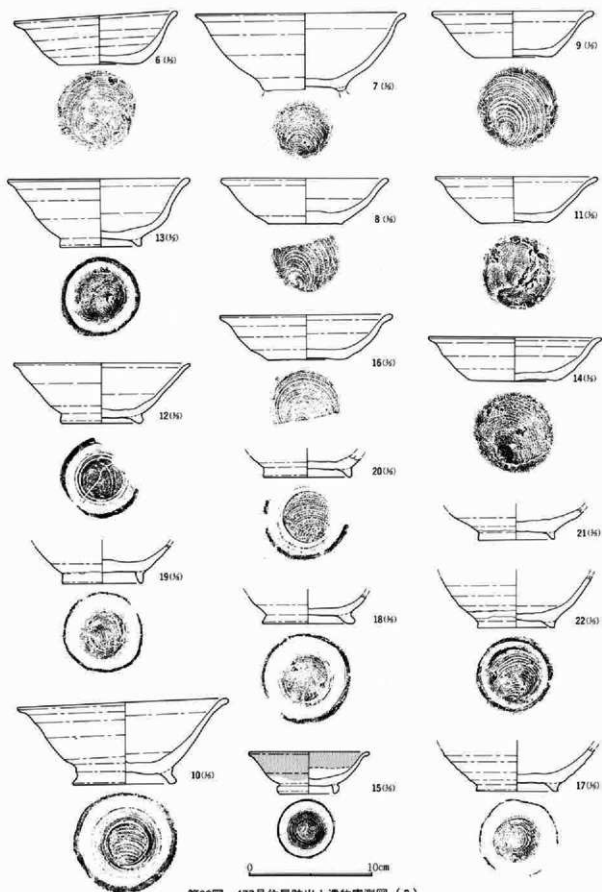
(477号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石を多量に含む。
- ②暗褐色土 白色軽石を殆ど含まない。
- ③暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(〜20mm)を多量に含む。
- ④暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(〜30mm)を多量に含む。



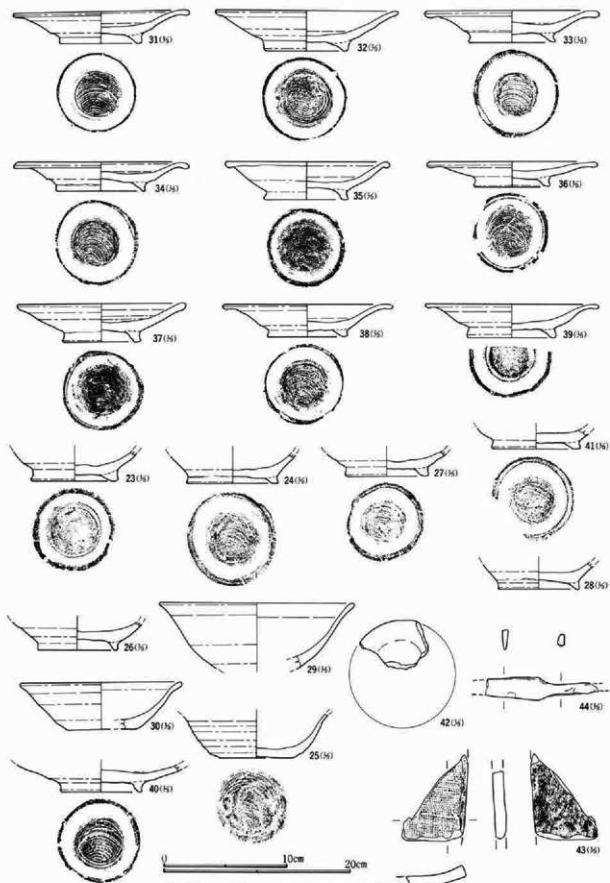
第79図 477号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第80図 477号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第81図 477号住居跡出土遺物実測図(3)

第36表 477号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
79-1	土 煎 器 壺	覆土 破片	口(22.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形でロクロ使用。口辺横撫で。内面無撫で。	
79-2 45	須 恵 器 甌	床面+6 破片	口(23.6) 底 — 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	輪積成形でロクロ使用。体部外面横撫で。	
79-3	土 煎 器 壺	床面+6 破片	口 — 底 3.0 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面下位縦方向縦撫で。内面下位無撫で。	
79-4 45	須 恵 器 台付壺	床面+5 破片	口 — 底 (9.0) 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③赤褐色	輪積成形後、外面横撫で。内面無撫で。	
79-5 45	須 恵 器 坏	床面+7 瓦残存	口(12.4) 底 5.4 高 3.6	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
80-6	須 恵 器 坏	床面+9 瓦残存	口(12.8) 底 6.4 高 3.9	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
80-7 45	須 恵 器 高台付埴	床面直上 瓦残存	口(16.6) 底 — 高 —	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③外面灰白色、内面灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	高台刺離
80-8	須 恵 器 坏	床面+10 瓦残存	口(15.2) 底 (6.0) 高 3.6	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
80-9 45	須 恵 器 坏	床面+10 瓦残存	口(12.4) 底 6.0 高 3.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③外面浅黄色、内面灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
80-10 45	須 恵 器 高台付埴	床面+12 瓦残存	口(16.4) 底 7.6 高 6.4	①青、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
80-11	須 恵 器 坏	床面+6 瓦残存	口(12.6) 底 5.2 高 3.6	①青、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	粘土が付着
80-12 45	須 恵 器 高台付埴	覆土 瓦残存	口(13.7) 底 (6.3) 高 4.7	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
80-13 45	須 恵 器 高台付埴	床面+4 瓦残存	口(14.2) 底 6.3 高 5.4	①粗、石英細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	左回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
80-14	須 恵 器 坏	床面+4 瓦残存	口(13.5) 底 6.5 高 3.4	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
80-15 45	灰軸陶器 高台付埴	覆土 ほぼ球形	口 9.4 底 4.6 高 3.3	①細、殆ど含まない。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
80-16	須 恵 器 坏	床面+8 瓦残存	口(13.6) 底 (6.0) 高 3.5	①粗、石英細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
80-17	須 恵 器 高台付埴	床面+8 瓦残存	口 — 底 6.4 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
80-18	須 恵 器 高台付埴	床面直上 破片	口 — 底 7.1 高 —	①青、石英細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	外面底部一部黒変
80-19	須 恵 器 高台付埴	床面+2 破片	口 — 底 6.2 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
80-20	須 恵 器 高台付埴	床面+2 破片	口 — 底 6.4 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

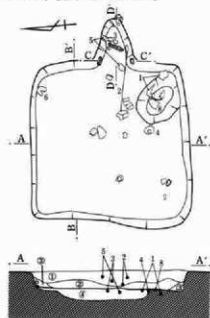
発掘番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
80-21	須恵器 高台付埴 破片	床面+4	口— 底(6.0) 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
80-22	須恵器 高台付埴 破片	床面+7	口— 底 6.0 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	粘土が付着
81-23	須恵器 高台付埴 破片	床面+9	口— 底 6.3 高—	①青、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-24	須恵器 高台付埴 破片	床面+10	口— 底 7.1 高—	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-25	須恵器 坏 %残存	床面+8	口— 底 6.0 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
81-26	須恵器 高台付埴 破片	床面+3	口— 底 6.2 高—	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-27	須恵器 高台付埴 破片	床面+14	口— 底 6.4 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-28	須恵器 高台付埴 破片	床面+15	口— 底 6.4 高—	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-29	須恵器 埴 破片	覆土	口(15.1) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形。	
81-30	須恵器 坏 破片	覆土	口(12.8) 底(7.6) 高(3.7)	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	外面に一部保付着
81-31 45	須恵器 高台付皿 %残存	床面+6	口(13.6) 底 6.3 高 2.5	①青、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-32	須恵器 高台付皿 %残存	床面直上	口(14.2) 底 6.4 高 3.2	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-33 45	須恵器 高台付皿 %残存	床面+5	口(15.6) 底 6.4 高 2.5	①粗、石英細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-34 45	須恵器 高台付皿 %残存	床面+10	口(13.4) 底 7.0 高 2.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-35 45	須恵器 高台付皿 %残存	床面+10	口(13.6) 底 6.4 高 3.0	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-36	須恵器 高台付皿 %残存	覆土	口(13.0) 底 5.9 高 2.1	①粗、褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-37	須恵器 高台付皿 %残存	床面+5	口(13.4) 底 6.2 高 3.0	①青、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③暗灰黄色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-38	須恵器 高台付皿 %残存	覆土	口(13.3) 底(6.8) 高 2.7	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-39 45	須恵器 高台付皿 %残存	床面+6	口(13.0) 底 6.2 高 2.5	①青、石英細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
81-40	須恵器 高台付皿 %残存	床面+3	口— 底(6.2) 高—	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	

採掘番号 図版番号	土器類別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
81-41	須恵器 高台付皿	床面+6 破片	口 — 底 4.8 高 —	①粗、砂粒 ②還元焼、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	保存費
81-42	須恵器 耳皿?	覆土 小破片	口 (8.4) 底 — 高 —	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焼、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
81-43	平瓦	床面+2 小破片	長 — 幅 — 厚 1.0	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焼、やや軟質 ③鈍い黄褐色	一枚造りか。	
81-44 67	鉄製品 刀子	覆土 破片	長 (9.0) 厚 0.4 幅 1.5 重 11.9			

479号住居跡 (第82・83図、第37表、図版15・46・65・66)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、62-32-33グリッドに単独で位置する。本住居跡付近は、第8次調査区で最も同時期の住居跡が密集する地域にあたる。

平面形は東西2m67cm・南北2m58cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-95°-Eを示す。壁高は22cmを測る。床面は竈前を中心に貼床を施す。掘り方には、竈前のビットが一基検出されている。柱穴・壁溝については、検出されていない。



(479号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石(〜3mm)を少量含む。
 ②暗褐色土 ロームブロックをやや多く含む。
 ③暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
 ④暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む、やや締まりに欠ける。

竈

- ①暗褐色土 白色軽石(〜3mm)を少量、焼土粒を稀に含む。
 ②暗褐色土 ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含む。
 ③暗赤褐色土 15mm内外の焼土ブロックを多量に含む。
 ④暗褐色土 層に比し、焼土粒の含有が少ない。
 ⑤暗褐色土 ローム粒(〜3mm)・焼土粒(〜3mm)を少量含む。
 ⑥暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

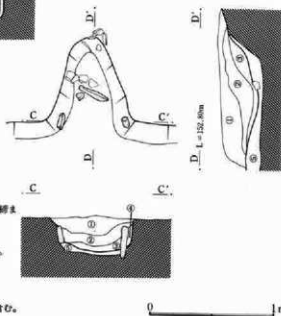
第82図 479号住居跡実測図(1)

竈は東壁中央にあり、幅60cm・奥行57cm・深さ30cmを測る。内部に数個体分の羽釜破片が残存し、石材も認められる事から、羽釜を補強材に用いた石組の構造を想定できる。

貯蔵穴は、竈右脇にあり、径81cm・深さ25cmを測る楕円形を呈する。

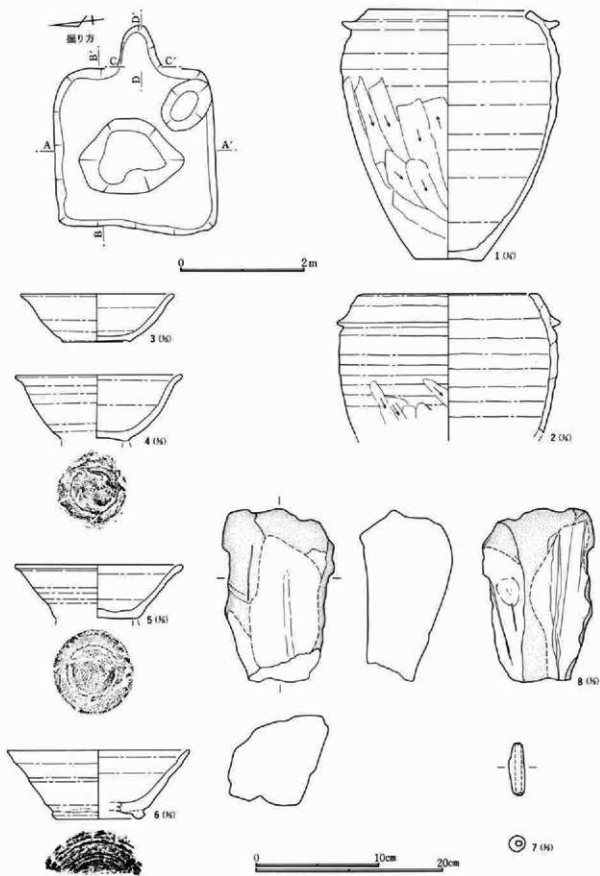
遺物は、竈周辺に分布するが、量的には少ない。

(富田)



0 1m

第3章 平安時代の遺構と遺物



第83図 479号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第37表 479号住居跡出土遺物観察表

神田番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	径量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
83-1 46	須恵器 羽 壺	床面直上 写残存	口(17.3) 底(7.2) 高 26.0	①粗、砂粒 ②還元焰味、硬質 ③灰白色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半縦方向 瓦削り。	
83-2 46	須恵器 羽 壺	床面+4 破片	口(18.4) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰味、やや硬質 ③黄灰色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半斜方向 瓦削り。	
83-3 46	須恵器 坏	甕内-5 写残存	口(12.0) 底(5.5) 高 3.8	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形。	
83-4 46	須恵器 高台付埴 瓦	床面-2 写残存	口(13.2) 底 — 高 —	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台剥離
83-5 46	須恵器 高台付埴 瓦	床面-6 写残存	口(13.2) 底 — 高(4.2)	①粗、石英・黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	高台剥離
83-6	須恵器 高台付埴 瓦	床面直上 写残存	口(14.2) 底(6.6) 高(5.4)	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
83-7 65	土 甕 瓦形	覆土 完形	長 3.9 径1.3/0.6 孔径 0.5 重 6.1	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	棒状工具巻き付け。	
83-8 66	石製品 硯石 破片	床面直上	長(13.4) 厚 6.8 幅 8.0 重 950		完形。四面使用。刃試し状の痕跡あり。	砂岩

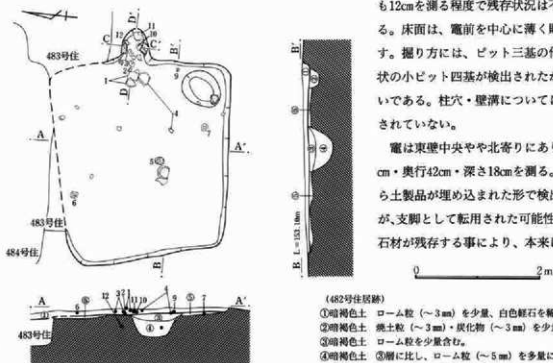
482号住居跡 (第84~86図、第38表、図版15・46・61・65・68・69)

本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、64—22・23グリッドに位置する。483号住居跡(平安)の南西隅を切って構築され、484号住居跡(奈良)に北東隅を接する。

平面形は東西3m15cm・南北2m88cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Eを示す。壁高は最大でも

12cmを測る程度で残存状況は不良である。床面は、竈前を中心に薄く貼床を施す。掘り方には、ピット三基の他、柱穴状の小ピット四基が検出されたが、不揃いである。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央や北寄りにあり、幅45cm・奥行42cm・深さ18cmを測る。内部から土製品が埋め込まれた形で検出されたが、支脚として転用された可能性もある。石材が残存する事により、本来は石組構



第84図 482号住居跡実測図(1)

(482号住居跡)

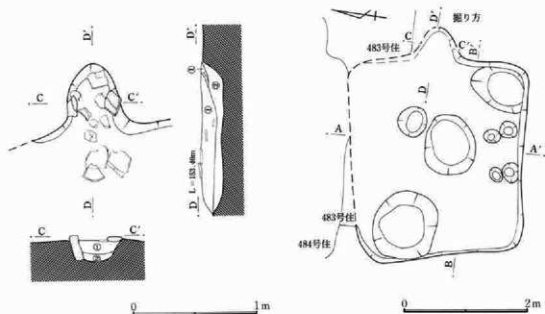
- ①暗褐色土 ローム粒(〜3mm)を少量、白色軽石を稀に含む。
- ②暗褐色土 焼土粒(〜3mm)・炭化物(〜3mm)を少量含む。
- ③暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- ④暗褐色土 層に比し、ローム粒(〜5mm)を多量に含む。
- ⑤暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

第3章 平安時代の遺構と遺物

造であったと思われる。

貯蔵穴は、東南隅にあり、径60cm・深さ21cmを測る円形を呈する。

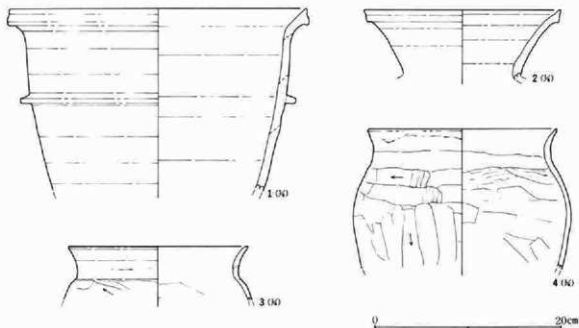
遺物は、竈内を中心に分布するが、全体量は少なく、個体の残存率も低い。煮沸具にコ字状口縁土師器甕と甔を含む。「名」と判読できる墨書土器2点の出土が注意される。他に煎礬石状の緑泥片岩1個(0.37kg)が検出されている。(春山)



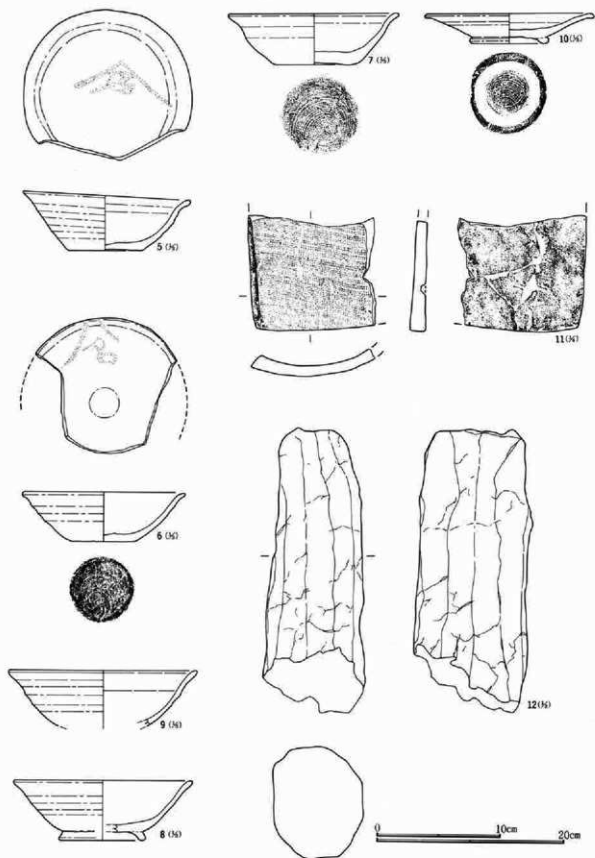
甕

①暗赤褐色土 ローム粒(～3mm)・焼土粒(～3mm)・炭化物(～3mm)を多量に含む。

②暗赤褐色土 ローム粒・焼土粒(～5mm)を多量に含む。



第85図 482号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第86図 482号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物

第38表 482号住居跡出土遺物観察表

棟号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
85-1 46	須恵器 甕	床面+5 破片	口(31.6) 底— 高—	①粗、黄母・石英粒 ②酸化焰、やや硬質 ③淡黄色	輪積成形でロクロ使用。	
85-2	須恵器 大甕	床面+2 小破片	口(20.7) 底— 高—	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	ロクロ成形。	
85-3 46	土師器 壺	壺内+4 小破片	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪積成形後、口辺調整で。外面削り。内面 磨面で。	
85-4 46	土師器 壺	床面直上 破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪積成形後、口辺調整で。体部外面削り。 内面磨面で。	
86-5 46・69	須恵器 環	床面-31 %残存	口(13.0) 底 5.8 高 4.3	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	黒書土器
86-6 46・68	須恵器 環	床面+5 %残存	口(12.6) 底 5.0 高 3.9	①普、黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	内面底部に傷付 着。黒書土器
86-7 46	須恵器 環	床面-2 完形	口 13.3 底 6.2 高 4.3	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
86-8	須恵器 高台付埴	覆土 反残存	口(13.8) 底 (6.6) 高 (4.7)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	粘土付着
86-9	須恵器 埴	床面+3 破片	口(14.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
86-10	須恵器 高台付皿	壺内+1 %残存	口(12.8) 底 5.8 高 2.4	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
86-11 61	平瓦	壺内+4 小破片	長— 幅— 厚 1.3	①粗、褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	一枚造りか。	
86-12 65	支脚	壺内-15 破片	長(21.4) 幅 8.5	①普、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③淡褐色～黄褐色	外面磨面で。	二次加熱の影響 少

483号住居跡 (第87・88図、第39表、図版15・46)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、64・65-22・23グリッドに位置する。484号住居跡(奈良)の覆土を切って構築され、482号住居跡(平安)に南壁の一部を破壊される。南側には南北に連なるように同時期の住居跡が比較的密集するが、北側は各時代を通じて住居跡のない空地になっている。

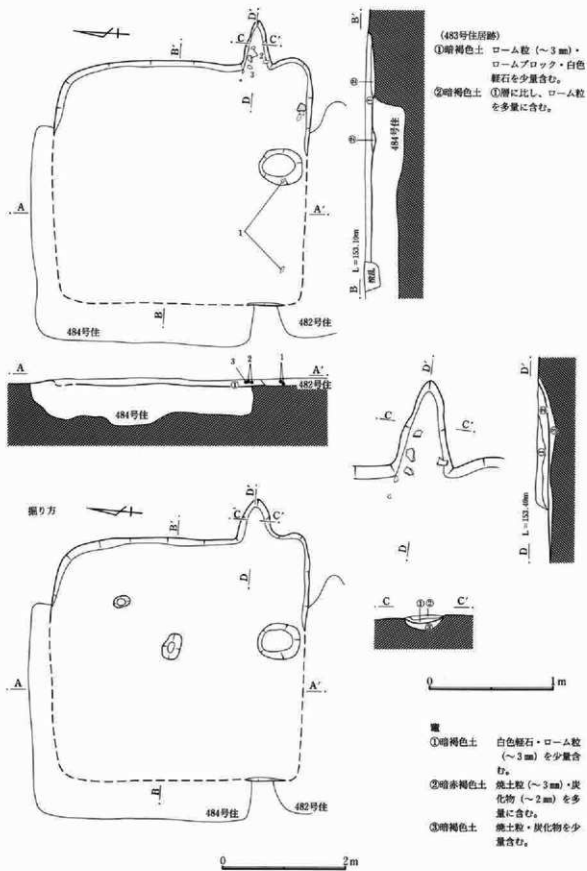
平面形は東西3m84cm・南北4m08cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-89°-Eを示す。壁高は最大で9cmを測る程度で残存状況は不良である。大部分が484号住居跡の覆土中にかかる為、明瞭な貼床は検出されなかった。小ビットが二基確認されているが、判然としない。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。

竈は東壁中央南寄りであり、幅45cm・奥行63cm・深さ9cmを測る。

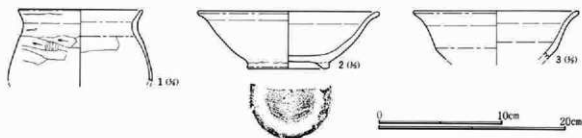
貯蔵穴は南壁中央付近にあり、径69cm・深さ37cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈周辺に散漫に分布するが、種類に乏しく個体の残存率も低い。(春山)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第87図 483号住居跡実測図



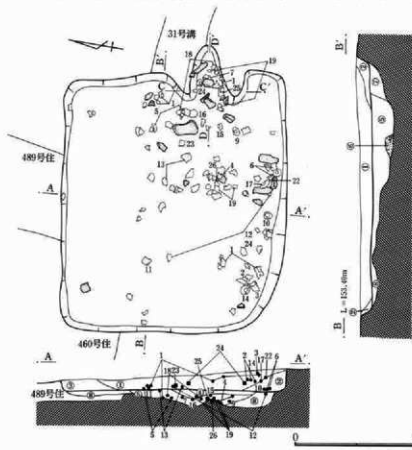
第88図 483号住居跡出土遺物実測図

第39表 483号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
88-1 46	土師器 小型壺	床面+2 破片	口(13.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焼、軟質 ③鈍い褐色	輪依成形後、口辺横撫で。体部外面上半横方向磨削り。内面撫で。	
88-2	須恵器 高台付壺	壺内+5 瓦残存	口(14.2) 底(6.3) 高4.5	①粗、雲母・砂粒 ②還元焼、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
88-3	須恵器 坏	壺内+6 破片	口(13.0) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焼、やや硬質 ③鈍い灰褐色	ロクロ成形。	

495号住居跡 (第89~93図、第40表、図版16・46・47・61・62・65)

本住居跡は、第7次調査区中央の平坦面にあり、62-22・23グリッドに位置する。460号住居跡(古墳)・



第89図 495号住居跡実測図(1)

489号住居跡(古墳)を切って構築され、東西方向の31号溝が中央部をかすめる。

平面形は東西4m11cm・南北3m60cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。壁高は最大で29cmを測る。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施す。掘り方には、南壁を面する掘り込みと時期

(495号住居跡)

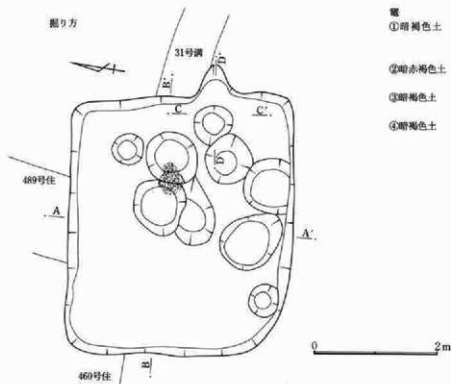
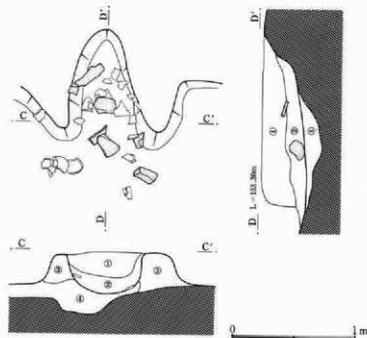
- ①暗褐色土 白色軽石・ローム粒(〜3mm)を少量含む。
- ②暗褐色土 ①層に比し、ローム粒を多量に含む。粘質土。
- ③暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- ④暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土 ①層に比し、ローム粒の含有が多い。粘質土。
- ⑥灰白色粘土
- ⑦暗赤褐色土 焼土粒(〜5mm)を多量に含む。
- ⑧暗黄褐色土 ローム粒(〜10mm)を多量に含む。

差のあるピット八基が検出されているが、内部から青灰色粘土が検出されたピットもある。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅63cm・奥行75cm・深さ33cmを測る。破損した石材が散乱し、石組構造を想定させるが、詳細は不明である。

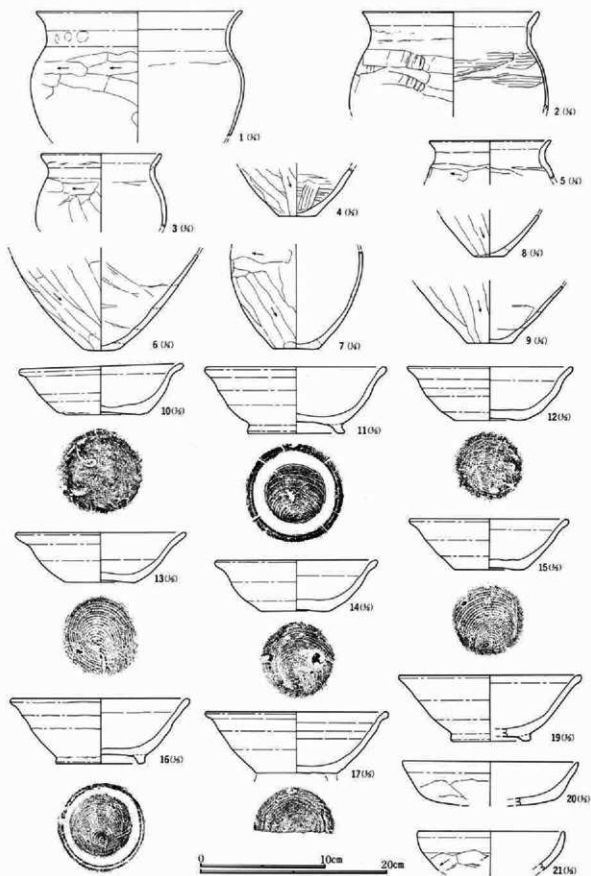
貯蔵穴は、掘り方段階で確認された径48cm・深さ14cmを測る南西隅のピットが該当すると思われる。

遺物は、床面上に散乱状態で検出された。量的には並だが、いずれも残存率は低い。瓦については竈の補強材の可能性もある。煮沸具はコ字状口縁土師器甕である。他に筒編石状の網雲母石墨片岩、点紋網雲母石墨片岩、緑簾緑泥片岩各1個(計1.83kg)が検出されている。(春山)



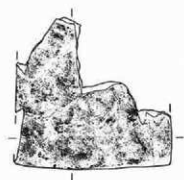
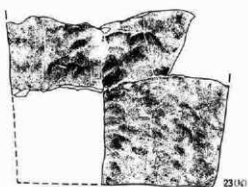
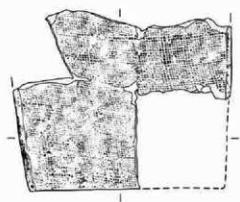
- 竈
- ①暗褐色土 ローム粒(～3mm)・白色軽石(～3mm)・焼土粒(～3mm)を含む。
 - ②暗赤褐色土 焼土粒・炭化物(～3mm)を多量に含む。
 - ③暗褐色土 白色軽石・ローム粒・焼土粒を含む。
 - ④暗褐色土 ロームブロック・焼土粒をやや多く含む。

第90図 495号住居跡実測図(2)



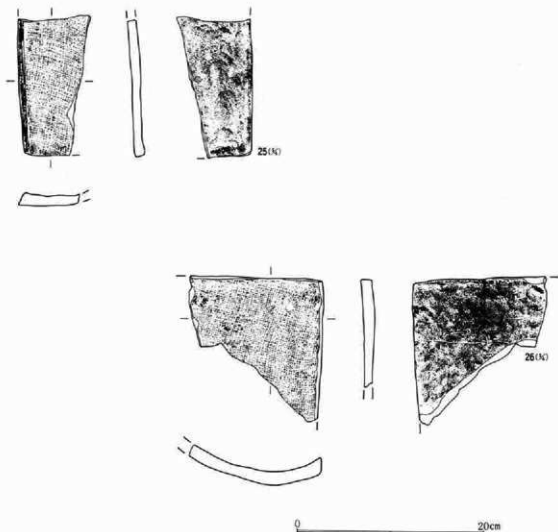
第91図 495号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第92図 495号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第93図 495号住居跡出土遺物実測図(3)

第40表 495号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器種別	出土状況 残存状況	法量(cm) (W)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
91-1 47	土 師 器 壺	床面+4 片残存	口(21.7) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面横方向削り。内面撫で。	
91-2 46	土 師 器 壺	床面+15 破片	口(18.6) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③橙色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面横方向削り。内面撫で。	
91-3	土 師 器 小型 壺	床面+26 破片	口(12.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③暗褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面削り。	
91-4	土 師 器 壺	床面-19 破片	口 — 底 4.0 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄色、内面鈍い橙色	輪横成形。外面縦方向削り。内面撫で。	
91-5 46	土 師 器 小型 壺	床面-12 破片	口(12.8) 底 — 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口辺横撫で。外面削り。内面撫で。	
91-6	土 師 器 壺	床面+2 破片	口 — 底 (3.4) 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い赤褐色	輪横成形。外面下半斜方向削り。内面撫で。	

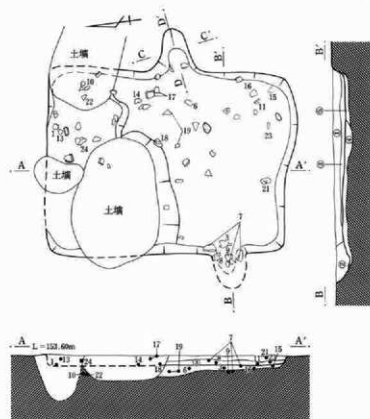
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

採掘番号 図版番号	土器類別 種類	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
91-7 46	土師器 小型壺	竈内-12 破片	口— 底 4.8 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形。体部外面上位横方向置削り。下位 縦方向置削り。	
91-8	土師器 壺	覆土 破片	口— 底 (3.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色	輪横成形。外面置削り。	
91-9	土師器 壺	床面-16 破片	口— 底 4.6 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い赤褐色	輪横成形。外面下半縦方向置削り。内面磨で、	
91-10 47	須恵器 坏	床面+2 完形	口 12.8 底 6.0 高 3.8	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
91-11 47	須恵器 高台付埴 瓦	床面+2 瓦残存	口(14.0) 底 (7.6) 高 5.2	①粗、石英粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
91-12 47	須恵器 坏	床面-2 瓦残存	口(13.0) 底 5.4 高 4.2	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。	一部黒変
91-13	須恵器 坏	床面-1 瓦残存	口 13.4 底 5.8 高 3.9	①粗、石英粒多 ②酸化焰、やや硬質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	一部黒変
91-14 47	須恵器 坏	床面+16 瓦残存	口 12.8 底 5.6 高 4.0	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	一部黒変
91-15	須恵器 坏	床面-5 瓦残存	口 12.4 底 5.6 高 5.0	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
91-16 47	須恵器 高台付埴 瓦	床面-13 瓦残存	口(14.0) 底 6.8 高 5.1	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
91-17	須恵器 高台付埴 瓦	床面-15 瓦残存	口(14.4) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰オリーブ色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台割離
92-18	須恵器 高台付埴 瓦	床面-12 瓦残存	口(17.8) 底 (7.0) 高 6.7	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
91-19 47	須恵器 高台付埴 瓦	竈内+17 瓦残存	口(14.4) 底 (5.8) 高 (5.2)	①粗、石英粒少 ②酸化焰、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
91-20	土師器 坏	覆土 破片	口(13.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪横成形後、口辺磨で。外面置削り。	
91-21	土師器 坏	覆土 破片	口(11.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺磨で。外面置削り。	
92-22 65	土 鉢	床面+20 完形	長 4.7 孔径 0.4 重 14.3	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い赤褐色	棒状工具巻き付け。	
92-23 62	平 瓦	床面+4 破片	長— 幅— 厚 1.3	①粗、白色鉱物細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	一枚造り。	
92-24 62	丸 瓦	竈内+8 破片	長— 幅— 厚 1.5	①粗、白色鉱物細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	一枚造り。	
93-25 61	平 瓦 小破片	竈内-12 小破片	長— 幅— 厚 1.0	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	一枚造りか。	
93-26 62	平 瓦 小破片	床面-14 小破片	長— 幅— 厚 1.4	①粗、石英・雲母 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い褐色	一枚造りか。	

512号住居跡 (第94～96図、図版16・47・62)

本住居跡は、第7次調査区南端の平坦面にあり、56-21・22グリッドに単独で位置する。周囲には、ほぼ同時期で同規模の住居跡が密集している。芋穴などの土壌や耕作等の擾乱によって、住居の西半部を中心に破壊され、残存状況は非常に悪い。

上記の理由により、プラン確認に不安は残るが、平面形は東西2m88cm・南北4m05cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-93°-Eを示すものと思われる。壁は緩やかに立ち上がっており、最大で11cmを測る。

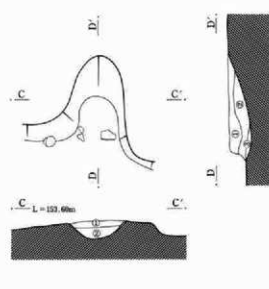


床面は、竈前を中心に全面に貼床を施すと思われるが、あまり明瞭ではない。掘り方には時期差のあるピットが三基以上が認められる。

貯蔵穴・柱穴・壁溝については、確認されていない。

竈は東壁ほぼ中央にあり、幅66cm・奥行60cm・深さ18cmを測る。

遺物は住居跡全体に分布し、量もやや多いが個々の残存率は低い。本住居跡に属するものかどうか不安は残るが、西壁付近の焼土粒を多量に含む覆土中から出土した大型の特殊土器(器種不明)が注意される。他に瓦の破片も出土している。(中沢)

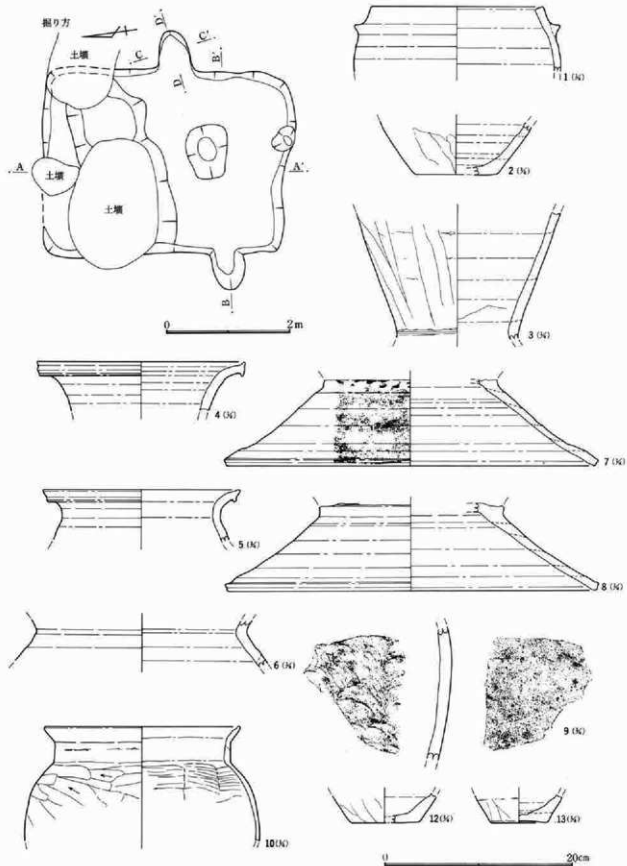


(512号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを含み、締まっている。
 - ②暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
 - ③暗褐色土 ロームブロックを多く含む、締まっている。
 - ④暗褐色土 ロームブロックを主体とした層。
 - ⑤黒褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 竈
- ①暗褐色土 白色軽石・ロームブロック・焼土粒を含む。
 - ②暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
 - ③暗赤褐色土 焼土粒・炭化物を含む。

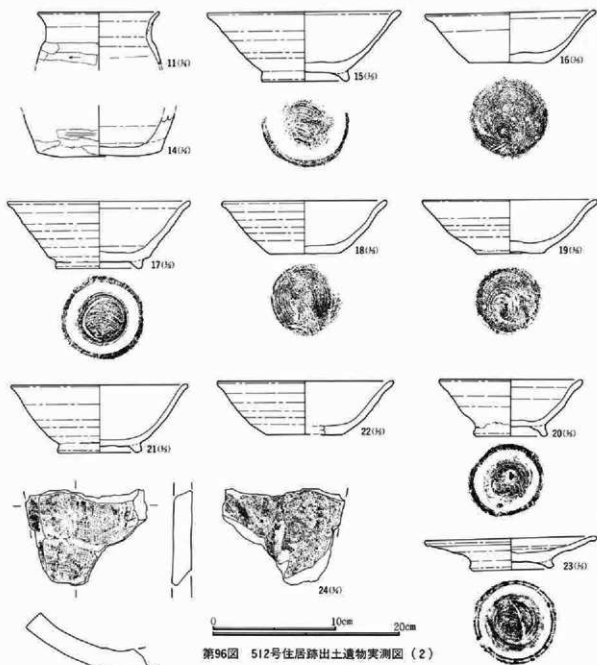
第94図 512号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第95図 512号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第96図 512号住居跡出土遺物実測図(2)

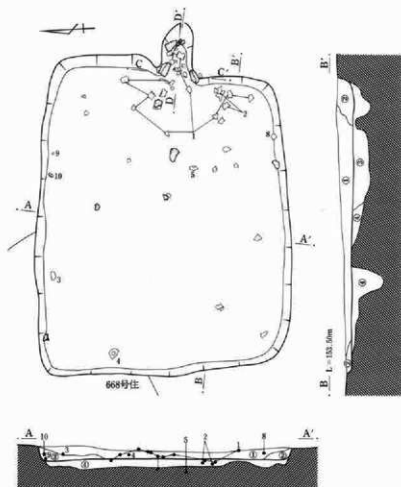
第41表 512号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
95-1 47	須恵器 羽蓋	床面直上 小破片	口(18.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
95-2	須恵器 羽蓋	覆土 小破片	口— 底(8.5) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	輪積成形でロクロ使用。外面下半段削り。	
95-3	須恵器 瓶	床面—5 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。内外面削り調整。	
95-4 47	須恵器 壺	覆土 破片	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰気味、やや硬質 ③褐色	ロクロ成形。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

発掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
95-5	須恵器 壺	覆土 小破片	口(20.7) 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
95-6	須恵器 壺	床面+4 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
95-7 47	須恵器 脚部?	床面+2 破片	口— 底(39.0) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形でロクロ使用。	
95-8 47	須恵器 脚部?	床面+4 破片	口— 底(39.4) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形でロクロ使用。	7と同一個体か
95-9	須恵器 壺	床面+9 小破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪轆成形でロクロ使用か。体部外面平削り。 内面当具痕。	
95-10	土師器 壺	床面+12 破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面横方向磨 削り。内面荒撫で。	
96-11 47	土師器 小型壺	床面直上 破片	口(12.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。外面横方向磨削り。 内面撫で。	
95-12 47	須恵器 羽蓋	覆土 破片	口— 底(7.0) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪轆成形でロクロ使用。外面磨削り。	
95-13	須恵器 壺?	床面+10 破片	口— 底(6.0) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	輪轆成形でロクロ使用。外面磨削り。	
96-14	須恵器 壺	床面直上 破片	口— 底(13.2) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪轆成形でロクロ使用。	
96-15 47	須恵器 高台付埴 瓦	床面-1 瓦残存	口(15.2) 底(6.7) 高(5.5)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
96-16 47	須恵器 坏	床面-5 瓦残存	口13.3 底6.0 高4.0	①粗、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
96-17 47	須恵器 高台付埴 瓦	床面+10 瓦残存	口(14.4) 底(6.6) 高5.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
96-18 47	須恵器 坏	床面+1 瓦残存	口(12.8) 底5.6 高4.1	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
96-19	須恵器 坏	床面+10 瓦残存	口(13.8) 底(5.6) 高4.2	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
96-20	須恵器 高台付埴 瓦	覆土 瓦残存	口(12.2) 底(5.6) 高4.5	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰気味、やや軟質 ③外面褐色、断面黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	いぶし焼成
96-21 47	須恵器 高台付埴 瓦	床面+10 瓦残存	口(13.9) 底(6.3) 高5.3	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
96-22	須恵器 坏	床面+12 瓦残存	口(13.8) 底(6.0) 高(4.2)	①粗、石英粒少 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
96-23	須恵器 高台付埴 瓦	床面+4 瓦残存	口(13.2) 底6.0 高2.5	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
96-24 62	平瓦	床面+8 小破片	長— 幅— 厚2.1	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い褐色、断面褐色	一枚造りか。	

513号住居跡 (第97～99図、第42表、図版16・17・48・65・69)



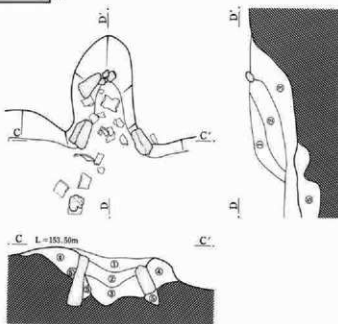
本住居跡は、第7次調査区南端の平坦面にあり、55-21グリッドに位置する。北に512号住居跡(平安)、南に679号住居跡(平安)が隣接する。668号住居跡(時期不明)の東隅を切って構築されている。

平面形は東西5m07cm・南北4m11cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-95°-Eを示す。壁高は最大で17cmを測る。床面は、竈前を中心として全体に厚く貼床を施す。掘り方には、竈前の二時期に亘るピットの掘り直しを含む四基のピットが検出された他、北東隅付近にやや大きな掘り込みが認められた。貯蔵穴・柱穴・壁溝については検出されていない。



(513号住居跡)

- ①黒褐色土 1mm内外の白色軽石粒を多量に含む。
 - ②黒褐色土 ローム粒を多量に含む。
 - ③暗褐色土 焼土粒・炭化物(～3mm)を含み、締まっている。
 - ④暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とした層。
- 竈
- ①暗褐色土 1mm内外の白色軽石粒を多量に、焼土粒を少量含む。
 - ②暗褐色土 焼土粒・炭化物を含み、締まっている。
 - ③暗赤褐色土 焼土を主体とし、炭化物を含む。
 - ④暗褐色土 焼土粒・炭化物・ロームブロックを含み、締まっている。
 - ⑤暗黄褐色土 ロームブロック・炭化物を多量に含む、やや締まっている。



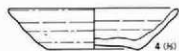
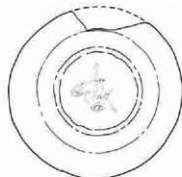
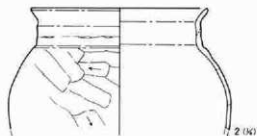
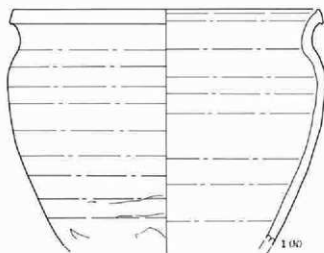
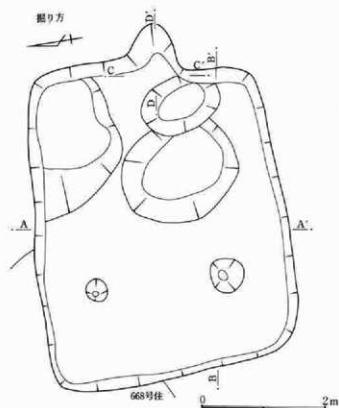
第97図 513号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

竪は東壁ほぼ中央にあり、幅48cm・奥行66cm・深さ36cmを測る。両袖石が残り、基本的に石組の構造を持っていたと思われるが、残存状況は不良で原型を想定することはできない。

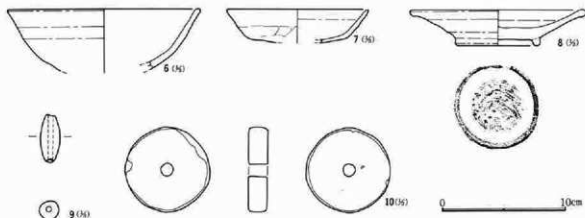
遺物は、竪を中心に床面全体に分布するが、密度は薄く、残存率も低い。判読不明の墨書土器と紡錘車の石製類似品の出土が注意される。

(中沢)



第98図 513号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第99図 513号住居跡出土遺物実測図(2)

第42表 513号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
98-1 48	須恵器 大 甕	床面-5 瓦残存	口(32.6) 底— 高—	①粗、白色黏物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③灰黄色、断面鈍い褐色	轆轤成形でロクロ使用。体部外面下半部削り。	
98-2 48	土器 壺	床面+6 破片	口18.6 底— 高—	①粗、砂粒多 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	轆轤成形後、口辺横撫で。体部外面上半横方向削り。下半縦方向削り。	
98-3 48・69	須恵器 高台付皿	床面+8 瓦残存	口(13.8) 底— 高—	①粗、褐色黏物粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	黒書土器 高台割離
98-4 48	須恵器 坏	床面+3 瓦残存	口(13.4) 底7.4 高3.2	①粗、黒色黏物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	外面一部自然釉
98-5	須恵器 坏	床面-8 瓦残存	口(13.4) 底(7.0) 高3.4	①粗、黒色黏物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
99-6	須恵器 埴	覆土 破片	口(15.1) 底— 高—	①苔、石英・黒色黏物粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄褐色	ロクロ成形。	
99-7 48	土器 坏	覆土 破片	口(10.1) 底— 高—	①細、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	轆轤成形後、口辺横撫で。外面指押さえ。	
99-8 48	須恵器 高台付皿	床面+7 瓦残存	口(16.8) 底6.6 高2.8	①粗、黒色黏物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
99-9 65	土 鏝	床面+2 突形	長3.7 孔径0.4 重8.0	径1.5/0.6 ①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③鈍い褐色	棒状工具巻き付け。	
99-10 65	石製品 紡錘車	床面+6	径6.7 厚1.5	孔径1.0 重95.2	丁寧な成形。上下面とも磨練が認められる。	砂岩 類似石製品か

514号住居跡(第100図、第43表、図版17・48)

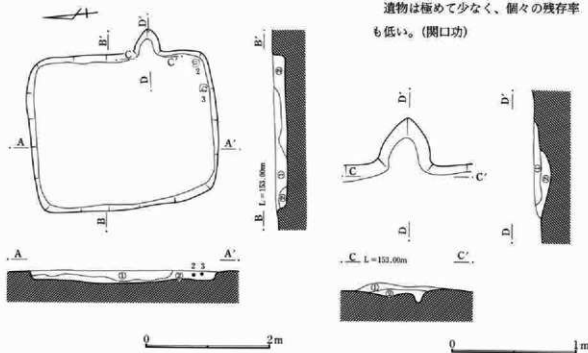
本住居跡は、第7次調査区西端の平坦面にあり、63-13・14グリッドに単独で位置する。周囲には同時期の住居跡の分布は散漫で、やや孤立する傾向にある。

平面形は、東西2m49cm・南北3m03cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-91°-Eを示す。壁高は最大で21cmを測る。床面は、黄褐色ローム(地山)を叩き締めていると思われ、掘り方は基本的に認められず、

貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設も検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅42cm・奥行33cm・深さ12cmを測るが、残存状況は不良で痕跡に近い。

遺物は極めて少なく、個々の残存率も低い。(関口功)

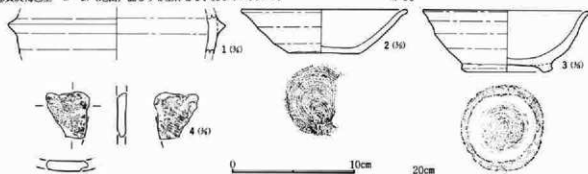


(514号住居跡)

- ①暗褐色土 白色顔石・ローム粒(〜3mm)を稀に含み、締まりに欠ける。
②黄灰褐色土 ローム(地山)凝りを主体とし、締まりに欠ける。

竈

- ①黄灰褐色土 焼土粒を含み、締まりに欠ける。
②暗黄褐色土 ローム細粒・焼土粒を稀に含み、締まりに欠ける。



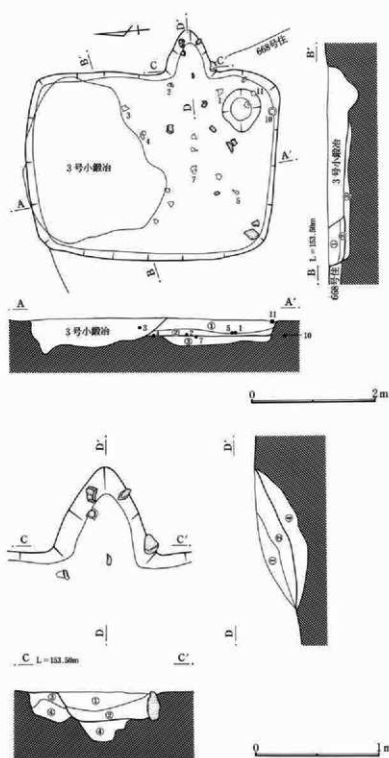
第100図 514号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第43表 514号住居跡出土遺物観察表

探訪番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (容)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
100-1	須恵器 羽蓋	覆土 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪轆成形でロクロ使用。	
100-2 48	須恵器 埴	床面+5 矢残存	口 13.0 底 5.5 高 3.4	①粗、石英細粒 ②酸化焰気味、軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	内外面部分的に 油煙付着。灯明 皿として使用か
100-3 48	須恵器 高台付埴	床面+8 片残存	口(13.4) 底(5.8) 高 5.8	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い浅黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
100-4	平瓦 小破片	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 1.0	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い黄褐色	一枚造りか。	磨耗が著しい

515号住居跡 (第101・102図、第44表、図版17・48・71)

本住居跡は、第7次調査区南端の平坦面にあり、56-21グリッドに位置する。周囲は同時期の住居跡の分布が密で、東に512号・南に513号・667号住居跡が隣接している。668号住居跡 (時期不明) の東壁を切って構築され、廃絶後に小鍛冶 (3号小鍛冶) として空間転用されている。



平面形は東西2 m97cm・南北4 m02cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-96°-Eを示す。壁高は25cmを測る。柱穴・壁溝については、検出されていない。床面は、竈前を中心に貼床が施され、床下には、竈前のピットの他、南壁から西壁にかけて大きな掘り込みが見られた。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅78cm・奥行63cm・深さ30cmを測る。右袖石と燃焼部を画する二石が残存し、石組構造であったと思われる。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径69 cm・深さ28cmを測る円形を呈する。

遺物の分布は散漫で、種類が乏しい上、個体の残存率も低い。小破片ではあるが、灰釉陶器耳皿と刻書土器が認められる。(中沢)

(515号住居跡)

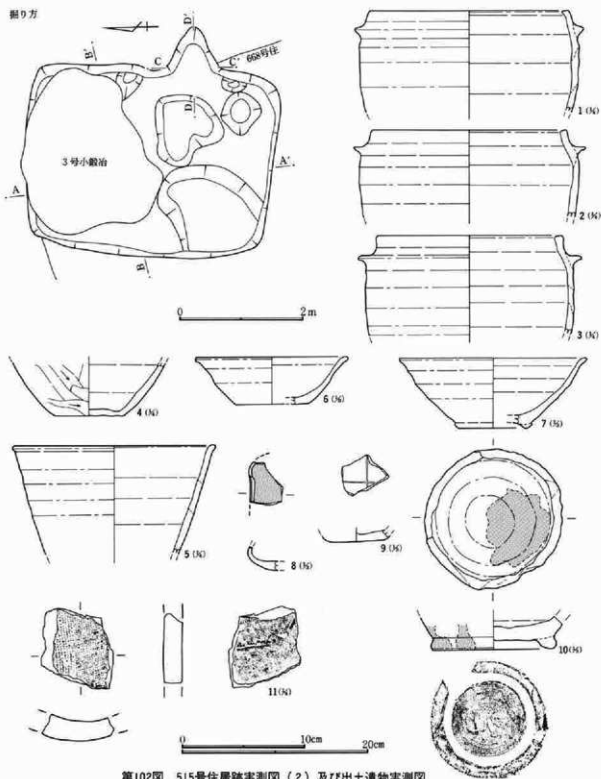
- ①暗褐色土 白色軽石・ローム粒 (～3mm) を少量含む。
- ②暗褐色土 ローム粒・ロームブロックをやや多く含む。
- ③暗黄褐色土 ロームを主体とし、締まりに欠ける。

竈

- ①暗褐色土 白色軽石・ローム粒 (～3mm) を少量含む。
- ②暗赤褐色土 ロームブロック (～20mm) を少量、焼土粒を多量に含む。
- ③暗赤褐色土 ロームブロック・焼土粒を少量含む。
- ④暗赤褐色土 ロームブロック・焼土粒をやや多く含む。

第101図 515号住居跡実測図 (1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第102図 515号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第44表 515号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
102-1	須恵器 羽蓋	灰面+4 破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焼、硬質 ③黄灰色	輪轆成形でロクロ使用。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

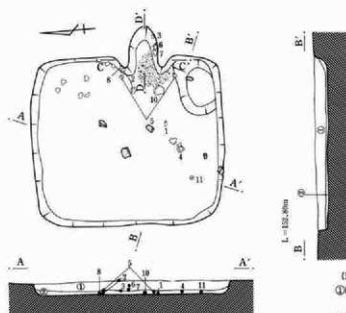
探検番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
102-2	須恵器 羽蓋	床面-1 破片	口(26.3) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪轆成形でロクロ使用。	
102-3	須恵器 羽蓋	床面+12 破片	口(19.5) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③浅黄色	輪轆成形でロクロ使用。	
102-4	須恵器 羽蓋	床面直上 破片	口— 底(7.2) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③浅黄色	輪轆成形でロクロ使用。外面下半斜方向剝削り。	
102-5	須恵器 鉢	床面+4 破片	口(21.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪轆成形でロクロ使用。	
102-6	須恵器 坏	覆土 残存	口(11.9) 底(5.6) 高(3.7)	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
102-7	須恵器 高台付塊	床面直上 破片	口(14.7) 底(5.2) 高(5.5)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
102-8 48	灰輪陶器 耳皿	覆土 小破片	口— 底— 高—	①粗、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
102-9 71	須恵器 坏	覆土 破片	口— 底— 高—	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	釘書き有り
102-10 48	灰輪陶器 甕	床面直上 破片	口— 底(9.6) 高—	①粗、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。高台貼付。	
102-11	平瓦	床面+1 小破片	長— 幅— 厚 2.0	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	

517号住居跡 (第103~105図、第45表、図版17・18・48・65)

本住居跡は、第7次調査区西端の平坦面にあり、65-13・14グリッドに単独で位置する。調査区外に近いので、周囲の住居跡の分布は不明である。

平面形は東西2 m70cm・南北3 m09cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-95°-Eを示す。壁高は最大で23cmを測る。床面に貼床は認められず、黄褐色ローム(地山)を直接叩き締めて使用しているようである。付属する柱穴・壁溝も、確認されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅



(517号住居跡)

- ①暗褐色土 軽石・ロームブロックを稀に含み、やや締まっている。
- ②暗黄褐色土 ローム(地山) 強じりを主体とし、締まっている。

第103図 517号住居跡実測図(1)

0 2m

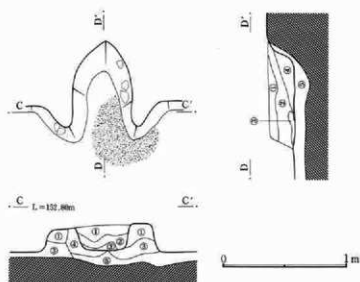
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

48cm・奥行60cm・深さ21cmを測る。電
用材としては、粘土を多量に使用して
いることが確認されているが、詳細は
不明である。

貯蔵穴は、径84cm・深さ24cmを測る
円形を呈する。

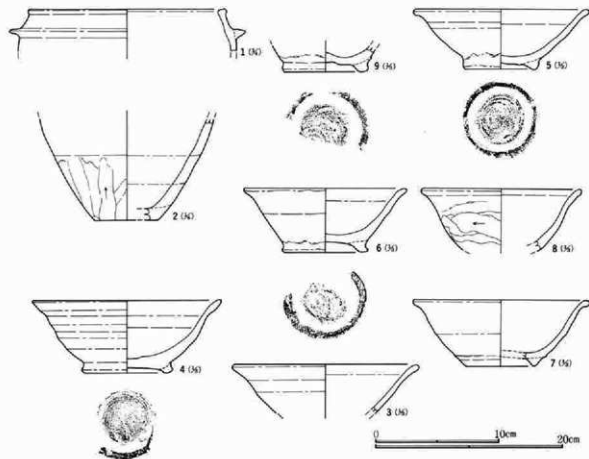
遺物は、竪周辺から床面中央にか
けて分布するが、種類に乏しく量も少
ない。そうしたなかでは坏類の出土が目
立つ。土器以外では一部欠損した滑石
片岩製の紡錘車が出土している。

(関口功)

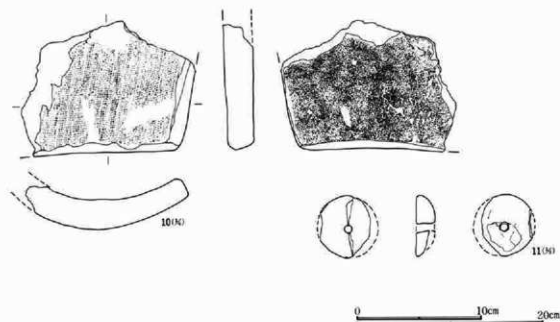


竪

- ①暗黄褐色土 軽石・ロームブロック・粘土を含み、締まっている。
- ②暗褐色土 焼土粒・ロームブロックを稀に含み、やや締まっている。
- ③暗黄褐色土 灰褐色の粘土を主体とし、締まっている。
- ④暗赤褐色土 焼土粒を多量に含み、やや締まっている。
- ⑤暗黄褐色土 焼土粒・灰・粘土を含み、締まっている。



第104図 517号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第105図 517号住居跡出土遺物実測図(2)

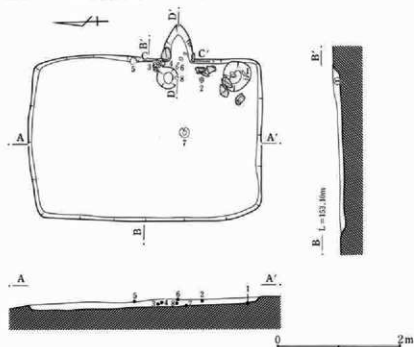
第45表 517号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
104-1	須恵器 羽蓋	床面+1 破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化剤、軟質 ③灰褐色、断面鈍い橙色	輪模成形でロクロ使用。	
104-2 48	須恵器 羽蓋	床面+1 破片	口— 底(6.8) 高—	①粗、砂粒 ②還元剤、やや硬質 ③灰色	輪模成形でロクロ使用。外面彫削り。	
104-3	須恵器 埴	竈内+4 破片	口(14.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化剤、やや硬質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形。	
104-4 48	須恵器 高台付埴	床面+2 片残存	口(14.6) 底(6.4) 高5.7	①骨、石英類・黒色鉱物粒 ②酸化剤、硬質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
104-5	須恵器 高台付埴	床面+2 片残存	口(13.6) 底5.8 高5.7	①粗、砂粒 ②酸化剤、軟質 ③灰黄色～浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
104-6 48	須恵器 高台付埴	竈内+12 片残存	口(13.0) 底(6.4) 高5.0	①粗、砂粒・小石 ②酸化剤、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
104-7	須恵器 高台付埴	竈内+6 片残存	口(13.6) 底(5.4) 高(5.2)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化剤、やや軟質 ③褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	縁状の付着物あり
104-8	須恵器 高台付埴	床面+2 破片	口(12.4) 底— 高—	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化剤気味、やや硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。外面に指押さえ。	
104-9	須恵器 高台付埴	竈土 破片	口— 底(6.4) 高—	①粗、褐色鉱物粒 ②還元剤、軟質 ③暗灰色、断面灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面縁状の付着物あり
105-10	平瓦	床面+2 破片	長— 幅— 厚3.0	①粗、白色鉱物粒 ②還元剤、軟質 ③灰色	一枚造り。側端の面取り2。	
105-11 65	石製品 紡轆車	床面+1	径4.8 厚1.5	孔径0.7 重36.5	広面に削り磨滅。広面下に製作時の観方向の擦痕あり。側面を僅かに形成。	滑石片岩

519号住居跡 (第106・107図、第46表、図版18・48・69)

本住居跡は、第7次調査区西端の平坦面にあり、63-14グリッドに単独で位置する。周囲には同時期の住居跡の分布は散漫で、やや孤立する傾向にある。

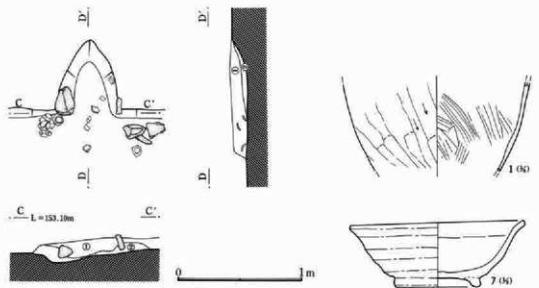
平面形は東西2m64cm・南北3m75cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-91'-Eを示す。壁高は最大で14cmを測る。床面は、黄褐色ローム(地山)を叩き締めており、貼床は認められない。柱穴・壁溝については、検出されていない。



竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅48cm・奥行48cm・深さ12cmを測る。原位置を保つと見られる物はないが、竈周辺に石材が散乱しており、本来は石組構造であった可能性がある。

貯蔵穴は、径45cm・深さ17cmを測る円形を呈する。

遺物はやや少なく、竈周辺に疎に分布し、残存率も低い。煮沸具には見るべき物がないが、羽釜を伴わないようである。「名」と読める墨書土器の出土が注意される。(中沢)



(519号住居跡)

①暗褐色土 軽石・ロームブロックを含み、やや締まりに欠ける。

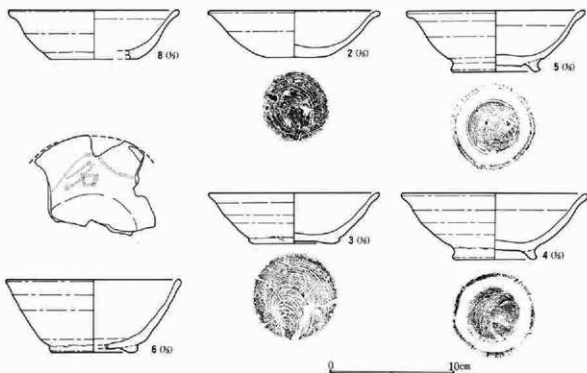
竈

①暗褐色土 軽石・ロームブロックを含み、締まっている。

②暗褐色土 炭土粒・ロームブロックを含み、やや締まりに欠ける。

第106図 519号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第107図 519号住居跡出土遺物実測図(2)

第46表 519号住居跡出土遺物観察表

押図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
106-1	土器 甕 壺	床面直上 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形。体部外面磨削。内面磨削で。	
107-2	須恵器 坏	床面+5 瓦残存	口(13.4) 底 4.6 高 3.7	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	磨耗が著しい
107-3	須恵器 坏	床面+4 瓦残存	口(13.6) 底 6.4 高 4.0	①粗、石英粒多 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
107-4 48	須恵器 高台付埴 瓦	床面+5 瓦残存	口(14.6) 底 6.4 高 5.2	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
107-5	須恵器 高台付埴 瓦	床面+8 瓦残存	口(14.0) 底 6.8 高 4.8	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
107-6 48・89	須恵器 高台付埴 瓦	床面+8 瓦残存	口(13.8) 底(6.6) 高(5.7)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	黒書土器
106-7 48	須恵器 高台付埴 瓦	床面+1 ほぼ完形	口 13.8 底 6.6 高 5.0	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
107-8	須恵器 坏	床面+5 瓦残存	口(13.4) 底(7.0) 高 4.8	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	ロクロ成形。	

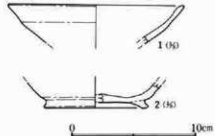
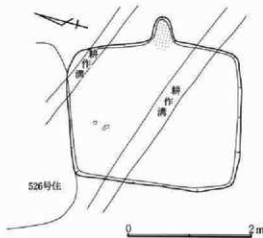
525号住居跡(第108図、第47表、図版18)

本住居跡は、第7次調査区南端の平坦面にあり、55-25グリッドに位置する。北壁が526号住居跡(平安)の南壁と接する形で構築され、二本の耕作溝に破壊されるが、プラン確認の段階で既に痕跡程度であった。平面形は東西2m34cm・南北2m82cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-73°-Eを示すと思われる。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

竪は、東壁ほぼ中央に、幅36cm・奥行42cm・深さ3cmの範囲で焼土の分布が認められることから、この部分に構築されていたと思われる。

遺物は極端に少なく、本住居跡に属するものかどうか疑問が残る。(関口功)

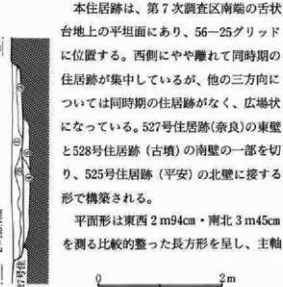
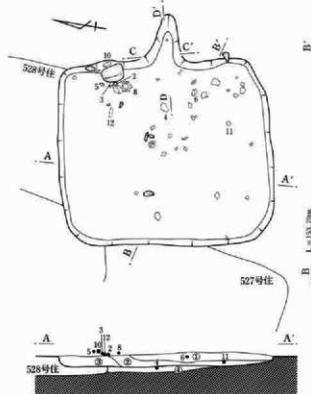


第108図 525号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第47表 525号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
108-1	須恵器 埴	床面直上 破片	口(13.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
108-2	須恵器 高台付埴	覆土 破片	口— 底(8.0) 高—	①青、褐色胎物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	

526号住居跡 (第109~111図、第48表、図版18・48・61・65・67・71)



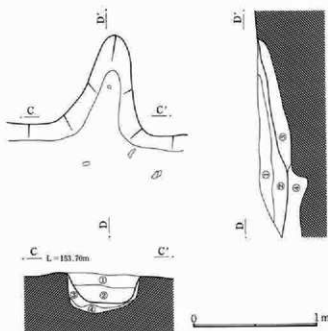
本住居跡は、第7次調査区南端の舌状台地上の平坦面にあり、56-25グリッドに位置する。西側にやや離れて同時期の住居跡が集中しているが、他の三方向については同時期の住居跡がなく、広場状になっている。527号住居跡(奈良)の東壁と528号住居跡(古墳)の南壁の一部を切り、525号住居跡(平安)の北壁に接する形で構築される。

平面形は東西2m94cm・南北3m45cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸

(526号住居跡)

- ①暗褐色土 軽石を多量に含み、締まっている。
- ②暗褐色土 ローム細粒・焼土粒・炭化物を少量含み、やや締まっている。
- ③暗褐色土 ローム細粒を稀に含み、締まり欠ける。
- ④暗褐色土 ②層に類する。
- ⑤黄褐色土 ロームブロックを主体とし、締まっている。

第109図 526号住居跡実測図(1)



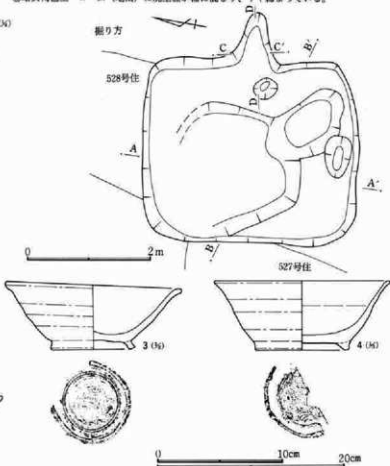
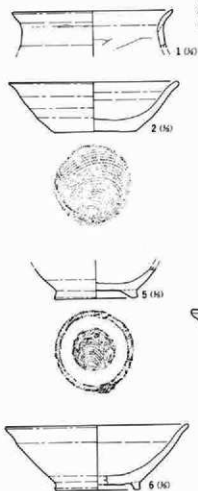
方向はN-82°-Eを示す。壁高は15cmを測る。床面は竈前を中心に貼床が施され、床下には竈前のピットの他、小ピット三基と住居西半部に大きな掘り込みが認められた。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁ほぼ中央にあり、幅57cm・奥行66cm・深さ15cmを測る。

遺物は、やや多いが残存率は低い。煮沸具はコ字状口縁土師器甕である。金属製品には、破損した刀子がある。綵刻のある石製紡錘車の出土が注意されるが、それ以外の遺物に見るべきものがなく、大半が小破片であり、流れ込みであるかもしれない。(開口功)

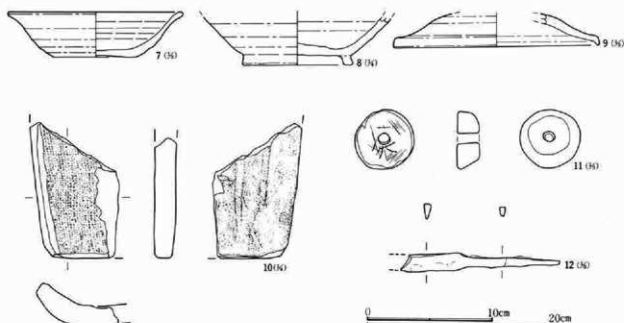
竈

- ①暗褐色土 軽石・焼土粒を含み、締まっている。
- ②暗褐色土 ロームブロック・焼土粒をやや多く含み、締まっている。
- ③暗褐色土 焼土・灰・ロームブロックを含み、やや締まりに欠ける。
- ④暗黄褐色土 ローム(地山)に焼土粒が稀に混じり、やや締まっている。



第110図 526号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第111図 526号住居跡出土遺物実測図(2)

第48表 526号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図取番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
110-1	土器 壺	覆土 破片	口(16.9) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口刃横削で。	
110-2 48	須恵器 坏	床面+18 ほぼ完形	口(13.4) 底 6.4 高 3.9	①粗、石英粒 ②還元焰、やや硬質 ③浅黄色	左回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
110-3 48	須恵器 高台付埴	床面+19 瓦残存	口(13.8) 底(6.2) 高 5.0	①粗、石英粒 ②還元焰、やや硬質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	一部黒変
110-4	須恵器 高台付埴	床面-2 瓦残存	口(13.9) 底(7.2) 高 5.5	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
110-5	須恵器 高台付埴	床面+22 破片	口— 底(6.6) 高—	①粗、石英粒多 ②酸化焰、硬質 ③鈍い橙色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
110-6	須恵器 高台付埴	床面+12 破片	口(14.4) 底(3.6) 高 5.5	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
111-7	須恵器 埴	覆土 瓦残存	口(13.6) 底(6.6) 高 3.6	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形。	
111-8 48	須恵器 大壺	床面+20 破片	口— 底 11.8 高—	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	内面底部一部自然軸
111-9	須恵器 壺	覆土 破片	口径— 口 16.0 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
111-10 61	平瓦 粉鉢車	床面+21 小破片	長— 幅— 厚 2.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。御側の面取り2。	
111-11 65・71	石製品 紡錘車	床面+5 完形	径 4.6/3.1 厚 1.7 重 70.5	孔径 0.9	全面的に磨滅。特に挟面の孔から5mmの範囲は同心円状の磨滅が顕著。	蛇紋岩 維列あり
111-12 67	鉄製品 刀子	床面+18	長(12.6) 幅 1.2 重 14.1	厚 0.5		

530号住居跡 (第112・113図、第49表、図版19・49)

本住居跡は、第7次調査区南端の平坦面にあり、57・58-21・22グリッドに位置する。南側には同時期の住居跡が密集するが、北側と西側は散漫で、東側は同時期の住居跡の空地になっている。西壁が後出する531号住居跡(平安)の東壁に接する形で構築されたと思われ、南東隅を土壌に破壊されている。

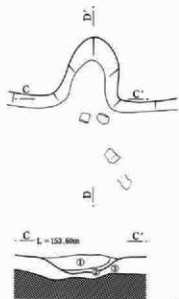
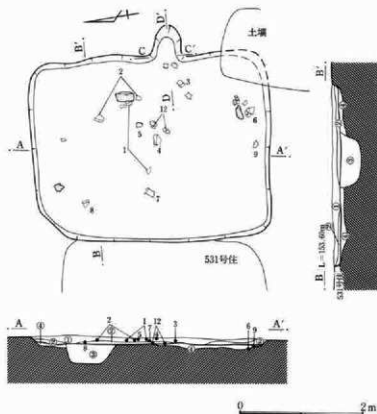
平面形は東西2m97cm・南北3m84cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-97°Eを示す。壁高は最大で

9cm程度で、残存状況は不良である。床面は、ほぼ全面に貼床を施し、掘り方には、大小八基のピットが確認されているが、貯蔵穴に相当するものは明確でなく、柱穴・壁溝についても、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅45cm・奥行45cm・深さ9cmを測る。残存状況は極めて悪く、痕跡に近い。

遺物はやや少なく、床面全体に散布している。接合しない羽釜の個体数の多さがやや目立つ。小破片ではあるが、灰釉陶器境の出土が注意される。

(関口功)



(530号住居跡)

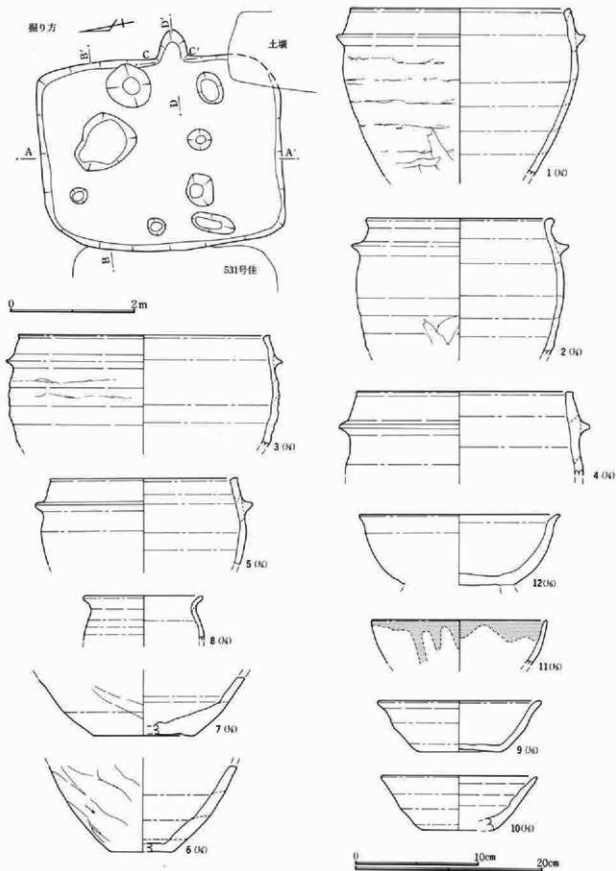
- ①暗褐色土 軽石・ロームブロックを含み、締まっている。
- ②暗黄褐色土 ロームブロックを含み、締まっている。
- ③暗褐色土 ロームブロックを含み、やや締まっている。
- ④黄褐色土 ローム(地山)を主体とし、褐色土が混じり、締まっている。

竈

- ①暗褐色土 軽石・焼土粒・ロームブロックを含み、締まっている。
- ②暗赤褐色土 焼土粒をやや多く含み、締まっている。
- ③暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、締まっている。

第112図 530号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第113図 530号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物

第49表 530号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
113-1 49	須恵器 羽蓋	床面+4 片残存	口(23.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。体部外面下半部削り。	
113-2	須恵器 羽蓋	床面+4 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	輪積成形でロクロ使用。体部外面下半部削り。	
113-3	須恵器 羽蓋	床面+2 破片	口(26.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③褐色	輪積成形でロクロ使用。	
113-4	須恵器 羽蓋	床面+6 破片	口(24.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
113-5	須恵器 羽蓋	床面+6 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③浅黄色	輪積成形でロクロ使用。	
113-6	須恵器 羽蓋	床面-5 破片	口— 底(6.6) 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	輪積成形でロクロ使用。外面削り。	
113-7	須恵器 壺?	床面+4 破片	口— 底(10.8) 高—	①昔、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	軟質陶器か
113-8 49	須恵器 小型壺	床面+2 破片	口(12.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い橙色	輪積成形後、口辺擴張で。	
113-9 49	須恵器 環	床面-2 片残存	口(12.8) 底(6.4) 高4.0	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
113-10	須恵器 環	覆土 破片	口(12.2) 底(5.6) 高(4.3)	①粗、青黒・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	ロクロ成形。	
113-11 49	灰釉陶器 環	覆土 破片	口(13.8) 底— 高—	①細、殆ど含まない。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
113-12 49	須恵器 高台付埴	床面直上 片残存	口(15.7) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	高台割離

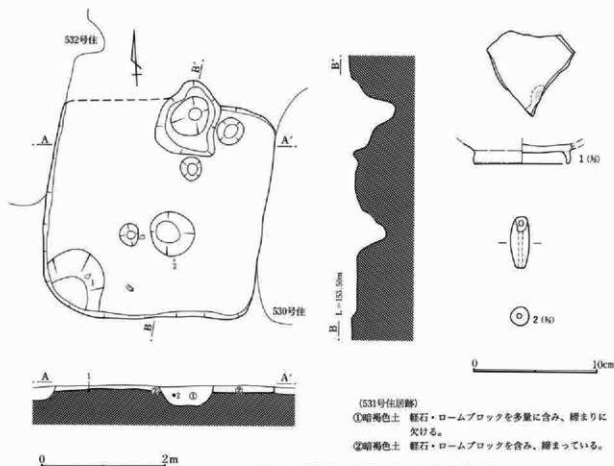
531号住居跡 (第114図、第50表、図版19・49・65)

本住居跡は、第7次調査区南端の舌状台地上の平坦面にあり、57・58—21グリッドに位置する。南側には同時期の住居跡が南北に連なるように密集するが、北側と西側は散漫で、東側は古墳時代の住居跡と中世の溝が数条認められるものの、同時期の住居跡の空地になっている。東側に同時期の住居跡が認められないのは、あるいはこの溝が関係しているのかもしれない。新旧関係は不明だが、530号住居跡(平安)に接する形で構築され、532号住居跡(平安)に若干西壁を破壊されている。

残存状況が極めて悪く、痕跡に近い状態で検出されたため、充分な情報はないが、土層観察等から平面形は東西3m54cm・南北3m36cmを測るほぼ正方形を呈するものと思われる。竈と思われる掘り込みから想定される主軸方向はN-13°-Eを示す。壁高は最大でも7cm程度を測るにすぎない。貼床はあったかもしれないが不明で、少なくとも顕著な硬化面を形成する程ではなかった。

竈は北壁中央やや西寄りであったと思われる、幅69cm・奥行30cm・深さ72cmを測る。貯蔵穴は、竈右脇にあるピットが相当すると思われるが、不詳である。

遺物は分布・量とも少なく、図化できたのは灰釉陶器境と土師のみである。(関口功)



(531号住居跡)

①暗褐色土 軽石・ロームブロックを多数に含み、締まりに欠ける。

②暗褐色土 軽石・ロームブロックを含み、締まっている。

第114図 531号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第50表 531号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器種類 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (容)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
114-1 49	灰釉陶器 高台付埴	床面-2 破片	口— 底(7.6) 高—	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
114-2 65	土 甌	床面-2 ほぼ完形	長 4.0 口径0.3 重7.7	径1.4/0.6 ①細、砂粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	棒状工具巻き付け。	

532号住居跡 (第115～117図、第51表、図版19・20・49・65・71)

本住居跡は、第7次調査区南端の舌状台地上の平坦面にあり、58-20グリッドに位置する。533号住居跡(古墳)の東隅、痕跡状態の531号住居跡(平安)の南半部と534号住居跡(平安)の西壁を切って構築され、土壇に西壁の一部を破壊されている。

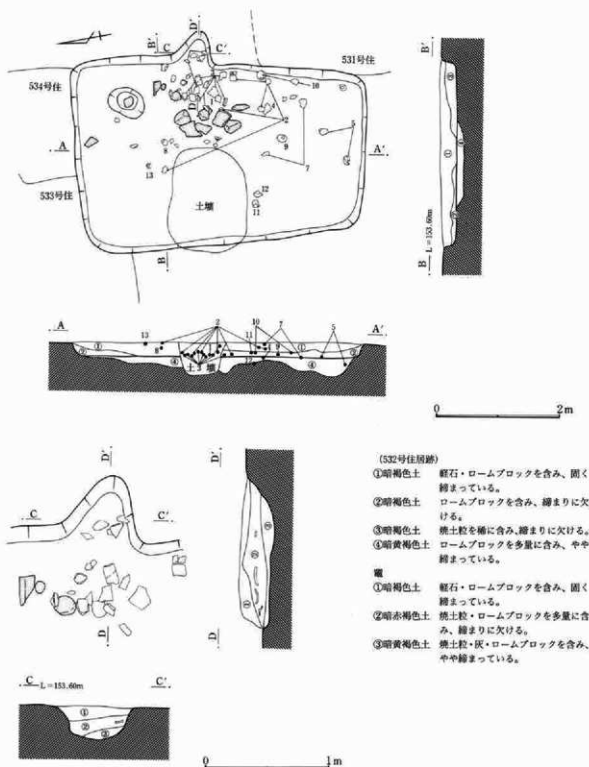
平面形は東西3m09cm・南北4m74cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-103°-Eを示す。壁高は最大で25cmを測る。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施す。掘り方には、竈前のピットも含め、三基のピットが認められた。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや北寄りにあり、幅57cm・奥行42cm・深さ24cmを測る。床面に散乱する石材や羽釜類が、石組竈の構成・補強材である可能性もあり、それらが竈付近の床面に散乱している状況からは、住居跡の廃棄の時点で竈を完全に破壊していたことが予想される。

第3章 平安時代の遺構と遺物

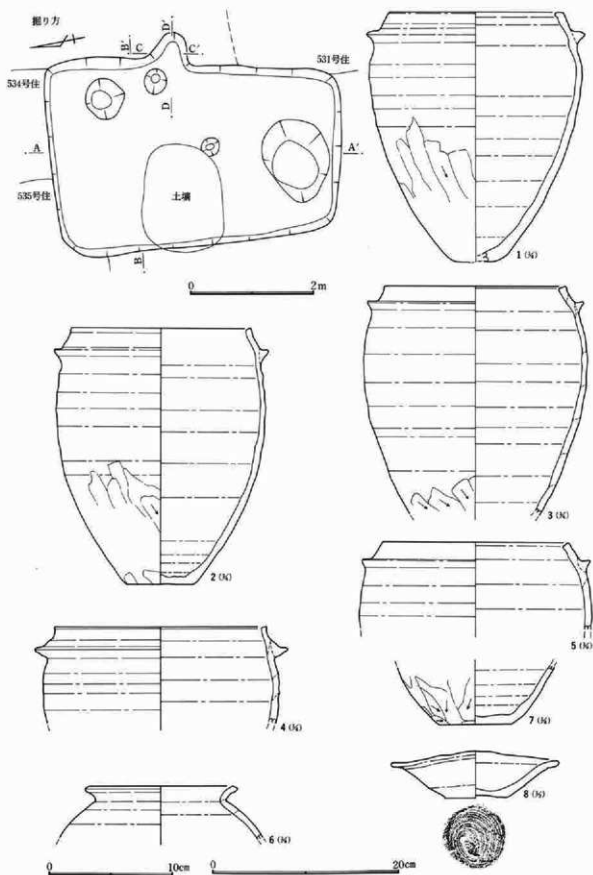
貯蔵穴は、竈左脇にある径57cm・深さ42cmを測る円形のピットが相当すると思われる。

遺物は、竈を中心に床面全体に分布し、羽釜類が目立つ。他に刻書のある須恵器埴と流紋岩製の紡錘車が検出されている。(中沢・関口功)



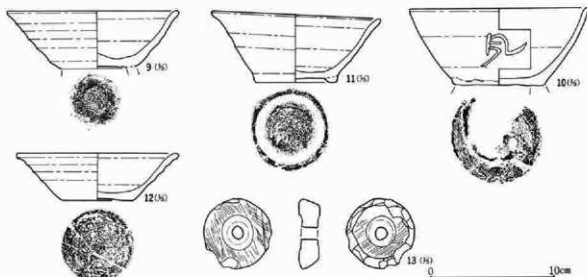
第115図 532号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第116図 532号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



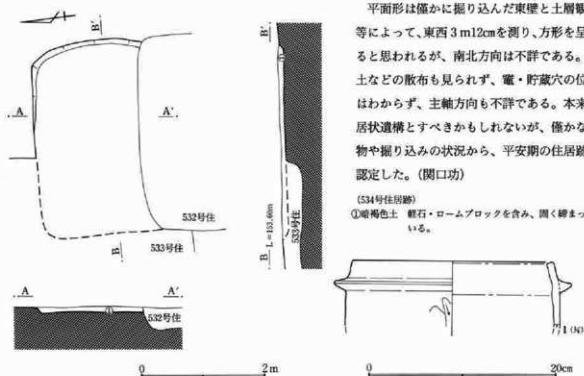
第117図 532号住居跡出土遺物実測図(2)

第51表 532号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種類 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
116-1	須恵器 羽 蓋	床面+2 瓦残存	口(18.4) 底(3.6) 高(26.3)	①粗、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③鈍い黄色	輪横成形でロクロ使用。体部外面下半部削り。	
116-2	須恵器 羽 蓋	床面+2 瓦残存	口(18.9) 底(7.0) 高(26.9)	①粗、砂粒 ②還元焙、やや軟質 ③黄灰色	輪横成形でロクロ使用。体部外面下半部削り。	
116-3 49	須恵器 羽 蓋	床面直上 瓦残存	口(19.2) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③鈍い黄褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面下半部方向削り。	
116-4	須恵器 羽 蓋	床面-1 破片	口(22.6) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③鈍い棕色	輪横成形でロクロ使用。	
116-5	須恵器 羽 蓋	床面-8 破片	口(19.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③棕色	輪横成形でロクロ使用。	
116-6	須恵器 壺	覆土 破片	口(15.3) 底 — 高 —	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焙、硬質 ③灰色	輪横成形でロクロ使用。	
116-7	須恵器 壺	床面直上 破片	口 — 底(7.6) 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③鈍い褐色	輪横成形でロクロ使用。外面下半部削り。	
116-8 49	須恵器 坏	床面+10 完形	口 13.1 底 4.8 高 3.7	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焙、軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
117-9 49	須恵器 高台付埴	床面+2 瓦残存	口(13.6) 底 — 高 —	①粗、白色鉱物粒 ②還元焙、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台剝離
117-10	須恵器 高台付埴	床面+4 瓦残存	口(14.2) 底 — 高 —	①粗、石英・白色鉱物粒 ②酸化焙、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台剝離 割書あり
117-11 49	須恵器 高台付埴	床面+4 瓦残存	口(13.3) 底 6.4 高 5.3	①粗、砂粒 ②酸化焙、軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
117-12 49	須恵器 坏	床面-9 瓦残存	口(12.5) 底 5.5 高 3.8	①粗、白色鉱物粒 ②還元焙、やや軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	内外面一部黒変
117-13 65	石製品 紡 車 車	床面+18 ほぼ完形	径 5.4/4.4 厚 1.6	孔径 1.0 重 46.6	広面に製作時の粗い層痕が残る。孔の周辺を磨るよう調整。	流紋岩

534号住居跡（第118図、第52表、図版49）

本住居跡は、第7次調査区南端の舌状台地上の平坦面にあり、58・59—20グリッドに位置する。覆土の流失が進行し、残存状況は極めて不良である。533号住居跡（古墳）を切って構築され、前出の532号住居跡（平安）に西半部を破壊されている。



平面形は僅かに掘り込んだ東壁と土層観察等によって、東西3m12cmを測り、方形を呈すると思われるが、南北方向は不詳である。焼土などの散布も見られず、竈・貯蔵穴の位置はわからず、主軸方向も不詳である。本来住居状遺構とすべきかもしれないが、僅かな遺物や掘り込みの状況から、平安期の住居跡と認定した。（開口功）

（534号住居跡）

①暗褐色土 軽石・ロームブロックを含み、固く締まっている。

第118図 534号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第52表 534号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土層種別 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
118-1 49	須恵器 羽釜	覆土 小破片	口(21.3) 底— 高—	①粗、砂粒 ②炭化形、やや硬質 ③灰褐色	輪模成形でロクロ使用。外面段削り。	

535号住居跡（第119～121図、第53表、図版20・21・49・50）

本住居跡は、第7次調査区北東端の緩斜面にあり、52・53—17・18グリッドに位置する。580号住居跡（古墳）の南西隅を切って構築されているが、耕作による攪乱が深くおよび、残存状況は不良である。

平面形は東西4m68cm・南北4m62cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN—92°—Eを示す。壁高は最大で16cmを測る。炭化材の遺存が見られ、あるいは火災を受けているかもしれない。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施す。掘り方には、時期差のあるものも含め、九基のピットが検出された。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、確認されていない。竈は東壁に二箇所確認されており、造り替えが行われたものと思われる。切り合い関係はやや不明瞭であるが、諸状況から新旧を判断した。

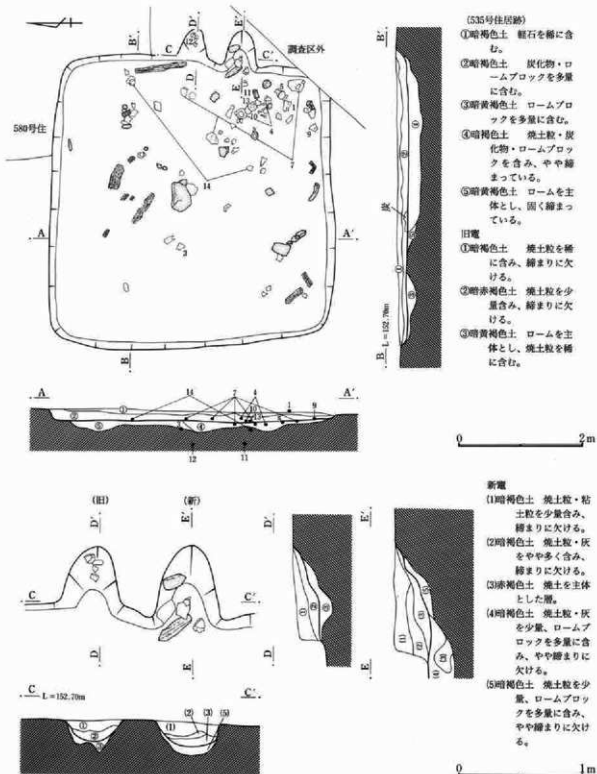
先行する竈は、東壁ほぼ中央にあり、幅51cm・奥行45cm・深さ21cmを測る。

後出する竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅54cm・奥行54cm・深さ24cmを測る。残存状況は不良で原型

第3章 平安時代の遺構と遺物

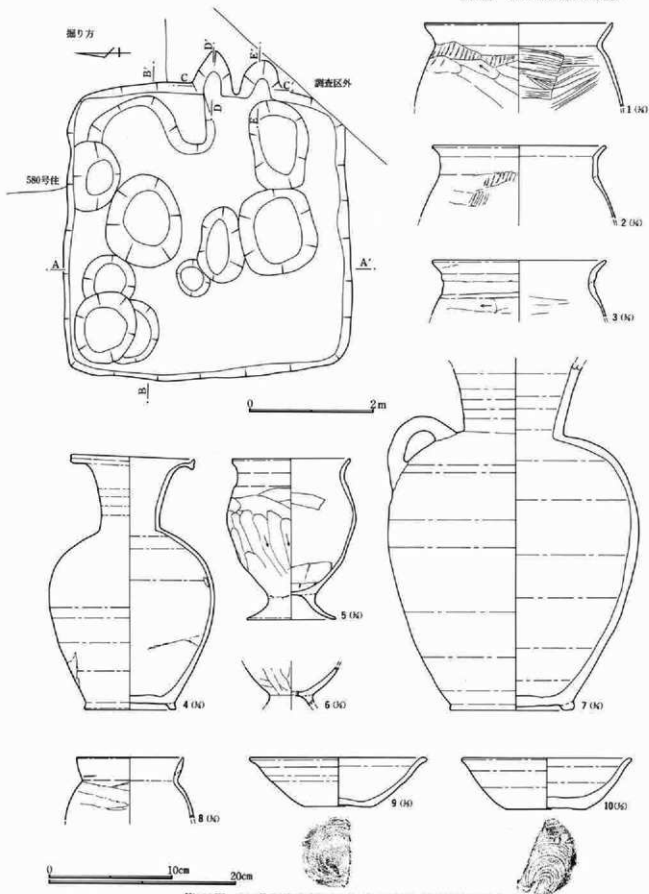
を想定することはできない。

遺物は、床面上に散乱状態で確認された。量的には並だが、個体の残存率は低い。煮沸具はコ字状口縁土器器甕である。他に、床面のほぼ中央に作業台と考えられる上部が平坦な石が埋設されていた。(富田)



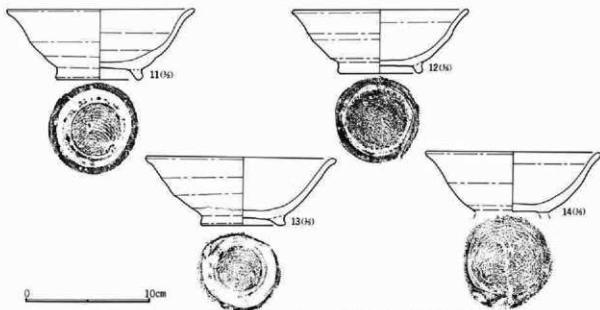
第119図 535号住居跡実測図(1)

第2階 竪穴住居跡と出土遺物



第120図 535号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第121図 535号住居跡出土遺物実測図(2)

第53表 535号住居跡出土遺物観察表

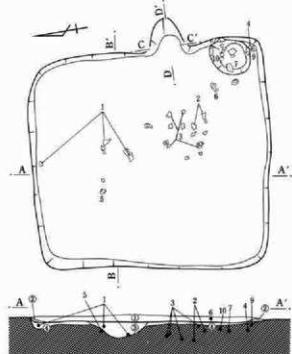
押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
120-1	土器 器 壺	床面+12 破片	口 19.8 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③外面浅黄色内面鈍い褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面寛撫で。	
120-2	土器 器 壺	覆土 破片	口(18.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。	
120-3	土器 器 壺	床面-12 破片	口(18.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪模成形後、口辺横撫で。外面磨削り。内面 撫で。	
120-4 49	須恵器 長頸壺	床面-2 ほぼ完形	口 13.0 底 9.6 高 26.5	①粗、黒色鉱物粒やや多 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
120-5 49	土器 器 台付壺	床面-1 瓦残存	口 12.5 底 9.5 高 15.9	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面寛撫で。	
120-6	土器 器 台付壺	覆土 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	輪模成形後、外面磨削り。	
120-7 49	須恵器 有縁長頸壺	床面-1 瓦残存	口 — 底(12.9) 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	ロクロ成形。体部外面磨削り後、器で調整。	
120-8	土器 器 小型壺	覆土 破片	口(11.4) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪模成形後、口辺横撫で。外面磨削り。	
120-9	須恵器 壺	床面直上 瓦残存	口(14.0) 底(5.4) 高 4.8	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	内面いぶし焼成
120-10	須恵器 坪	床面+2 瓦残存	口(13.4) 底(6.2) 高 4.1	①細、石英粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
121-11 50	須恵器 高台付壺	床面-30 瓦残存	口(14.0) 底 6.5 高 5.5	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
121-12 50	須恵器 高台付壺	床面-35 瓦残存	口(13.8) 底 5.0 高 6.3	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	

検出番号 図版番号	土器類別 形 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
121-13 50	須恵系 高台付埴	床面+2 写残存	口(14.9) 底 6.4 高 5.4	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③外面灰黄色、内面浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	底部に厚付着
121-14 50	須恵系 高台付埴	床面-14 写残存	口 18.5 底 - 高 -	①粗、黒色鉱物細粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台剝離

549号住居跡 (第122・123図、第54表、図版21・50)

本住居跡は、第9次調査区北端の緩斜面にあり、54-16・17グリッドに単独で位置する。

平面形は東西3m63cm・南北3m87cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-96°-Eを示す。壁高は最大で8cmを測る。

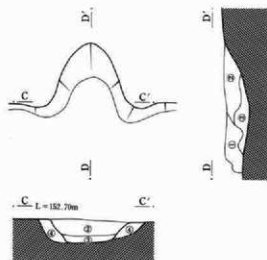


床面は、竈前を中心に薄く貼床を施し、掘り方には竈前も含め三基のピットと、壁を画するような掘り込みが二箇所認められた。柱穴・壁溝については、検出されていない。竈は東壁中央やや南寄りであり、幅60cm・奥行き48cm・深さ18cmを測るが、残存状況は不良である。

貯蔵穴は、径62cm・深さ32cmを測る円形を呈する。

遺物は、貯蔵穴と竈前のピットを中心に検出されているが、種類は乏しく固体の残存率も低

0 2m



(549号住居跡)

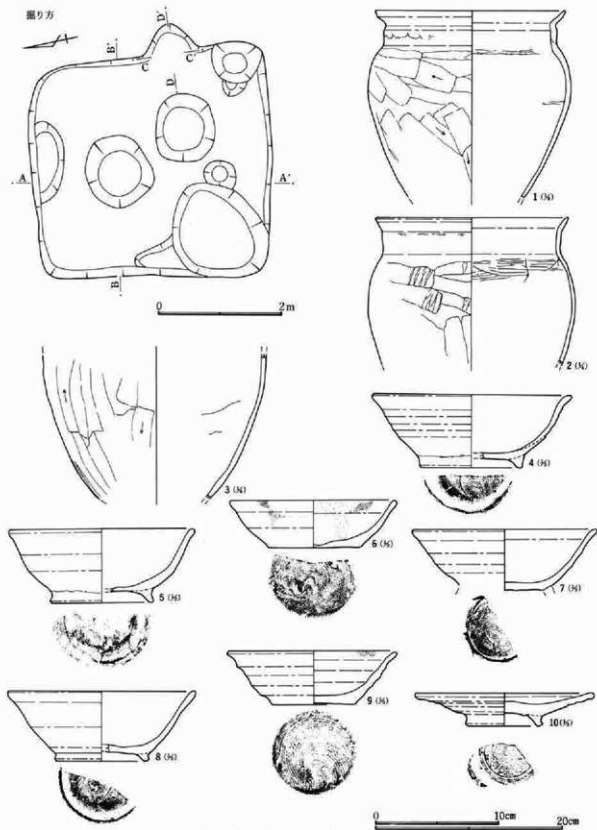
- ①暗褐色土 白色軽石(〜3mm)を多量に、ローム粒(〜5mm)を少量含む。
- ②暗黄褐色土 ローム粒(〜5mm)を多量に含み、締まりに欠ける。
- ③暗褐色土 焼土ブロック(5〜30mm)・ローム粒(〜10mm)を少量含む。
- ④暗黄褐色土 ロームを主体とし、締まっている。
- 竈
- ①暗褐色土 白色軽石(〜2mm)を含む。
- ②暗赤褐色土 焼土粒(〜5mm)を多量に、炭化物・ローム粒を少量含む。
- ③暗褐色土 ローム粒を多量に、焼土粒・炭化物を少量含む。
- ④暗黄褐色土 ロームを主体とし、焼土粒を稀に含む。

0 1m

第122図 549号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物

い。皿を含む坏類がやや多く認められるが、僅かに残る煮沸具の破片はいずれもコ字状口縁土師器甕で、羽釜を全く含まないようである。(富田)

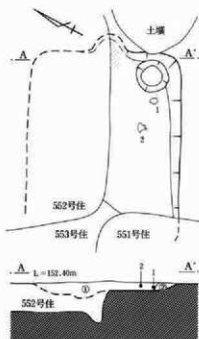


第123図 549号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第54表 549号住居跡出土遺物観察表

押込番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
123-1 50	土師器 壺	床面-20 瓦残存	口(20.1) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面瓦撫で。	
123-2 50	土師器 壺	床面-26 破片	口(20.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面瓦撫で。	
123-3 50	土師器 壺	床面-30 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪横成形。体部外面磨削り。	
123-4 50	須恵器 高台付埴	床面-12 瓦残存	口(15.4) 底(7.8) 高(5.7)	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
123-5 50	須恵器 高台付埴	床面-12 瓦残存	口(14.6) 底(8.0) 高(5.8)	①粗、石英粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
123-6 50	須恵器 坏	床面+4 瓦残存	口(13.0) 底(6.8) 高(3.7)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	内外面に油煙付着
123-7 50	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +18 瓦残存	口(14.4) 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台割離
123-8 50	須恵器 高台付埴	覆土 破片	口(14.8) 底(7.2) 高(5.5)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
123-9 50	須恵器 坏	床面-3 ほぼ完形	口(13.2) 底(6.7) 高(4.2)	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	内面に油煙付着
123-10 50	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +21 瓦残存	口(14.0) 底(5.6) 高(2.6)	①粗、褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	

554号住居跡(第124・125図、第55表、図版22・50)



第124図 554号住居跡実測図

本住居跡は、第7次調査区中央部の平坦面にあり、70・71—25グリッドに位置する。551号住居跡(奈良)・552号住居跡(奈良)・553号住居跡(古墳)の覆土を切って構築されている。地山を直接掘り込んだ住居跡の南半部のみが確認されている。規模については不詳であるが、残存する南壁等から、主軸方向はN—64°—Eを示すと思われる。壁高は10cmを測る。

竈は、焼土の分布から東壁にあったと思われるが、詳細は不明である。貯蔵穴は、径54cm・深さ30cmを測る円形を呈する。

遺物は極めて少なく、図化できた以外は極端な細片である。(関口功)

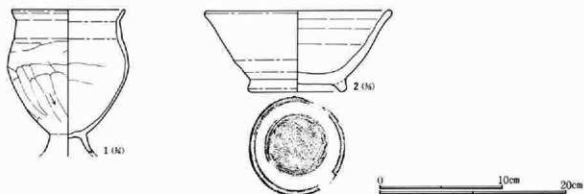
(554号住居跡)

①暗褐色土 軽石を多量に含み、やや締まりに欠ける。

②暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、やや締まっている。

0 2m

第3章 平安時代の遺構と遺物



第125図 554号住居跡出土遺物実測図

第55表 554号住居跡出土遺物観察表

探訪番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
125-1 50	土 師 器 小型台付 壺	床面+3 瓦残存	口(11.9) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③褐色	輪横成形後、口辺横挫で、体部外面磨削り。 内面荒削り。脚部横挫で。	
125-2 50	須 恵 器 高台付壺	床面+6 瓦残存	口(13.6) 底 7.0 高 6.3	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転コクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

563号住居跡 (第126~129図、第56表、図版22・50・51・62・67・69・71)

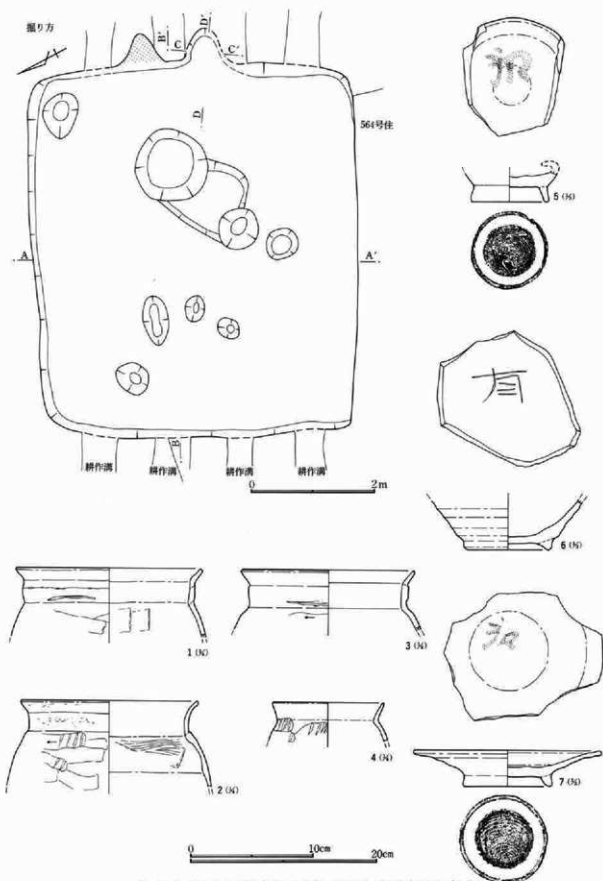
本住居跡は、第8次調査区北寄りの平坦面にあり、84-39グリッドに位置する。東側には、南北方向に各時代の住居跡がやや密集する傾向があるが、同時期の住居跡は概して散在的である。また、北側には663号住居跡(平安)・664号住居跡(平安)の、主軸方向のほぼ一致する住居跡が隣接する。564号住居跡(古墳)の東隅を切って構築されているが、表土がかなり流失した上に、東西方向の四条の耕作溝によって破壊されたため、本住居跡本来の覆土は僅かなものであった。

平面形は東西5m91cm・南北5m34cmを測る比較的整った長方形を呈し、今回報告する住居跡の中では最大規模を測る。主軸方向はN-117°-Eを示すと思われる。壁高は最大で13cmを測る。床面の状況は、竈周辺を中心に貼床を施していたと思われる、掘り方は一部564号住居跡の覆土中の為明瞭ではないが、時期差のある竈前のビットの他、小ビットが六基が検出された。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属する施設については、検出されていない。

廃棄時の竈は、東壁ほぼ中央にあり、幅66cm・奥行48cm・深さ15cm程度を測ると思われるが、耕作溝によって右袖部分を大きく破壊されている。構築材とみられる石材等の遺存は全くない。東壁中央やや北寄りにも焼土粒のやや集中する地点があり、先行する造り替え竈が存在した可能性があるが、残存状況は極めて悪く図化できない。

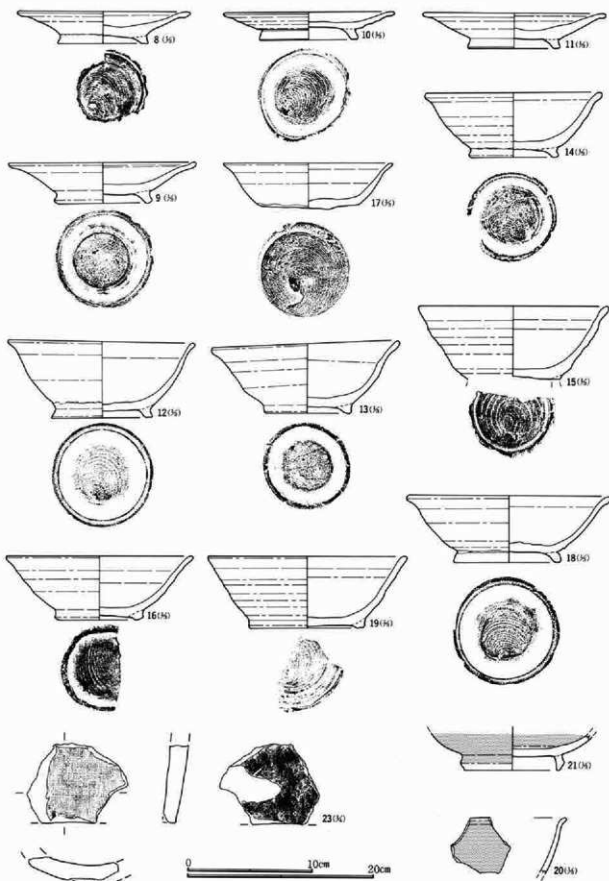
原位置を保つ物は少ないと思われるが、遺物は床面全体に分布が認められる。量的にはやや少ないが、個体の残存率は高い。皿を含む坏類が多く認められ、煮沸具にはコ字状口縁土師器壺を利用していたと思われる。そうした中では、「和(弘)」と書かれた墨書土器二点、内面に朱塗りのある「有」の刻書土器と灰軸陶器二点の検出が注意される。金属製品には破損品を再生・利用した刀子などがある。他に薙鬚石状の点紋網雲母石墨片岩2個、石墨泥片岩1個(計1.2kg)が検出されている。(関口功)

第3章 平安時代の遺構と遺物



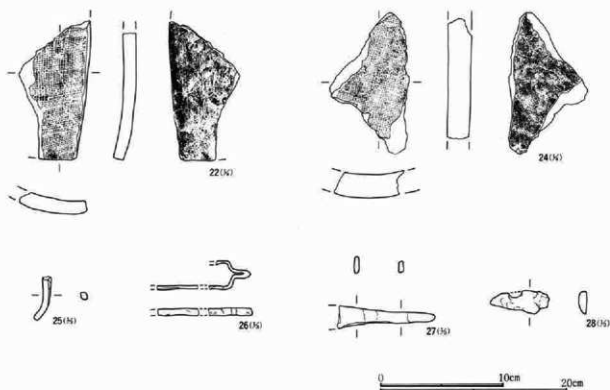
第127図 563号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第128図 563号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第129図 563号住居跡出土遺物実測図(3)

第56表 563号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
127-1	土 師 器 罌	覆土 破片	口(19.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③明赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。内面荒撫で。	
127-2 50	土 師 器 罌	床面-5 破片	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。内面荒撫で。	
127-3 50	土 師 器 罌	覆土 破片	口(18.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪横成形後、口辺横撫で。外面磨削り。	
127-4 50	土 師 器 小型罌	覆土 小破片	口(12.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口辺横撫で。外面磨削り。	
127-5 50・69	須 恵 器 高台付 耳 皿	床面+3 瓦残存	口— 底 6.0 高—	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	黒書土器
127-6 71	須 恵 器 高台付罌	床面+2 瓦残存	口— 底 6.6 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	黒書あり 欠損後内面未塗
127-7 50・69	須 恵 器 高台付皿	床面+12 瓦残存	口(14.8) 底 (6.9) 高 (2.8)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	黒書土器
128-8	須 恵 器 高台付皿	床面-16 瓦残存	口(13.5) 底 (7.0) 高 2.5	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
128-9 50	須 恵 器 高台付皿	床面-10 ほぼ完形	口 15.0 底 7.0 高 3.2	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

探検番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
128-10	須恵器 高台付埴 瓦	床面-6 瓦残存	口(13.5) 底(7.8) 高(2.2)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
128-11	須恵器 高台付埴 瓦	覆土 瓦残存	口(14.1) 底 7.0 高 2.8	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
128-12	須恵器 高台付埴 瓦	床面-12 ほぼ完形	口 14.6 底 7.9 高 6.0	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
128-13	須恵器 高台付埴 瓦	床面-12 ほぼ完形	口 14.7 底 6.8 高 5.4	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
128-14	須恵器 高台付埴 瓦	床面-2 瓦残存	口(13.8) 底(6.6) 高 5.1	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
128-15	須恵器 高台付埴 瓦	床面+2 瓦残存	口(15.0) 底 7.0 高 5.8	①粗、石英粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	高台剥離
128-16	須恵器 高台付埴 瓦	床面+6 瓦残存	口(14.8) 底(6.0) 高 5.0	①粗、石英・膏母 ②還元焰、軟質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
128-17	須恵器 環	床面-40 瓦残存	口(13.4) 底 7.8 高 3.5	①粗、石英粒多 ②還元焰、軟質 ③黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
128-18	須恵器 高台付埴 瓦	床面-8 瓦残存	口(16.2) 底 8.4 高 5.2	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
128-19	須恵器 高台付埴 瓦	覆土 破片	口(15.6) 底(8.5) 高 5.6	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	内外面黒染
128-20	灰輪陶器 埴 瓦	覆土 破片	口 - 底 - 高 -	①膏、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
128-21	灰輪陶器 高台付埴 瓦	覆土 破片	口 - 底(7.4) 高 -	①粗、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部回転機で調整。高台貼付。	
128-22	平瓦	床面+2 小破片	長 - 幅 - 厚 1.5	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い褐色	一枚造りか。	
128-23	平瓦	床面+4 小破片	長 - 幅 - 厚 1.8	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③褐色	一枚造りか。	
128-24	平瓦	床面+6 小破片	長 - 幅 - 厚 2.5	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③褐色	一枚造りか。	
128-25	鉄製品	覆土 破片	長 3.5 厚 0.5 幅 0.5 重 (3.5)			
128-26	鉄製品	覆土	長 (5.8) 厚 (0.6) 幅 (2.2) 重 (4.4)			
128-27	鉄製品	覆土	長 (7.8) 厚 0.4 幅 1.9 重 (14.2)			
128-28	鉄製品	覆土	長 (4.6) 厚 0.6 幅 1.7 重 (7.3)			

568号住居跡 (第130図、第57表、図版22・51)

本住居跡は、第7次調査区南寄りの平坦面にあり、57・58-13グリッドに位置する。524号住居跡(古墳)の覆土と地山を掘り込んで構築され、南西隅に攪乱を受ける。

北壁は完全に流失し、西壁も痕跡程度で不確定であるが、東西方向は3m00cm程度を測ると思われる。竈から

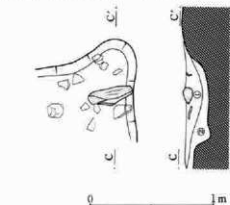
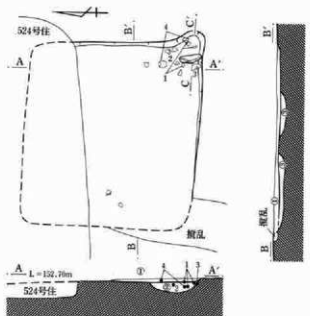
第3章 平安時代の遺構と遺物

想定される主軸方向はN-117°-Eを示す。床面は、貼床を施したと思われる、床下には、径82cm・深さ13cmを測る電前のピットと、径146cm・深さ8cmを測る楕円形を呈する掘り込みが確認されているが、貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁隅にあり、住居の主軸から南に25度程振れている。幅48cm・奥行30cm・深さ18cmを測る。天井石

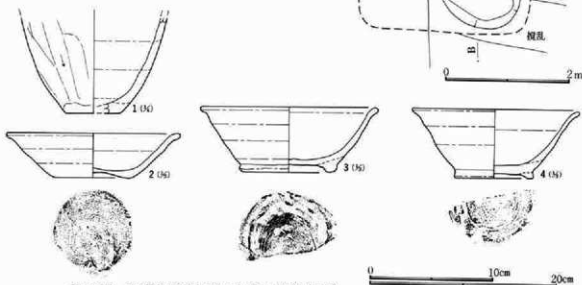
と思われる石材が外れた状態であった以外、石材の検出はなかった。

遺物は、竈内部を中心に分布しているが、量的に少なく種類も乏しい。(関口功)



(568号住居跡)

- ①暗褐色土 ロームブロックを多量に、焼土粒・炭を稀に含み、やや締まっている。
- ②暗褐色土 ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含む。
- ③暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 竈
- ④暗褐色土 粘土・ロームブロック・焼土粒を含み、やや締まっている。
- ⑤暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。



第130図 568号住居跡実測図及び出土遺物実測図

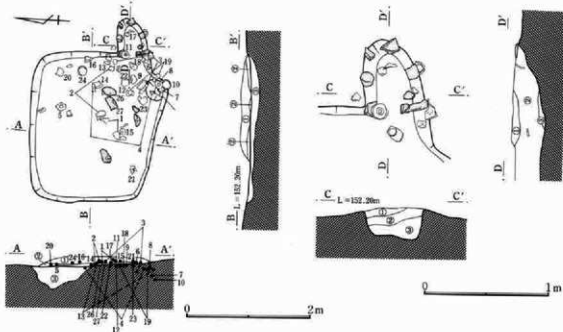
第57表 568号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器種類	出土状況 残存状況	法量(cm) (E)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
130-1	土師器 壺	壺内-6 破片	口— 底(6.0) 高—	①明、砂粒・黒色鉱物粒多 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪積成形後、外面削り。	
130-2	須恵器 坪	壺内-3 片残存	口(13.4) 底 6.0 高 3.5	①青、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	内外面黒染
130-3 51	須恵器 高台付埴 瓦	壺内-2 片残存	口(13.8) 底(7.0) 高 5.1	①明、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
130-4 51	須恵器 高台付埴 瓦	壺内-6 片残存	口(13.2) 底(6.3) 高 5.4	①青、白色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	

570号住居跡 (第131~134図、第58表、図版23・51・66・69)

本住居跡は、第7次調査区北寄りの平坦面にあり、71-27・28グリッドに単独で位置する。周囲にはやや離れて、東に16・17号掘立柱建物跡、西に18号掘立柱建物跡が存在しているが、同時期の住居跡はなく、孤立した形になっている。

平面形は東西2m37cm・南北2m19cmを測る歪んだ長方形を呈し、平面プランが確認されている中では、今回の報告書では最小規模を測る。主軸方向はN-86°-Eを示す。壁高は最大で5cmを測る。床面は、黄褐色ローム(地山)を叩き締めており、北壁寄りの床面下には不整形の掘り込みがあった。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。



(570号住居跡)

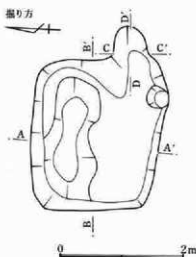
- ①暗褐色土 磁石を多量に含み、やや締まっている。
 ②暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を稀に含み、やや締まりに欠ける。
 ③暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、やや締まっている。

竪

- ①暗褐色土 磁石を多量に含み、やや締まっている。
 ②暗褐色土 磁石・焼土粒・ローム粒を稀に含み、やや締まっている。
 ③赤褐色土 焼土を主体とし、固く締まっている。

第131図 570号住居跡実測図(1)

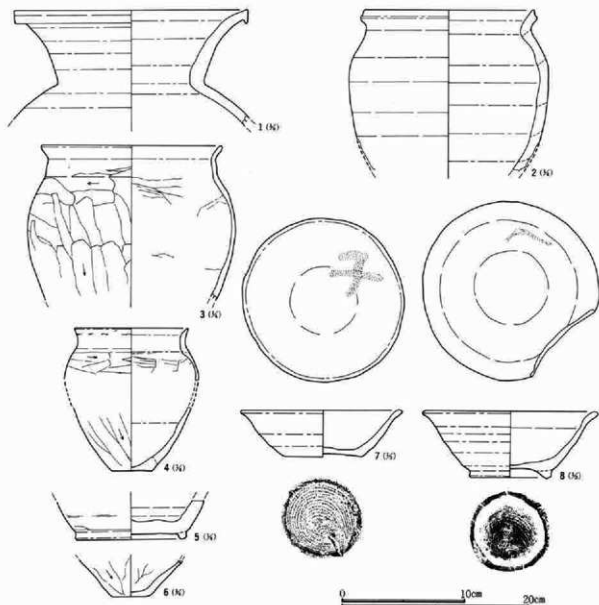
第3章 平安時代の遺構と遺物



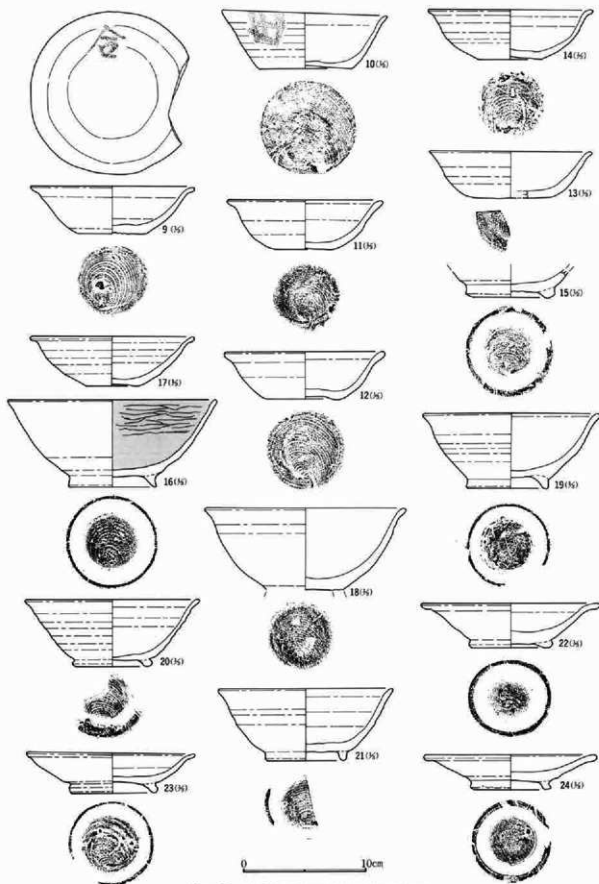
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅48cm・奥行51cm・深さ18cmを測る。表土掘削の際に破壊され、原位置を保つものは無かったが、基本的に石組構造を示すと思われる。

貯蔵穴は、竈右脇にあり、径36cm・深さ18cmを測る円形を呈する。

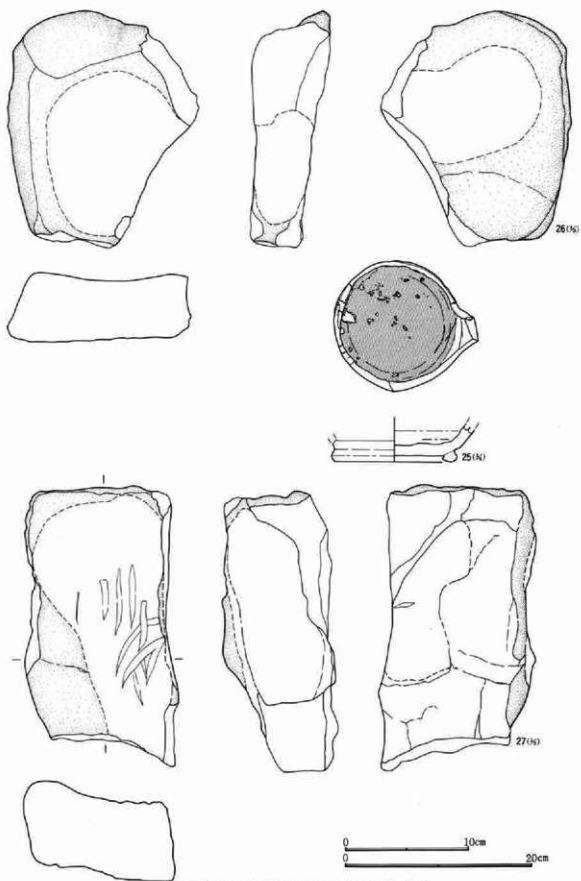
遺物は、土器を中心にかなり多く検出されている。貯蔵穴内とその付近から検出された四点の墨書土器と内面磨き又は黒色処理を施された高台付埴や灰釉陶器壺が注意される。土器以外では、半分欠損した砂岩製の砥石が二点検出されている。(関口功)



第132図 570号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第133図 570号住居跡出土遺物実測図(2)



第134図 570号住居跡出土遺物実測図(3)

第58表 570号住居跡出土遺物観察表

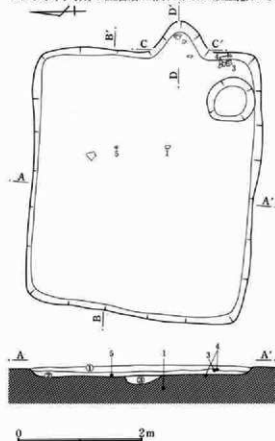
採回番号 図版番号	土器類別	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
132-1 51	須恵器 壺	床面+4 破片	口(24.8) 底— 高—	①粗、白色黏物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
132-2	須恵器 壺	床面+1 小破片	口(18.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形。	
132-3 51	土師器 壺	床面-9 瓦残存	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面瓦撫で。	
132-4	土師器 小型壺	床面-6 破片	口(12.0) 底(4.5) 高(15.0)	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③暗褐色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 内面瓦撫で。	
132-5	須恵器 高台付壺	床面+2 破片	口— 底 11.4 高—	①粗、白色黏物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
132-6	土師器 壺	床面+1 破片	口— 底 4.0 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	輪轆成形。外面磨削り。内面瓦撫で。	
132-7 51・69	須恵器 坏	貯蔵穴内 +9 完形	口 12.4 底 6.1 高 3.6	①粗、石英・黒色黏物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	墨書土器
132-8 51・69	須恵器 高台付壺	貯蔵穴内 +22 ほぼ完形	口(13.6) 底 6.2 高 5.2	①粗、石英・褐色黏物粒 ②還元焰、やや軟質 ③淡黄色	右回転ロクロ成形後、高台貼付。	墨書土器
132-9 51・69	須恵器 坏	床面-1 ほぼ完形	口 12.9 底 5.5 高 13.7	①粗、石英粒少 ②還元焰、硬質 ③淡黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	墨書土器
133-10 51・69	須恵器 坏	貯蔵穴内 +5 完形	口 13.1 底 7.4 高 4.3	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや硬質 ③淡黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	墨書土器 油埋が付着
133-11 51	須恵器 坏	壺内+4 ほぼ完形	口 12.0 底 4.8 高 3.9	①粗、石英粒多 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
133-12 51	須恵器 坏	床面-2 瓦残存	口 13.6 底 6.0 高 3.7	①粗、石英粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
133-13 51	須恵器 坏	床面-6 瓦残存	口(12.7) 底 (6.0) 高 (3.7)	①粗、石英・黒色黏物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
133-14 51	須恵器 坏	床面+1 瓦残存	口(12.8) 底 4.9 高 3.9	①粗、黒色黏物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
133-15	須恵器 高台付壺	床面+4 破片	口— 底 6.2 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
133-16	須恵器 高台付壺	床面+5 瓦残存	口(16.4) 底 6.7 高 (6.9)	①粗、石英・白色黏物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	内面黒色処理
133-17	須恵器 坏	壺内+2 瓦残存	口(12.6) 底 (4.0) 高 3.9	①粗、石英・黒色黏物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄色	ロクロ成形。	
133-18 51	須恵器 高台付壺	床面-2 瓦残存	口(15.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③淡黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台割離
133-19	須恵器 高台付壺	床面-6 瓦残存	口(13.8) 底 (6.2) 高 5.9	①粗、石英・雲母 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
133-20	須恵器 高台付壺	床面+2 瓦残存	口(13.5) 底 (5.8) 高 5.3	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

採掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (容)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
133-21	須恵器 高台付皿	床面+3 瓦残存	口(13.7) 底(6.0) 高 5.6	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
133-22 51	須恵器 高台付皿	床面-1 瓦残存	口(13.8) 底 6.1 高(3.5)	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
133-23	須恵器 高台付皿	床面-2 瓦残存	口 13.1 底 6.6 高 3.1	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
133-24 51	須恵器 高台付皿	床面+4 完形	口 13.4 底 6.0 高 2.7	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
134-25 51	灰釉陶器 壺	覆土 破片	口 — 底 9.5 高 —	①骨、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
134-26 66	石製品 砥石	床面直上 破片	長 18.6 厚 5.4 幅 14.5 重 1,879		荒砥。三面を使用。刃試し状の痕跡あり。	砂岩
134-27 66	石製品 砥石	床面直上 破片	長 22.0 厚 6.6 幅 11.7 重 3,000		荒砥。三面を使用。刃試し状の痕跡あり。	砂岩

585号住居跡 (第135・136図、第59表、図版23・24・51・65)

本住居跡は、第8次調査区北寄りの平坦面にあり、78-36・37グリッドに単独で位置する。周辺には、19号掘立柱建物跡が隣接し、北東方向にややまとまった形で住居跡が所在するものの、他方向には住居跡が見られず、同時期の住居跡に限れば40m以上離れている。耕作による擾乱が深く及び残存状況は不良である。



平面形は東西4 m20cm・南北3 m69cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-95°Eを示す。壁高は最大で15cmを測る。床面は、竈前を中心に薄く貼床を施すが、あまり明瞭でない。掘り方には、竈に伴う大小三基のピットの他、小ピットが六基以上確認された。柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅84cm・奥行42cm・深さ18cmを測る。

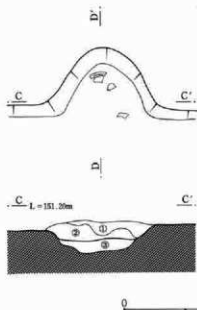
貯蔵穴は、竈右脇にあり、径78

(585号住居跡)

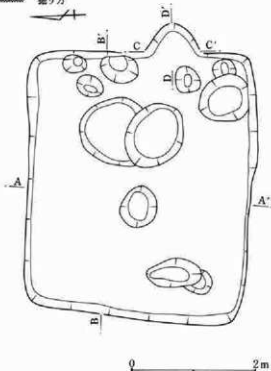
- ①暗褐色土 径3mmの黄色緑石(YP)・ローム粒を少量含み、締まりに欠ける。
- ②暗褐色土 黄色緑石・ロームブロック(～20mm)を少量含み、締まりに欠ける。
- ③暗褐色土 ②層に比し、ロームブロックを多量に含み、締まりに欠ける。

第135図 585号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



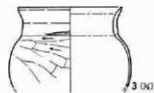
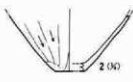
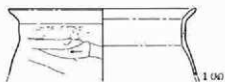
掘り方
↑



cm・深さ21cmを測る円形を呈する。

遺物は、竪周辺と床面中央部に分布するが、種類に乏しく残存率も低い。確認されている範囲では煮沸具にはコ字状口縁の土師器甕のみである。土器類以外では穿孔具の形状が想定されうる石製紡錘車の出土が注意される。(富田)

- 遺
①暗褐色土 径3mmの黄色軽石(YF)・ローム粒を少量含み、締まりに欠ける。
②暗褐色土 黄色軽石・ロームブロックを少量、焼土粒を多量に含み、締まりに欠ける。
③暗褐色土 黄色軽石・ロームブロック・焼土粒を少量含み、締まりに欠ける。



0 10cm 20cm

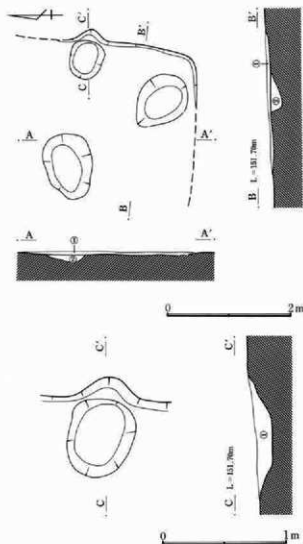
第136図 585号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物

第59表 585号住居跡出土遺物観察表

標識番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
136-1	土師器 壺	床面-19 小破片	口(19.7) 底— 高—	①粗・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面横方向彫削り。内面撫で。	
136-2	土師器 壺	覆土 小破片	口— 底(3.1) 高—	①粗・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面彫削り。内面撫で。	
136-3 51	土師器 小型壺	床面+5 破片	口(11.0) 底— 高—	①粗・砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面彫削り。	
136-4 51	須恵器 高台付埴	床面直上 埴残存	口(14.2) 底(7.2) 高8.2	①粗・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
136-5 65	石製品 紡錘車	床面+1 完形	径3.8/2.9 厚1.7	孔径0.8 重44.1	穿孔一時中断後、再度穿孔。断面に縦あるいは斜の製作時の磨痕。使用成は不明瞭。	滑石片岩

586号住居跡 (第137図、図版24)



第137図 586号住居跡実測図

本住居跡は、第9次調査区北西部の緩斜面にあり、55-09グリッドに単独で位置する。表土の流失が進み、僅かに竈周辺のみが痕跡状態で確認されている。従って規模の詳細は不明であるが、東西・南北とも3m前後の広がりを持っていたと思われる。主軸方向はN-96-Eを示す。確認段階で径96cm・深さ13cmの竈前のピットが検出されている。

竈は、焼土の分布から東壁にあったと思われる、幅48cm・奥行18cm・深さ05cmを測る。

貯蔵穴は、径78cm・深さ13cmを測る円形を呈する。

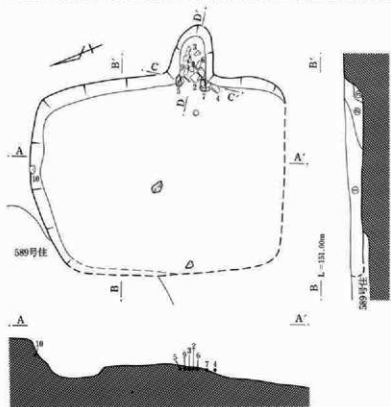
遺物は、図化できない土師器の細片が数点あるが、流れ込みの可能性がある。時期不明の住居跡とすべきであるが、僅かな遺物や竈の位置等から平安時代に所属するものと認定した。(富田)

(586号住居跡)

- ①暗褐色土 ロームブロックを少量含み、締まりに欠ける。
 - ②暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 竈
- ①暗褐色土 焼土粒・ロームブロックを多量に含み、締まりに欠ける。

590号住居跡 (第138・139図、第60表、図版24・52・71)

本住居跡は、第9次調査区南端の緩斜面にあり、48・49-14グリッドに位置する。589号住居跡(古墳)の甕右脇の東南隅を切って構築されている。南側のやや顕著な開析谷に面する傾斜面の為、住居跡の南半部が流失するなど残存状況は悪い。

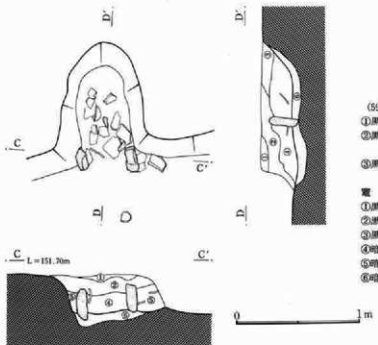


特に南壁付近は、黒色土中にかかる為、プラン確認に不安が残るが、平面形は東西3m21cm・南北4m08cm程度を測る長方形を呈し、主軸方向はN-115°-Eを示すものと思われる。壁高は27cmを測る。床面は、ローム(地山)を叩き締めており、貯蔵穴・柱穴・壁溝については、確認されていない。付属施設は径108cm・深さ23cmのピットが認められるのみである。

甕は東壁中央やや南寄りであり、幅72cm・奥行75cm・深さ24cmを測る。基本的に石組の構造をもっていたと思われるが、両袖石基部と燃焼部中央奥寄りに支脚が残存していたのみである。

遺物は、甕に挟みこまれていた土釜・羽釜の破片を主としている。流れ込みと思われるが竈書のある須恵器蓋の検出が注意される。

(富田)



(590号住居跡)

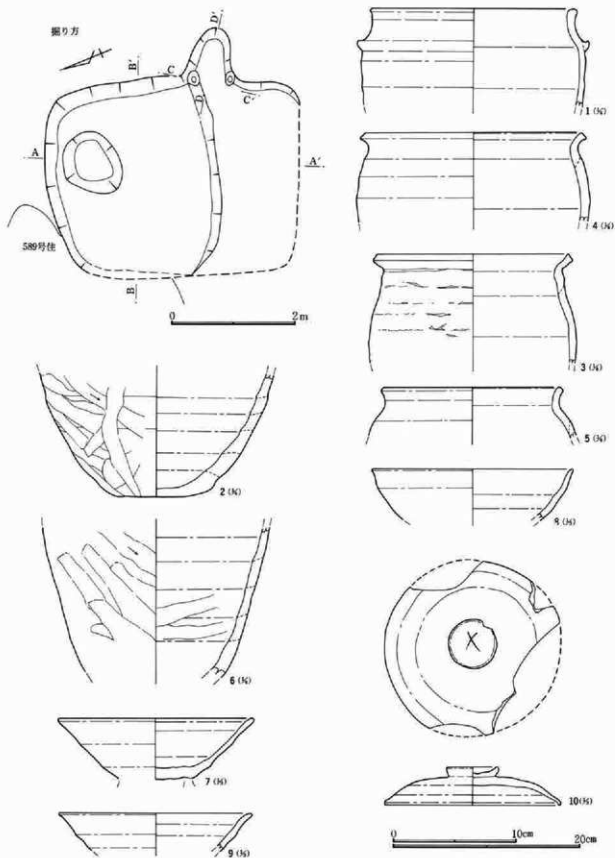
- ①黒褐色土 ローム粒(～10mm)を少量含む。
- ②黒褐色土 焼土粒(～5mm)を多量に、ローム粒(～5mm)を少量含む。
- ③黒褐色土 ロームブロック(～30mm)を少量、焼土粒を稀に含む。

甕

- ①黒褐色土 焼土粒を稀に含む。
- ②黒褐色土 ローム粒(～10mm)を少量含む。
- ③黒褐色土 焼土粒(～3mm)を少量含む。
- ④暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
- ⑤暗褐色土 ローム粒を少量、焼土粒を稀に含む。
- ⑥暗褐色土 焼土粒を少量含む。

第138図 590号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



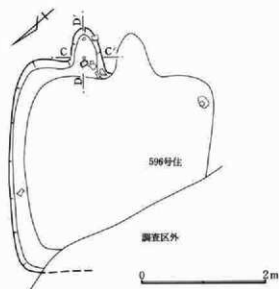
第139図 590号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第60表 590号住居跡出土遺物観察表

調査番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (径)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
139-1 52	須恵器 羽釜	覆土 小破片	口(21.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、硬質 ③鈍い赤褐色	輪横成形でロクロ使用。	
139-2 52	須恵器 土釜	甕内+1 破片	口— 底(7.6) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③橙色	輪横成形でロクロ使用。体部外面下位部で近い削り。	
139-3 52	須恵器 土釜	甕内+1 小破片	口(20.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③外 面鈍い褐色、内面赤褐色	輪横成形でロクロ使用。	2と同一個体か
139-4 52	須恵器 土釜	床面直上 破片	口(23.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。	
139-5 52	須恵器 土釜	床面直上 破片	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。	4と同一個体か
139-6 52	須恵器 土釜	甕内+1 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面位で近い削り。内面撫で。	
139-7 52	須恵器 高台付埴	床面直上 瓦残存	口(15.3) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③鈍い褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	高台刺離
139-8 52	須恵器 環	覆土 破片	口(15.9) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③鈍い褐色	ロクロ成形。	
139-9 52	須恵器 環	甕内+1 破片	口(15.2) 底— 高—	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焙、やや硬質 ③鈍い褐色	ロクロ成形。	
139-10 52・71	須恵器 蓋	床面+16 瓦残存	径(4.0) 口(14.0) 高 3.0	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焙、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、頂部副軸置削り。焼貼付。	蓋書

595号住居跡 (第140・141図、第61表、図版25・26・52・62・67・69)

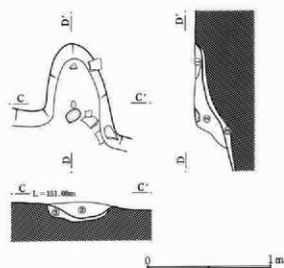
本住居跡は、第7次調査区北端の平坦面にあり、90-37グリッドに位置する。596号住居跡(平安)に北壁を除く住居跡の大半を破壊されている。



第140図 595号住居跡実測図(1)

一部調査区外にかかるのと前述の理由により、南北方向は不明だが東西方向は3m39cm程度を測ると思われる。主軸方向はN-129°-Eを示すが、今回報告する住居跡の中では、後出する596号住居跡と共に最も南寄りに傾く。やや離れてはいるが、周辺に所在する同時期の563・663・664号住居跡も、同様にやや南寄りの傾向を示す。壁高は最大で33cmを測る。床面は、僅かに残存する北壁付近から判断すると、厚く貼土を施していたと思われるが、大部分が破壊を受けている為判然としない。従って貯蔵穴・柱穴・壁溝についても、不明である。

第3章 平安時代の遺構と遺物

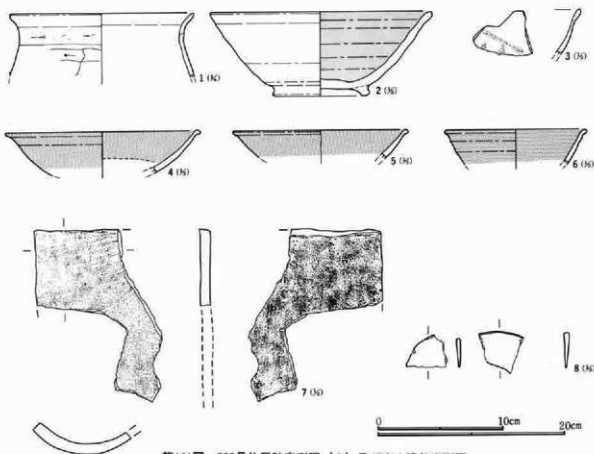


竈は東壁にあり、幅54cm・奥行54cm・深さ16cmを測る。

遺物は、竈を中心に分布するが、量は少ない。煮沸具には羽釜を含まないようである。小破片ではあるが判読不明の墨書土器と灰釉陶器塊三点の出土が注意される。(関口功)

竈

- ①暗赤褐色土 焼土粒を多量に含み、やや締まりに欠ける。
- ②暗赤褐色土 灰・焼土粒を多量に含み、締まりに欠ける。
- ③暗黄灰褐色土 焼土粒を稀に含む。



第141図 595号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第61表 595号住居跡出土遺物観察表

拝見番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 保存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
141-1 52	土器 壺	覆土 小破片	口(19.4) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪積成形後、口辺横撫で。外面瓦削り。	
141-2 52	酒器 高台付埴	床面+1 宛形	口 19.4 底 7.2 高 6.6	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	内面に多量の墨が付着

検出番号 図版番号	土器種類 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
141-3 69	須恵器 坏	覆土 小破片	口— 底— 高—	①胎、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	ロクロ成形。	体部内面黒書
141-4 52	灰釉陶器 埴	覆土 破片	口(15.6) 底— 高—	①胎、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
141-5	灰釉陶器 埴	覆土 小破片	口(13.6) 底— 高—	①胎、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
141-6	灰釉陶器 埴	覆土 小破片	口(11.0) 底— 高—	①胎、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
141-7 62	平瓦	竈内+2 破片	長— 幅— 厚 1.1	①胎、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	一枚造り。	
141-8 67	鉄製品 鏝	覆土 破片	長— 厚 0.4 幅 2.7 重(10.2)			

596号住居跡 (第142～145図、第62表、図版25・26・52・53・62・67・69・70)

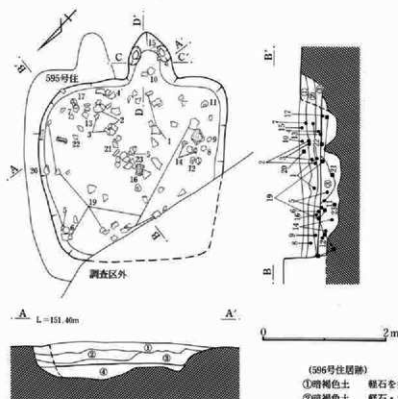
本住居跡は、第7次調査区北端の平坦面にあり、90-37グリッドに位置する。前出の595号住居跡(平安)を切って構築されている。

住居跡の南西隅が調査区外にかかる為、不確定な要素があるが、東西2m91cm・南北3m00cmを測る正方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-129°-Eを示す。壁高は最大で36cmを測り、比較的残存状況は良好である。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施す。掘り方には、竈前に小規模なピットが認められた他、北壁

付近に時期差のある掘り込みが認められ、平坦ではない。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅75cm・奥行63cm・深さ30cmを測る。燃焼部と煙道部を画する位置に二箇所掘り込みが確認されている。竈用材と見られる石材の残存はないが、石組の構造を持っていた可能性がある。

遺物は、土器を中心にかなり多く検出されているが、垂直分布に大きなばらつきが認められ



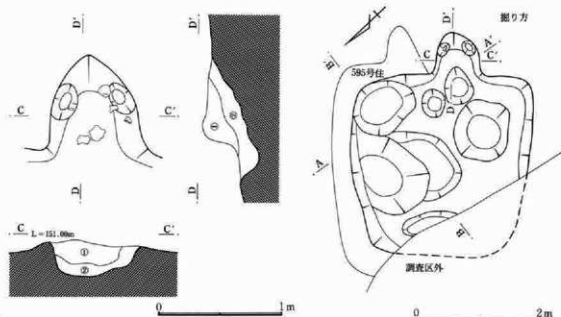
第142図 596号住居跡実測図(1)

(596号住居跡)

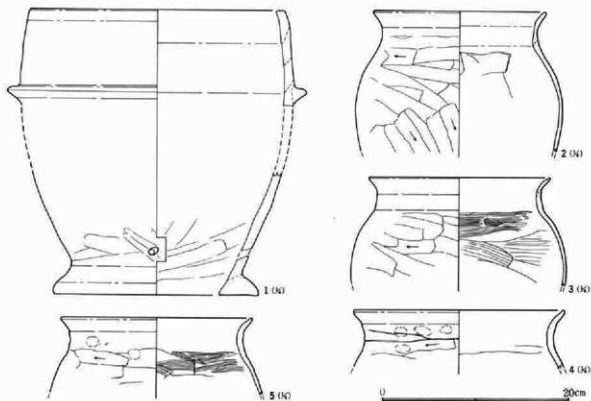
- ①暗褐色土 軽石を多量に含み、固く締まっている。
 ②暗褐色土 軽石・ロームブロック・焼土粒を含み、やや締まりに欠ける。
 ③暗黄褐色土 ロームブロック・焼土粒を多量に含み、やや締まりに欠ける。
 ④暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を含み、やや締まりに欠ける。

第3章 平安時代の遺構と遺物

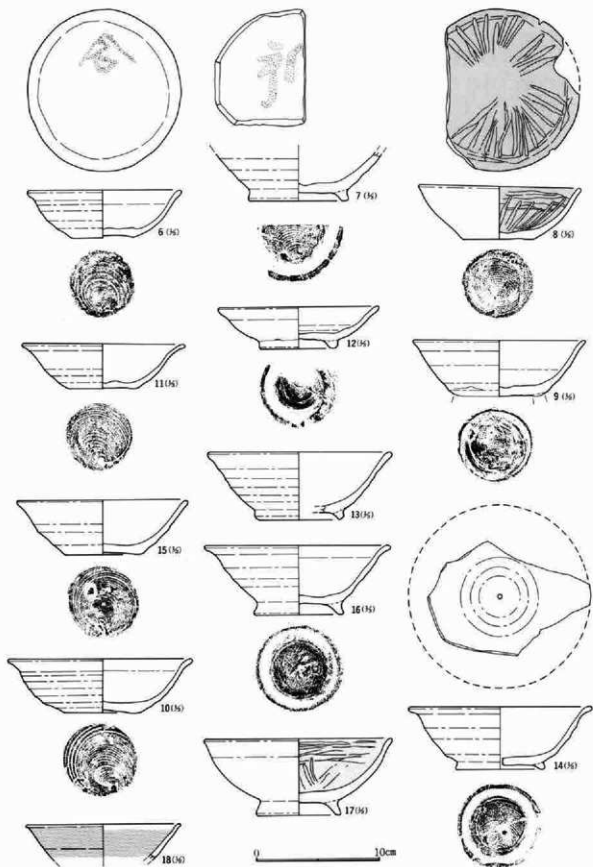
る。そうした中では二箇所穿孔のある甕、底部内面中央から外面に向けて穿孔された高台付埴や「瓮」「弘」と読める墨書土器等が注意される。(関口功)



- ①暗赤褐色土 軽石・ロームブロック・焼土粒を含み、やや締まりに欠ける。
 ②暗赤褐色土 焼土粒を多量に含み、やや締まっている。

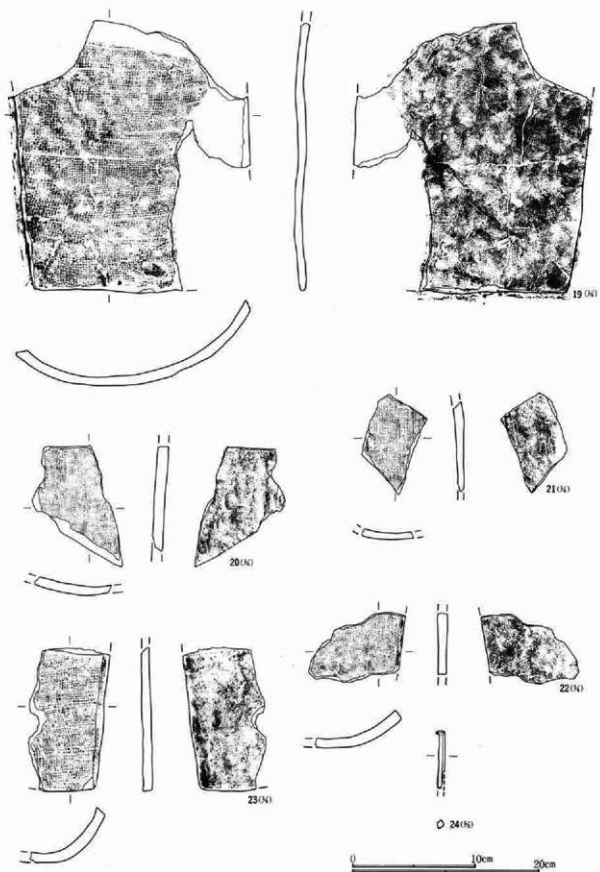


第143図 596号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第144図 596号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第145図 596号住居跡出土遺物実測図(3)

第62表 596号住居跡出土遺物観察表

押出番号 採取番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (口・底・高)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
143-1 53	須恵器 甕	床面+4 破片	口(27.0) 底(21.2) 高(30.0)	①青、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	輪襷成形でロクロ使用。体部外面下位無で、内面無で。体部下位に2ヶ所穿孔あり。	
143-2 52	土師器 甕	床面+5 破片	口(18.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③明褐色	輪襷成形後、口辺横無で。体部外面上位横方向の尻削り。下位縦方向尻削り。内面上位置無で。	
143-3 52	土師器 甕	床面+12 破片	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪襷成形後、口辺横無で。体部外面上位横方向尻削り。内面下位置無で。	
143-4 52	土師器 甕	床面+3 破片	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化物、軟質 ③鈍い褐色	輪襷成形後、口辺横無で。外面上位横方向尻削り。内面無で。指痕圧痕。	
143-5	土師器 甕	床面-9 破片	口(21.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪襷成形後、口辺横無で。体部外面上位横方向尻削り。内面置無で。指痕圧痕。	
144-6 53・69	須恵器 坏	床面直上 完形	口 6.3 底 4.7 高 3.7	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	黒書土器 油煙が付着
144-7 53・70	須恵器 高台付埴	床面+22 片残存	口— 底(7.8) 高—	①粗、石英・黒色鉱物細粒 ②酸化焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	黒書土器
144-8 53	須恵器 坏	床面+8 片残存	口 12.6 底 5.5 高 4.1	①青、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	内面黒色処理
144-9	須恵器 高台付埴	床面+2 片残存	口(13.5) 底— 高—	①粗、石英粒多 ②酸化焰、軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台欠損
144-10 53	須恵器 坏	甕内+27 片残存	口(14.4) 底 5.8 高 4.2	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
144-11 53	須恵器 坏	床面-5 片残存	口 12.6 底 5.8 高 3.5	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
144-12	須恵器 高台付埴	床面-5 片残存	口(12.5) 底(5.9) 高 3.3	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、高台貼付。	
144-13	須恵器 高台付埴	床面+1 片残存	口(14.4) 底(6.4) 高(5.3)	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
144-14 53	須恵器 高台付埴	床面-19 片残存	口(14.4) 底 7.0 高 4.9	①粗、石英粒少 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色〜鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	底部に内一外へ穿孔有り
144-15 53	須恵器 甕	甕内+27 片残存	口(13.6) 底 6.0 高 4.2	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
144-16 53	須恵器 高台付埴	床面+4 片残存	口 14.4 底 6.9 高 5.5	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
144-17	須恵器 高台付埴	床面-2 片残存	口(14.6) 底 6.4 高 6.0	①青、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	内面黒色処理
144-18 53	灰釉陶器 坏	覆土 破片	口(12.1) 底— 高—	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	光ヶ丘
145-19 62	平 瓦	床面-25 破片	長— 幅— 厚 1.0	①粗、石英粒多 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	一枚造り。	
145-20 62	平 瓦	床面+23 小破片	長— 幅— 厚 1.1	①細、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	

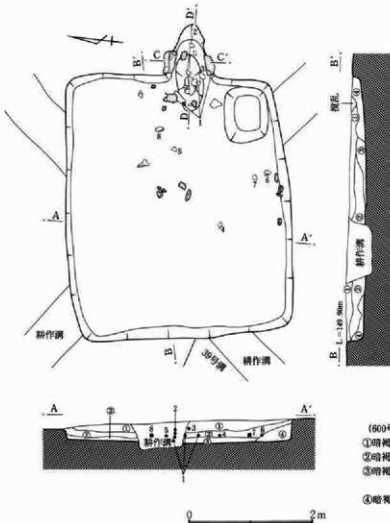
第3章 平安時代の遺構と遺物

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
145-21	平瓦	床面-18 小破片	長— 幅— 厚0.8	①粗、石英・褐色鉱物細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	一枚造りか。	
145-22	平瓦	床面-1 小破片	長— 幅— 厚1.1	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	一枚造りか。	20と同一個体か
145-23 62	平瓦	床面-22 小破片	長— 幅— 厚1.1	①粗、石英・白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い黄褐色	一枚造りか。	
145-24 67	鉄製品 釘	覆土 破片	長(4.5) 幅0.5	厚0.5 重(3.5)		

600号住居跡 (第146～148図、第63表、図版26・53・62・70)

本住居跡は、第7次調査区北端の平坦面にあり、96・97-25グリッドに位置する。本住居跡以西は、西谷川に向かう傾斜面になっているが、調査区外近くに所在する為、周囲の住居跡等の分布は不詳である。39号溝に南西隅を若干、二条の交差する耕作溝の擾乱によって床面まで破壊されている。

平面形は東西4m23cm・南北3m63cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-82°-Eを示す。壁高は最大で



29cmを測る。床面の粘床は、竈前を中心に薄く施されていたと思われるが、上記の理由により残りが悪い。床下には竈前のピットの他、ピット一基が検出されたが、掘り方は概して平坦である。柱穴・壁溝等の付属施設については検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りであり、幅72cm・奥行78cm・深さ36cmを測る。煙道部分まで比較的良く残るが、両袖石は大きく破損している。

貯蔵穴は、長径87cm・短径69cm・深さ20cmを測る隅丸方形を呈する。

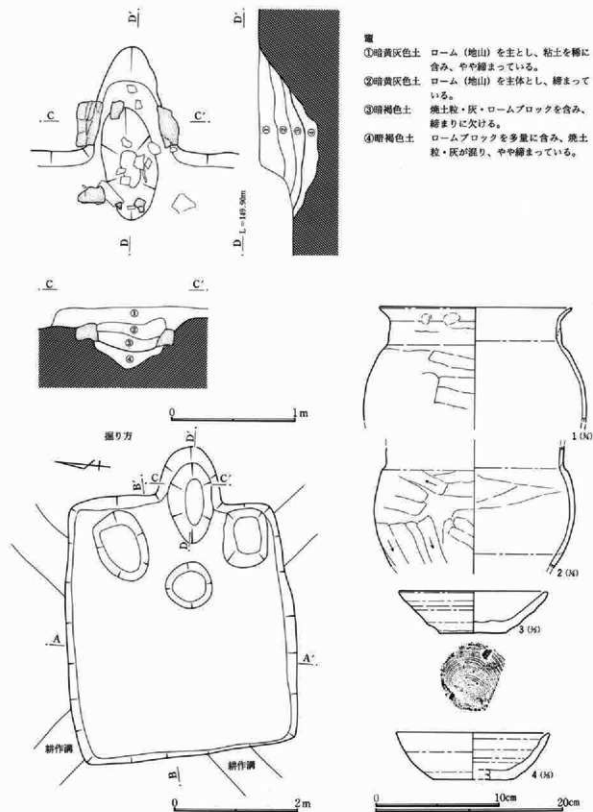
(600号住居跡)

- ①暗褐色土 軽石を含み、締まりに欠ける。
- ②暗褐色土 焼土粒・灰を含み、やや締まりに欠ける。
- ③暗褐色土 ロームブロックを少量含み、締まりに欠ける。
- ④暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、やや締まっている。

第146図 600号住居跡実測図(1)

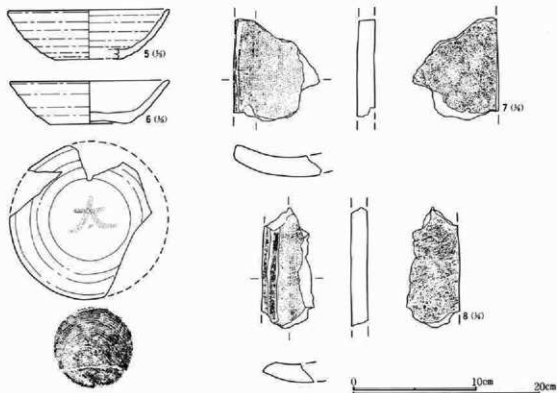
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

遺物はやや少なく、竪を中心分布している。土師器の坏・甕類の出土が目立つ。南壁中央付近から出土した「太」と判読できる墨書土器が注意される。煮沸具はコ字状口縁土師器甕である。(関口功)



第147図 600号住居跡実測図（2）及び出土遺物実測図（1）

第3章 平安時代の遺構と遺物



第148図 600号住居跡出土遺物実測図(2)

第63表 600号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (8)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
147-1 53	土器 甕	床面+2 破片	口(20.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い棕色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面磨削り。 指環圧痕。	磨耗が著しい
147-2	土器 甕	床面+6 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪轆成形後、体部外面磨削り。内面撫で。	
147-3 53	須恵器 坏	甕内+20 瓦残存	口(10.6) 底 5.2 高 3.2	①青、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部赤切り。未調整。	
147-4	須恵器 坏	床面+8 瓦残存	口(12.0) 底(6.1) 高(3.7)	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	クロコ成形。	
148-5	須恵器 坏	床面+6 瓦残存	口(12.6) 底(5.4) 高(3.8)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	クロコ成形。	
148-6 53・70	須恵器 坏	床面+7 瓦残存	口(12.5) 底 6.4 高 3.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部赤切り。未調整。	黒書土器
148-7 62	平瓦 小破片	床面+7 小破片	長— 幅— 厚 1.9	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色凹面赤化	一枚造りか。側端の面取り3。	
148-8	平瓦 小破片	床面+6 小破片	長— 幅— 厚 1.8	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。側端の面取り2。	

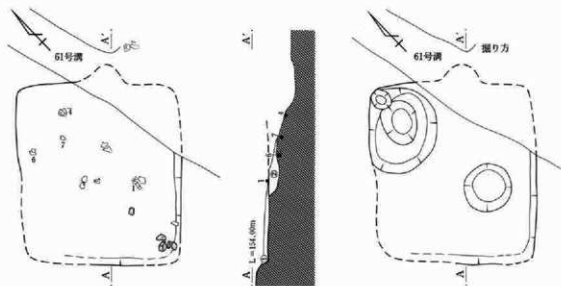
608号住居跡 (第149・150図、第64表、図版26・53・62・63・71)

本住居跡は、第10次調査区西端の北東方向の緩斜面にあり、45—66・67グリッドに位置する。61号溝に東南隅を破壊されたうえに、地山の一部を含む表土の流失によって、残存状況は極めて不良である。

不確定な要素が伴うが、平面形は東西2m64cm・南北2m88cm程度を測る正方形を呈するものと思われる。主軸方向は不詳である。僅かに残る南壁は最大で10cmを測る。床面は、貼床を施していたと思われるが、あまり明瞭でない。掘り方には、三時期に亘るピットをはじめとして、四基のピットが検出されたが、その機能等は不詳である。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、確認されていない。

竈は、焼土の散布から東壁ほぼ中央にあったと思われるが、61号溝によって破壊されている為、詳細は不明である。

遺物は種類に乏しいものの、遺構の残存状況からすれば、比較的量は多い。煮沸具には羽釜を含むようである。他に「辛」と判読できる文字瓦の出土が注意される。(関口功)

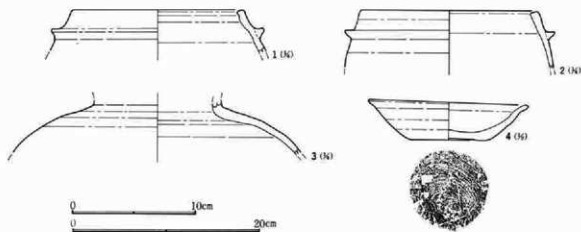


(608号住居跡)

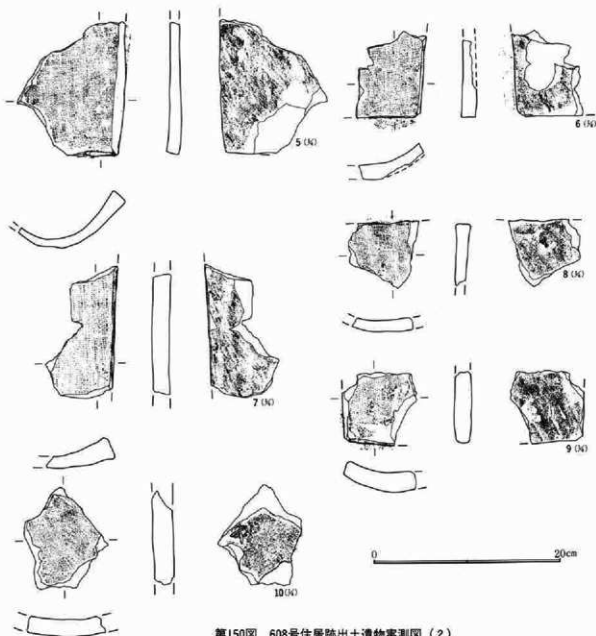
①暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、やや締まっている。

②暗灰褐色土 粘土を多量に焼土粒・灰を少量含み、締まっている。

0 2m



第149図 608号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)



第150図 608号住居跡出土遺物実測図(2)

第64表 608号住居跡出土遺物観察表

押国番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
149-1	須恵器 羽蓋	床面直上 小破片	口(18.1) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③黄灰色	輪積成形でロクロ使用。	
149-2	須恵器 羽蓋	覆土 小破片	口(18.7) 底— 高—	①粗、砂質 ②還元焰、やや硬質 ③褐色	輪積成形でロクロ使用。	
149-3	須恵器 甕	覆土 小破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色、断面鈍い褐色	輪積成形でロクロ使用。	
149-4 53	須恵器 坏	床面-24 外残存	口 12.5 底 6.0 高 3.0	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	一部黒変

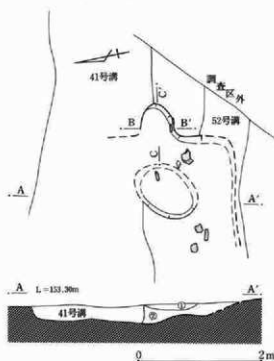
探跡番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①粘土 ②硝子 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
150-5 62	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.5	①粗、石英・白色鉱物細粒 ②酸化硝、硬質 ③鈍い黄褐色	一枚造りか。	
150-6	平瓦	床面-14 小破片	長— 幅— 厚 1.5	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化硝、硬質 ③鈍い黄褐色	一枚造りか。	
150-7 62	平瓦	床面-18 小破片	長— 幅— 厚 1.9	①粗、白色鉱物粒 ②酸化硝、硬質 ③鈍い黄褐色	一枚造りか。	
150-8	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.3	①粗、白色鉱物細粒 ②還元硝、硬質 ③褐色、断面赤褐色	一枚造りか。	
150-9	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 2.0	①粗、石英・雲母 ②酸化硝、硬質 ③鈍い黄褐色	一枚造りか。	
150-10 63・71	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 2.0	①粗、白色鉱物粒 ②還元硝、硬質 ③灰色、断面鈍い赤褐色	一枚造りか。	「辛」の文字あり 黒書

621号住居跡 (第151図、図版26)

本住居跡は、第8次調査区南端近くの平坦面にあり、57-32グリッドに位置する。41号溝に北北部を、52号溝に南壁を破壊され、半壊状態の竪と、竪前のピットのみ検出された。竪から想定される主軸方向はN-94°-Eを示す。壁高は最大で10cmを測る。

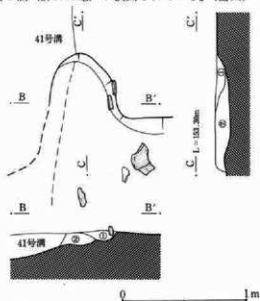
竪は東壁にあり、幅60cm・奥行48cm・深さ12cmを測る。

遺物は羽蓋を含むが、いずれも細片で図化できない。他に黒縞石状の点紋緑泥片岩1個、点紋絹雲母石墨片岩2個(計1.36kg)が検出されている。(富田)



(621号住居跡)

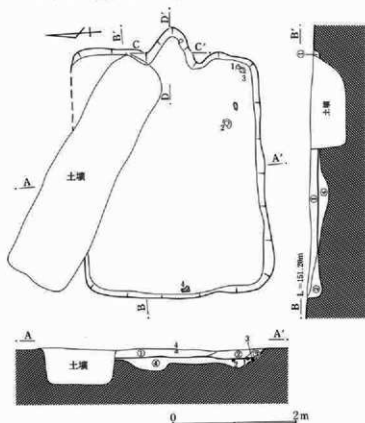
- ①暗褐色土 白色軽石(〜2mm)・焼土粒をやや多く含む。
 ②暗褐色土 白色軽石・ローム細粒を少量含む。
 竪
 ①暗褐色土 白色軽石(〜2mm)・ローム細粒を少量、焼土粒をやや多く含む。
 ②暗褐色土 白色軽石(〜2mm)・ローム細粒・焼土粒を少量含む。



第151図 621号住居跡実測図

622号住居跡 (第152・153図、第65表、図版26・27・53・66)

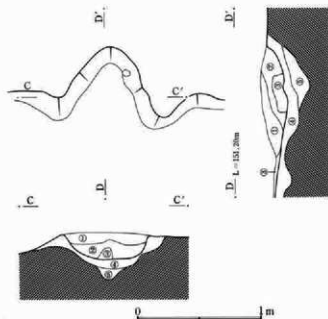
本住居跡は、第8次調査区東寄りの緩斜面にあり、67-39グリッドに位置する。周囲に住居跡の分布は見られるが、同時期の住居跡に限るとかなり散漫な状態になる。時期不明の方形の土壇によって西壁から床面にかけて大きく破壊されている。



平面形は東西3 m96cm・南北3 m06cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-92°-Eを示す。壁高は最大で14cmを測る。床面は、竈前を中心に厚く貼床を施し、掘り方には、大小あわせて六基のピットが検出されている。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、確認されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅69cm・奥行45cm・深さ21cmを測る。覆土の状態の割りに残存状況は不良だが、燃焼部にピット状の掘り込みを伴う。

遺物は種類に乏しく、個々の残存率も低い。図化できた物は坏類が主であるが、確認されている範囲では煮沸具はコ字状口縁の土師器壺のみである。定形化した砥石には、刃試しの条痕が認められる。(中沢)

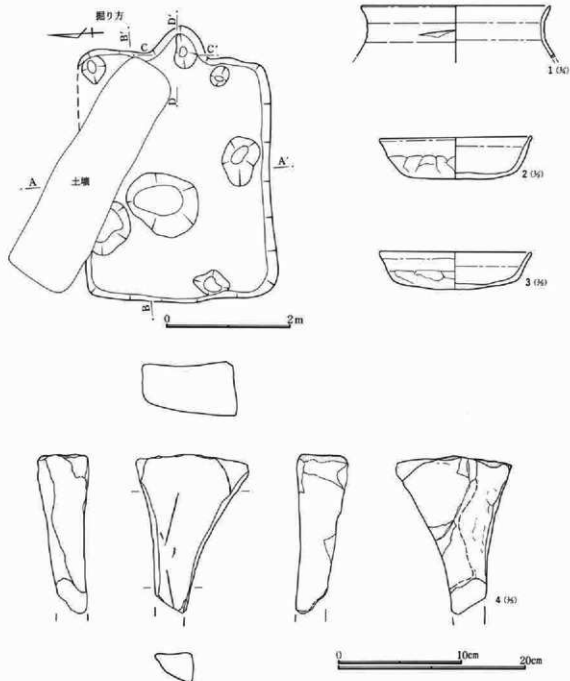


(622号住居跡)

- ① 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、ローム粒を多量に含む。
 - ② 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
 - ③ 褐色土 ロームブロックを主体とした層。
 - ④ 褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とし、少量の黒褐色土を含む。
- 竈
- ① 暗褐色土 灰褐色の粘質土を多量に、ローム粒を少量含む。
 - ② 暗褐色土 灰褐色の粘質土・焼土粒を多量に含む。
 - ③ 赤褐色土 焼土ブロック。
 - ④ 暗褐色土 ロームブロックを主体とし、焼土粒を少量含む。
 - ⑤ 暗褐色土 ロームブロックを主体とし、焼土粒を稀に含む。

第152図 622号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第153図 622号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第65表 622号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
153-1	土師器 壺	床面-1 破片	口(19.7) 底 - 高 -	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③褐色	輪横成形後、口辺横撫で。	
153-2 53	土師器 坏	床面-1 片残存	口 11.8 底 - 高 3.3	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半～底部箇所あり。	
153-3 53	土師器 坏	床面-1 片残存	口(11.8) 底 - 高(2.9)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下半～底部箇所あり。	

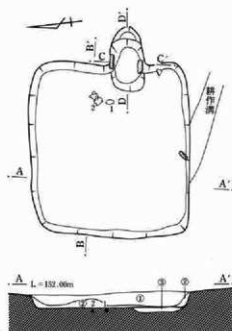
第3章 平安時代の遺構と遺物

押図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
153-4 66	石製品 磁 石	床面+8 破片	長 12.5 厚 4.3 幅 7.5 重 460		中砥。四面を使用。	流紋岩

624号住居跡 (第154・155図、第66表、図版27・53)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、68-34・35グリッドに単独で位置する。周囲の住居跡の分布は散漫で、同時期の住居跡に限ると非常に孤立した位置に所在する。

平面形は東西2m73cm・南北2m55cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-97°-Eを示す。壁高は26cmを



測る。床面は、竈前を中心に貼床を施す。掘り方には、若干の凹凸が認められる程度で、明瞭な掘り込みは認められなかった。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

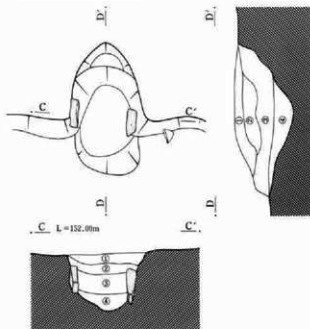
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅54cm・奥行54cm・深さ45cmを測る。燃焼部に掘り込みがあり、煙道部との間に明瞭な段を造る。両袖石基部を残すが、残存状況は不良である。

遺物は種類も少なく、個体の残存率も低い。坏類がやや多く認められるが、僅かに残る煮沸具の破片はコ字状口縁土師器壺のみで羽釜は全く含まないようである。(中沢)

0 2m

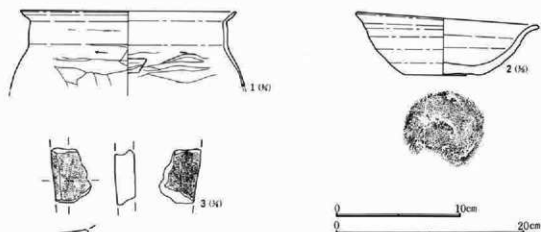
(624号住居跡)

- ①黒褐色土 黒褐色土を主体とし、ローム粒を少量含む。
- ②褐色土 ローム粒を主体とした層。黒褐色土を少量含む。
- ③褐色土 ②層に類し、締まりに欠ける。
- 竈
- ①黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
- ②褐色土 ロームを主体とした層。
- ③赤褐色土 ローム粒と多量の焼土粒・焼土ブロックの混入層。
- ④暗褐色土 ③層に類し、ローム粒・焼土ブロックの混入層。



第154図 624号住居跡実測図

0 1m



第155図 624号住居跡出土遺物実測図

第66表 624号住居跡出土遺物観察表

押戻番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
155-1	土器 壺	床面-2 破片	口(22.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化剤、やや硬質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面横方向篋削り。内面直撫で。	
155-2 53	須恵器 埴	床面-4 片残存	口 14.2 底 6.9 高 4.5	①粗、褐色胎物粒 ②還元剤、やや軟質 ③黄灰色	左回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	
155-3	平瓦 小破片	覆土 破片	長 — 幅 — 厚 2.0	①粗、白色胎物粒 ②酸化剤、やや軟質 ③鈍い褐色、断面褐色	一枚造りか。	

646号住居跡 (第156・157図、第67表、図版27・28・53・54)

本住居跡は、第8次調査区北端近くの平坦面にあり、80-39グリッドに位置する。648号住居跡(古墳)の東半部から地山にかけて掘り込み、遺物・土層等から殆ど時期差のない647号住居跡(平安)の覆土を切って構築されている。恐らく646号住居跡が構築された段階では、647号住居跡が未だ完全には埋没しきっておらず、意図的に掘削量の少なくて済む様みを利用する為、そういう占地になった可能性がある。

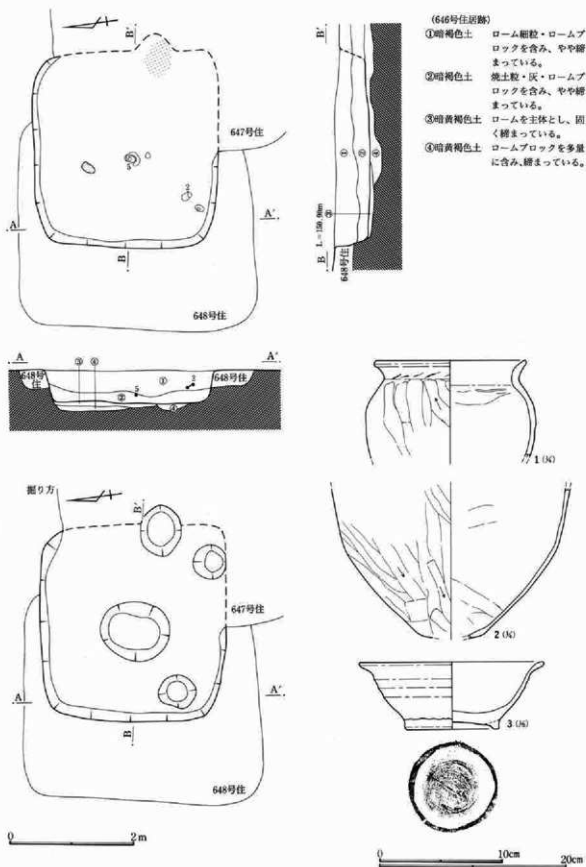
覆土を切って構築されているため不確定な要素が伴うが、平面形は東西3m10cm・南北2m97cmを測る正方形を呈すると思われる。主軸方向については不詳である。壁高は最大で31cmを測る。床面は、後出の647号住居跡の床面とほぼ同じレベルで構築されている。掘り方調査によって、電前のピットの他、二基のピットが検出されたが、電右脇のピットが貯蔵穴と思われる。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。

電は焼土の分布等から、東壁中央やや南寄りであったと思われるが、残存状況は極めて不良であった。掘り込みは長径78cm・短径63cm・深さ6cmを測る。

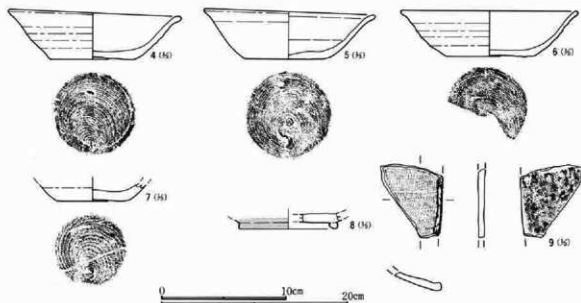
貯蔵穴は、径49cm・深さ15cmを測る円形を呈するが、本来の規模は明らかではない。

遺物は床面上に薄く分布するが、種類に乏しく残存率もやや低い。環頸がやや多く認められるが、僅かに残る煮沸具の破片はいずれもコ字状口縁土師器甕で、羽釜は全く含まないようである。(関口功)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第156図 646号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)



第157図 646号住居跡出土遺物実測図(2)

第67表 646号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器類別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
156-1 53	土 甕 甕	覆土 破片	口(16.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い赤褐色	輪横成形後、口辺無磨で。体部外面縦方向磨削り。内面置削で。	磨耗が著しい
156-2 53	土 甕 甕	床面+22 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③外面黄灰色、断面鈍い褐色	輪横成形後、体部外面縦方向磨削り。内面置削で。	
156-3 53	須恵器 高台付埴	覆土 片残存	口(14.5) 底(7.2) 高 5.3	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
157-4 53	須恵器 埴	覆土 片残存	口 13.6 底 6.5 高 3.7	①粗、石英細粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
157-5 54	須恵器 埴	床面+10 片残存	口(13.5) 底 6.3 高 3.7	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
157-6 54	須恵器 埴	覆土 片残存	口(13.8) 底(6.8) 高 3.6	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
157-7 54	須恵器 埴	覆土 破片	口 — 底(5.6) 高 —	①粗、黒色鉱物細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
157-8 54	灰輪陶器 埴	覆土 小破片	口 — 底(7.6) 高 —	①粗、胎ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
157-9	平 瓦	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 0.6	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	一枚造りか。	

647号住居跡 (第158～163図、第68表、図版27・28・54・63・68・70・71)

本住居跡は、第8次調査区北端近くの平坦面にあり、80-40グリッドに位置する。周辺には北側を中心に住居跡が比較的重複・密集しているが、同時期の住居跡に限れば概して散在的である。648号住居跡(古墳)の東壁と649号住居跡(奈良)の北西隅を切って構築され、前出の646号住居跡(平安)に北西隅を破壊されている。結果として地山を掘り込んでいるのは、南西隅のみである。

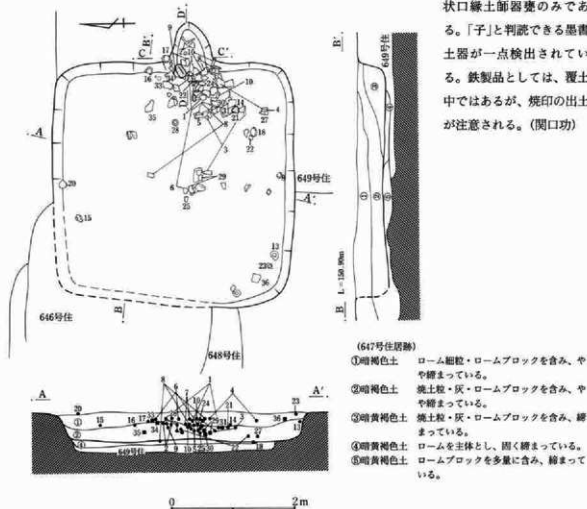
北西隅が破壊されている為、不確定な要素を伴うが、平面形は東西3m84cm・南北3m90cmを測る正方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、竈付近の東壁で最大33cmを測る。床面は、竈前を中心として全面に厚く貼床を施していたと思われる。掘り方では、ビット一基と不整形な掘り込みが検出されている。不整形な掘り込みに関しては、本来時期差のある二基のビットである可能性が高い。柱穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は東壁中央やや南寄りであり、幅69cm・奥行57cm・深さ27cmを測る。構造材に用いたと思われる粘土が崩落した状態で検出された。

貯蔵穴は、649号住居跡の覆土中のため確認できなかった。

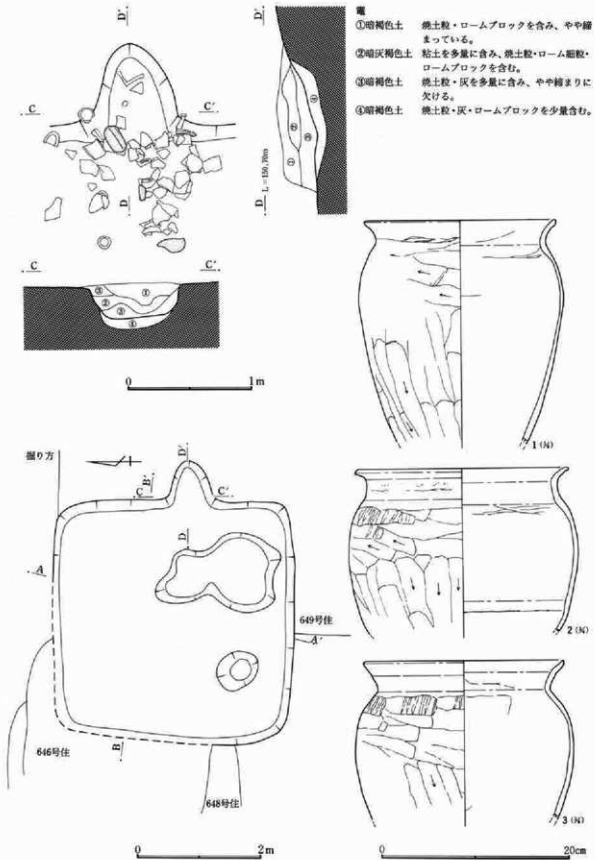
遺物は、竈を中心に浮いた状態で多量に検出されているが、個体の残存率は低く、種類に乏しい。特に土師器の要類の多さが目立つ。瓦については竈の補強材の可能性もある。羽釜は全く含まれず、煮沸具はコ字

状口縁土師器壺のみである。「子」と判読できる黒書土器が一点検出されている。鉄製品としては、覆土中ではあるが、焼印の出土が注意される。(関口功)



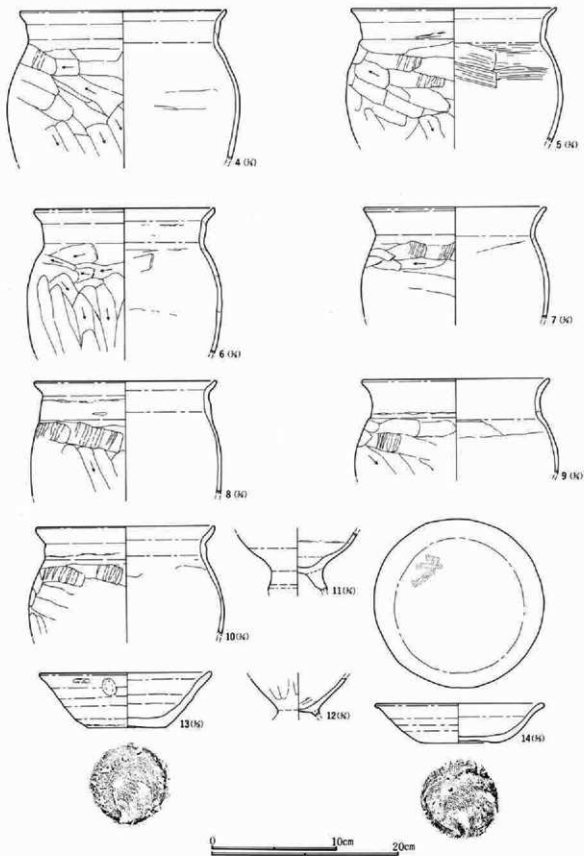
第158図 647号住居跡実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

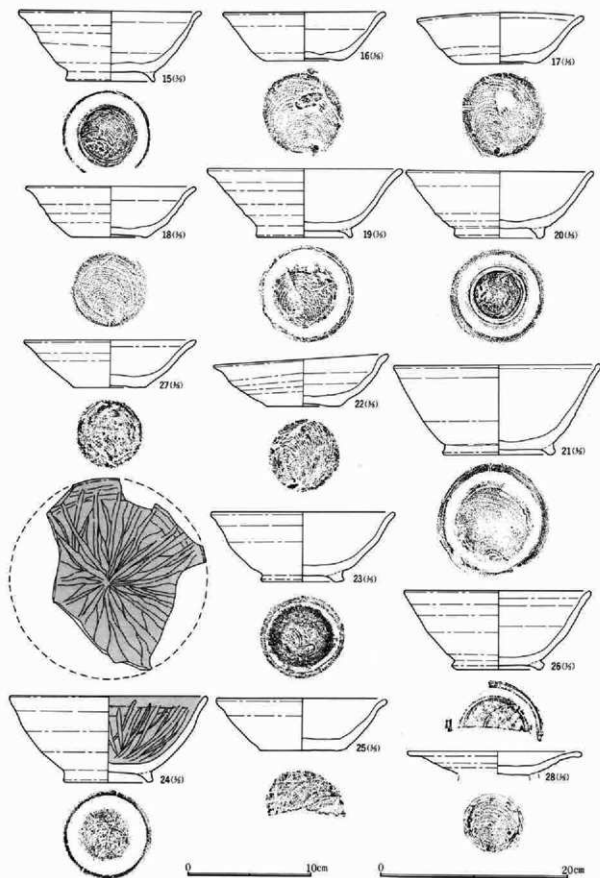


第159図 647号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物

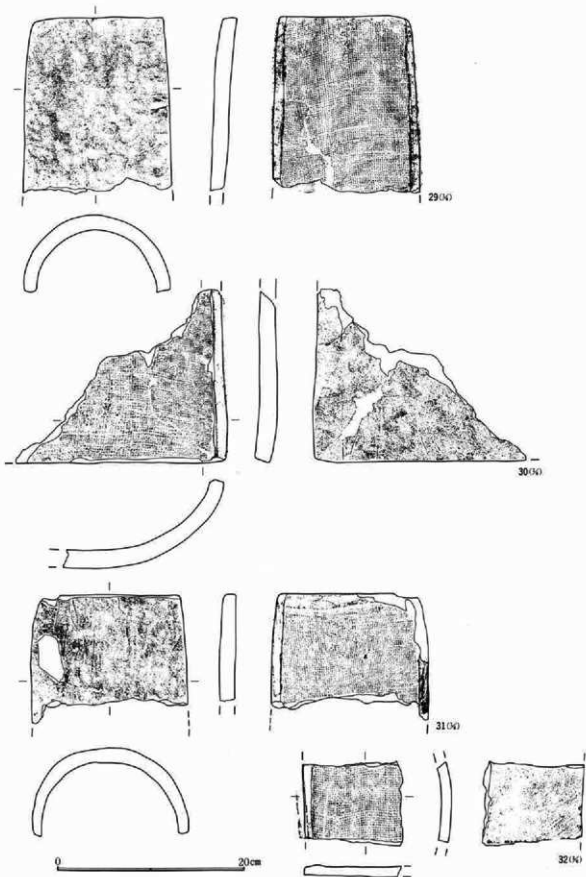


第160図 647号住居跡出土遺物実測図(2)

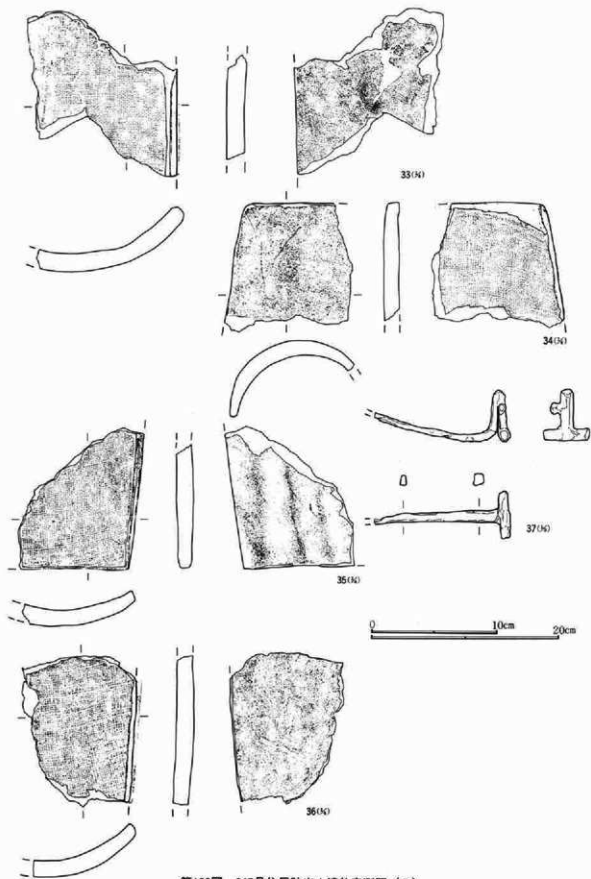


第161図 647号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第162図 647号住居跡出土遺物実測図(4)



第163図 647号住居跡出土遺物実測図(5)

第3章 平安時代の遺構と遺物

第68表 647号住居跡出土土物観察表

検出番号 図版番号	土器器種 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①土色 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
159-1 54	土師器 壺	床面+8 瓦残存	口(22.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面上位置撫で。	器底が著しい
159-2 54	土師器 壺	床面+22 破片	口22.2 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面上位置撫で。	
159-3	土師器 壺	床面+12 瓦残存	口20.8 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面上位置撫で。	
160-4	土師器 壺	床面+30 破片	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③明赤褐色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面置撫で。	
160-5 54	土師器 壺	床面+12 破片	口21.8 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面上位置撫で。	
160-6	土師器 壺	床面+11 瓦残存	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面上位置撫で。	
160-7 54	土師器 壺	床面+21 瓦残存	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面横方向削り。	
160-8	土師器 壺	床面直上 破片	口(19.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。	
160-9	土師器 壺	床面+18 瓦残存	口(19.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位斜方向削り。内面下位置撫で。	
160-10	土師器 壺	床面+17 破片	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	輪攪成形後、口辺横撫で。体部外面横方向削り。	
160-11 54	土師器 台付壺	覆土 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪攪成形後、外面横撫で。内面撫で。	
160-12 54	土師器 台付壺	覆土 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪攪成形後、外面横撫で。内面撫で。	
160-13 54	須恵器 坏	床面+25 ほぼ完形	口(13.6) 底6.3 高4.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
160-14 54・70	須恵器 坏	床面+24 完形	口13.2 底5.8 高3.1	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	黒書土器
161-15	須恵器 高台付埴	床面+14 ほぼ完形	口14.3 底7.0 高5.5	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰色	左回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
161-16 54	須恵器 坏	床面+13 ほぼ完形	口12.6 底5.2 高3.8	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	粘土が付着
161-17	須恵器 坏	床面+26 ほぼ完形	口13.0 底6.0 高4.0	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
161-18 54	須恵器 坏	床面直上 ほぼ完形	口13.4 底5.0 高4.0	①粗、石英粒多 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
161-19 54	須恵器 高台付埴	覆土 瓦残存	口15.3 底7.3 高5.4	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
161-20 54	須恵器 高台付埴	床面+40 瓦残存	口(14.7) 底5.7 高5.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	

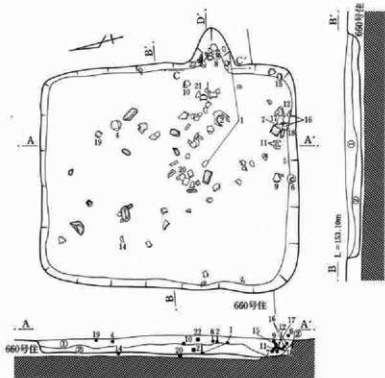
第2節 竪穴住居跡と出土遺物

発掘番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (E)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
161-21 54	須恵器 高台付埴 瓦	床面+20 完形	口 16.2 底 8.6 高 7.0	①青、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部未切り。高台貼付。	内面に保付着
161-22	須恵器 坏	床面+6 片残存	口(13.8) 底(5.8) 高 3.7	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転クロコ成形後、底部未切り。未調整。	
161-23 63	須恵器 高台付埴 瓦	床面+35 片残存	口 14.6 底 6.4 高 5.5	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	クロコ成形後、底部未切り。高台貼付。	
161-24	須恵器 高台付埴 瓦	床面+28 片残存	口(15.4) 底 6.6 高 6.8	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	クロコ成形後、底部未切り。高台貼付。	内面黒色処理
161-25	須恵器 坏	床面+8 片残存	口(13.6) 底(6.4) 高 4.1	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	クロコ成形後、底部未切り。未調整。	
161-26	須恵器 高台付埴 瓦	覆土 片残存	口(14.6) 底(6.6) 高 6.2	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部未切り。高台貼付。	
161-27	須恵器 坏	床面+5 片残存	口(13.4) 底 5.6 高 3.7	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転クロコ成形後、底部未切り。未調整。	
161-28 54	須恵器 高台付埴 瓦	床面+30 ほぼ完形	口 13.6 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台剝離
162-29 63	丸 瓦	床面+6 破片	長 — 幅 — 厚 1.6	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	一枚造り。	
162-30 63	平 瓦	床面+6 破片	長 — 幅 — 厚 1.9	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	一枚造り。側端の面取り2。	
162-31 63	丸 瓦	床面+16 破片	長 — 幅 — 厚 1.5	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い褐色、断面褐色	一枚造り。	
162-32 63	平 瓦 小破片	覆土 小破片	長 — 幅 — 厚 1.0	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③褐色	一枚造りか。	
163-33 63	平 瓦	床面+28 破片	長 — 幅 — 厚 1.9	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い褐色、断面褐色	一枚造り。側端の面取り3。	
163-34 63	丸 瓦 小破片	床面+25 小破片	長 — 幅 — 厚 1.5	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	
163-35 63	平 瓦 小破片	床面+12 小破片	長 — 幅 — 厚 1.8	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、凹面赤化	一枚造りか。	
163-36 63	平 瓦 小破片	床面+30 小破片	長 — 幅 — 厚 1.7	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。側端の面取り2。	
163-37 68・71	鉄製品 美 印	覆土	残存長(10.8) 印面 縦3.9 横3.7 重 43.2			印面「上」

651号住居跡 (第164～167図、第69表、図版28・55・63)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、59-33グリッドに位置する。10軒の重複する竪穴住居跡中に所在し、660号住居跡(古墳)の南壁の一部を切って構築される。

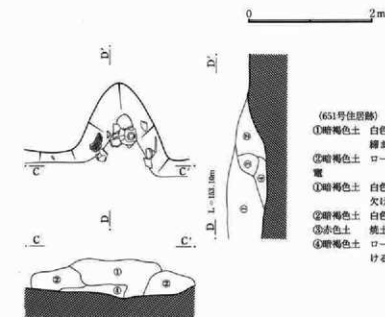
平面形は東西3m60cm・南北4m11cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-102°-Eを示す。壁高は最大で26cmを測る。大部分が660号住居跡の覆土中に構築されている為、あまり明瞭ではないが、竈前を中心に貼床



を施していたと思われる。掘り方は、660号住居跡の床面に及んでいないことは確実であるが、詳細は判然としない。貯蔵穴・柱穴・壁溝等については、検出されていない。

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅66cm・奥行51cm・深さ15cmを測るが、残存状況は不良である。

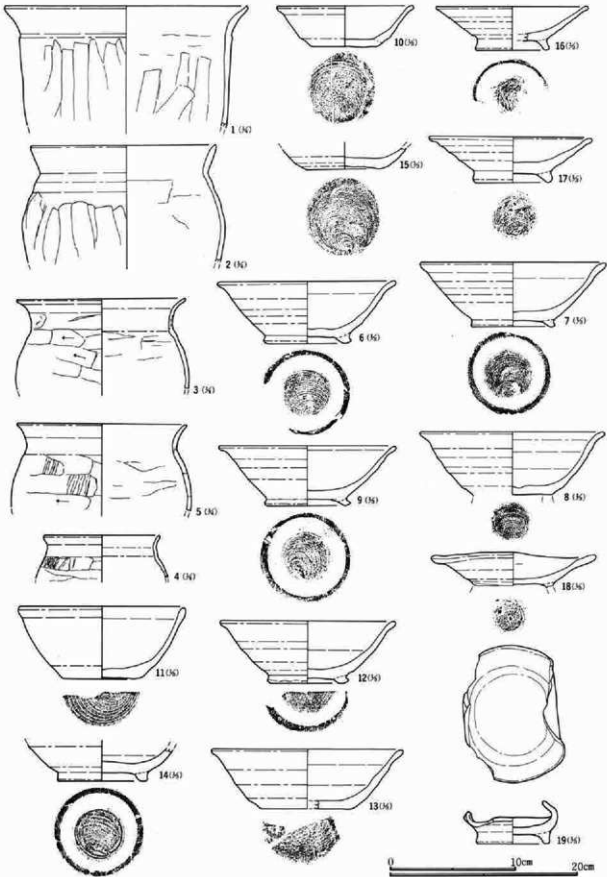
遺物はやや多く、一部時期の異なる物も含まれるが、先行する住居跡からの混入品であろう。種別では、特に坏類の多さが目立つ。中形と小形に大別できると思うが、大形になる物は認められず、蓋等の種類も見ることができない。煮沸具には羽釜を含まないようである。(富田)



(651号住居跡)

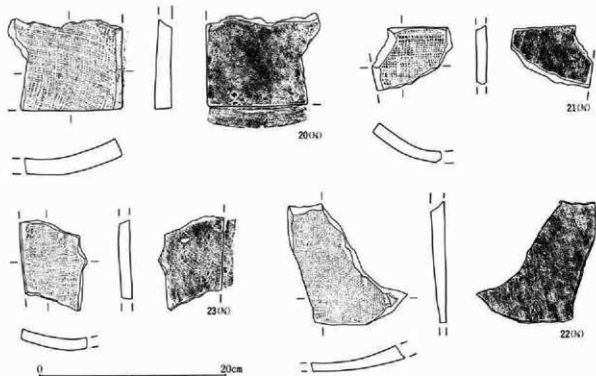
- ①暗褐色土 白色軽石(～3m)・ローム粒(～3m)を少量含み、締まりに欠ける。
- ②暗褐色土 ロームをやや多く、焼土粒を少量含む。
- 竈
- ①暗褐色土 白色軽石・ローム粒・焼土粒を少量含み、締まりに欠ける。
- ②暗褐色土 白色軽石・ローム粒を少量含み、締まりに欠ける。
- ③赤色土 焼土を主体とした層。
- ④暗褐色土 ローム粒を多量に、焼土粒を少量含み、締まりに欠ける。

第164図 651号住居跡実測図



第165図 651号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第166図 651号住居跡出土遺物実測図(2)

第69表 651号住居跡出土遺物観察表

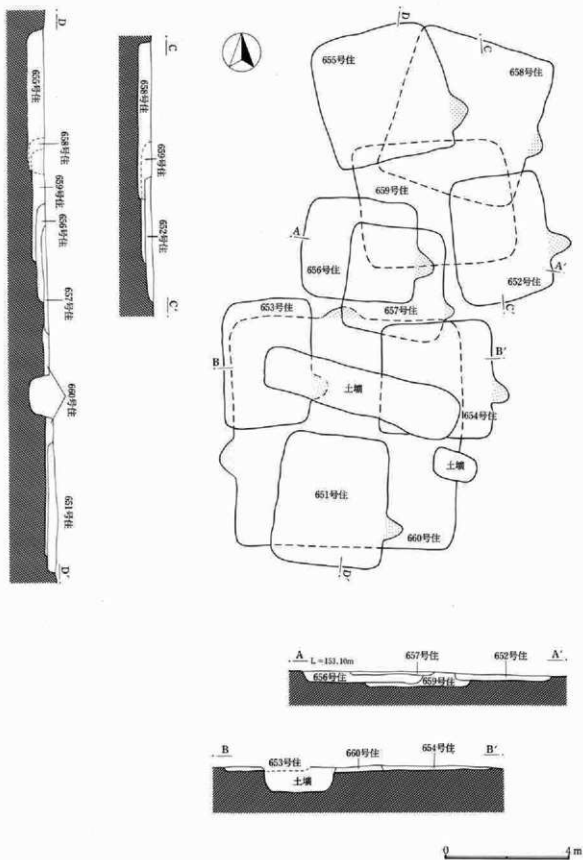
押附番号 図版番号	土器種別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
165-1 55	土器 壺	床面直上 破片	口(15.8) 底— 高—	①菅、石英粒多・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③外面鈍い褐色、内面褐色	口辺横撫で。体部外面縦方向彫削り。内面磨撫で。	古墳後期か
165-2 55	土器 壺	床面+16 破片	口(19.5) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面縦方向彫削り。内面磨撫で。	奈良末～平安初
165-3	土器 壺	覆土 破片	口(18.0) 底— 高—	①菅、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面彫削り。内面磨撫で。	
165-4 55	土器 小型壺	床面+16 片残存	口12.4 底— 高—	①菅、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面彫削り。内面磨撫で。	
165-5	土器 壺	覆土 破片	口(18.0) 底— 高—	①菅、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面彫削り。内面磨撫で。	
165-6 55	須恵器 高台付埴	床面+28 片残存	口(14.0) 底(6.2) 高4.9	①菅、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-7 55	須恵器 高台付埴	床面+5 片残存	口(14.5) 底6.4 高5.1	①菅、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-8 55	須恵器 高台付埴	壺内+18 片残存	口(14.6) 底6.4 高—	①細、石英・細砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台割離
165-9	須恵器 高台付埴	床面+20 片残存	口(14.0) 底6.2 高4.7	①細、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-10	須恵器 坏	床面+14 片残存	口(11.0) 底5.2 高3.2	①粗、石英細・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

検出番号 図版番号	土器類別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
165-11	須恵器 埴	床面+5 瓦残存	口(13.0) 底(6.0) 高(5.7)	①青、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
165-12	須恵器 高台付埴	床面+9 瓦残存	口(13.6) 底(6.0) 高 4.9	①青、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色、断面灰色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-13	須恵器 埴	覆土 小破片	口(16.0) 底(7.0) 高(4.9)	①青、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形。	
165-14	須恵器 高台付埴	床面-1 瓦残存	口 - 底 6.8 高 -	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-15	須恵器 埴	床面+16 破片	口 - 底 6.0 高 -	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
165-16 55	須恵器 高台付皿	床面+10 瓦残存	口(11.9) 底(5.6) 高(3.4)	①青、雲母・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-17 55	須恵器 高台付皿	床面+10 瓦残存	口(13.4) 底(6.0) 高 3.1	①青、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	左回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-18 55	須恵器 高台付皿	床面+6 瓦残存	口 13.2 底 - 高 -	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
165-19 55	須恵器 高台付 耳 皿	床面+19 瓦残存	口(10.7) 底 5.8 高 3.3	①粗、石英粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
166-20 63	平 瓦	床面-2 小破片	長 - 幅 - 厚 1.7	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い褐色	一枚造りか。	
166-21	平 瓦	床面+2 破片	長 - 幅 - 厚 1.2	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い褐色	一枚造りか。	
166-22 63	平 瓦	竈内+20 小破片	長 - 幅 - 厚 1.4	①粗、石英・白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	
166-23	平 瓦	覆土 小破片	長 - 幅 - 厚 1.2	①粗、石英・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	

参考までに、各住居跡の所属年代を整理すれば次のようになる。(第167図参照)

- ◎古墳時代……658・659・660 (次回以降報告)
- ◎奈良時代……655 (次回以降報告)
- ◎平安時代……651・652・653・654・656・657 (今回報告)

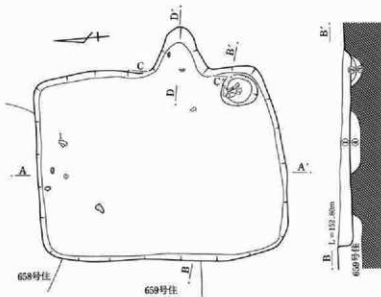


第167図 651号住居跡周辺遺構重複関係図

652号住居跡 (第168・169図、第70表、図版28・55)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、60・61-34グリッドに位置する。658号住居跡(古墳)と659号住居跡(古墳)の北東隅を切つて構築される。

平面形は東西3m03cm・南北3m96cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-93°-Eを示す。壁高は最大で

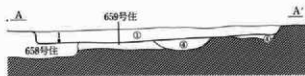


21cmを測る。床面は、竈前を中心に貼床が施され、床下には竈前のピットが一基検出されたが、掘り方は概して平坦である。柱穴・壁溝については、検出されていない。

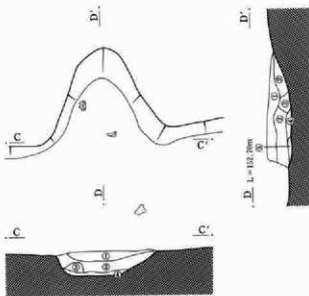
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅87cm・奥行66cm・深さ21cmを測る。残存状況が不良で本来の構造は明らかではない。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径57cm・深さ30cmを測る円形を呈する。

遺物は、貯蔵穴を中心に分布するが、量的に少なく、個体の残存率も低い。僅かに残る煮沸具の破片はいずれもコ字状口縁土師器で、羽釜は全く含まないようである。(富田)



0 2m



(652号住居跡)

①暗褐色土 白色軽石(〜3mm)・ローム粒(〜3mm)を少量含み、締まりに欠ける。

②暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。

③灰白色土 灰白色粘土を主体とした層。

④暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。

竈

①暗褐色土 白色軽石(〜3mm)・ローム粒(〜3mm)を少量含み、締まりに欠ける。

②暗褐色土 焼土粒を多量に含む。

③暗黄褐色土 ロームを主体とした層。

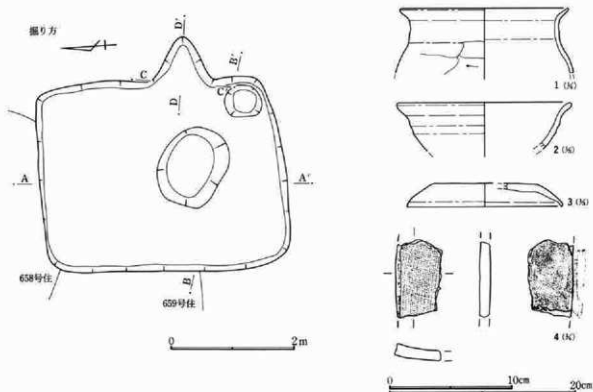
④暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。

⑤褐色土 ローム粒・焼土粒・灰を含む。

0 1m

第168図 652号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第169図 652号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第70表 652号住居跡出土遺物観察表

探跡番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
169-1 55	土 甕 甕	床面+4 破片	口(18.0) 底— 高—	①青、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪轆成形後、口辺撻撫で、外面瓦雨り。	
169-2	須恵器 坏	覆土 小破片	口(13.4) 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	ロクロ成形。	
169-3 55	須恵器 蓋	覆土 破片	胴— 口(12.4) 高—	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	ロクロ成形。	
169-4	平 瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.1	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	

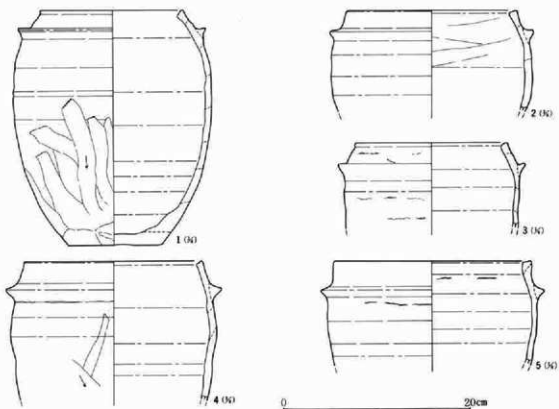
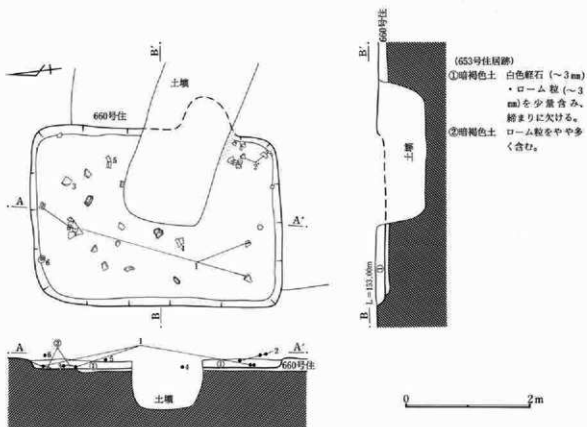
653号住居跡 (第170・171図、第71表、図版29・55)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、60-33グリッドに位置する。660号住居跡(古墳)の北西隅を切って構築され、現代のものと思われる土壌によって、竈を中心に破壊される。

平面形は東西2m85cm・南北3m99cmを測る比較的整った長方形を呈するが、主軸方向は不詳である。壁高は最大で16cmを測る。貼床はあったと思われるが、明確な硬化面としては確認されていない。掘り方についても、660号住居跡の覆土中の為、あまり明瞭ではない。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。竈は東壁にあったと思われるが、詳細は不明である。

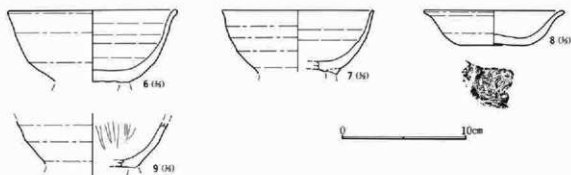
遺物は床面上に散漫に分布するが、種類に乏しく、接合しない羽釜破片が目立つ程度である。(富田)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第170図 653号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第171図 653号住居跡出土遺物実測図(2)

第71表 653号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
170-1 55	須恵器 羽蓋	床面直上 瓦残存	口(15.0) 底(10.0) 高 24.6	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色、内面灰黄色	輪積成形でロクロ使用。体部外面下半縦方向 筋削り。	
170-2 55	須恵器 羽蓋	床面+9 破片	口(18.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪積成形でロクロ使用。	
170-3	須恵器 羽蓋	床面+2 破片	口(16.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	輪積成形でロクロ使用。	
170-4 55	須恵器 羽蓋	床面直上 破片	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	輪積成形でロクロ使用。	
170-5	須恵器 羽蓋	床面+14 破片	口(20.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	輪積成形でロクロ使用。	
171-6 55	須恵器 高台付塊	床面+19 ほぼ完形	口 13.3 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台制御
171-7	須恵器 高台付塊	覆土 瓦残存	口(12.0) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙色	ロクロ成形。高台貼付。	
171-8	須恵器 環	覆土 瓦残存	口(11.0) 底(6.8) 高 2.7	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
171-9	須恵器 高台付塊	覆土 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	ロクロ成形。	内面黒色処理 高台制御

654号住居跡 (第172・173図、第72表、図版29・55・63)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、59・60-34グリッドに位置する。660号住居跡(古墳)と657号住居跡(平安)を切って構築され、土壌によって住居跡の一部を破壊される。結果としてローム(地山)を掘り込んでいるのは、竈を含む東壁周辺のみである。

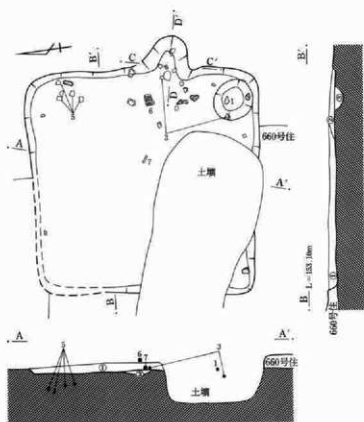
平面形は遺物分布の状況や切り合い関係等を考慮すれば、やや不確かな要素があるとせざるを得ないが、東西3m57cm・南北3m69cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-103°-Eを示すものと思われる。壁高は最大で9cmを測る程度で、残存状況は不良である。床面には、竈前を中心に貼床を施していたと思われるが、明瞭には検出されなかった。掘り方には、竈の掘り込みと、明瞭でないものも含めて三基のピットが検出されている。柱穴・壁溝については、検出されていない。

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

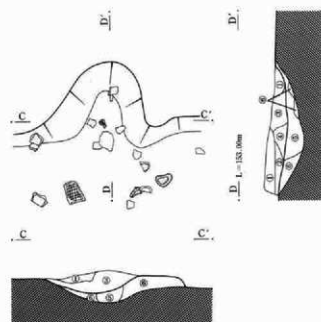
竪穴は東壁中央やや南寄りにあり、幅48cm・奥行63cm・深さ09cmを測るが、掘り方に近い状態で確認された。

貯蔵穴は竪穴右側にあり、径63cm・深さ17cmを測る円形を呈する。

遺物は、竪穴周辺を中心に分布するが、量的に少なく、流れ込みと考えられる物もある。瓦については、補強材の可能性がある。煮沸具はコ字状口縁土師器甕であると思われる。他に灰胎陶器境の出土が注意される。(富田)



0 2m



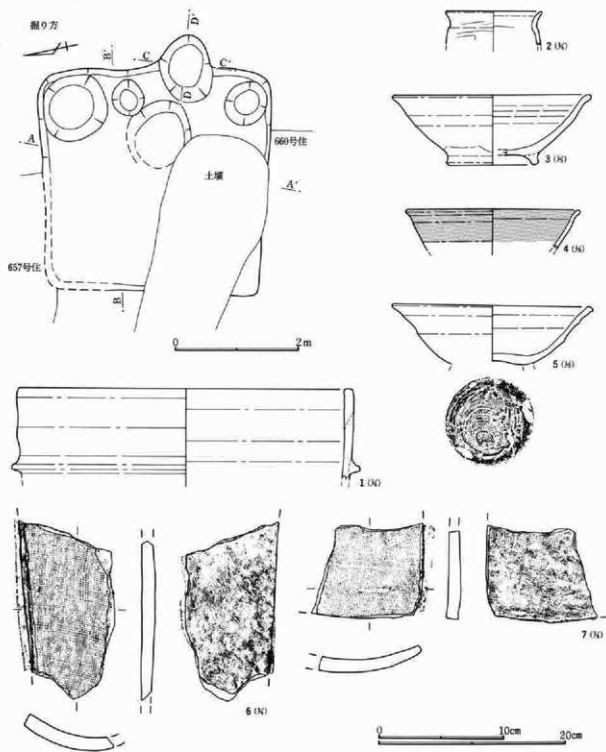
0 1m

(654号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石(〜3mm)・ローム粒(〜3mm)を少量含み、締まりに欠ける。
- ②暗褐色土 ①層に比し、ローム粒を多量に含む。
- ③暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
- 竪穴
- ①暗褐色土 白色軽石・ローム粒・焼土粒を少量含む。
- ②暗褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物(〜10mm)を少量含む。
- ③暗赤褐色土 ローム粒・焼土粒をやや多く含む。非常にろい。
- ④褐色土 ローム粒・ロームブロックをやや多く含み、締まりに欠ける。
- ⑤暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
- ⑥暗褐色土 焼土粒を稀に含む。

第172図 654号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第173図 654号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第72表 654号住居跡出土遺物観察表

詳細番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
173-1	銅 裏面 瓶	床面直上 小破片	□(35.4) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	口クロ成形。	

押印番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (g)	①胎土 ②酸化 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
173-2 55	土師器 小型甕	覆土 破片	口(10.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い棕色	輪轆成形後、口辺横溝で。体部外面磨削り。	
173-3	須恵器 高台付埴	床面-8 破片	口(16.0) 底(6.8) 高(5.5)	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
173-4	灰釉陶器 埴	覆土 小破片	口(13.6) 底— 高—	①滑、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
173-5 55	須恵器 高台付埴	床面-26 6残存	口 15.5 底— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	高台刺摩
173-6 63	平瓦	床面+14 破片	長— 幅— 厚 1.4	①粗、石英粒 ②酸化焰、硬質 ③棕色	一枚造り。	
173-7 63	平瓦	床面直上 小破片	長— 幅— 厚 1.4	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	

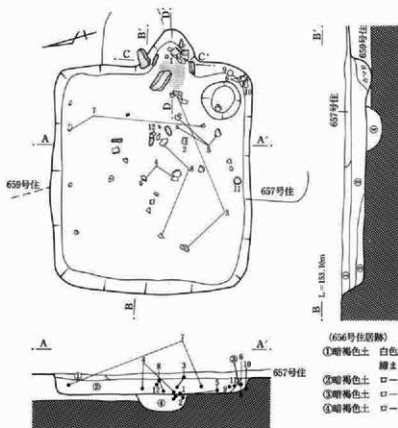
656号住居跡 (第174~176図、第73表、図版29・30・55・56・65・67)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、60・61-33グリッドに位置する。659号住居跡(古墳)の南西隅を切って構築され、657号住居跡(平安)に東壁と南壁の一部を破壊される。

平面形は東西3m66cm・南北3m21cmを測る比較的整った長方形を呈し、主軸方向はN-105°Eを示す。

壁高は最大で33cmを測る。床面は、竪前を中心に貼土を施す。掘り方には、時期差のある竪前のピット二基と、袖石の掘り込みが確認された。西壁を中心に窪みが検出されたが、壁溝ではないだろう。柱穴についても、検出されていない。

竪は東壁中央やや南寄りにあり、幅60cm・奥行54cm・深さ33cmを測る。657号住居跡の構築の際に、破壊を受けているわりには比較的残存状況は



第174図 656号住居跡実測図(1)

(656号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石(〜3m)・ローム粒(〜3m)を少量含み、締まりに欠ける。
- ②暗褐色土 ローム粒を少量、白色軽石を稀に含む。
- ③暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。
- ④暗褐色土 ローム粒・焼土粒をやや多く含む。

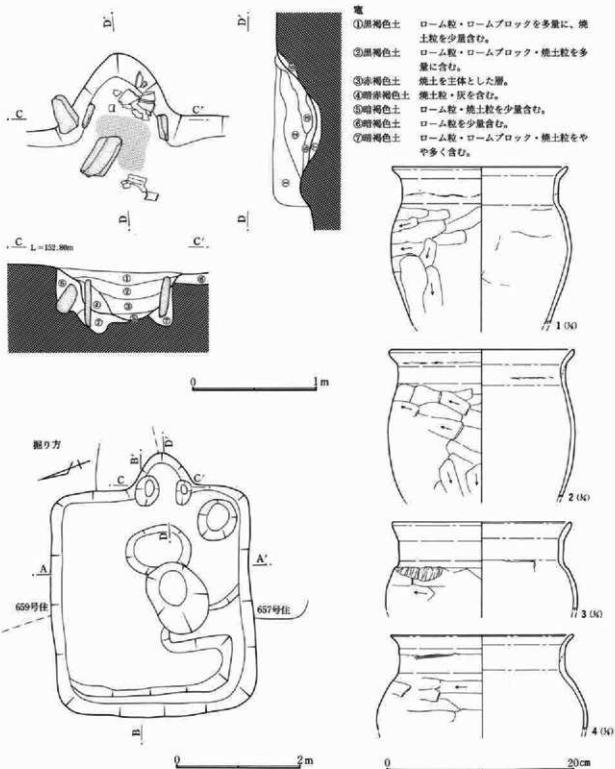
0 1m

第3章 平安時代の遺構と遺物

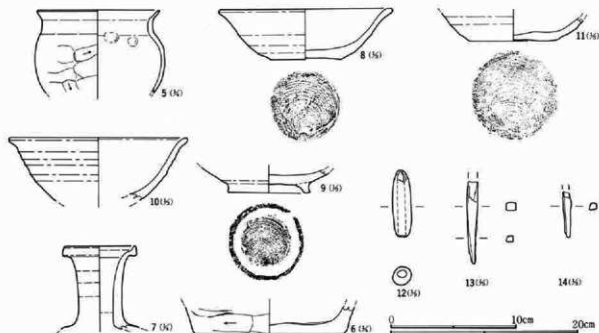
良好である。両袖石が残り、石組の構造を想定させる。

貯蔵穴は竈右脇にあり、径66cm・深さ24cmを測る円形を呈する。

遺物は、竈内部とその付近から出土している。量的には並であるが、種類には乏しい。坏類は破片も少なく、大小数種あってやや種類の多い煮沸具には、羽釜を含まないようである。(富田)



第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第176図 656号住居跡出土遺物実測図(2)

第73表 656号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	流量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
175-1 56	土器 甕	甕内床面 互残存	口(18.8) 底— 高—	①青、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面撫で。	
175-2	土器 甕	床面-6 互残存	口(19.4) 底— 高—	①青、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。	
175-3 56	土器 甕	床面+8 破片	口(19.0) 底— 高—	①青、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面削り。内面撫で。	
175-4	土器 甕	床面+2 破片	口(19.4) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面削り。	
176-5 56	土器 小型甕	床面-6 互残存	口(12.8) 底— 高—	①青、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③暗褐色	輪模成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位縦方向削り。内面撫で。内面指頭圧痕。	
176-6 56	須恵器 甕	床面-5 破片	口— 底(16.0) 高—	①青、石英大・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗黄灰色。断面灰白色	輪模成形後、外面下半横方向削り。	
176-7 56	須恵器 長頸壺	床面+6 破片	口(7.5) 底— 高—	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや軟質 ③暗緑灰色	ロクロ成形。	
176-8 56	須恵器 壺	床面+2 互残存	口(13.5) 底 5.6 高 4.0	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③暗灰色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
176-9	須恵器 高台付壺	床面+5 破片	口— 底 6.5 高—	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い浅黄色	ロクロ成形後、高台黏付。	
176-10	須恵器 高台付壺	床面+4 破片	口(14.0) 底— 高—	①粗、石英粒多 ②還元焰、軟質 ③暗灰色	ロクロ成形。	
176-11	須恵器 坏	床面+6 破片	口— 底 7.0 高—	①青、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形。底部未切り。未調整。	内外面に腐付層

第3章 平安時代の遺構と遺物

標記番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
176-12 65	土 鉢	床面+12 完形	長 5.1 径 1.5/0.8 孔径0.5 重 9.7	①細、細砂粒 ②酸化焙、やや硬質 ③浅黄色	棒状工具巻き付け。	
176-13 67	鉄製品 釘?	覆土	長 6.5 厚 0.6 幅 0.8 重 9.9			
176-14 67	鉄製品 釘?	覆土	長 3.6 厚 0.6 幅 0.5 重 1.9			

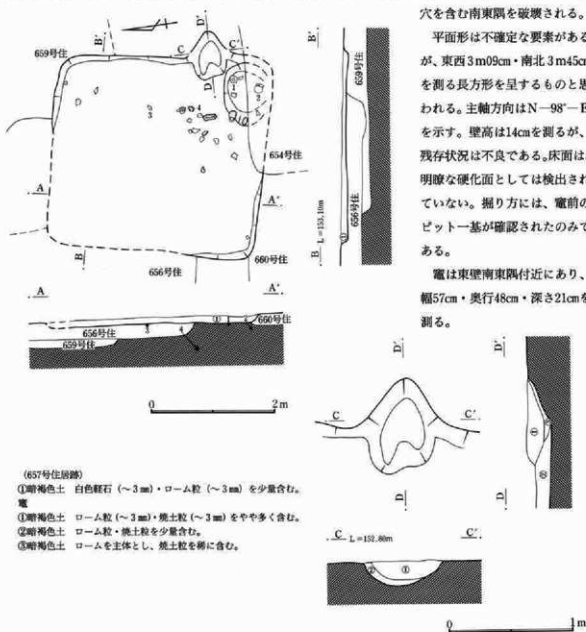
657号住居跡 (第177・178図、第74表、図版30・56)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、60-33グリッドに位置する。一連の重複住居跡群の中にあり、656号(平安)・659号(古墳)・660号(古墳)住居跡を切って構築され、654号住居跡(平安)に貯蔵

穴を含む南東隅を破壊される。

平面形は不確定な要素があるが、東西3m09cm・南北3m45cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-98°-Eを示す。壁高は14cmを測るが、残存状況は不良である。床面は、明瞭な硬化面としては検出されていない。掘り方には、電前のビット一基が確認されたのみである。

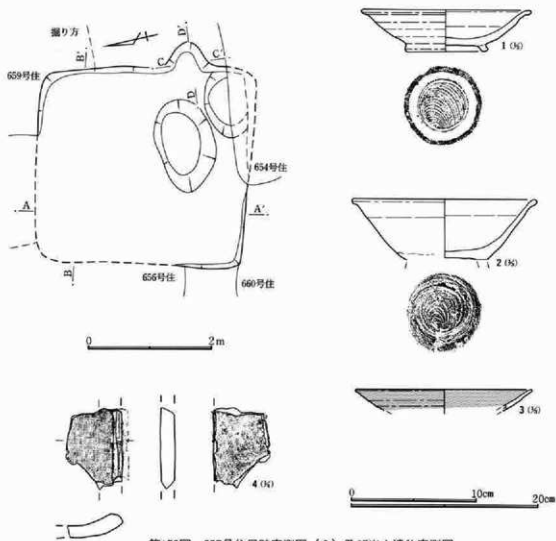
竈は東壁南東隅付近にあり、幅57cm・奥行48cm・深さ21cmを測る。



第177図 657号住居跡実測図(1)

貯蔵穴は、半壊状態の為、本来の規模は明らかではないが、深さ24cmを測る。

遺物には、灰釉陶器皿が出土しているが、所属については不明である。(富田)



第178図 657号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

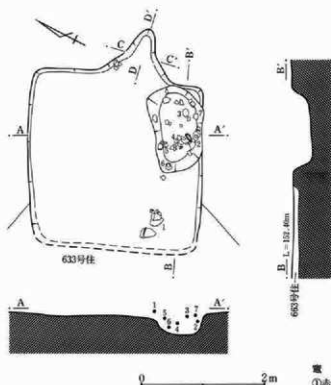
第74表 657号住居跡出土遺物観察表

探出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (重)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
178-1 56	須恵器 高台付皿	床面-1 片残存	口 13.2 底 6.2 高 3.3	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
178-2 56	須恵器 高台付埴	床面-5 片残存	口 14.3 底 — 高 —	①粗、石英粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台割離
178-3 56	灰釉陶器 皿	床面-1 小破片	口 13.9 底 — 高 —	①粗、珪と含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
178-4	平瓦	床面-40 小破片	長 — 幅 — 厚 1.5	①粗、石英・黒色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	一枚造りか。側面のみ取り。	

661号住居跡 (第179・180図、第75表、図版30・56)

本住居跡は、第8次調査区中央の平坦面にあり、64-33グリッドに位置する。南方方向には同時期の住居跡が比較的重複・密集しているが、他の三方向については、分布密度が極めて低く、かなり広い空地状態を呈していたと思われる。633号住居跡(古墳)の北東隅を切って構築されるが、覆土の流失が著しく、残存状況は不良である。

プラン確認にやや不安が残るが、平面形は東西2m85cm・南北2m82cmを測る正方形を呈するものと思われる。



主軸方向はN-75°-Eを示す。掘り方に近い状態で検出された為、床面に関する情報は得られていない。

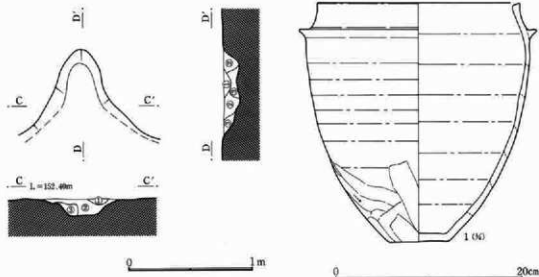
竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅42cm・奥行72cm・深さ12cmを測るが、住居の主軸方向より南へ10°程傾いている。

貯蔵穴は、長径138cm・短径78cm・深さ30cmを測る不整形な楕円形を呈する。

遺物は、貯蔵穴内を中心に分布するが、種類に乏しく残存率も低い。煮沸具には羽釜を含むようである。(中沢)

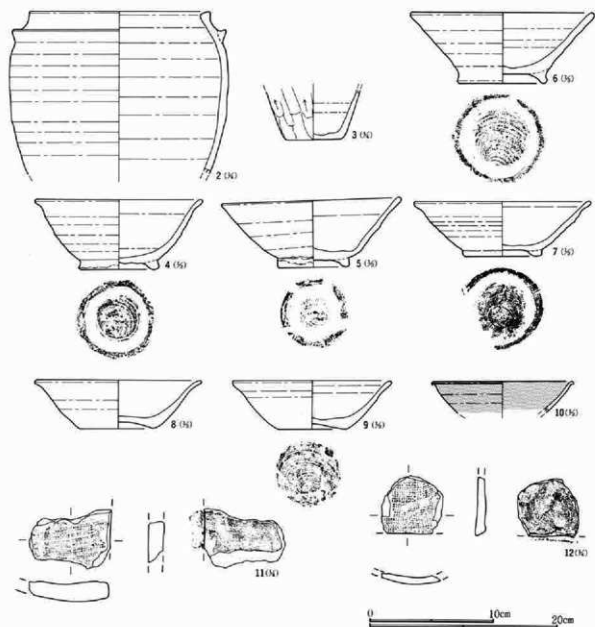
竈

- ①赤褐色土 焼土粒を主体とした層。
- ②黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- ③暗褐色土 ロームを主体とした層。



第179図 661号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第180図 661号住居跡出土遺物実測図(2)

第75表 661号住居跡出土遺物観察表

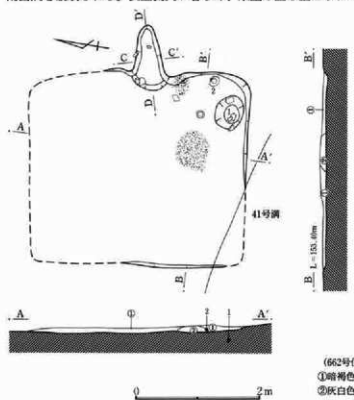
探検番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (8)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
179-1 56	須恵系 羽釜	床面+5 %残存	□(21.5) 底(6.4) 高25.2	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰褐色、断面橙色	輪積成形でロクロ使用。体部外面下半縦方向 磨削り。	
180-2 56	須恵系 羽釜	貯蔵穴内 +18 %残存	□19.0 底— 高—	①粗、砂粒黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い黄褐色	輪積成形でロクロ使用。	
180-3 56	土師系 釜	貯蔵穴内 +26 破片	□— 底5.8 高—	①粗、砂粒多 ②還元焰、硬質 ③黄褐色	輪積成形後、外面磨削り。	内外面に保付着
180-4 56	須恵系 高台付碗	貯蔵穴内 +14 %残存	□(13.3) 底5.8 高5.5	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	重ね焼きの痕跡 あり

第3章 平安時代の遺構と遺物

検出番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
180-5 56	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +18 残存	口 14.1 底 5.5 高 5.3	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部糸切り、高台貼付。	高台に刻みイケ 所あり
180-6 56	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +6 残存	口(14.3) 底 6.8 高 5.6	①粗、白色黏物粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部糸切り、高台貼付。	
180-7 56	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +28 残存	口(13.7) 底 (5.8) 高 4.3	①青、石英粒多 ②還元焰、やや硬質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部糸切り、高台貼付。	内外面に傷付着
180-8	須恵器 埴	覆土 残存	口(13.0) 底 6.0 高 3.8	①細、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	
180-9 56	須恵器 埴	覆土 残存	口(12.6) 底 5.6 高 3.8	①粗、黒色・白色黏物細粒 ②還元焰、やや硬質 ③浅黄色	右側転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
180-10	灰胎陶器 埴 小破片	覆土 小破片	口(11.0) 底 - 高 -	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形。	光ヶ丘?
180-11	平 瓦	覆土 小破片	長 - 幅 - 厚 1.6	①粗、白色黏物粒 ②還元焰、硬質 ③鈍い棕色	一枚造りか。	磨耗が著しい
180-12	平 瓦	覆土 小破片	長 - 幅 - 厚 0.8	①粗、石英粒多 ②還元焰、硬質 ③褐色	一枚造りか。	

662号住居跡 (第181・182図、第76表、図版31・56)

本住居跡は、第8次調査区南寄りの平坦面にあり、58-30・31グリッドに位置する。東西に走る41号溝に
南西隅を破壊される。表土流失が著しく、東壁の立ち上がりについては確認されていない。



第181図 662号住居跡実測図(1)

上記の理由により、南北方向は不明とせざるを得ないが、東西方向は3m12cmを測る。電から想定される主軸方向は、N-80°-Eを示す。壁高も貯蔵穴付近で6cmを測る程度である。基本的に貼床はなく、ローム(地山)を叩き締めて床面にしていただと思われる。

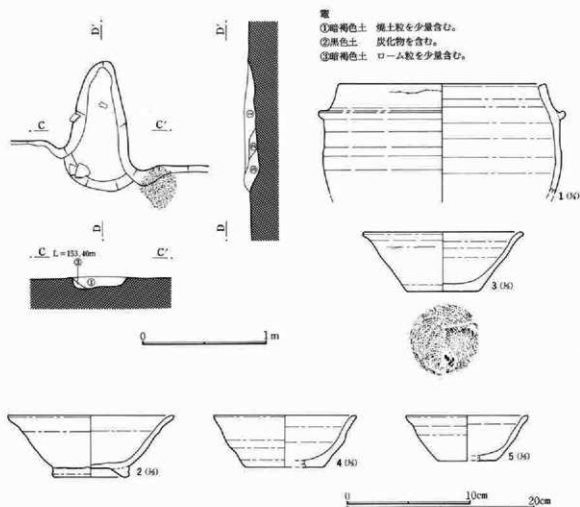
電は東壁中央やや南寄りにあり、幅42cm・奥行96cm・深さ09cmを測る。焼土化は充分ではなく痕跡に近い。

貯蔵穴は、径54cm・深さ33cmを測る円形を量するが、本来の規模は明らかではない。

(662号住居跡)

- ①暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
②灰白色土 灰白色粘土塊を主体とした層。

遺物は竈と貯蔵穴周辺に認められるが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。僅かに残る煮沸具はいずれも羽釜破片のみである。(富田)



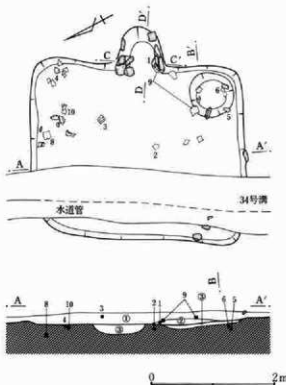
第182図 662号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第76表 662号住居跡出土遺物観察表

押回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (H)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
182-1 56	須恵器 羽釜	貯蔵穴内 +38	口(21.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③淡黄色	輪轆成形。ロクロ使用。	
182-2 56	須恵器 高台付椀	床面+2 瓦残存	口(13.0) 底(5.8) 高 4.8	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
182-3	須恵器 椀	覆土 瓦残存	口(12.6) 底 5.6 高 4.7	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
182-4	須恵器 椀	覆土 瓦残存	口(10.4) 底(6.0) 高 4.1	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙色	ロクロ成形。	
182-5	須恵器 椀	覆土 破片	口(9.6) 底(4.4) 高(3.6)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③淡黄色	ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	

663号住居跡 (第183~185図、第77表、図版31・57・64・70)

本住居跡は、第8次調査区北端近くの平坦面にあり、86-39グリッドに位置する。羽釜を伴う同時期の住居跡としては、周辺に2軒程検出されているが、それら以外では、20グリッド(100m)近く南に離れて所在している。34号溝や水道管敷設による擾乱で寸断される。



平面形は、東西2m79cm・南北3m45cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-117-Eを示す。壁高は17cmを測る。床面は竈前を中心に貼床を施すが、明瞭ではない。掘り方には、北東隅付近の壁を画する掘り込みと、ピット三基が検出されている。

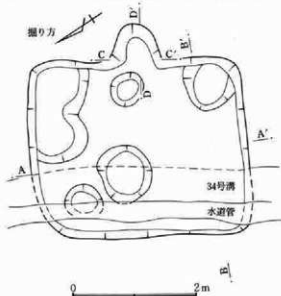
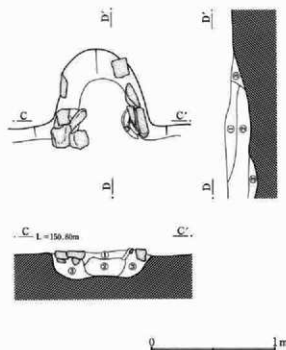
竈は東壁やや北寄りにあり、幅45cm・奥行69cm・深さ15cmを測る。羽釜破片を補強材に用いた石組構造であったと思われる。

(663号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石を多量に、ロームブロックを少量含み、締まっている。
- ②暗褐色土 ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含み、締まっている。
- ③暗褐色土 ロームブロックを多量に、焼土粒を少量含み、締まりに欠ける。

竈

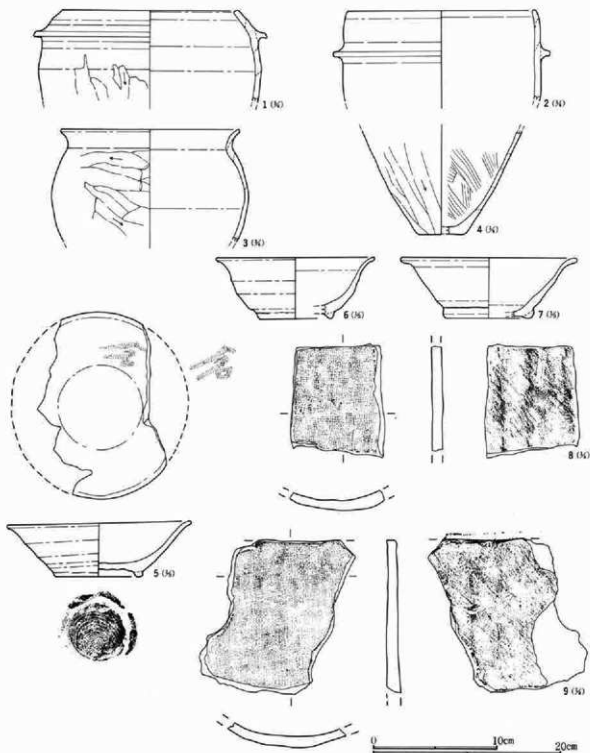
- ①暗褐色土 焼土粒・軽石を稀に含み、締まっている。
- ②暗赤褐色土 ロームブロック・焼土粒を多量に含み、やや締まっている。
- ③暗赤褐色土 焼土粒・炭化物を稀に含み、やや締まっている。



第183図 663号住居跡実測図

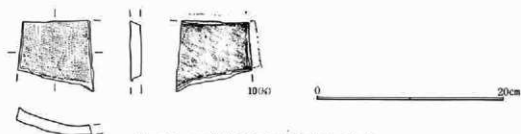
貯蔵穴は、径72cm・深さ30cmを測るが、本来の規模は明らかではない。

遺物は少なく、竪内部及び床面を中心に分布する。煮沸具には僅かながらゴ字状口縁土器器壁がみられるが、本来は個体数も多く検出されている羽釜を利用していたと思われる。他に「宍」と判読できる墨書土器の出土が注意される。(関口功)



第184図 663号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第185図 663号住居跡出土遺物実測図(2)

第77表 663号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
184-1 57	須恵器 羽釜	甕内+2 破片	口18.6 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③赤褐色	輪横成形でロクロ使用。体部外面磨削り。	
184-2	須恵器 羽釜	床面-6 小破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪横成形でロクロ使用。	
184-3 57	土師器 甕	床面+10 破片	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	輪横成形でロクロ使用。体部外面磨削り。	
184-4	土師器 甕	床面-2 破片	口— 底(4.7) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、体部外面下位蔵方向磨削り。内面磨削で。	
184-5 57・70	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +18 片残存	口(13.4) 底 6.4 高 4.2	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	墨書土器
184-6	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +24 片残存	口(12.5) 底(5.7) 高(4.8)	①粗、石英粒多 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
184-7	須恵器 高台付埴	覆土 片残存	口(13.2) 底(6.2) 高(4.7)	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③黄灰色	ロクロ成形後、高台貼付。	
184-8 64	平瓦	床面-14 小破片	長— 幅— 厚 1.1	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	一枚造りか。	
184-9 64	平瓦	床面+6 小破片	長— 幅— 厚 1.1	①粗、石英粒多、黒色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄色	一枚造り。	
185-10	平瓦	床面-2 小破片	長— 幅— 厚 1.1	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	一枚造りか。	

664号住居跡(第186~188図、図版31・57・64・67)

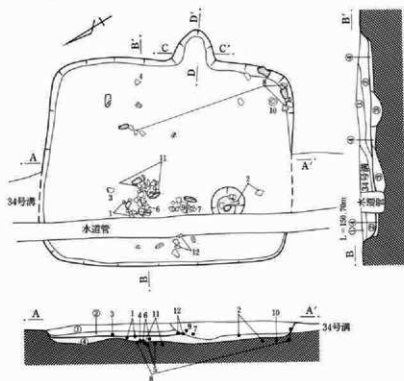
本住居跡は、第8次調査区北端近くの平坦面にあり、87-39・40グリッドに位置する。前出の662号住居跡の北側に隣接し、同様に羽釜を伴う住居跡である。34号溝と水道管敷設による破壊を受ける。

平面形は東西3m30cm・南北3m96cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-125°-Eを示す。壁高は最大で24cmを測るが、全体としては残存状況は不良である。床面は、電筒を中心に貼床を施すが、顕著な硬化面ではなかった。掘り方には、東南隅を面する掘り込みと、少なくとも三基以上のピットが確認されている。柱穴・壁溝等については、検出されていない。

竈は東壁の中央付近にあり、幅45cm・奥行54cm・深さ18cmを測る。焼土化も充分ではなく、内部から遺物

も殆ど検出されていない。

貯蔵穴は南西隅付近にある半壊状態のピットが該当すると思われるが、確証はない。規模は現状で径54cm・深さ19cmを測る。



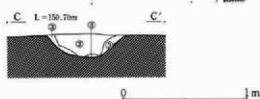
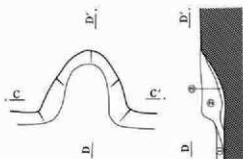
遺物は、床面中央やや西寄りを中心に分布し、特異な状況を呈している。煮沸具には羽釜・土釜を含むが、いずれも残存率が低く、本住居跡で使用されたと考えられるものは少ない。堀・環壕には足高台のものが含まれる。

(富田)

0 2m

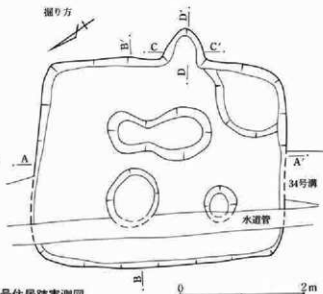
(664号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石(～3mm)を多量に含み、締まっている。
- ②暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、締まっている。
- ③暗褐色土 炭土粒を多量に含む。
- ④暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、締まりに欠ける。



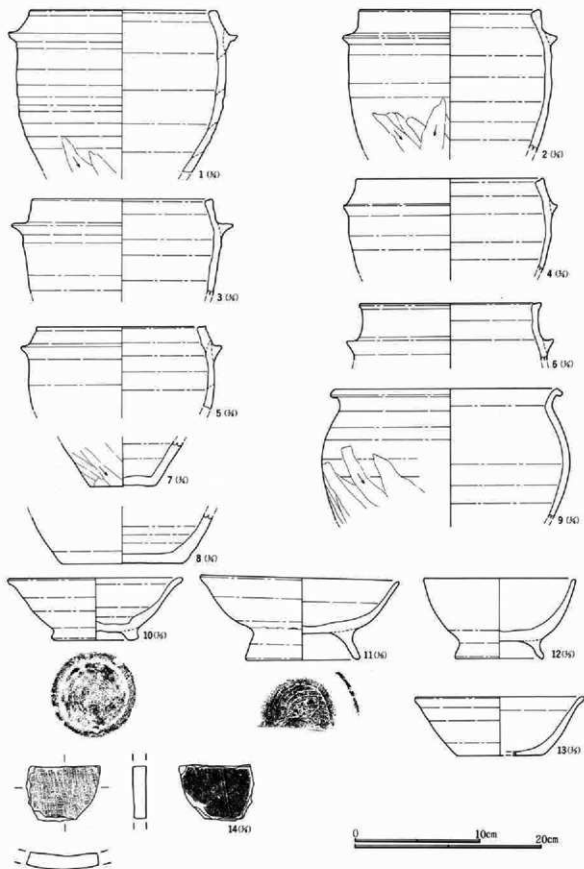
■

- ①暗褐色土 ローム細粒を多量に含み、締まっている。
- ②暗黄褐色土 ロームブロック・炭土粒を少量含み、締まりに欠ける。
- ③暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。



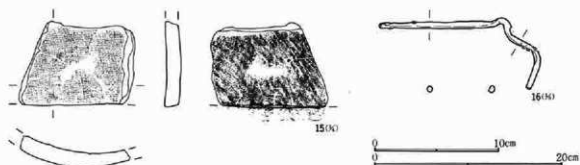
第186図 664号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



第187図 664号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第188図 664号住居跡出土遺物実測図(2)

第78表 664号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器種別	出土状況 残存状況	法量(cm) (口)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
187-1 57	須恵器 羽蓋	床面-1 破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半削り。	
187-2	須恵器 羽蓋	床面-6 破片	口(19.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半削り。	
187-3	須恵器 羽蓋	床面+2 破片	口(19.1) 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	輪轆成形でロクロ使用。	
187-4	須恵器 羽蓋	床面-6 小破片	口(19.8) 底— 高—	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色	輪轆成形でロクロ使用。	
187-5	須恵器 羽蓋	床面-15 破片	口(18.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③浅黄色	輪轆成形でロクロ使用。	
187-6	須恵器 羽蓋	床面-6 破片	口(19.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い橙色	輪轆成形でロクロ使用。	
187-7 57	須恵器 羽蓋	床面+2 小破片	口— 底(7.0) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面削り。	
187-8	須恵器 壺	床面-8 破片	口— 底(12.8) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪轆成形でロクロ使用。	
187-9 57	須恵器 甕	床面+5 破片	口(23.6) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰気味、やや硬質 ③黄褐色	輪轆成形でロクロ使用。体部外面下半削り。	
187-10 57	須恵器 高台付埴	床面-8 瓦残存	口(13.6) 底 6.0 高 4.9	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
187-11 57	須恵器 高台付埴	床面-10 瓦残存	口(15.6) 底(8.8) 高 6.4	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
187-12	須恵器 高台付埴	床面直上 瓦残存	口(11.8) 底(6.8) 高 6.3	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
187-13	須恵器 坏	覆土 破片	口(13.4) 底(6.8) 高(4.6)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	
187-14	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.4	①粗、白色鉱物細粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

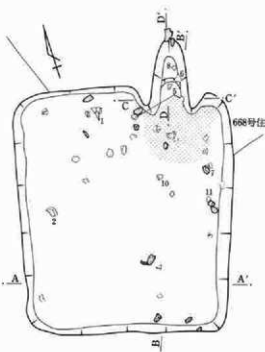
押出番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
188-15 64	平瓦	覆土 小破片	長 一 幅 一 厚 1.6	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焼、硬質 ③灰黄色	一枚造りか。	
188-16 67	鉄製品	覆土	長 12.8 幅 0.4 重 11.8			

667号住居跡 (第189～191図、第79表、図版32・57・64・67)

本住居跡は、第7次調査区南端の平坦面にあり、55-20グリッドに位置する。周囲には北側を中心に同時期の住居跡がまぎらって所在する。668号住居跡 (時期不明) の南西隅を切って構築される。

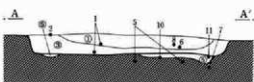
平面形は東西3m48cm・南北3m93cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-16°-Eを示す。壁高は最大で36cmを測り、残存状況は比較的良好である。床面は竈前を中心に厚く貼床を施し、掘り方には、時期差のある竈前のピットの他に、多数のピットが検出されているが、その性格・機能については判然としにくい部分が多い。貯蔵穴については、確認されていない。柱穴・壁溝等についても、検出されていない。

竈はこの時期の住居跡としてはかなり例外的で、北壁中央やや東寄りになり、幅51cm・奥行117cm・深さ45cmを測る。煙道部付近まで残存するものの、残存状況は概して不良であり、用材とみられる石が周辺に散乱している。



0 2m

遺物は、竈周辺を中心に散漫に分布する。全体量は並であるが、個体の残存率は低い。煮沸具には羽釜・土釜を含むと思われる。今回報告する中では、遺存状態の最も良い灰釉陶器境が、検出されている。他に蔦編石状の絹雲母石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩・安山岩各1個 (計1.8kg) が検出されている。(中沢)

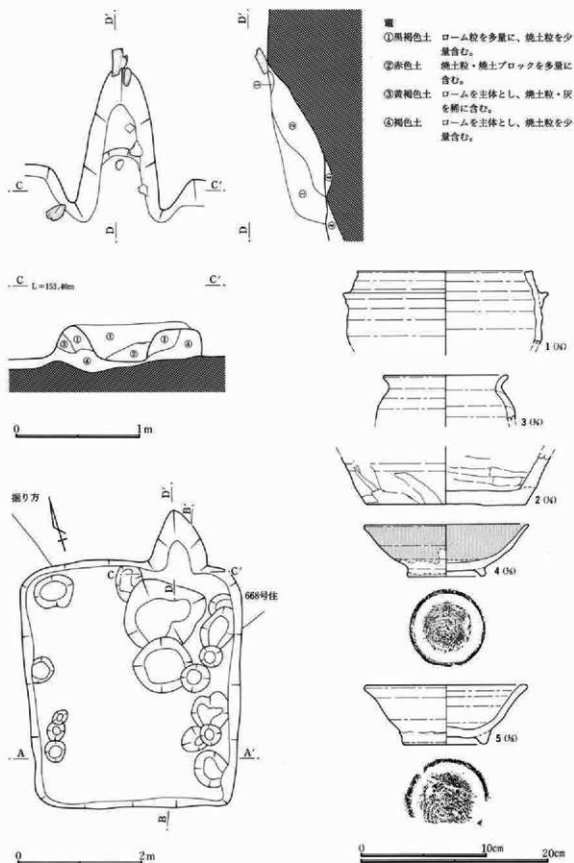


(667号住居跡)

- ①黒褐色土 1m内外の白色軽石粒を多量に、ローム粒を少量含む。
- ②赤色土 多量の焼土粒と黒褐色土の混入層。
- ③暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- ④褐色土 焼土粒を稀に含む。
- ⑤暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。

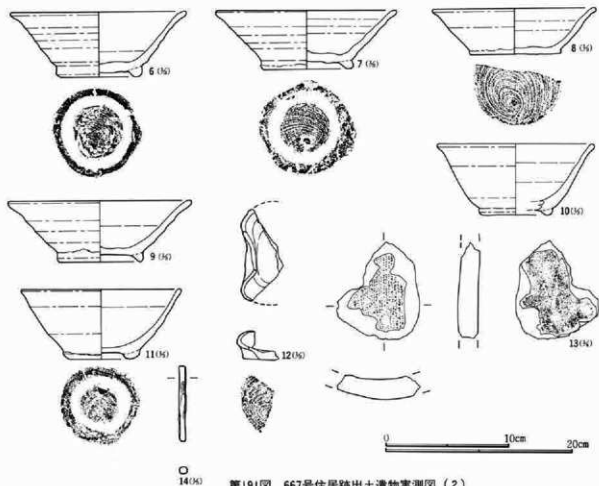
第189図 667号住居跡実測図 (1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第190図 667号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第191図 667号住居跡出土遺物実測図(2)

第79表 667号住居跡出土遺物観察表

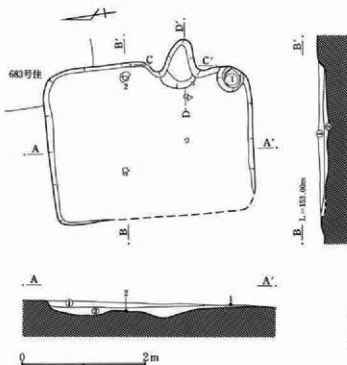
採掘番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
190-1 57	須恵器 羽 釜	床面+2 破片	口(18.6) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	輪積成形でロクロ使用。	
190-2 57	須恵器 嬰	床面+28 破片	口 — 底(17.0) 高 —	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪積成形。外面塗削り。内面撫で。	
190-3 57	須恵器 小型嬰	覆土 破片	口(13.0) 底 — 高 —	①粗、石英粒少 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	輪積成形でロクロ使用。	
190-4 57	灰輪陶器 高台付残	覆土 片残存	口(13.0) 底 8.0 高 4.1	①骨、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
190-5 57	須恵器 高台付残	床面-14 片残存	口(12.8) 底 (6.4) 高 4.7	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
191-6	須恵器 高台付残	甕内+6 片残存	口(13.3) 底 (6.2) 高 3.1	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
191-7 57	須恵器 高台付残	床面-18 片残存	口(13.2) 底 7.0 高 4.6	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。高台貼付。	
191-8	須恵器 坏	甕内+12 片残存	口(12.8) 底 (7.1) 高 3.6	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い褐色	右回転ロクロ成形後、底部未切り。未調整。	

採区番号 図版番号	土器種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
191-9	須恵器 高台付埴	覆土 片残存	口(14.4) 底(6.5) 高 4.8	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
191-10	須恵器 高台付埴	床面-5 片残存	口(12.2) 底(5.5) 高(5.6)	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
191-11 57	須恵器 高台付埴	床面-3 片残存	口(12.6) 底(5.0) 高 5.5	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
191-12 57	須恵器 耳皿	覆土 片残存	口 - 底 - 高(2.2)	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
191-13 64	平瓦	覆土 小破片	長 - 幅 - 厚 2.1	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	一枚溜りか。	
191-14 67	鉄製品 釘?	覆土	長 5.9 厚 0.6 幅 0.6 重 4.9			

670号住居跡 (第192・193図、第80表、図版32・57)

本住居跡は、第9次調査区北東端の平坦面にあり、53-19グリッドに位置する。683号住居跡(古墳)の南西隅を切って構築される。表土の流失や桑根による擾乱が深く及び、痕跡に近い状態で検出された。

西壁については不確定な要素が伴うが、平面形は東西2m49cm・南北3m36cmを測る長方形を呈していたと思われる。主軸方向はN-104°-Eを示す。壁高は最大で12cmを測る。床面は、電前を中心に貼床を施していたと思われるが、プラン確認時で既に流失していた。掘り方は平坦ではなく、電前のピットの他、大小二基のピットが検出された。



第192図 670号住居跡実測図(1)

電は東壁中央やや南寄りにあり、幅48cm・奥行57cm・深さ18cmを測るが、残存状況は極めて不良である。

貯蔵穴は電右脇にあり、径40cm・深さ5cmを測る円形を呈する。内部に須恵器大甕の底部が遺存していたが、本来の規模は明らかではない。

遺物は電周辺に分布するが、量的に少なく、種類に乏しい。煮沸具には羽釜を含まないようである。

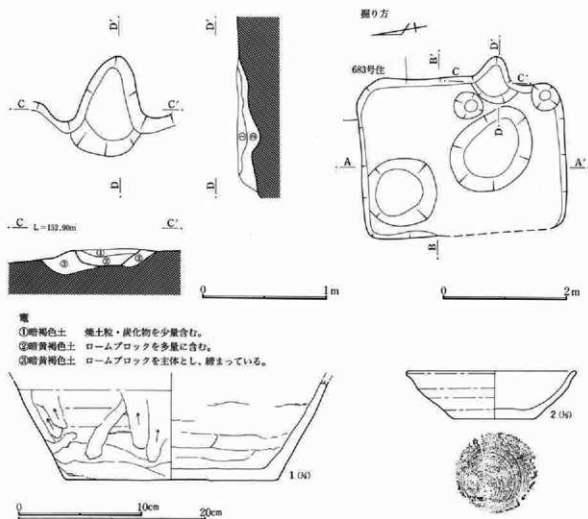
(高田)

(670号住居跡)

①暗褐色土 白色軽石・焼土粒・炭化物を少量含み、締まっている。

②暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、締まっている。

第3章 平安時代の遺構と遺物



第193図 670号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第80表 670号住居跡出土遺物観察表

採掘番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
193-1 57	須恵器 大 甕	床面+4 破片	口 — 底 22.6 高 —	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③暗黄灰色	輪襷成形後、体部外面下平斜~横方向に削り、 内面撫で。	
193-2 57	須恵器 坏	床面直上 残存	口(13.5) 底 6.4 高 3.7	①滑、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	右回転クワロ成形後、底部余切り。未調整。	

675号住居跡 (第194・195図、第81表、図版33・58・70)

本住居跡は、第8次調査区中央やや東寄りの緩斜面にあり、67-40・41グリッドに位置する。調査範囲内の平安時代に属する住居跡としては、最も低位に所在する。殆ど時期差のない676号住居跡(平安)を切って構築され、46号溝が西壁をかすめる。

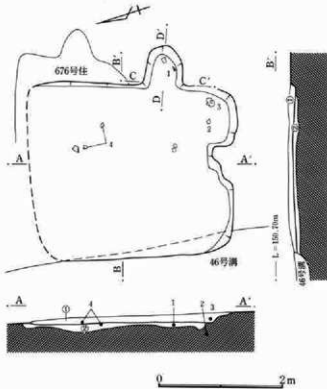
表土の流失が著しく、特に北壁は完全に消失している為、南北方向は不明であるが、東西方向は2m73cmを測り、主軸方向はN-107°-Eを示す。西壁には、ローム(地山)の掘り残しが確認されている。壁高は最大

で16cmを測る。床面は、竈前を中心に貼床を施していたと思われるが、あまり明瞭でない。掘り方には、壁を面する掘り込みが、ロームの掘り残しの両脇から検出されている。北壁付近のピットについては、後出の

676号住居跡に帰属する可能性もある。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

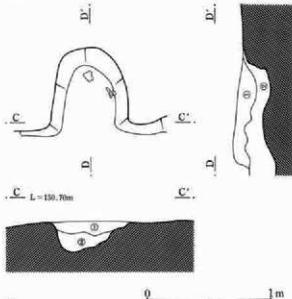
竈は、東壁中央やや南寄りにあり、幅45cm・奥行66cm・深さ21cmを測るが、残存状況は極めて不良で痕跡に近い。

遺物は、竈周辺を中心に分布するが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。煮沸具には羽釜を全く含まないようである。そうした中では、「糸」と判読できる墨書土器の出土が注意される。(関口功)

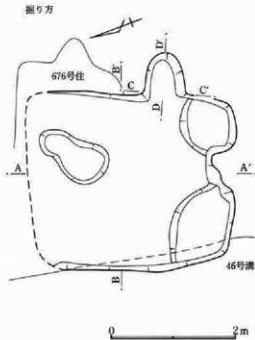


(675号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石・ロームブロックを多量に、焼土粒・灰化物を稀に含み、固く締まっている。
 ②暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、固く締まっている。

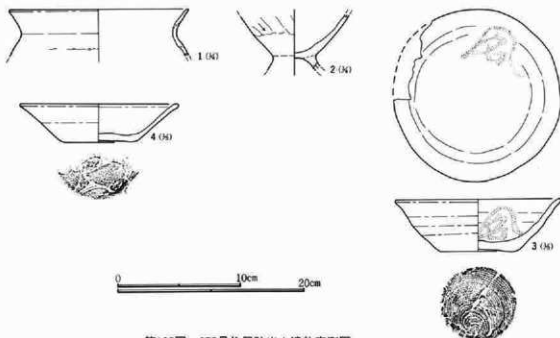


- 竈
 ①暗褐色土 白色軽石を多量に含み、焼土粒・灰が混り、固く締まっている。
 ②暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、焼土粒・灰を稀に含み、固く締まっている。



第194図 675号住居跡実測図

第3章 平安時代の遺構と遺物



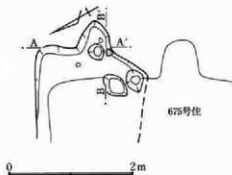
第195図 675号住居跡出土遺物実測図

第81表 675号住居跡出土遺物観察表

押出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
195-1	土師器 壺	甕内-3 小破片	口(18.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪挽成形後、口辺横撫で。	
195-2 58	土師器 台付壺	灰面-17 小破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い橙色	輪挽成形後、外面瓦削り。内面撫で。	
195-3 58・70	須恵器 坏	灰面+4 残残存	口(13.0) 底 6.0 高 4.1	①粗、石英粒少 ②還元焰、硬質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	黒貴土器
195-4	須恵器 坏	灰面-2 残残存	口(12.4) 底(5.5) 高 3.0	①粗、石英粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	内外面一部黒灰

676号住居跡 (第196・197図、第82表、図版33)

本住居跡は、第8次調査区中央やや東寄りの緩斜面にあり、67-40・41グリッドに位置する。前出の675号住居跡(平安)に住居跡の大部分を破壊される。残存状況は極めて不良で痕跡に近い状態で検出された。

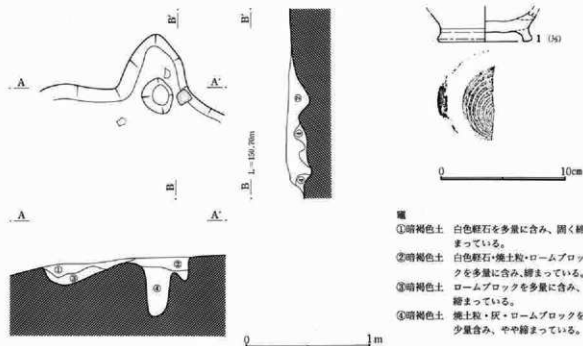


第196図 676号住居跡実測図(1)

規模の詳細は不明であるが、竈から想定される主軸方向はN-116°-Eを示す。柱穴状のピットを含む、小ピット三基が確認されているが、貯蔵穴等の付属施設は、確認されていない。

竈は、東壁中央付近に焼土と粘土がまがまって認められることから認定した。規模は幅54cm・奥行51cm・深さ15cmを測る。

遺物は極めて少なく、見るべき物がない。(関口功)



第197図 676号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第82表 676号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (容)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
197-1	須恵器 高台付碗	床面+7 破片	口— 底(7.0) 高—	①粗、白色胎物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	

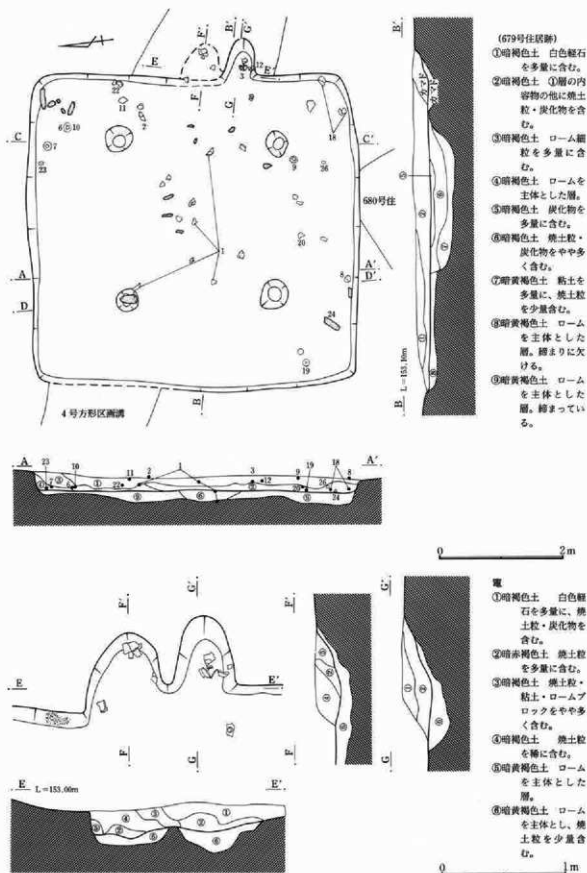
679号住居跡 (第198～201図、第83表、図版33・34・58・65・66・67・70・71)

本住居跡は、第9次調査区北東端の平坦面にあり、53・54—21グリッドに位置する。周囲には、北側に同時期と思われる513号住居跡が近接して所在するが、それ以外の同時期と思われる住居跡までは20グリッド以上離れている。680号住居跡(古墳)を切って構築され、中央を浅間A軽石を多量に含む4号方形区画溝に破壊される。

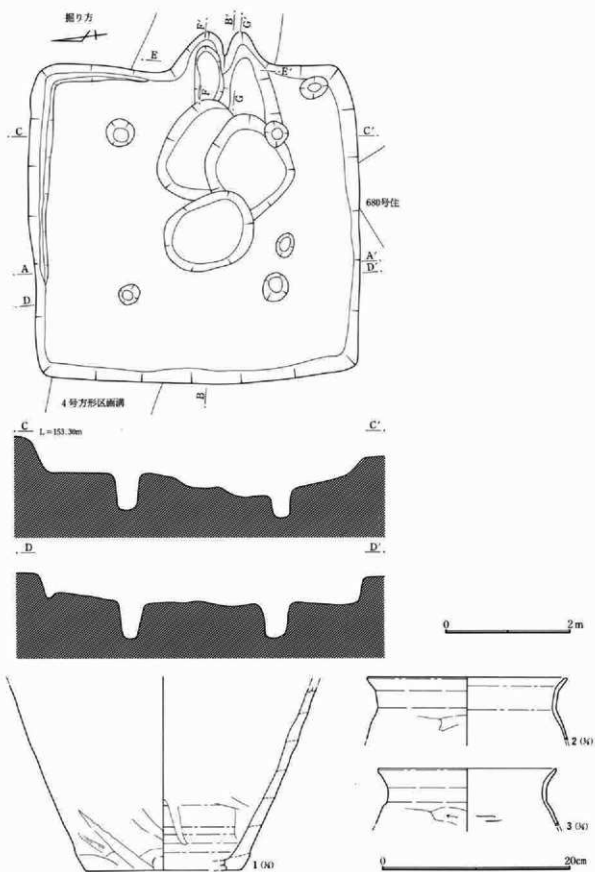
平面形は、東西4m95cm・南北5m37cmを測る正方形を呈し、主軸方向はN-95°-Eを示す。壁高は最大で45cmを測る。床面は、電前を中心に厚く貼床を施し、掘り方には、三時期に亘る電前のビット等が検出されている。貯蔵穴については、該当するものは確認されていない。柱穴は四箇所確認されている。壁溝については、残存状況の良好な北東隅を中心に検出されている。

竈は東壁に二箇所確認されており、造り替えが行われたものと思われる。切り合い関係はやや不明瞭であるが、諸状況から新旧を判断した。先行する竈は、東壁中央にあり、現状で幅56cm・奥行62cm・深さ14cmを測る。後出する竈は、東壁やや南寄りにあり、幅45cm・奥行66cm・深さ21cmを測る。

遺物は比較的多く、床面全体に分布する。単品では「八」と墨書された土器器耳、「物Ⅱ(部)・八田」「八」の絞線のある石製紡錘車の他、鉄製紡錘車(紡輪)等の金属製品の出土が注意される。土器類は、量的に少なくないが、コ字状口縁土器器耳の小破片が多く残存率が低い。プランや土器等から二軒重複の可能性も検討したが、一軒と認定した。(富田)

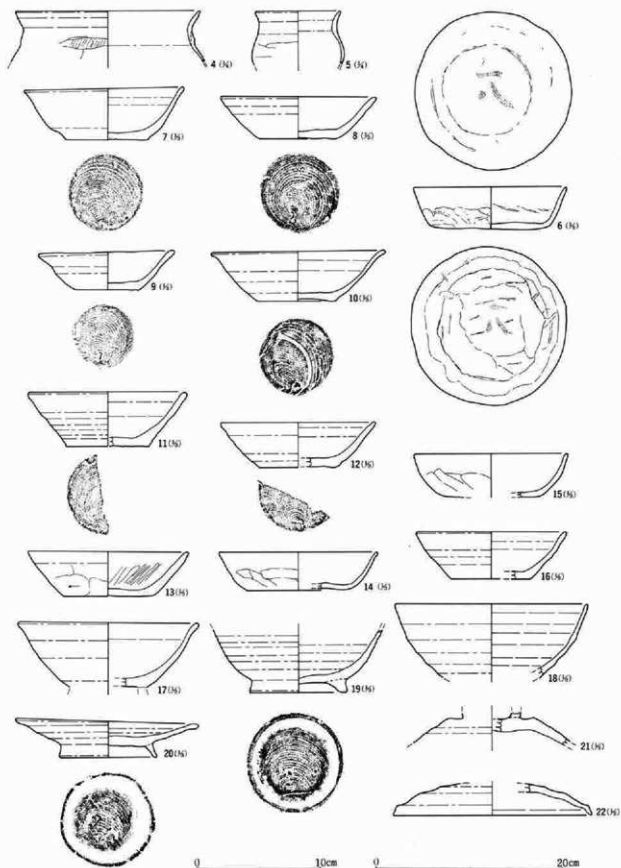


第198図 679号住居跡実測図(1)

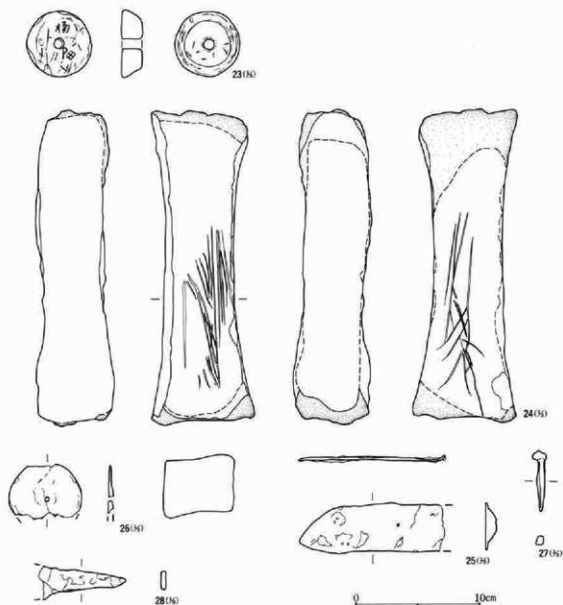


第199図 679号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第200図 679号住居跡出土遺物実測図(2)



第201図 679号住居跡出土遺物実測図(3)

第83表 679号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (±)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
199-1	須恵器 大 壺	床面+16 破片	口 — 底(16.4) 高 —	①粗、白色紅物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色、断面灰赤色	輪積成形でロクロ使用。体部外面叩き後撫で。 内面当具痕あり。	
199-2 58	土 器 壺	床面+18 破片	口(20.8) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い橙色	輪積成形後、口辺撫撫で。体部外面磨削り。 内面撫で。	
199-3 58	土 器 壺	甕内+14 小破片	口(18.6) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③鈍い橙色	輪積成形後、口辺撫撫で。体部外面磨削り。 内面撫で。	
200-4	土 器 壺	覆土 小破片	口(19.4) 底 — 高 —	①粗、石英・砂粒 ②還元焰、軟質 ③鈍い橙色	輪積成形後、口辺撫撫で。外面磨削り。内面 撫で。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

探跡番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
200-5	土師器 小型甕	覆土 破片	口(9.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪楕成形後、口辺撫で。体部外面削り。 内面撫で。	
200-6 58・70	土師器 坏	床面+3 完形	口12.2 底9.5 高3.3	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪楕成形後、口辺撫で。外面削で。底部 削り。	黒書土器
200-7 58	須恵器 坏	床面+4 完形	口12.6 口10.7 底6.4 高4.0	①粗、褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍 い黄褐色、内面鈍い褐色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	外面底部に煤付 着
200-8 58	須恵器 坏	床面+20 片残存	口(12.2) 底6.0 高3.3	①滑、石英・砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	内面に油煙が付 着
200-9 58	須恵器 坏	床面+18 完形	口10.7 底5.2 高3.0	①粗、黒色鉱物細粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍黄色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	外面に煤付着
200-10 58	須恵器 坏	床面+3 片残存	口13.6 底6.1 高3.9	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	
200-11 58	須恵器 坏	床面+16 片残存	口(12.6) 底(6.6) 高4.3	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	
200-12 58	須恵器 坏	甕内+14 片残存	口(12.1) 底6.1 高3.5	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	
200-13 58	土師器 坏	覆土 片残存	口(12.6) 底(7.0) 高3.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪楕成形後、口辺撫で。外面削り。内面 磨き。	
200-14	土師器 坏	覆土 片残存	口(12.5) 底(6.9) 高3.0	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪楕成形後、口辺撫で。外面指押さえ。底 部削り。	
200-15	土師器 坏	覆土 破片	口(12.1) 底(7.9) 高(3.4)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③明赤褐色	輪楕成形後、口辺撫で。外面指押さえ。	
200-16	須恵器 甕	覆土 片残存	口(11.8) 底(6.4) 高(3.7)	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	
200-17 58	須恵器 高台付甕	覆土 片残存	口(14.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。未調整。	高台刺摩
200-18 58	須恵器 甕	床面+2 片残存	口(15.2) 底— 高—	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	クロコ成形。	
200-19 58	須恵器 高台付甕	床面+1 片残存	口— 底7.7 高—	①粗、石英粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
200-20 58	須恵器 高台付甕	床面+5 片残存	口(14.6) 底7.6 高2.8	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転クロコ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
200-21 58	須恵器 蓋	覆土 破片	胴— 口— 高—	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰白色	クロコ成形後、頂部回転削り。網貼付。	
200-22	須恵器 蓋	床面+6 破片	胴— 口15.5 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	クロコ成形。	
201-23 65・71	石製品 紡錘車	床面+2 完形	径 5.2/3.6 孔径 0.8 厚 1.7 重 74.2		全面的に磨減。広面に設計線が残る。狭面は 同心円状の縦着な磨減でやや歪む。	滑石片岩 織肌あり
201-24 66	石製品 砥石	床面+1 完形	長 24.8 厚 5.0 幅 8.8 重 1750.0		中砥。四面を使用。刃試しの痕跡あり。	流紋岩
201-25 67	鉄製品 鎌	覆土	長 11.6 厚 0.2 幅 3.6 重 31.0			

採掘番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考	
			径	厚				
201-26 67	鉄製品 紡錘車	床面+5	径	5.8	孔径	0.3		
			厚	0.4	重	23.6		
201-27 67	鉄製品 釘	覆土	長	4.7	厚	0.7		
			幅	0.6	重	4.5		
201-28 67	鉄製品 刀子	覆土	長	7.0	厚	0.4		
			幅	1.5	重	16.8		

684号住居跡 (第202~204図、第84表、図版34・58・64)

本住居跡は、第9次調査区中央の埋没谷に面した南西方向の緩斜面にあり、51-13・14グリッドに位置する。同時期の住居跡に限ると孤立する傾向にある。切り合い関係としては、685号住居跡(古墳)の東南隅を切って構築される。

平面形は東西3m93cm・南北2m88cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-101°-Eを示す。壁高は最大で40cmを測る。基本的に貼床はなく、ローム(地山)を叩き締めて床面としていたと思われる。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。

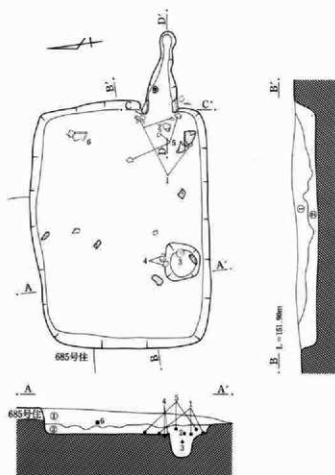
竈は東壁の南寄りにあり、煙道部が良好に検出された。規模は幅42cm・奥行123cm・深さ36cmを測る。砂岩

製の両袖石は残るが、支脚・天井石の残存は全くない。周辺には電用材と考えられる石材が散乱しており、竈自体の残存状況はやや不良である。

貯蔵穴は、径56cm・深さ38cmを測る円形を呈する。

遺物は竈周辺を中心に分布するが、量的に少なく、個体の残存率も低い。埴・埴類には足高台のものがある。煮沸具には羽釜を含むようであるが、いずれも小破片で図化できない。

(関口功・富田)



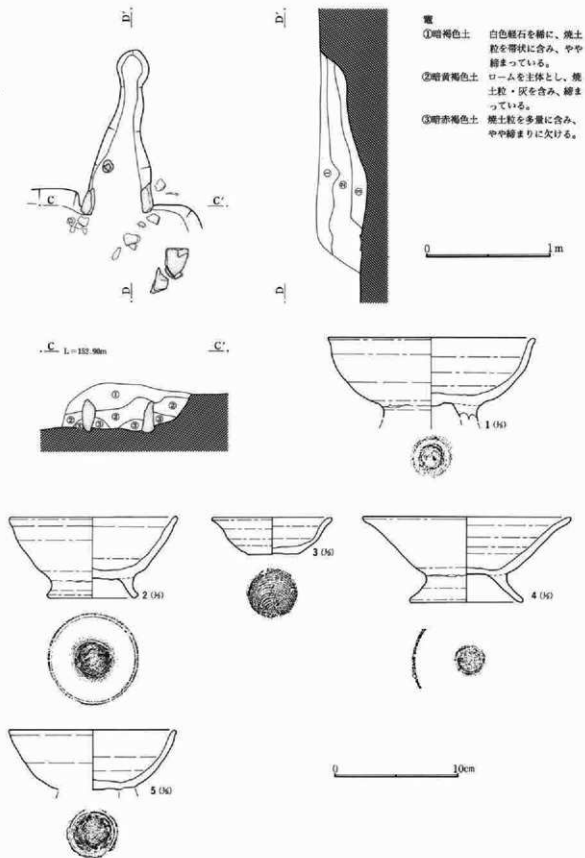
(684号住居跡)

①暗褐色土 白色軽石を稀に含み、締まっている。

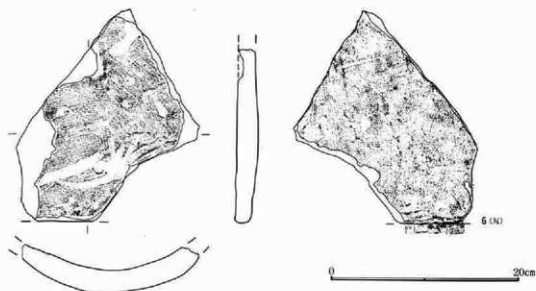
②暗褐色土 ロームブロックを多量に、脆土粒・炭化物を稀に含み、締まっている。

第202図 684号住居跡実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第203図 684号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)



第204図 684号住居跡出土遺物実測図(2)

第84表 684号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
203-1 58	須恵器 高台付埴 瓦	床面直上 瓦残存	□ 16.4 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
203-2	須恵器 高台付埴 瓦	床面直上 瓦残存	□ (13.0) 底 7.0 高 6.4	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③暗灰青色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
203-3 58	須恵器 小皿	ピット内 +22 完形	□ 9.3 底 4.0 高 2.9	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
203-4 58	須恵器 高台付埴 瓦	床面-1 瓦残存	□ (16.3) 底 (8.8) 高 6.7	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
203-5 58	須恵器 高台付埴 瓦	床面直上 瓦残存	□ 13.4 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台剝離
204-6 64	平瓦	床面+15 破片	長 — 幅 — 厚 2.2	①粗、雲母・白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③黄灰色、断面浅灰色	一枚造り。	

697号住居跡 (第205図、第85表、図版35・58)

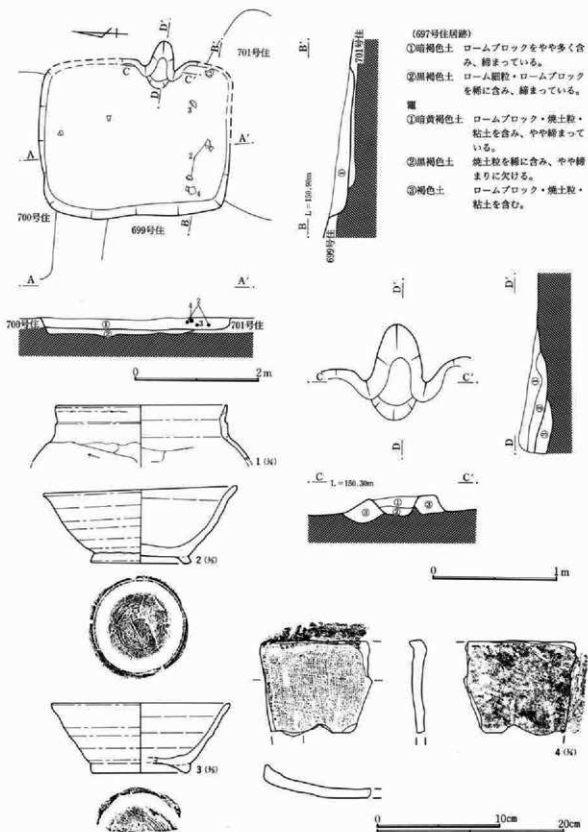
本住居跡は、第10次調査区中央の埋没谷内部の緩斜面にあり、42-73グリッドに位置する。同時期の住居跡に限れば、その分布は極めて散在的である。699号住居跡(古墳)・700号住居跡(古墳)・701号住居跡(奈良)の覆土を切って構築される。

表土が流失した上に、一部黒色土中にかかる為ブラン確認に不安は残るが、平面形は東西2m49cm・南北3m06cmを測る長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示すものと思われる。壁高は最大で37cmを測る。床面の状況は明瞭ではないが、貼床があったと思われる。掘り方は、701号住居跡の床面にまで達しているが、ピットをはじめ、貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

第3章 平安時代の遺構と遺物

竈は東壁中央やや南寄りにあり、幅36cm・奥行60cm・深さ09cmを測る。

遺物は極めて少なく、種類に乏しい。(関口功・関口博)



第205図 697号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第85表 697号住居跡出土遺物観察表

標図番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量 (cm) (#)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
205-1	土師器 壺	覆土 小破片	口 18.0 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化焙、やや軟質 ③褐色	輪削成形後、口辺横撫で。体部外面横方向度 磨り。内面撫で。	
205-2 58	須恵器 高台付埴	床面+5 瓦残存	口 15.1 底 7.2 高 5.8	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焙、やや軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
205-3	須恵器 高台付埴	床面+5 瓦残存	口(14.0) 底(7.4) 高(5.5)	①粗、石英細粒 ②酸化焙、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
205-4 64	平瓦	床面+10 小破片	長 — 幅 — 厚 1.1	①粗、雲母・白色鉱物粒 ②酸化焙、硬質 ③浅黄色	一枚造りか。	歪みが著しい

704号住居跡 (第206・207図、第86表、図版35)

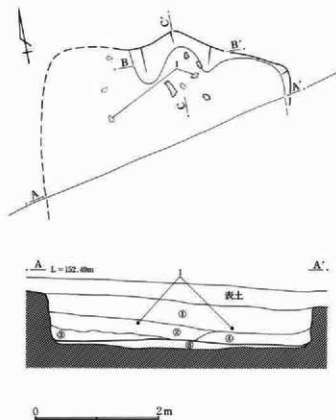
本住居跡は、第10次調査区中央の南北に走る埋没谷内部の緩斜面にあり、36・37-72・73グリッドに単独で位置する。表土の流失が著しく、付近には湧水点もあり、プラン確認時で既に痕跡状態であった。

上記の理由や一部調査区外にかかるため、規模の詳細は不明である。僅かに残る竈の痕跡から推定される主軸方向はN-7°-Eを示す。壁高は最大で11cmを測る。床面には、粘土を利用した貼床が施されていたと思われるが、あまり明瞭ではない。貯蔵穴・柱穴・壁溝については、検出されていない。

竈はこの時期の住居跡としては、かなり例外的で、北壁ほぼ中央にあり、幅78cm・奥行69cm・深さ99cmを測る。粘土が焼けた状態で崩落し、原型を全くとめていなかった。

遺物は、竈周辺を中心に分布するが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。流れ込みの可能性もあり、注意を要する。種類としては、コ字状口縁土師器壺の細片が目立つ程度で、羽釜は全く含まないようである。

(関口博)

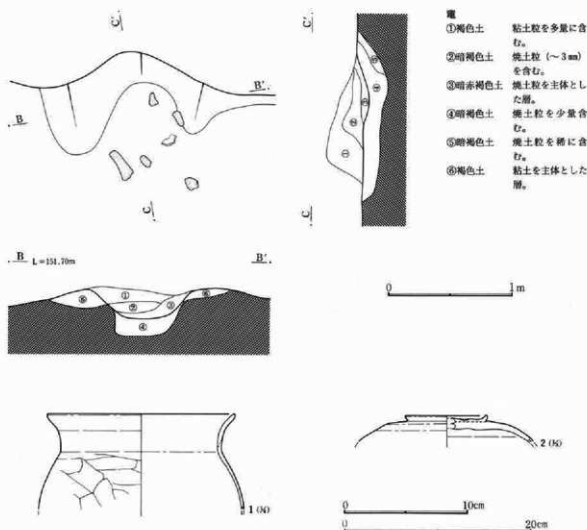


第206図 704号住居跡実測図(1)

(704号住居跡)

- ①暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- ②暗褐色土 焼土粒・粘土を少量含む。
- ③暗褐色土 粘土を少量含む。
- ④暗褐色土 ③層に比し、粘土を多量に含む。
- ⑤暗褐色土 粘土を多量に含む。

第3章 平安時代の遺構と遺物



第207図 704号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図

第86表 704号住居跡出土遺物観察表

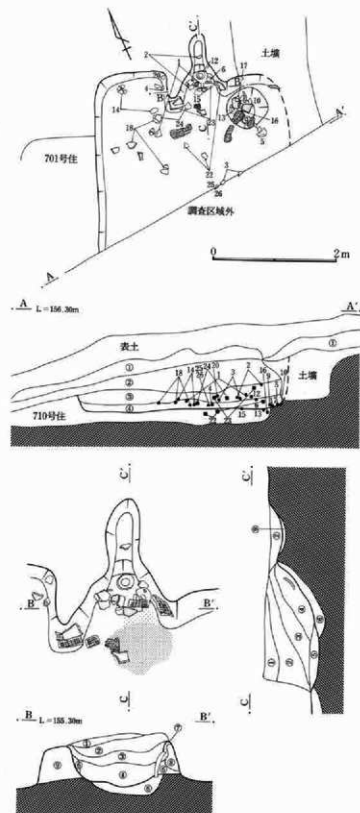
探検番号 図版番号	土器類別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
207-1	土器 甕	床面+24 破片	口(20.0) 底— 高—	①粗、雲母・砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③橙色	輪轆成形後、口辺横撫で。体部外面塗布り。 内面無で。	
207-2	甕 蓋	覆土 小破片	横(6.4) 口— 高—	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形後、頂部削り。横貼付。	

711号住居跡(第208～211図、第87表、図版35・36・59・64・67・70)

本住居跡は、第11次調査区南西端の西向きの急斜面にあり、38—82グリッドに位置する。矢田遺跡の調査範囲では平安時代の住居跡が分布する東限にあたり、同時期の住居跡の分布は極めて散在的であるが、文字資料を出土する住居跡が比較的分布する特徴をもつ。701号住居跡(奈良)の覆土を切って構築され、現代のものと思われる土壌に東壁を破壊される。

一部調査区外にかかる為、南北方向は不明であるが、東西方向は3m12cm程度を測るものと思われる。電から想定される主軸方向はN-20°-Eを示す。壁高は最大で42cmを測る。

床面は、竪前を中心に厚く貼床が施され、掘り方には、粘土を検出した竪前のビット一基が認められた。柱穴・壁溝等の付属施設については、検出されていない。



第208図 711号住居跡実測図(1)

竪は北壁のほぼ中央にあり、幅54cm・奥行93cm・深さ45cmを測る。主軸方向が北に傾くのは、傾斜の影響であろう。左袖は棚状に掘り残した地山を利用し、住居跡内部に張り出している。支脚に該当すると思われる石材が遺存するなど、残存状況は比較的良好で、粘土と瓦を構造物に用いていたことが確認されている。貯蔵穴は竪右脇にあり、径63cm・深さ18cmを測る円形を呈する。

遺物はやや多く、竪周辺を中心に分布する。煮沸具はコ字状口縁土師器甕である。三点の墨書土器や刀子の出土が注意される。(富田)

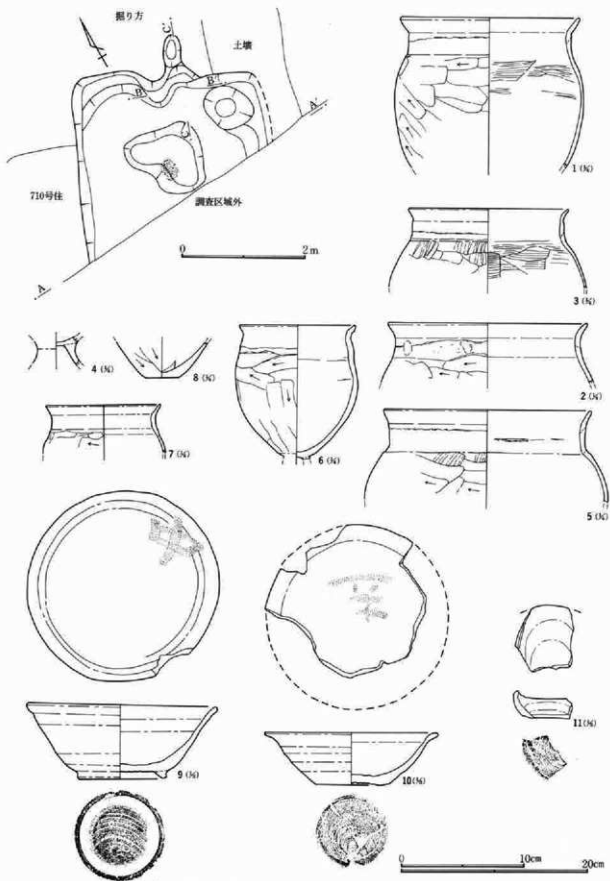
(711号住居跡)

- ①暗褐色土 白色軽石(～3m)を少量含む。
- ②黒褐色土 ロームを主体とし、炭が多量に混入した層。
- ③暗黄褐色土 色調は覆土中で最も明るい。炭化物(～3mm)を含む。
- ④黒褐色土 炭化物(～10mm)を多量に含む。

竪

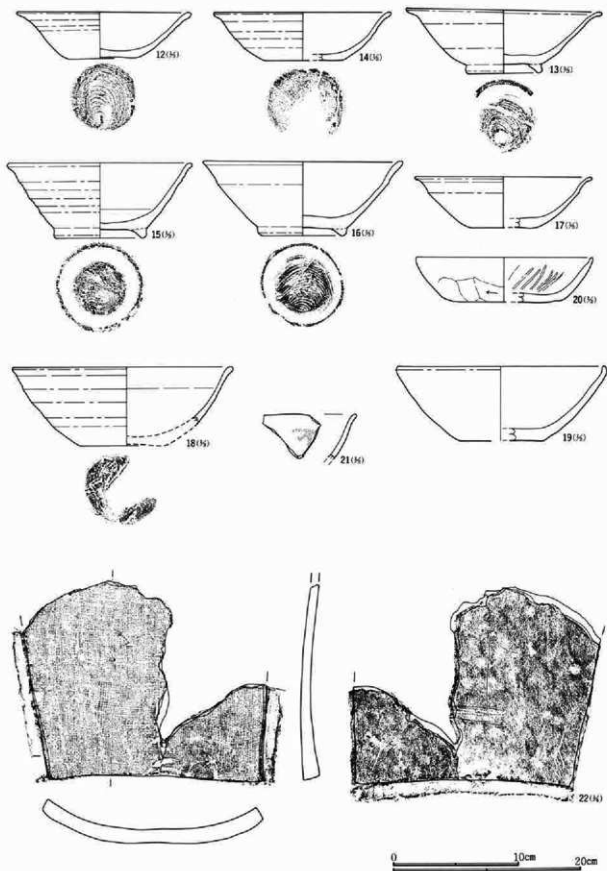
- ①暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- ②暗黄褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。
- ③暗黄褐色土 焼土粒・炭化物をやや多く含む。
- ④暗赤褐色土 焼土粒・炭化物を多量に含む。
- ⑤黒褐色土 炭化物を多量に含む。
- ⑥暗褐色土 焼土粒を少量含む。
- ⑦暗黄褐色土 ロームを主体とし、粘土を少量含む。
- ⑧暗灰白色土 粘土を主体とし、固く締まっている。
- ⑨暗黄褐色土 ロームを主体とした層。

第3章 平安時代の遺構と遺物

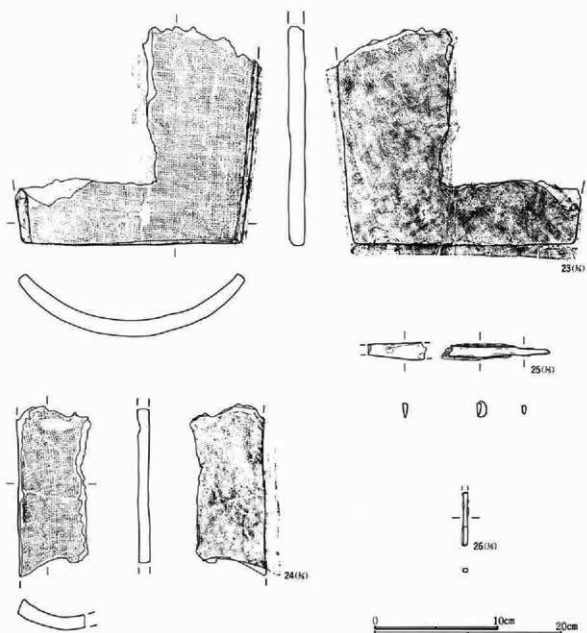


第209図 711号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第2節 竪穴住居跡と出土遺物



第210圖 711号住居跡出土遺物実測図(2)



第211図 711号住居跡出土遺物実測図(3)

第87表 711号住居跡出土遺物観察表

標記番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状況 携存状況	法量 (cm) (R)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備 考
209-1 59	土 器 壺	床面+10 片残存	口(18.9) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化胎、軟質 ③鈍い褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面横～斜方向磨削り。内面縦撫で。	
209-2 59	土 器 壺	床内+15 破片	口(21.0) 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化胎、軟質 ③褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面横方向磨削り。内面縦撫で。	
209-3	土 器 壺	床面+10 破片	口(16.9) 底 — 高 —	①膏、砂粒 ②酸化胎、やや硬質 ③鈍い黄褐色	輪積成形後、口辺横撫で。体部外面横方向磨削り。内面縦撫で。	
209-4 59	土 器 小皿台付 壺	床面+5 破片	口 — 底 — 高 —	①粗、砂粒 ②酸化胎、軟質 ③褐色	輪積成形後、外面横撫で。	

第2節 竪穴住居跡と出土遺物

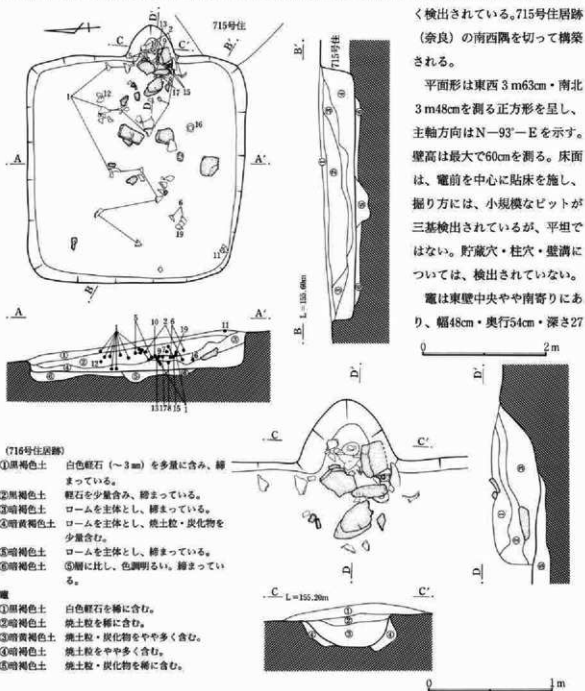
拝園番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (容)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
209-5 59	土師器 壺	床面直上 破片	口(22.0) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、やや軟質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面横方向削り。	
209-6	土師器 小型台付 壺	竈内+14 片残存	口(12.3) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方向削り。下位斜方向削り。内面撫で。	磨耗が著しい
209-7 59	土師器 小型壺	覆土 破片	口(12.2) 底— 高—	①滑、砂粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い赤褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面横方向削り。	
209-8	土師器 壺	覆土 小破片	口— 底(3.5) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	輪横成形後、外面削り。内面撫で。	
209-9 59・70	須恵器 高台付埴 埴	床面+4 ほぼ完全形	口15.2 底6.6 高5.8	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	黒書土器
209-10	須恵器 埴	床面直上 片残存	口(13.6) 底5.8 高4.1	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③浅黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	黒書土器
209-11 59	須恵器 耳皿	覆土 破片	口(10.5) 底(5.1) 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
210-12 59・70	須恵器 埴	竈内+18 完全形	口13.6 底5.5 高3.7	①粗、石英粒多 ②酸化焰、軟質 ③鈍い橙色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	製作時の補修痕あり
210-13 59	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +10 片残存	口15.3 底(5.6) 高5.9	①滑、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
210-14 59	須恵器 埴	床面+5 片残存	口(14.0) 底(6.2) 高(3.8)	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
210-15	須恵器 高台付埴	床面-1 片残存	口(14.3) 底7.0 高5.9	①粗、石英粒 ②酸化焰、やや硬質 ③鈍い黄褐色	ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
210-16 59	須恵器 高台付埴	貯蔵穴内 +13 片残存	口(16.0) 底6.4 高5.8	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部余切り。高台貼付。	
210-17	須恵器 埴	床面直上 片残存	口(13.8) 底(5.0) 高(4.0)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	ロクロ成形後、底部余切り。未調整。	
210-18 59	須恵器 埴	床面+4 片残存	口17.3 底(6.6) 高(6.1)	①滑、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、軟質 ③黄灰色	ロクロ成形。	内面に黒付着
210-19	土師器 埴	覆土 破片	口(16.3) 底(6.6) 高(5.9)	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③橙色	ロクロ成形か。	奈良
210-20 59	土師器 埴	床面+17 片残存	口(14.0) 底(7.2) 高(3.5)	①粗、砂粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い橙色	輪横成形後、口辺横撫で。外面下平～底部削り。内面磨き。	
210-21 70	須恵器 埴	覆土 小破片	口— 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③浅黄色	ロクロ成形。	体部内面黒書
210-22 64	平瓦	床面-6 破片	長— 幅— 厚1.8	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造り。	
211-23 64	平瓦	床面+14 破片	長— 幅— 厚1.7	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③橙色	一枚造り。狭端面の面取り2。	
211-24 64	平瓦	床面+6 小破片	長— 幅— 厚1.2	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、硬質 ③鈍い黄褐色	一枚造り。	

第3章 平安時代の遺構と遺物

検出番号 図版番号	土器類別 器 種	出土状況 残存状況	流量 (cm) (長・厚)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
211-25 67	鉄製品 刀子	床面+5	長 一 厚 0.4 幅 1.1 重 17.3			
211-26 67	鉄製品 鉄 簾	床面+5	長 4.2 厚 0.3 幅 0.3 重 2.1			

716号住居跡 (第212~214図、第88表、図版36・37・59・60・67・71)

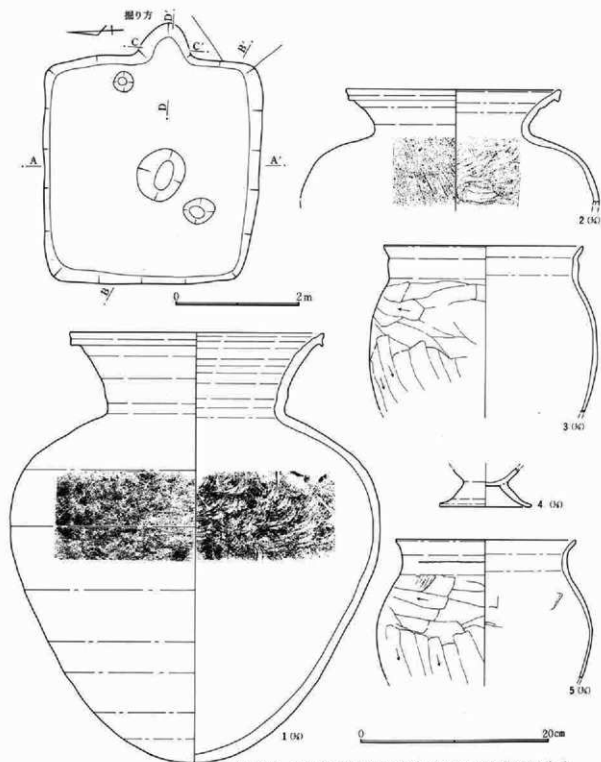
本住居跡は、第11次調査区中央の北東方向の緩斜面にあり、42-87・88グリッドに位置する。矢田遺跡の調査範囲で検出された平安時代の住居跡としては、最東端にあたる。周囲には奈良時代に属する住居跡が多く検出されている。715号住居跡(奈良)の南西隅を切って構築される。



第212図 716号住居跡実測図(1)

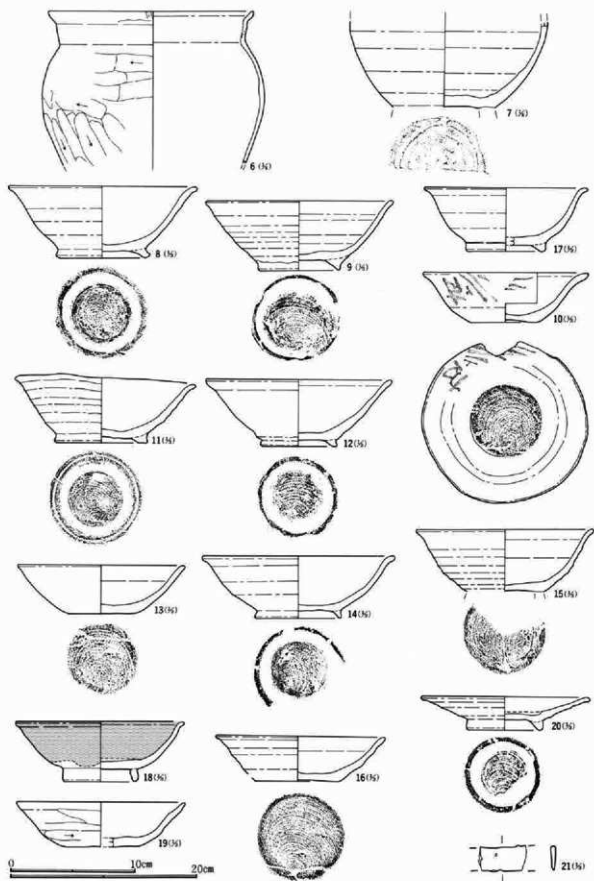
cmを測る。破損した石材が竈周辺に散乱することから、石組の構造を推定させるが、いずれも原位置を保っておらず、詳細は不明である。

遺物はやや多く、竈内部及び床面中央付近を中心に分布している。主に電覆土中で検出されている煮沸具は、コ字状口縁土師器甕で、羽釜は伴わないようである。「加 □」[寿カ]と読める墨書土器が竈内部より出土している。他に灰軸陶器境も検出されている。(富田)



第213図 716号住居跡実測図(2)及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



第214図 716号住居跡出土遺物実測図(2)

第88表 716号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
213-1 60	須恵器 大壺	床面+2 瓦残存	口(26.8) 底— 高45.4	①粗、白色・黒色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪横成形でロクロ使用。体部外面平行叩き。 内面当具痕。	
213-2 60	須恵器 壺	床面+13 破片	口22.8 底— 高—	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪横成形でロクロ使用。体部外面平行叩き。 内面当具痕。	
213-3 59	土師器 壺	覆土 破片	口(29.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方 向篋削り。下位縦方向篋削り。	内面の磨耗が著 しい
213-4 59	土師器 小版台付 壺	覆土 破片	口— 底(9.4) 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い赤褐色	輪横成形後、外面横撫で。	
213-5 60	土師器 壺	床面+19 破片	口(18.8) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方 向篋削り。下位縦方向篋削り。内面上位篋撫 で。	
214-6 59	土師器 壺	床面+17 破片	口(21.6) 底— 高—	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面上位横方 向篋削り。下位縦方向篋削り。	内面の磨耗が著 しい
214-7 60	須恵器 瓶	床面+26 破片	口— 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪横成形でロクロ使用。	高台刺離
214-8 60	須恵器 高台付塊	床面+10 完形	口15.0 底6.8 高5.6	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、やや軟質 ③明黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
214-9 60	須恵器 高台付塊	甕内+19 瓦残存	口(14.8) 底6.4 高5.5	①粗、黒色鉱物粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
214-10 60・71	須恵器 環	甕内+20 ほぼ完形	口13.6 底5.2 高3.9	①粗、石英粒多 ②酸化焰、軟質 ③残黄色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	内面に少量油煙 が付着。黒書土 器
214-11 60	須恵器 高台付塊	床面+55 ほぼ完形	口14.3 底7.1 高5.1	①粗、砂粒 ②還元焰、やや軟質 ③黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	歪みが著しい
214-12 60	須恵器 高台付塊	床面+14 瓦残存	口(14.6) 底6.0 高5.2	①粗、砂粒 ②還元焰、軟質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
214-13 60	須恵器 環	甕内+17 瓦残存	口(13.2) 底(5.2) 高3.8	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	
214-14 60	須恵器 高台付塊	覆土 瓦残存	口(15.1) 底(6.7) 高4.9	①粗、黒色鉱物細粒 ②還元焰、やや軟質 ③灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	
214-15 60	須恵器 高台付塊	床面+18 瓦残存	口(14.0) 底— 高—	①粗、黒色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。高台貼付。	高台刺離
214-16 60	須恵器 環	床面+14 瓦残存	口13.3 底6.6 高3.4	①粗、石英・褐色鉱物粒 ②酸化焰、軟質 ③鈍い黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	体部ロクロ回転 による横撫でな し
214-17 60	須恵器 高台付塊	床面+20 瓦残存	口(12.8) 底(6.0) 高(5.0)	①粗、石英・黒色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
214-18 60	灰釉陶器 高台付塊	覆土 瓦残存	口(13.2) 底(5.8) 高4.7	①細、殆ど含まない ②還元焰、硬質 ③灰白色	ロクロ成形後、高台貼付。	
214-19 60	土師器 環	床面+24 瓦残存	口(13.2) 底(5.8) 高3.5	①粗、砂粒 ②酸化焰、軟質 ③褐色	輪横成形後、口辺横撫で。体部外面下半～底 部篋削り。	

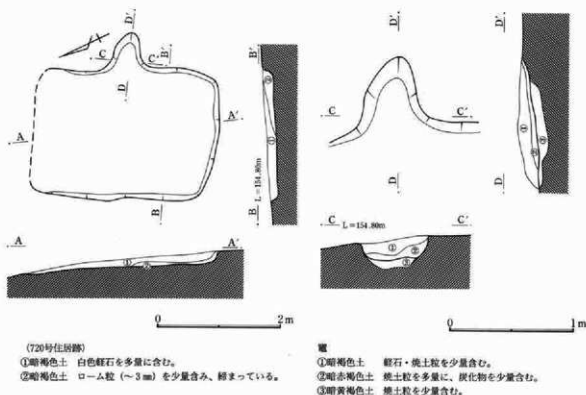
第3章 平安時代の遺構と遺物

採掘番号 図版番号	土器種別 器	出土状況 残存状況	法量(cm) (長)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
214-20 60	須恵器 高台付皿	覆土 為残存	口(13.0) 底(5.8) 高 2.6	①粗・石英・白色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部水切り、高台貼付。	
214-21 67	鉄製品 刀子	覆土	長 3.8 厚 0.3 幅 1.9 重 3.9			

720号住居跡 (第215図、図版37)

本住居跡は、第11次調査区中央の緩斜面にあり、43-87グリッドに単独で位置する。南東方向には、前出の716号住居跡が所在する。北壁が痕跡状態であるが、平面形は東西2m10cm・南北2m97cmを測る長方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-120°-Eを示す。壁高は残りの良い南壁で18cmを測る。基本的に貼床は認められず、地山を叩き締めて床面としていたと思われる。

竈は東壁にあり、幅45cm・奥行54cm・深さ12cmを測るが痕跡に近い。貯蔵穴等の付属施設については、検出されていない。遺物は極めて少量・細片で、図化できない。(富田)



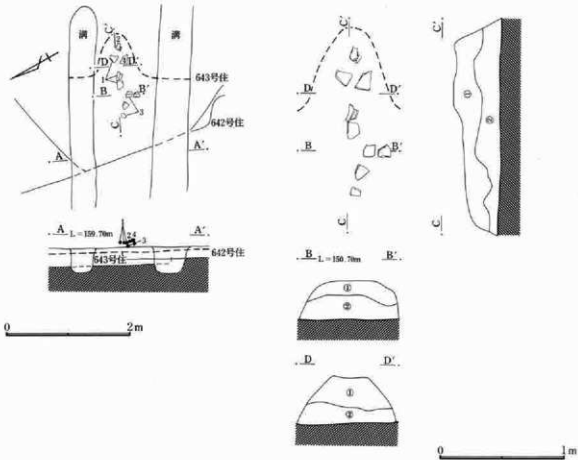
第215図 720号住居跡実測図

747号住居跡 (第216・217図、第89表、図版37・60・64・68)

本住居跡は、第8次調査区北端近くの平坦面にあり、81・82-41グリッドに位置する。643号住居跡(古墳)・645号住居跡(奈良)調査中に、竈のみ浮いた状態で検出された。覆土が完全に流失している為、十分な情報はないが、焼土粒と遺物の散布等から東竈であったと思われる。貼床はあったかもしれないが、不詳である。掘り方についても覆土中の為、明瞭ではない。従って、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設の存在もわからな

い。

遺物は竪穴周辺に集中するが、量的には少ない。(関口功)



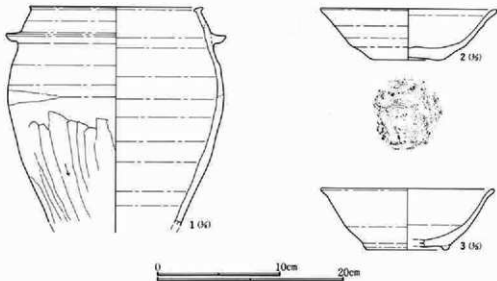
(747号住居跡)

①暗褐色土 軽石・ローム細粒を含み、締まっている。

竪

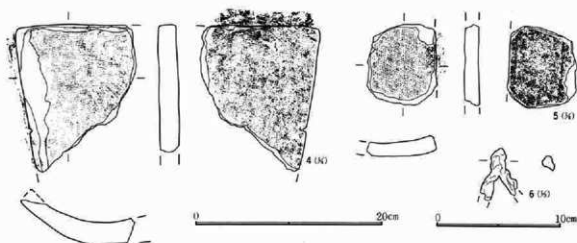
①暗褐色土 黒土粒・ローム細粒・灰を含み、やや締まりに欠ける。

②暗褐色土 ロームブロックを含み、やや締まりに欠ける。



第216図 747号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第3章 平安時代の遺構と遺物



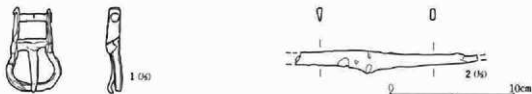
第217図 747号住居跡出土遺物実測図(2)

第89表 747号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
216-1 60	須恵器 羽釜	不明 破片	口(18.2) 底— 高—	①粗、砂粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	輪攪成形でロクロ使用。体部外面下半部削り。	
216-2 60	須恵器 坏	不明 片残存	口(14.0) 底 5.6 高 4.0	①粗、褐色鉱物粒・小石 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り。未調整。	内外両底部黒変
216-3	須恵器 高台付焼	不明 破片	口(13.6) 底(6.2) 高(4.8)	①粗、褐色鉱物粒 ②還元焰、やや硬質 ③灰黄色	ロクロ成形後、高台貼付。	
217-4 64	平瓦	不明 小破片	長— 幅— 厚 2.1	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。側面の面取り2。	
217-5	平瓦	覆土 小破片	長— 幅— 厚 1.5	①粗、白色鉱物粒 ②還元焰、硬質 ③灰色	一枚造りか。側面の面取り2?。	
217-6 68	鉄製品 ?	覆土	長 4.1 幅 2.4 重 12.1	厚—		

12・145号住居跡(第218図、第90表、図版68)

両住居跡とも過年度に報告済みであるが、報告漏れの遺物があったので、今回報告する。



第218図 12・145号住居跡出土遺物実測図

第90表 12・145号住居跡出土遺物観察表

発掘番号 図版番号	土器種別 器種	出土状況 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
218-1 68	鉄製品 鍔具	床面+21	長(6.6) 幅(4.3)	厚(1.1) 重(28.6)		[矢田遺跡II]
218-2 68	鉄製品 刀子	床面+10	長(14.5) 幅(1.0)	厚(0.4) 重(18.6)		[矢田遺跡II]

第4章 若干の考察及びまとめ

第1節 物部の分布とその意味について

新潟大学 小林 昌 二

1. はじめに

本遺跡の集落が、古墳前期の小規模な居住の廃絶後、周辺集落と同様に古墳後期の6世紀後半になって一気に成立し、平安時代の10世紀後半までの4世紀間にわたって営まれていたという事実から、この6世紀後半の成立時期に大いに注目する必要があることを既に述べ、この集落遺跡を支えた歴史的背景について次のように指摘した。すなわち本遺跡は、時期を異にする緑野と佐野の二つのミヤケの形成・展開を歴史的背景とする集落遺跡であり、またその二つのミヤケが河川交通との接点にあって「東山道」の碓氷峠に向かう位置にあるところから、大和王権の東国支配や蝦夷支配のための重大な交通路を支える政治的意義をもつものと推定した。またその歴史的背景については、緑野屯倉に関する物部や物部連氏と佐野三家には山部や山部連氏・上宮王家らのかすかな痕跡の存在を指摘し、これらも無視できないことを述べた（『矢田遺跡II』第4章第1節「矢田遺跡成立の前後」）。

本小稿では、上に要約した矢田遺跡の重要な歴史的背景をなすと見られる緑野屯倉の成立に、物部・物部連氏が上に述べたような目的において深く関与していたとすれば、こうした地域での展開は単に「東山道」沿いのこの地域にのみ痕跡を残すはずのものではなく、「東海道」や「北陸道」などの要衝の地域に向けても同様の展開の跡がいささかなりとも確認できる可能性が考えられるのではないかと仮説に立ってこの点を検討し、本遺跡の「物部郷長」などの刻字石製紡錘車出土の意味に接近してみたい。

2. 物部の分布

(1) 簡単な研究史から

いま全国に分布する膨大な物部的一端をいくつかの地点において検証しようとする場合、当然のことながら伴造系中央物部連氏の理解を避けて通れない。そのためにいささかその研究史の概観を以下簡単に記しておくたい。

この問題はまず部民制研究の重要な一環であり、また古代国家論の一角をなすが、記紀批判にもとづくとその根本史料の制約には大きなものがある。その点で物部の起源を宮廷の祭祀から軍事・警察機能への従事に理解の重点を進め、また物部の分布が西国のみならず東国にも広く展開した事実を示した直木孝次郎氏の既往の研究について、この後者の論点を継承しつつもこれに方法的批判を加えて新たな見解を提呈した野田嶺志氏の「物部氏に関する基礎的考察——物部氏の成立・展開過程の一試論として——」（『史林』第51巻第2号）が今日でも注目されるものである。

ここにおける方法的批判とは、①伴造系中央氏族が国家権力自体の成立展開過程に密着し、②伴造系氏族相互に有機的関係をもち、③その伝承は一般氏族の伝承とは異なっているとの視点からの検討が満たされること、また④記紀批判の徹底によってその基本的理解が計られることにあり、かかる視点と方法から中央物部氏の理解を具体的に提示した点で重要である。

それらによると伴造系中央物部連氏は、継体・欽明朝の内乱期に基本矛盾が激化し、地方豪族層が激しく

第4章 若干の考察及びまとめ

動揺する過程で、中央権力内の直接関係者なるが故に失脚したとして、崇仏論争をモチーフとする紀の記述を批判している。その一旦は没落した中央物部連氏は、天武・持統朝での踐祚大嘗祭の儀衛独占で復活し、書紀の物部関係記事の多くがそのときに新しく出発した石上氏との関係で創作されたものであるという。

さて中央物部連氏の興隆を二つの画期でとらえるこの野田説では、その前段となる物部の源流からの展開の特質をいかなるものに求めているのであろうか。

この点についてその源を南大和の生産技術集団にもとめ、5世紀前後の王権の河内平野開発において国家生産機構にトモ集団として編成され、5世紀中葉から6世紀の前半にかけての大和朝廷の全国支配の過程において全国の開発・取奪に携わり、したがって国家制度の整備過程で「大連物部」氏となったとする。またこのときに地方支配層の中央服属儀礼の場としての石上神宮の原形が成立し、これを管轄し、祀官を支配したとして、全国に分布する膨大な物部が成立したと位置づけている。

繰り返しになるが私見もまた本遺跡の成立の背景に中央物部連氏に密接する緑野ミヤケの存在を考えているので、この最後の部分での全国に分布する物部の成立の時期を二つの画期の前段に位置づけていることが注目されるのである。

さて以後も伴造系中央物部連氏の研究は少なくないが、それは生産技術集団の性質が金属精錬に求められているという研究や物部の祭祀の性質や関与の研究などに向けられているものであり、国家生産機構にトモ集団として編成され、また全国に分布する膨大な物部の成立に関与した問題の研究は活発であるとはいえない。そのためいきおい生産技術集団としての伴造系中央物部連氏との関連でトモとして地方の物部が形成された時期についても一応同様に5世紀中葉から6世紀の前半に見ておさざるをえない。この点では矢田遺跡周辺の集落遺跡には6世紀の前半の成立も少なくないところから、6世紀後半に一気に成立する矢田遺跡についてはその二次的な展開とする理解も可能であろう⁽⁶⁾。

さて全国に分布する物部の史料群を補う形で本遺跡の9世紀段階の住居跡から「物部郷長」刻字石製紡錘車が出土したことは時期の差があるとはいえまことに貴重なものである。この時期の相違を踏まえてその歴史的位置づけを求めようとするのがここの一つの目的でもある。

以上の研究史の簡単な概観をふまえて、「はじめに」で述べた本遺跡の「東山道」筋の理解のために、「東海道」筋と「北陸道」筋における物部の分布の特徴について検討を進めたい。

(2) 東海・東山・北陸の三道における物部の分布

① 東海道諸国の分布

「東海道」筋の12か国における物部の分布は、第91表のように上総国を除く11か国にその存在が知られるが、上総国といえども資料のあり方によることも決して否定できない。

さて10世紀延長年間に相次いで成立した「和名抄」や「延喜式」において見られる物部郷や物部神社といえども、中央物部連氏の第二段階天武・持統朝以降の成立というよりも前述の第一段階の歴史的な展開と密接して成立した地方物部と考えられる⁽⁷⁾ので、それが郷名や延喜式内社の名称として見られることは、その地域の地方的有力層の存在と密接していたものとして第一に注目しなければならない。この点を見ると、物部の郷名は、尾張国愛智郡、駿河国益頭郡、下総国千葉郡における計3郷にとどまるが、物部神社は伊勢国飯高郡と志保郡の2社、尾張国愛智郡と春日郡の2社、甲斐国山梨郡1社の計5社が知られる。

物部郷と物部神社の両者がまたいづれかが存在する諸国は5か国になるが、人名の分布として知られるものは第91表にもあるように、伊賀国、伊勢国、尾張国、三河国、遠江国、相模国、下総国、常陸国の8か国

第91表 物部分布表

地域	国名	物部郷	物部姓氏	人	名	その他
畿内	大和国			物部織麻呂(化仁4・正)		物部郷
	山城国			物部千代(近衛勲文書)、豪右部人物部古吉(近衛6)		
	河内国					物部郷名、物部宮
	和泉国					物部郷
	摂津国					物部宮
東海	伊賀国			物部織麻呂(尾形頼母母弟)		
	伊勢国	飯高郡 也根郷		物部伊勢守(藤原記)		
	尾張国	賀茂郡 春日郷		物部守守(東山道・2・12)、物部高敏(内裏)・3)		
	三河国			物部織久(弘仁4・正)		三河国造物部連河能(国造本紀)
	遠江国			物部石山能(天平)藤原国正(教部、後鳥羽院勅、万葉集など)		遠淡海国造物部連河能(国造本紀)
	駿河国	諸郡				久野国造(国造本紀)
	甲斐国	山陽郡				
	伊豆国					伊豆国造物部連河能(国造本紀)
	相模国			物部朝臣女(孝安朝、大正2・3 藤原記)		
	上総国					
	下総国	千栗郡		物部織(藤原)上丁、万葉集)物部千刀及(山辺郡上丁、万葉集)		
	群马国			物部国造(黄野)・引小山(下野屋内、大乙上物部由幸(敦親風上))		久自国造物部連河能(国造本紀)
東山道	江国	美土郡	(物部和津神)	物部伊勢伊賀麻呂(元元元・9)豪右部人物部伊賀(藤原3・10)		
	美濃国	多芸郡 支内郡 本多郡	多芸郡 厚見郡 本多郡	物部麻呂(元元元・11)他、大正2年伊勢、天平御定2年国司解		
	信濃国			物部連伊賀(藤原朝人自朝臣・3)		珠流河国造物部連河能(国造本紀)
	上野国			物部神麻呂(天平御定元・10)、物部千足(神皇正統記)		
	下野国	芳賀郡				
	武蔵国		入間郡	物部織麻呂(百部郡)藤原(万葉集)、物部連見麻呂(藤原記)		
	出雲国					
	陸奥国			物部(近江)物部連(大正承和7・3)		
	飛騨国					
北陸	若狭国					
	越前国			物部千代(天平3 国司未詳(藤原))、物部朝大乙(天平御定2 国司解)		
	(出雲国)					
	(美濃国)					
	越中国		射水郡	物部連(藤原)少部吉(藤原記)		
	越後国	物部郡	物部郡 三輪郡			
	佐渡国		物部郡			

である。

次に物部姓の存在を確認できない伊豆国については、「国造本紀」に「伊豆国造 神功皇后御世物部連祖天孫鉾命八世孫若建命定膳国造」とあることもなお参考してみなければなるまい。この「国造本紀」には、物部連祖につながる国造についてそのほかに、三河国造、遠淡海国造、久野国造、珠流河国造、久自国造(以上東海道)、三野後国造(美濃国・東山道)、小市国造、風早国造(以上伊予国・南海道)、松津国造(筑前国・西海道)が記されているが、その東海道地域の多いことが注意される。

参考して見なければならぬものになお直木氏が挙げている物部複姓者の分布の問題もあるが不明の点が少ないのでここでは敢えてふれないでおきたい。

② 東山道諸国の分布

「東山道」筋9か国の物部の分布では、第91表のように物部郷の存在は、近江国栗太郡、美濃国多芸郡、同安八郡、同本果郡、下野国芳賀郡の3国6郷に及ぶ。また物部神社は、近江国物部布都神(『三代実録』元慶六年十月条従五位下に神階叙位さる、式外社で所在郡不明)、美濃国厚見郡、同国多芸郡、同国本果郡、武蔵国入間郡の3国5社が知られる。

次に物部の人名の分布は、近江国・美濃国、信濃国、上野国、下野国、武蔵国、陸奥国であるが、飛騨国

と出羽国は見られない。

以上のように、東山道諸国9国における物部の分布は、飛騨国、出羽国に見られないもの他の7国への広がりが知られると言ってよい。さらに美濃国において特に顕著な分布状況が指摘できる。これは東海道筋の伊勢国や尾張国への分布の顕著さあるいは対応するかもしれない。

③ 北陸道諸国の分布

「北陸道」筋は一応7か国とはいうものの、7世紀の末まで若狭国以外おしなべて越国に括られていたことはあらためて言うまでもない。

物部の分布は、やはり第91表のように、物部郷についてはわずかに越後国頸城郡に1郷が見られるだけであり、物部神社は、越中国射水郡、越後国頸城郡、同国三嶋郡、佐渡国雑太郡の3国4社が知られる。

物部の人名の分布は、越前国には坂井郡、足羽郡、丹生郡、江沼郡、敦賀郡で広く見られるほかには越中国に見られる程度である。

僅かな史料から明確な分布の特徴を指摘することは容易ではないが、ここでも一応越国全体への分布の傾向を読み取ることができそうである。とりわけ当時は辺境の越後国頸城郡に郷名や神社として結果する様相は注目されてよい。

④ 三道における物部の分布の特徴

東海・東山・北陸の三道における物部の分布の特徴には、次の点が指摘できそうである。

まず第一に、史料の偏在という古代史にありがちな問題を考慮しても直木孝次郎氏が主張されたように中央伴造物部連氏の地方的伴造・部民の系譜を引く集団は東日本地域にも広く存在していたことであろう。

第二には、広範囲に及ぶ分布のなかにあつてなおその分布のあり方にはわずかではあるが濃淡が指摘できそうな様相がある。すなわち東海道、東山道が接近する伊勢・美濃・尾張の三国には、物部郷・物部神社の分布の多さとなって色濃く表れていると見られることである。北陸道の越前国の各郡に及ぶ物部の分布をも参考にするるとこの地域は後の三関国にも該当・近接し、注目される。

第三に蝦夷と境を接する地域の下総や常陸、それに越後地域に明瞭に分布していることである。下野国には物部郷があり、常陸国では『釈日本紀』所引の「常陸国風土記」信太郡の記事において小山上物部河内、大乙上物部会津が惣領高向大夫に請いて立評したことが知られ、豪族的物部の存在が確認できよう。他方北陸道の越後国頸城郡には物部郷と物部神社とが知られているが、これは現存する物部神社を中心とした現在の中頸城郡板倉町と清里村にまたがる地域と考えられており、この高田平野東南部には6世紀後半～末ころに横穴式石室墳の大群集墳群が出現する。その特徴について「軍事的な性格が強く、均質な構造をもつ群集墳のあり方は、いかにも屯田兵的な植民を思わせるものがある」との指摘があるように(8)蝦夷と境を接する軍事的な緊張をうかがわせるものである。

第四に、「国造本紀」には東海道の三河国造、遠淡海国造、久努国造、珠流河国造、伊豆国造、久自国造がその出自を物部連祖としている。これらの国造の出自が物部連祖であることを他に支証する記録は乏しいが、元来物部連氏を顕彰しようとの意図から出た『先代旧事本紀』の「国造本紀」としては10国造にとどまり、その付会の意図を指摘することは困難である。また東海道以外の三野後国造、小市国造、風早国造、松津国造の推定地域にも物部の分布が知られるとともに、東海道の三河、遠江、駿河にも物部の分布が見られ、この記述の如何がどうであれ、物部の展開した地帯として注意する必要がある。

以上限界の多い僅かな史料からではあるが、東海・東山・北陸の三道における物部の分布は、東日本地域にも広く分布し、特にその交通の要衝地帯や蝦夷と境する諸国に明瞭なその痕跡があるといえよう。

3. 石製紡錘車刻字「物部郷長」などについて

(1) 「物部郷長」などについて

12号竪穴建物跡（9世紀後半）から出土の「物部郷長」刻字石製紡錘車については、「矢田遺跡II」第4章第2節「物部郷長の世界」として関和彦氏がすでに詳しい検討を行っている。そこでは「郷長」関係出土文字資料の検討を通してこの「物部郷長」の物部が、郷名ではなく氏名であることを指摘している。また今回の「矢田遺跡III」に掲載されている出土遺構679住23（9世紀前半）からは、上面に「八」、下面に「物」八田」とする刻字石製紡錘車が出土している。上面の「八」の文字の意味は明らかでないがこの前者の遺構と後者の遺構とは半世紀の時期の相違とともにその位置を200メートル余隔っている。下面の「物」八田」は、物部の八田ではなく、出土遺構88住5（9世紀前半）の刻字石製紡錘車の「牝馬 馬手 為嶋名」と同様に人名の物部を意味し、つづく八田も人名の可能性が否定できないが、ここでは一応矢田郷の意味に解釈し、八田郷の物部と解釈しておきたい。

さてこの二つの「物部」に関する同じ刻字石製紡錘車による資料は、出土地が200メートル余離れているので、両者が時間的に連続する同一系統の紡績生産の遺物なのか、それとも一族の別の紡績生産の資料なのか、半世紀程の時間差をもっているもので明かではない。住居遺構の全容が判明し、その時間的な変化の推移が追求できるよう整理が進んだ時点であらためて考えてみたい点である。しかし、高崎市の中村東遺跡（9～10世紀）からの「物部私印」の出土や、群馬郡下賀郷高田里結知識碑（神亀三年）に見える三家子孫の物部君子足らなど相当の分布が推定できることから、今は矢田郷に居住する物部一族の別々の単位集団の紡績生産の資料としてみておきたい。

ここで群馬郡下賀郷高田里結知識碑（神亀三年）に見える三家子孫の物部君子足らのことにふれたが、これは前回「矢田遺跡成立の前後」（「矢田遺跡II」）で扱ったミヤケの問題に触れ、また「日本古代の集落形態と村落（共同体）」（『歴史学研究』626号）においてでも述べたことである。

すなわち上野国甘栗郡緑野屯倉や片岡郡佐野屯倉がこの矢田集落遺跡成立の歴史的背景をなすものとして重視することは、繰り返しになるがおよそ次のような問題になるからである。

その矢田遺跡集落は、6世紀後半に一気に成立し、以後10世紀まで継続して営まれたことがすでに明らかになっているが、矢田遺跡の立地する鍋川沿い集落遺跡の殆どは4世紀段階の集落の断絶のあとで6世紀前半と後半との二つの時期に矢田遺跡と同様に一気に成立する特徴を示している。この6世紀集落の出現は、やはり安閑紀二年の全国的な屯倉の設置記事にみられる上野国緑野屯倉の設置に関わり、物部の主導によると解されるものだからである。矢田遺跡より出土した9世紀段階の石製紡錘車に線刻された「物」八田」や「物部郷長」の文字は、以後の集落の継続に対応して居住してきた地方物部氏の存在を如実に示すものとみられるのである。

また天武十年（681）に比定される「山ノ上碑」における「佐野三家」や「万葉集」にみられる「佐野田」は、7世紀初頭の推古十五年の「亦国毎に屯倉を置く」に関わるとする指摘（尾崎喜左雄氏「上野三碑の研究」）があり、また神亀三年（726）高田里結知識碑の三家子孫・氏人の記載につながり、「万葉集」3418番の記述にある「うらなへ」の神事として継承されていたことも見逃せない。

さて、畿内の大園遺跡集落の変遷を分析した広瀬和雄・吉田晶氏らの仕事によると、6世紀末まで続いた集落が7世紀初頭に「怒然」とその姿を消す現象を解釈して、推古十五年の記事に見られる国家的な開発政策に伴うものとし（『高石市史』第一巻）、6世紀中葉以降の屯倉・部民・県などの設置、国造任命に伴う畿内の大天王権の支配権の確立を前提にした推古朝の国家的開発の存在に関連づけている。その後、そうした

ミヤケについて律令制の確立過程で廃止されていくが、畿内のミヤケの一部は、律令官田に継承された。その際にその他のミヤケはどのようになっていったのであろうか。あるいはそのミヤケの田の経営や耕作に關与した労働力や経営構造、そしてまた彼らの集落はどのようになっていったのであろうか。矢田集落遺跡の物部の存在は、このような問題に関して考えていくことのできる資料であるといえよう。また「田部」などの墨書土器による文字資料も同様の資料である。矢田遺跡からの出土はないが、問題の所在を確かめるために節をかえていささか触れてみたい。

(2) 8世紀後半～10世紀前半の「田部」の資料

矢田遺跡の真西約3キロの神保丘陵西端にある長根羽田倉遺跡から10世紀前半とされる須恵器の坏の外部に「田部カ」と墨書する土器が1点出土している。また群馬県前橋市の柳久保遺跡群の中嶋谷遺跡から、8世紀後半のものとして「田部」2点、部の略体文字の「田・」2点、「大田」1点、「下田」1点、また9世紀前半のものとして「田部」、「下田」各1点、9世紀後半の「田部」1点と時期の不明な多数の「田部」の墨書土器などが出土して注目されている。

前者の長根羽田倉遺跡からの出土の1点だけからすると、「茂」、「次」、「加」、「家」、「室」、「口（橋カ）口（家）家」、「得カ」などとある他の須恵器の坏や高台の坏、皿、碗、などの墨書からすると食器具を区分するための標識として、氏名などの一部を書いたものとも考えられなくもないが、後者の中嶋谷遺跡の場合は、「下田」や「上田口寺」、「大田」などがあり単に氏名を記して区別したとは思えない。無論こうした田に関する以外の「秦」、「存カ」（4点）、「刑カ」、「大カ」、「徳」、「奠カ」、「目」、「木」（2点）、「二カ」などの墨書もあり、これらの文字使用に共通する墨書であると考えなければならない。また90号土坑11出土の土師器の坏の外底面には「乙呂 乙公 若公 田部」と記されているケースもあって、さきに触れた矢田遺跡の出土遺構88住5の「牝馬 馬手 為鶴名」とある刻字石製紡錘車と同様に氏名に近い使用も否定できない。しかし「大田」、「下田」などととも用いられる多数の「田部」の墨書は、ミヤケの設置の確かな地帯に近接しているところから歴史的なミヤケの田部に関連する可能性がきわめて高いものと言わなければならない。

それにしても8世紀後半～10世紀前半の時期に、なぜ「田部」の墨書が存在するのか、やはり大きな問題であるといわなければならない。この問題のためには一つの学説（赤松俊秀氏「大化前代の田制について」・「公営田を通じて見たる初期荘園の構造」など『古代中世社会経済史研究』所収）が想起されなければならない。

すなわちそれは、律令田制における口分田の前提となったものが共同体の規制の強い一般集落の耕地であり、ミヤケ・タドコロではない。ミヤケ・タドコロは、屯田、勸旨田、官司田としてまた公田＝乗（剩）田としてその耕地が継承されたものであり、またミヤケ・タドコロの経営には賦役、田部の特定が重視されているが賃租経営が正当に評価される必要があるとする。賃租は公田において行われ、その公田地子は太政官厨家に送納されたところからもミヤケ・タドコロの系譜がたどれると説くものであり、この賃租が、公田と同じ役割をもった初期荘園の東大寺領越前国桑原荘にも採り入れられており、これが奈良時代後期に桑原三宅と称されたところからミヤケ・タドコロから初期荘園の系譜をたどるうえで意義深いとされているのである。

たしかに国の公的な田制としてミヤケは廃止になったが、しかしそれが賃租経営として公田に継承されたとする理解は、なおあらためて賦役、田部の存続の問題をも含めて見直される必要があると考える。すなわちミヤケを歴史的背景として成立したと考えられる矢田遺跡やその周辺の集落遺跡が6世紀～10世紀にわ

たって継続する事実は、集落の継続のみならず耕地継承とその経営の何らかの遺制の継承を当然想定させるからである。班田収授制が崩壊していく9世紀に、国家の側からは公営田・官田などのさまざまな経営が試みられていったが、他方在地における私営田経営や田刀経営などがそれに密接な関連をもつものであったことはすでに赤松氏が指摘されている（前掲）とおりであるが、矢田遺跡周辺の長根羽田倉遺跡から「田部」の墨書が出土している事実は、この集落の継続の問題とともに「田部」の名称の連続性が考えられなければならないことを示している。

以上、矢田遺跡周辺の8世紀後半～10世紀前半の「田部」の資料についてミヤケの「田部」に系譜を有する可能性を述べてきた。これは迂遠のようであるが、矢田遺跡に出土した9世紀段階の石製紡錘車線刻の「物部 八田」や「物部郷長」が示す矢田郡に蟠居した物部一族についてその系譜が矢田遺跡成立の6世紀後半にさかのぼって理解できることを推測させるからである。

4. 結びにかえて

「はじめに」で述べたように、これまでの検討によって矢田遺跡に出土した9世紀段階の石製紡錘車線刻の「物部 八田」や「物部郷長」の意味についてアプローチをこころみ、この地の物部の系譜的起源を矢田遺跡成立の6世紀後半にさかのぼることを推測し、ミヤケ設置との関連性もより容易に理解できることを述べてきた。たしかにこの場合ミヤケ設置との関係を推測することは容易になったわけであるが、それが如何なる目的をもったものであったかを理解するうえにおいては、前稿で指摘した単なる「交通の要衝」との推定にとどまっては歴史的理解という点で不十分であろう。

すなわち「2. 物部の分布」(2)の④でも述べた蝦夷と境を接する越後の群集墳に見られる軍事的な性質の問題になおも触れて地域的に接する上野国の物部の参考にした。

『新潟県史』通史編1原始・古代の第4章第5節「群集墳の展開」(甘粕健氏執筆部分)は、5世紀後半に新潟県内の古墳文化の様相が大きく変化し、まず魚野川左岸の飯綱山丘陵斜面に65基の円墳が、また小さな谷を隔てた蟻子山にも同様な91基の円墳が出現することを分析し、飯綱山古墳群の盟主的10号墳が角礫と円礫をまじえた2基の竪穴式石室を有することなどから5世紀後半～末のものとし、また有孔円板や勾玉形の石製模造品を副葬する6世紀前半までのものや瑪瑙製のコの字形の勾玉を副葬する6世紀後半から末頃までの古墳の存在から、この古墳群の時期を特定している。またこの飯綱山古墳群の構造の考察を行い、同10号墳から出土した短甲2領、鉄製鎧2振、鉄製馬具が当時最新の装備であるところから、この被葬者・武人の首長を頂点に編成された有力な農民の共同体であり、また軍事集団であったとしている。これらの武具は大和政権が掌握していた畿内の専門工人の製品と考えられており、特定の大首長によって編成された従属的な軍事集団の統率者としている。この魚沼地域とともに初期の群集墳は高田平野西南部の矢代川左岸の南葉山山麓丘陵に展開する192基の円墳群があるが、出土遺物が少なく年代の特定などが困難であるという。そしてこの両地域の初期群集墳を比較して魚沼の群集墳が外来の大和政権直属の集団の古墳群であるのたいして高田平野西南部古墳群は在地集団による地方色の強いものとしている。

この両地域に6世紀後半から7世紀にかけて畿内や北関東の先進文化と直結した横穴式石室の群集墳が出現する。魚沼地方の典型的な横穴式石室をもつ塩沢町の吉里古墳群について、その跡塚一号墳などの分析から騎馬の下級指揮官に率いられた小編成の武装集団が想定されている。そしてこの須恵器群の一群が群馬県菅ノ沢宮のものに一致することが確認されているなどその関係が目ざされている。魚沼地方ではやはり塩沢町に南山古墳群があり、また高田平野西部には谷地林、梨ノ木、小丸山古墳群が、東南部には首原、

第4章 若干の考察及びまとめ

水科、宮口古墳群が形成されるが、6世紀後半からのものとされており、東南部の群集墳が物部郷・物部神社の地域に当たり、菅原古墳群の前方後円墳被葬の軍事的酋長に編成・指揮されたものであると推定している。

以上のように6世紀後半から7世紀にかけて畿内や北関東の先進文化と直結し、蝦夷と境を接する越後の横穴式石室群集墳被葬集団の軍事的特徴の強調は、東山道の北境の検討をも必要とするものであるが、今はその余裕がない。ここでは東山道上野国の矢田遺跡の周辺が、北陸道の越後地域に接し、また東山道の北境につながる交通の要衝であることを確認することで結びとしたい。

注

- (1) 詳しくは、第2表「矢田遺跡周辺の遺跡」(『矢田遺跡』平安時代住居跡編(1)15頁、1990年)を参照。
- (2) この点は本稿の第三において述べていくが、『矢田遺跡II』平安時代住居跡編(2)1991年、において関和彦氏が郷長論として詳説している。小編ではこの物部の起源をどの時点までさかのぼって考えるべきかを問題にする。
- (3) 「物部連に関する二、三の考察」(『日本書紀研究』第二冊、塙書房、1966年)
- (4) 畑井弘氏「物部氏の伝承」(吉川弘文館、1977年)
- (5) 泉谷康夫氏「物部氏と宗教」(『日本書紀研究』第十六冊、塙書房、1987年)、亀井輝一郎氏「秦記風儀礼と物部——穂積・采女臣との同祖関係の形成をめぐる——」(『古代史論集』上、塙書房、1988年)、櫻村寛之氏「物部の種を巡って」(『日本書紀研究』第十七冊、塙書房、1991年)、矢野健一氏「瀬川流域の熊蓋遺跡と貫前(抜鉏)・宇都神社」(『矢田遺跡II』第4章第3節)
- (6) 拙稿「矢田遺跡成立の前後」(『矢田遺跡II』第4章第1節)では、直ちに矢田遺跡成立の歴史的背景としてのミヤケの成立を6世紀後半において結びつけようとする考えであったが、ミヤケの成立を6世紀前半において理解する必要もあり、この可能性をも考えここに述べた。
- (7) 第2段階の物部氏にはあらかじめ物部を標榜する新たな集団編成のできる条件に欠けると見られる。
- (8) 『新編歴史』通史編1原始・古代の第4章第5節「群集墳の展開」(甘粕健氏執筆部分)

第2節 矢田遺跡と養蚕

共立女子第二高校 関 和 彦

1 はじめに

遺跡は一つとして同じものはない。地域・時代は勿論のこと、遺跡の性格、規模など様々な様相を具体的に示す。本矢田遺跡もそういう意味で言えば、多くのことを我々に語りかけようとしている。筆者の目に、耳に入る範囲で矢田遺跡の語り掛けをまとめると次のようになる。

- (a) 共同体の具体的在り方、歴史的展開を浮き彫りできる。
- (b) 行政組織「里・郷」と村落の関係を追える。
- (c) 文献・金石文資料と文字資料の世界との融合から、地域の歴史像を素描できる。
- (d) 石製紡錘車等の検討から古代の養蚕、そして布生産の具体的な様相を検証できる。

以上の全てをここで論じることは出来ないが、(a)に関しては既に「矢田遺跡II」で小林昌二氏が論じ、(b)については拙稿で概観しておいた。(d)の布生産に関しては中沢悟・春山秀幸・関口功一氏のすぐれた共同研究がある。⁽¹⁾本稿では(d)の「古代の養蚕」を(a)の「共同体の具体的在り方」とからめて論じてみたい。

2 単位集団確認の方法

遺跡に広がる数ある建物址の中から「単位集団」を析出する試みは、多くの研究者によって展開されている。筆者も古代の「家号」という観点を導入して仮説を提起してきた。しかし、建物址をグルーピングする際には、確かな一定の法則をもって「単位集団」を確定したかという不安である。現に筆者が学んだ今日の学界到達点においても「竪穴住居」3～4棟を想定する論者、そして2棟とする論者と大きく見解が分かれていることが、その点を明確に語っていると見えよう。筆者はその「単位集団」を構成する「竪穴住居」の中に非住居が混在している可能性を指摘し、「竪穴建物」の使用を提起しているが、それは今までの研究には悪しき先入観と恣意性があるとの認識の上での問題提起であった。⁽²⁾それ故、ここでは現状において出来る限り恣意性を排除し、研究者誰もが手順として踏むべき方法を模索しながら「単位集団」の確認を矢田遺跡で試みてみたい。

その1. [地理的規制]

遺跡の広がりや地理的規制を受ける事例は数多く知られている。矢田遺跡の地理的環境に関してはすでに「矢田遺跡」第2章第1節で概観されているのでそれに譲るが、矢田遺跡が立地する段丘に関しては再確認しておきたい。

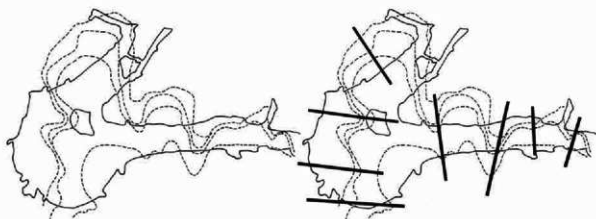
遺跡は、多胡段丘の東部、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北に伸びる台地上を占めている。この台地も、さらに侵食による南北、または東西方面への小支谷が形成、食い込み、それが遺跡内の遺構を幾つかの群として生成せしめる。第219図は矢田遺跡全体の遺構分布図であるが、全時代を通じて遺構が確認できない空間地が確認できる。第220図は矢田遺跡発掘前の等高線を参考にした小支谷の食い込みを示したものである。地図上の〔…〕は北側から等高線の150・152・154mを示している。その両地図を併せて見てもらえばわかるように遺構の空白地の殆どはその小支谷の所在地と重なり合う。小支谷はそれぞれ涌水等をとまない、他よりも傾斜地であることから建物等の用地としては避けられたものと考えられる。その小支谷に〔—〕をつけ、明示すれば7小支谷を紹介できる〔第221図〕。全てこの矢田遺跡のような地理的条件をとまう可能性は少ないと思うが、まずどの場合も細かな観察の上で、地理的条件によって区分できる状況を確認する

第4章 若干の考察及びまとめ

必要があると考える。



第219図 矢田遺跡遺構分布図



第220図 矢田遺跡発掘前主要等高線図

第221図 矢田遺跡小支谷分布図

その2. [遺構分布の検討]

地理的条件による第一区分を基礎に次に遺構の空白地に目を向ける作業に移る。但し、遺構の空白地とは諸々の事情により施設の敷設が避けられた場所であり、その事情を十分に吟味することが肝心である。事情

によっては空白地が本稿が析出しようとする共同体区分の境になる場合と、逆に共同体の要となる中庭の遺構の可能性もある。そこでその両者を識別する方法を導入する必要が出てくる。この場合、一定の方法をもたず、研究者の個人的感覚で判定することは避けるべきであろう。個人的感覚、すなわち恣意性にまかすならば、時間的差異はあっても確実な事例から推察する方法を現状では優先させるべきと考える。それは決して十全ではないが、現状の方法よりベターであろう。

そこで注目されるのは著名な黒井峯（西組を含む）遺跡である。しかし黒井峯遺跡は、発見直後、古代村落研究に決定的な「生」の素材を提供したと評価はされたが、最近では当初の華々しきはなくなり、未だ十分に古代村落研究の素材として活かされていないという状況にある。それは黒井峯遺跡が我々に示した村落の現実像と古代史研究者の「イメージ」してきた村落像とは「違和感」があるとされ、黒井峯遺跡は古代の一般的村落ではなく、山村、あるいは当該地域の特殊村落との認識も出されているのが現状である。果して黒井峯遺跡を特殊として彼単におくだけの、それと比較する「一般的村落」像を古代史研究者が持っているのでしょうか。黒井峯遺跡を十分な検討をせず、古代村落研究の中心から外すのは時期尚早であり、現状では古代村落研究に決定的な「生」の素材として対処すべきと考える。ここで黒井峯遺跡の遺構図（第222図・第223図）を検討してみたい。

第222図の黒井峯遺跡、そして第223図の西組遺跡では棚状遺構で囲まれた建築址群がそれぞれ一棟の竪穴建物址と単位集団を構成していることが指摘されている。ここでまず確認したいのは各单位集団相互の境となる空白地である。棚状遺構が明確なA・D・E・Fを見るならば、近接するA・D、A・E、D・Fの間隔は最長30m、最短10m（ともに約数）という数値を得ることができる。また最短のD・F間の空白地を見ると南北に走る帯状形態をとり、A等に見られる中庭とは明らかに相違することがうかがえる。その点を踏まえると、事例が少ない難点はあるが、単位集団相互を区分する貴重な目安となろう。

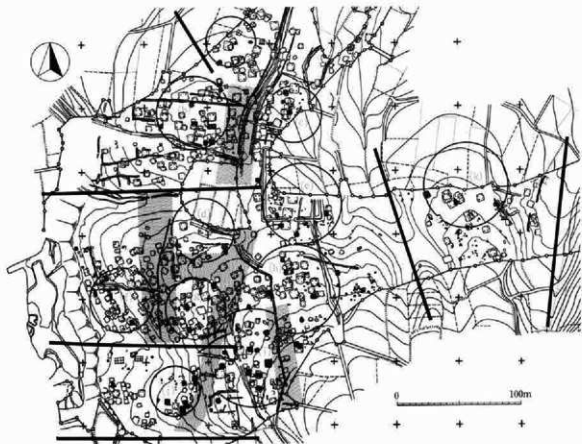
次は逆に単位集団の空間的規模について確認しておきたい。今までは単位集団の確認を竪穴「住居」の数で展開していたが、竪穴「住居」の中にも非住居の竪穴建物の存在が想定されること、平地建物・高床建物の存在も考慮すれば、棚状遺構で囲まれた（一部、棚状遺構に付随する竪穴建物を含んで考える）空間をより重視すべきと考えるからである。ここでは第222図のA・D・E・Fと第223図の西組遺構のGの5遺構を



サンプルとして概観してみたい。遺構Aは半径40mの円に大型竪穴建物、そして棚状遺構が配置される。遺構Dは半径20mの円に竪穴建物、そして棚状遺構が配置される。他のE・F・GはF・GがAと、EはDと同じ規模と観測される。ここでも類例が少ないが、5遺構は大きくみて大小の2群に分類でき、大は半径40m・小は半径20mの円という数値で整理されることがわかる。この数値は単位集団を確認する上で重要な尺度となると考える。

3 矢田遺跡の検討

矢田遺跡での竪穴建物遺構の編年は50年を単位になされ、9C前半24軒、後半79軒、10C前半104軒、後半45軒、不明その他22軒と分類がなされている。ここでは紙幅、時間の都合上、一番件数の多い10C前半に限定して具体的に検討したい。但し、このような場合、あくまで形として901年から950年という50年であり、876年から925年で区切れば若干異なる像がでるといことはお断りしておきたい。第224図は矢田遺跡遺構分布図（紙面の関係で遺跡北側の3遺跡、そして東側をカットした）の10C前半期の竪穴建物（スクリーン）と、赤色はそのうち紡錘車を出土した遺構を示す、地理的規制、そして黒井峯遺跡での確認で想定した帯状空白地をそれぞれ（—）、〔網懸〕で示した。その地理的規制、そして帯状空白地は単位集団相互を区切る境界帯としてとらえたい。次に単位集団の空間的規模を「大小2群に分類でき、大は半径40m・小は半径20mの円という数値」を念頭において描いたのが(a)~(d)の円である。このうち(i)は南北二つに区分できる可能性もあるが、テリトリーが狭くなることから一つとした。そのように何処に円の中心をとるか、また円の大きさをどうするか問題は多々あるが、気を付けたのは中庭（黒井峯遺跡を参考にして竪穴建物相互の間隔が20mを



第224図 10C前半の矢田遺跡

越えない程度)の間隔である。それによりある程度恣意性は作業の実感として排除されたと思う。

4 矢田遺跡と紡錘車

(a)から(k)までの11の単位集団のうち紡錘車を伴うのは(b)・(f)・(h)・(i)の4集団である。(a)・(c)・(d)・(e)・(k)は未発掘地での出土も想定されるがそれ程変化はないであろう。紡錘車に関しては前述した中沢悟・春山秀幸・関口功一氏の研究がある。三氏は明確には述べないが、紡錘車を麻の繊維を紡ぎ撚りをかける道具として位置づけているようである。紡錘車についての歴史学からの本格的研究はない。筆者は、「矢田遺跡II」で繭糸にも紡錘車は使用されたとした。今後の研究の進展の礎としてその点に関して更に私見を陳述してみたい。古代社会一般におけるの養蚕の展開、そして古代社会におけるその重要性については別稿で論じておいた。矢田遺跡で養蚕、そして絹糸生産が行われていたことを暗示するものとして121号竪穴建物から出土した繊維15片がある。中田節子氏の分析によれば、材質は絹であり、繊維は撚りをかけてあるという⁽⁴⁾。この繊維に撚りをかけて糸にする道具としては紡錘車以外にはないであろう。その点を踏まえて紡錘車の豊富な矢田遺跡は養蚕が盛んな地域と特色づけたい。

矢田遺跡では石製紡水車21点、鉄製紡錘車3点、計24点の紡錘車が出土している。そのうち線刻を施した紡錘車には前稿で検討した「物部郷長」を線刻したものをはじめとして8点確認されている。そのなかで注目されるのは「物部郷長」ともう一つ「牝馬 馬手 為嶋名」という刻書である。この紡錘車は83号「住居」址(9C前半)から出土したものである。この刻書に関しては春山秀幸氏が言及し「文章の体裁をもつ。制作時の整形の擦痕が顕著に残る広面に比較的明瞭に線刻されている。『馬手』は馬の調教にあたる職名ともみられるものの不確定である。『嶋名』についても人名・地名の可能性があるとす。字数が7文字というなかで、解釈の可能性を示すが、今後の課題とするのも現状では止むを得ないであろう。しかし、紡錘車への線刻としては7文字は極めて多いものであり、情報量も豊富といえる。ここで憶測を交え、7文字に関する私見を展開したい。まず「牝馬」であるが「矢田遺跡」では「牝馬」とする。「馬」の上に付くこと、字体の類似からそのように判読されたものと思われる。しかし



第225図 「牝馬 馬手 為嶋名」という刻書のある紡錘車

「牝」の偏は「牛」とは両数、形態とも異なり、むしろ「化」に近いとも見なされる。その点に関しては、後述することにして「馬手」が「馬の調教にあたる職名」とするならば、何故、全く関係のないそのような職名を紡錘車に線刻したのであろうか。「馬手」という名称は古代の戸籍に多く見えるものであり、「口手」は当時の名前の一形式として確認されるものであり、人名の一部、あるいは「牝馬」の名という可能性もあろう⁽⁵⁾。紡錘車に線刻された「牝馬」「馬手」という2組の文字を見つめる時、その両者に共通する「馬」という文字が気になる。紡錘車と養蚕とのかわりが前述のように想定されたとすると、紡錘車に「馬」という文字が線刻された意味が理解できると考える。養蚕と馬の関係は歴史的に長く深いものがあり、馬は養蚕神として崇められてきたという事実がある。端的な例を出せば、北陸・中部・関東から東北に浸透しているオシラサマ信仰がそれである。このオシラサマ信仰の起源は中国の「太古養馬記」・「蜀國経」・「搜神記」等に

見える蚕にまつわる馬の恋物語に求められるとされる。「太古蚕馬記」によれば娘に恋した馬を父親が射殺し、「皮を剥いで庭にさらし」たが、その後、馬の皮は娘を包み込み、大きな樹の上で悉く蚕と化し、糸を吐き続けたという。蚕を数えるのに「頭」を使い、中国四川地方では蚕を馬頭娘（嬢）と呼ぶのも、そのような言い伝えを背景にしていると考えられている⁽⁶⁾。

この養蚕と馬の関係が日本古代まで溯るかどうかであるが、参考になるのは『日本書紀』の天照大神の岩戸の前段部分「(素戔鳴尊)又天照大神の、方に神衣を織りつつ、斎服殿に居しますを見て、則ち天斑駒を剥ぎて、殿の裳を穿ちて投げ納る。是の時に、天照大神、驚動きたまいて、梭を以て身を傷ましむ」である。そこで注目されるのは素戔鳴尊が神衣を織る天照大神をおどすために「駒を剥ぎて」投げ入れる行為をとったことである。ここに見られる「駒を剥ぐ」という特殊行為は中国の説話の「皮を剥いで庭にさらし」たという内容の影響を受けていると考える。天照大神は絹糸で神衣を織っている最中、養蚕神の象徴の馬が皮を剥がれた状態で投げ入れられたので「驚動きたまいて、梭を以て身を傷ましむ」という事態となったというのであろう。ここで「万葉集」に目を転じると「あずへから 駒の行このす 危はとも 人妻児ろを まゆかせらふも (3542)」、「たらちねの 母が飼う蚕の 繭隠り いぶせく(馬声)もあるか 妹に逢はずして (2991)」のように感情表現の際にも養蚕と馬にかかわる言葉をともに織り込んでいることがうかがえ、注目される。

以上、矢田遺跡の紡錘車の線刻を素材にして紡錘車・養蚕・馬のかかわりについて推測してきた。ついでに「北馬」が「化馬」であるならば、蚕に変身するという意味の蚕神の表現とも解釈もできよう。試しに7文字の意味を考えるならば、「嶋名」という人物の為の「馬手」という名の蚕神馬、あるいは「嶋名」という人物の為に「馬手」という人物が用意した蚕神馬という意味であろうか。今後の研究進展の為の素材を提供しておきたい。

5 古代養蚕の実像

ここでは以上論じてきたことを踏まえ、古代の養蚕作業について具体的に論じてみたい。

古代の蚕に関しては家蚕が中心であったことについては既に別稿で『万葉集』・『日本書紀』・『続日本記』の検討から明らかにした⁽⁷⁾。その家蚕をどのような施設で飼育したかは疑問であるが、矢田遺跡で考えるならば堅穴建物以外に想定できない。また、いわゆる堅穴「住居」と呼ばれるなかに養蚕期には蚕専用の施設として活用されたものも想定する必要がある。蚕は雨(水)、煙、鼠に弱い存在であり、餌の桑は毎日、水気をとったものを与える必要がある。桑の採集は女性の仕事であり、「葉を揃く(『日本書紀』中41)」形で採集したようである。屋内での蚕の飼育であるが『催馬楽』に見える「走井の小堂刈り取め かけ それにこそ 繭つくらせて 糸引きなませ」は重要である。それによれば流れの水汲み場のあたりに生えた萱を刈り入れ、それを建物内に広げそこに蚕を放し、繭を作らせる作業を垣間見ることができよう。この萱は後代のマブシに相当するものと考えられるが、蚕の大・小便で濡れるので予備も必要と考える。この一連の作業も桑の刈り入れと同じく、『万葉集』にみえる「たらちねの 母が飼う蚕の 繭隠り」を踏まえれば女性労働であったと考えられる。桑は律令(田令)によれば、上戸に桑三百根以上、中戸には桑二百根、下戸には桑百根を植えさせる形をとっているが、「郷土の直しからざらむ、及び狭き郷には、必ずしも数に満てず」ということもあり、前代からの栽培の伝統があることから、実態承認的なものであったろう。桑栽培地は住居に近いところであったことは『出雲国風土記』・『日本書紀』に散見する桑に関する記載でうかがえるが、これは現代でも養蚕農家は天候不順に対処するため桑畑を手近に置くことに対応するのであろう。矢田遺跡で考

えるならば、遺跡西側を北流する西谷川で甕を刈り入れ、遺構空白地の小規模桑畑、そして集落周辺の桑林から桑を摘み、各単位集団毎の竪穴建物で蚕飼いをしたものと推測する。蚕が繭を作った後、その繭から繭糸を古代において如何に抽出したかは明確ではない。その様子の一端を示すのは『日本書紀』神代紀の「口の裏に蚕を含めて、便ち絲摘くことを得たり。此より始めて養蠶の道有り」であろう。蚕の繭を口に含んで繭糸を抽出する工程が語られるが、それは象徴的な表現であり、現実・一般の作業ではないであろう。また『今昔物語』の著名な「参河国始犬頭糸」でも犬の口から繭糸を抽出する場面が語られる。繭をカットして糸を取る方法もあるが、「口の裏に蚕を含み」は繭糸を接着しているセシリンを溶かす工程であり、湯で繭を煮込み、セシリンを溶かし、繭糸を抽出する工程の説話化であろう。『催馬楽』で甕のマブシ作成、蚕飼、繭糸抽出が一気に一工程として歌われていることを考慮すると、その工程は同じ施設で展開された可能性もあるが、その点に関しては今後の課題としておきたい。矢田遺跡を象徴する紡錘車はその繭糸に撚りをかけ織物用の絹糸にする道具である。本稿が取り上げた10C前半の矢田遺跡集落では第224図で理解できるように紡錘車を出土した確実な単位集団は(b)・(f)・(h)・(i)である。その点を踏まえると桑栽培・マブシ作成・蚕飼・繭糸抽出の「一般的」工程と紡錘車使用の製糸工程では階層的分化があったとも観察可能である。また紡錘車出土の竪穴建物址からは一般的傾向として羽釜が調理用煮沸の形跡を残して出土していないことも注目される⁽⁸⁾。それは紡錘車を使う作業場と羽釜を使用する生活の場が分けられていたことを示すのかも知れない。

6 おわりに

1991年11月に矢田遺跡を訪れた。遺跡は全く姿を消していた。矢田遺跡とは3年越しの付き合いである。人生で言えば晩年に付き合ったということになろう。発掘報告書は人間でいえば年譜的記録、業績記録的なものであろう。多くの遺跡は、それを残して消えていった。矢田遺跡に関しては晩年に付き合った小林昌二・矢野健一氏、そして発掘担当者、また小生も含めて回顧録を付したことになる。後日になり、研究者が発掘報告書を紐解く時、愛情を込めて書いた回顧録はあらゆる意味で生前の矢田遺跡を努めさせるであろう。筆者はそういう気持ちで矢田遺跡が晩年に語ろうとしたことをここに記したため。思いつくまま纏めたもので一貫性がないが、その点、御容赦願いたい。

注

- (1) 中沢恒・春山寿幸・関口功一「古代布生産と在地社会」(『群馬の考古学』所収)。
- (2) 細藤「古代村高の再検討と村高首長」(『歴史学研究』増刊号) 626号)。
- (3) 遺構図は馬井家遺跡に関しては「古墳時代の研究2集落と家屋居館」、西組遺跡に関しては「子持村史」を再編成した。
- (4) 中田節子「矢田遺跡121号住居跡出土繊維」(『矢田遺跡 平安時代住居跡編(1)』所収)。
- (5) □字は古代戸籍・計帳に馬・猪・犬・牛・鳥・鹿・猿・櫻・橘・衣・止・波・古・加・根・大・文・酒・麦・荒・宗・藤・宇・莫と数多い。これら全てを職名と考えることは不可能であろう。また難問であるが、当時、動物個体を如何に呼称したのかも課題である。「枕草子」に犬の名前「熊丸」が見えるが高・牛はどうであったろうか。結論は後の研究を待ちたい。
- (6) 養蚕関係の知識は布日根原「養蚕の起源と古代絹」・「絹と布の考古学」、篠原昭他「絹の文化誌」、小西正己「古代の虫まつり」、石島澗水「袖の里緒城」を参考にした。
- (7) 注2におなじ。

追記 本稿を執筆するにあたり、東京農工大学工学部付属繊維博物館の並木寛氏に御世話になった。記して感謝の意としたい。

第3節 矢田遺跡出土の

平安期における文字資料について

高島英之

1 はじめに

『統日本紀』和銅四年三月辛亥条や「多胡碑」、あるいは「倭名類聚抄」等の記述にみられる上野国多胡郡八(矢)田郷の故地に比定される矢田遺跡からは、墨書・刻書土器をはじめ文字瓦、刻字紡錘車、焼印など多種多様な文字資料が出土している。すでに幾つかの論考によってその一部は公表されており、中には耳目を集めるような重要な資料も存在していることから、発掘調査実施中から大変注目されてきたわけであるが、1遺跡から100点を越える文字資料の出土事例が報じられることが決してめずらしいことではなく、中には300点を越す場合も報告される状況の下では、調査規模などから勘案すれば出土量はむしろ少な目と言ってよい。

今回、当報告書によって、本遺跡における平安時代に属する遺構・遺物の報告が完了することから、ここで平安期の出土文字資料62点全点をとりあげ、ごく簡単に概括的な検討を試みることにしたい。なお、本遺跡出土の文字資料については、すでに刊行された2編の調査報告書中でも若干公表されてきたが⁽¹⁾、今回は、それらも含めて検討対象とする。文字資料の解釈や所属年代について、さきに報告したものと若干異なる事例も存在するが、今後は本稿で提示したものによられたい。また、本遺跡からは奈良時代に属するとみられる文字資料も数点出土しているが、それらについては未だ整理に着手されていない部分もあるので、追って刊行される各報告書において順次触れていくこととし、今回の検討対象からは除外する。

墨書土器をはじめとする出土文字資料の取り扱いについては、従来より、記載された文字内容のみが関心を集めてきた観が強かったが、近年では、それら文字資料を集落分析の有効な資料として活用するために、文字資料それぞれを集落形態およびその変遷の中で捉えるとともに、遺物そのものの観察と、文字の部位・方向・書体などに関する詳細な検討を併せて行う方法が提唱されている⁽²⁾。小稿も、この方法論を基本的に踏襲し、本遺跡の平安時代遺構群の時期変遷を4時期に分割した上で、集落の時間的変遷の中で文字資料を捉えていくことにしたい。なお、各文字資料の所属時期については、調査担当者⁽³⁾の見解に従った。

さて、今回検討の対象とする文字資料の内訳は、墨書土器42点、刻書土器6点、文字瓦6点、刻字紡錘車7点、焼印1点である。刻書土器の中には、土器の焼成以前に篋状の道具で刻字された「篋書き」のものが5点と、焼成後の製品に、硬質の釘状のもので刻字された「釘書き」のもの1点とがある。なお、当然のことながら、墨書土器・刻字紡錘車については本集落内で記載された可能性が高いが、文字瓦・篋書き土器については生産段階で記されたものであり、それぞれの性格は分別されるべきであろう。特に瓦については、本来的には別の場所で使用されるべきものが、偶々当地にもたらされたものであり、用途も瓦本来のものとは別のものであり、そこに記された文字自体が直接的に本遺跡に結びつくものではない。

また、ここで取り扱おうとする出土文字資料の多くは、一般的には1文字ないし2文字程度しか記されておらず、その文字内容はいかようにも解釈できる⁽⁴⁾。例え、1文字のみ記された資料でも、遺跡出土全体の文字資料や周辺遺跡出土のものとの関連で、意味が判明する場合もあるが、本遺跡の事例では文字内容の意味まで特定できるものは極めて少ない。故に今回は殆どの資料について文字の意味の解釈は問わないことにしたい。

なお、出土した文字資料全点の訳読は、筆者の責任において行ったが、一部については平川南（国立歴史民俗博物館）・東野治之（大阪大学）両氏にご教示賜った。ここに明記して謝意を表する。

2 墨書土器

以下では、本遺跡出土の墨書土器42点について、時期別にみていくことにしたい。

(1) 9世紀前半

9世紀前半代とみられる住居跡は24軒で、本遺跡における平安時代住居跡の約9%にすぎない。この時期の住居跡の分布は、調査地全体に散在しており、群をなすものはみあたらないようである。

墨書土器は6点であるが、それらが出土した住居跡は調査地北端部の640号住1軒以外すべて調査地の南辺付近一帯に限られる。

(2) 9世紀後半

この時期になると集落は拡大し、住居の軒数は79軒を数え、台地中央部にややまとまっているが、全体としてみれば、調査地全域に散在していると言ってよいだろう。

墨書土器は、12軒の住居跡から17点が出土しているが、それらは調査地区内のある特定の区域に集中しているわけではない。また、同一あるいは隣接する住居跡から同一の文字を記したものが出土している事例があるが（263・309号住居跡出土の「測」、563号住居跡出土の「弘」）、一方で、同一文字を記した墨書土器がおおよそ300m隔った住居から出土する場合もある（675号住居跡出土の20、711号住居跡出土の23）。

(3) 10世紀前半

この時期、住居数は104軒を越え、平安期における本集落の最盛期と言えよう。住居の分布は、調査地の南辺一帯と調査区中央部より北側にやや濃密であるが、ほぼ台地全体に展開していると言ってよいだろう。

墨書土器は8軒の住居跡より16点が出土しているが、集落が広範囲に展開するに比しては大変少なく、調査地の北寄り部分に多いようであり、且つこの時期には、同一住居から墨書土器が2～3点出土するものが多い。全体数が少ないので如何とも言い難いが、土器に文字を記す人々あるいは集団がある程度限定されてくるという想定も可能であろう。また本時期になると、9世紀代にはよくみられた、調査地南半分の住居からの墨書土器の出土が殆どみられなくなる。先述したように、特にこの時期には、住居が調査区の南半分と比較的まとまってくる傾向があるが、その区域からの墨書土器の出土は殆どみられない。住居軒数の多さが必ずしも直接的に墨書土器の盛行とむすびつくわけではなく、この点も文字を記す集団が、ある程度限定されてくることを示していると言えるだろう。なお、さきに述べたが、この時期には同一の住居から複数の墨書土器が出土する事例が、ままた見受けられるのだが、その中でも同一の文字が記されたものは1例のみである（482号住居跡出土の5・6）。

(4) 10世紀後半

この時期、住居数は45軒であり、前代の半数以下に減少する。集落は衰退期に入ったと考えられる。住居群の分布は、前代同様、調査区の南半分は濃密であるが、その中でも東西に住居群がわかるようである。この時期になると調査区北半分には住居は殆どなくなってしまふ。

墨書土器は、2軒の住居からわずか3点が出土しているにすぎず、その内の2点（44・45）は判読不能である。墨書土器のみならず、他の文字資料も非常に少なく、この時期には集落内において器物に文字を記すことが急速に減退していったとみてよからう。

(5) まとめ

以上、本遺跡出土の平安時代の墨書土器42点について、時期別にその構成をみてきた。序言でも述べたごとく、本遺跡から出土した文字資料は、調査規模、検出遺構数等からみれば全般的に少な目であり、墨書土器から集落内の小集団を類推することや、集落構成の変遷などをあとづけることは不可能と言わざるを得ない。

若干ではあるが、強いて特記事項として、二・三あげておこう。まず9世紀前半代の墨書土器「八」(6)であるが、その意味するところは現時点において不明であると言わざるを得ないが、刻字紡錘車(56・59)にもみられる記号であり、しかもその内の1点(56)は墨書土器(6)と同じ遺構からの出土で、いま1つ(59)も近接した場所から出土しているの、何らかの小集団の象徴的符号であったとみてよいだろう。

また、平安時代の墨書土器で、最も頻度の高い文字は「名」である、とは言うものの6軒の住居跡(9世紀後半～675号住・711号住、10世紀前半～482号住・596号住・663号住、10世紀後半～519号住)から7点(20・23・33・34・39・41・46)が出土しているにすぎないが、9世紀後半から10世紀後半にかけて、本集落の存続期間の中では、比較的長期に亘ってみられるものである。それらの文字が記載されている部位・方向も、体部内面・正位という点で共通している。しかも、その分布も、9世紀後半の711号住居跡出土の23以外、すべて調査区の北半部に限られている。これも文字内容やその意味するところは現時点では判断しがたいが、やはり本集落内における何らかの小集団に関する象徴的符号であるとみられよう。

他の墨書土器については、同一の文字のものがあっても、いずれも1点ないし2点程度であり、また、各時期に亘って存在するものもなく、墨書土器全般から、集落内の諸集団の変遷や集落構造を理解することは困難である。

最後に、墨書された部位の問題について若干みていきたい。墨書土器全般については第93表の通りであり、また、それらを時期別にすると第94表のごとくなるが、いずれにしても余りこれと言った傾向はつかめないうのである。特定の文字と、それが記された器物における部位・方向の関連にしても、同一文字自体の量が非常に少ないので何とも言い難い。

3 刻書土器

序言でも述べたように、刻書土器には、焼成前に甕状のもので粘土に刻字された、いわゆる「甕書き」のもの、焼成後の器体に硬質の釘様の道具で刻字された、いわゆる「釘書き」のものがある。後者については、集落内で記された可能性もあるが、前者は、いずれも土器の生産段階においてなされたものであり、⁽⁵⁾集落内で記載されたであろう文字資料とは一応別して考える必要があろう。

本遺跡出土の刻書土器はわずかに6点であり、そのうち515号住居跡出土の42以外はすべて甕書きのものである。

文字を記したものは25(9世紀後半、563号住居跡出土)および43(10世紀前半、532号住居跡出土)の2点で、残り4点は記号様である。

刻書土器は、各期に1点もしくは2点程度であり、墨書土器との関連性も見出しがたい。

4 文字瓦

本遺跡から出土した文字瓦は6点である。これらの文字瓦は、いずれも瓦の焼成前、すなわち生産段階において刻字されたものであり、また、瓦自体も本来的に本集落において使用されるべきものではなく、記された文字自体も、直接的には本集落に結びつくものではない。

周知のように本遺跡が所在する多胡郡一帯は、上野国分寺補修ないし修造に際して操業された瓦窯群が数多くみられ、本遺跡の背後の丘陵にも瓦窯跡群が展開していることから、これらの瓦もそれぞれいずれかの瓦窯から集落内に持ち込まれたものとみてよいだろう。上野国分寺跡の発掘調査では、大量の文字瓦が出土しており、表採資料をも加えればその数はまことに膨大であるが、その記載内容には郡・郷名あるいは人名とみられるものが多く、国分寺の創建および修造の際に役割を担った郡や、知識物として瓦を貢進した人々などの具体相を知る手掛かりとなっている。

本遺跡出土の文字瓦の時期としては、9世紀後半代に属するものが多いが、言うまでもなくその前後の時期には上野国分寺の補修・修造に伴う多胡郡内の瓦窯の操業が盛行していることから、集落内へ瓦を運び込むことも比較的容易に行われたものとみられる。

文字内容については、53(425号住居跡出土)が、某「浄麻」呂という人名を記したものとみて大過ないだろう。また54の「辛」は、多胡郡内の「辛科郷」に関わるものとみられるが、辛科郷の郷名もしくはその略号を記した文字瓦も国分寺跡から多く出土している。また、49の「大」も、国分寺跡出土の文字瓦中に非常に多くみられるものである。50～52の文字内容が何を指すかは、現時点では判断しかねる。いずれにしてもこれらは上野国分寺修造に際しての瓦生産・貢進に関わる刻字とみてよいだろう。

5 刻字紡錘車

刻字紡錘車は、群馬県域を中心に、埼玉県北西部にかけて濃密に分布する非常に特徴的な遺物である。特に群馬県内における出土例はぬきん出で多いが、その行為の意味するところについては、未だ不明な点が多い。また、それらの資料を概観すると、明確に判読できるものはあまり多くないのであるが、はっきりと記載内容が読みとれるものの中ではとくに地名もしくは人名を記したと思われるものが多いようである。

本遺跡出土の平安時代の刻字紡錘車は7点(55～61)であり、現在までの出土例の中では1遺跡における出土量としては最多である。また、9世紀前半から10世紀後半までの各時期に亘って出土している。これらの刻字紡錘車については本遺跡の出土遺物の中でもとりわけ注目されてきた資料であり、これまでもいくつかの専論がなされてきた。詳細はそれらにゆずることとして、以下、各点について簡単にみていくことにしたい。

55は、「牝馬 馬手 為嶋名」の3単語が並列して記されている。内容については確定しがたい。

56は上面に「八」、下面に「物部・八田」と記されている。「八」は、9世紀後半の526号住居跡出土の紡錘車(59)や、9世紀前半の679号住居跡出土の墨書土器(6)にもみられ、本集落内における何らかの象徴的符号とみてよいだろう。下面に記された「物部・八田」の記載は、従来から指摘されてきた本遺跡の所在地である「上野国多胡郡八田郷」と物部集団との関連をさらに補強するものとして注目できよう。

57は、これまでも随所でとりあげられてきた「物部郷長」と刻まれたものである。その意義や、その提起する問題については、すでに報告書に専論があるので、それらを参照されたいが、これまでの見解を若干まとめておくと、「物部郷長」の「物部」とは「氏名」として理解するのが妥当であり、少なくとも本紡錘車の所属年代と見られる9世紀後半代には「物部」氏の某が上野国多胡郡八田郷の郷長の地位にあり、それが郷全体の糞蚕についての生産向上を願う祭祀に際し、記されたものという理解が有力である。

58は、下面に「× 田」、側面に「×」が刻まれている。文字というよりは記号として解した方がよいだろう。

59は、さきにみた56や墨書土器6と同様の記号が記されている。

60・61はともに「八田郷」を側面の大きい径面から小さい径面に向かって放射状に三ヶ所記し、60では「家郷」、61では「大」をそれぞれ一ヶ所に記している。これら2つの資料および57の「物部郷長」の記載により、本遺跡の地が古代の八田郷の領域の一部であったとみることを確定的にしたのであった。文字自体はいずれも大変細い線で刻まれているが、60と61では、各々の字体ばかりでなく刻線の太さにも若干の差異があり、61の方がやや線が細く不鮮明である。「八田郷」の他に記された「家郷」および「大」については、それぞれの規格や文字パターンに類似があり、四単位の構成で文字が記され、それらがいずれも地名に関連する可能性も存在することから、「多胡郡大家郷」を指すと考えるのが妥当であろう。

以上、本遺跡出土の平安時代の刻字紡錘車7点についてみてきたが、本遺跡からはこれら以外にも、奈良時代に属するとみられる当該資料も少量ながら存在するが、本集落で紡錘車に刻字することが盛行するのは9世紀代からであると言えよう。これは、上野から北武蔵に及ぶ刻字紡錘車の全般の傾向とも合致する。⁽¹⁸⁾

紡錘車に刻字する行為の意味については、井上唯雄氏は調庸布の貢納に関わるものとして、調庸布の大きさ・品質等の管理を厳密に行うために、その品質にかかわる紡錘車についても管理や制限が行われたものと想定され、刻字に地名や人名が多いことから、それらの所属・所有を示すものと考え、そうした刻字も律令地方行政機構の村落内生産体系への諸統制に伴ってなされたものと理解された。⁽¹⁹⁾ また一方、関和彦氏は、単に所属・所有関係のみを示すものではなく、生産向上を願う共同体、あるいは成員個人の名を示したものとみて、「機織」祭祀に伴って刻字されたものと考えておられる。⁽²⁰⁾ 紡錘車に刻字することの意味・理由は、何もすべてが画一的なものではなく、各々の集団や個人において様々なケースが想定されるべきであり、各種多様な意味が考えられるので、そのいずれの仮説も想定可能であろう。ただ、紡錘車の出土事例全体の中では刻字されるものはそのごく少数であり、またそうした行為自体も、現段階においては地域的にもかなり限定されている。言わば全国各地における膨大な量の出土紡錘車の大部分には刻字されていないわけであるから、ただ単に所属・所有を示すためやあるいは公的な規制・管理に伴って刻字されたものとは考え難いように思われる。

いずれにせよ、刻字行為の意味については、現時点では広範囲な可能性を想定しておくことが必要であり、各出土遺跡における個別の検討を積み重ねた上で考えていくことが当面の課題ではないだろうか。

6 焼 印

焼印は9世紀後半代の647号住居跡から1点(62)出土している。印面は「上」1文字で、縦約4cm(約1寸3分)、横約3.5cm(約1寸2分)で、印面の厚さは10.9cmである。柄は末端部が欠損しており、原型の長さは不明であるが、現存長は10.8cmである。柄は1本の柱状の鉄棒を折り曲げただけの極めて簡単なもので、印面の裏側に直接接着している。おそらくはこれに木製の把手が装着されていたのであろう。

古代の焼印は、⁽²¹⁾ 管見の限りでは全国に本例を含めて8例あり(表4)、本例は群馬県内の出土例としては3例目である。また焼印のものではないが、群馬県高崎市の日高遺跡からは、曲物の底部に「信」の文字を焼印で押したものが出土しており、⁽²²⁾ 東京都八王子市の多摩ニュータウンNo.107遺跡からは木製皿類に「全」「官」「位」等の文字が焼印で押されたものが数例出土している。⁽²³⁾

焼印の用途としては、牛馬等に押すものと、木器に押すものとの方が想定可能であろう。よく知られているように牛馬印については養老版牧令駒積条に、

凡在、牧駒積、至二歳者、毎、年九月、国司共、牧長、对、以、官字、印、印、左髀、上、積、印、右髀、上、。(以下

略)

とあり、官牧で飼育される牛馬が2歳になった際に「官」の字の焼印を押すべきことが定められており、また、『類聚三代格』所引の延暦15年2月25日付太政官符では、百姓らの私有する牛馬の焼印について、長さ2寸・幅1寸5分以下と定めている。⁽²⁴⁾本遺跡出土の焼印の法量は、この規定に一応適合するが、本例が牛馬に対する焼印であるのか、それとも木器に押印されるべきものであるのかは、現物からでは判断できない。

7 おわりに

以上、本遺跡出土の平安時代に属する文字資料62点について、若干のまとめを行ってきた。

本遺跡出土の文字資料は、遺跡自体の調査規模に比してみれば、同時代の各地における集落遺跡の調査例からみて、むしろ少量であり、出土文字資料の記載から集落内の小集団の構造やその変遷を明確にあとづけることはできなかった。しかしながら今回は、文字資料とくに墨書土器の出土例の比較的少ない集落の一つのケース・スタディとして本遺跡を提示することができたわけであり、今後は各地の様々なパターンの墨書土器出土遺跡と比較検討することによって、将来的には墨書土器のあり方を総合的に解明することが可能となっていくであろう。そのような意味では、本遺跡における事例も、そのための1つの足がかりにはなり得るだろう。

また、本遺跡からは数こそ少ないとは言え、多種多様な文字資料が出土しており、それら文字資料の種類
の豊富さは、古代村落における文字の伝播・浸透の具体的実相を解明する上で、良好な材料を提供するもの
として高い意義を有するものと思われる。⁽²⁵⁾

今回はまた、それぞれの資料に記された文字の意味・内容については殆ど明らかにしえなかったが、1文字ないし2文字の記載ではいかようにも解釈できるので、無限の資料的価値を秘めた出土文字資料を集落分析の有効な材料として活用するための基礎的データの提示ということにとどめておきたい。⁽²⁶⁾

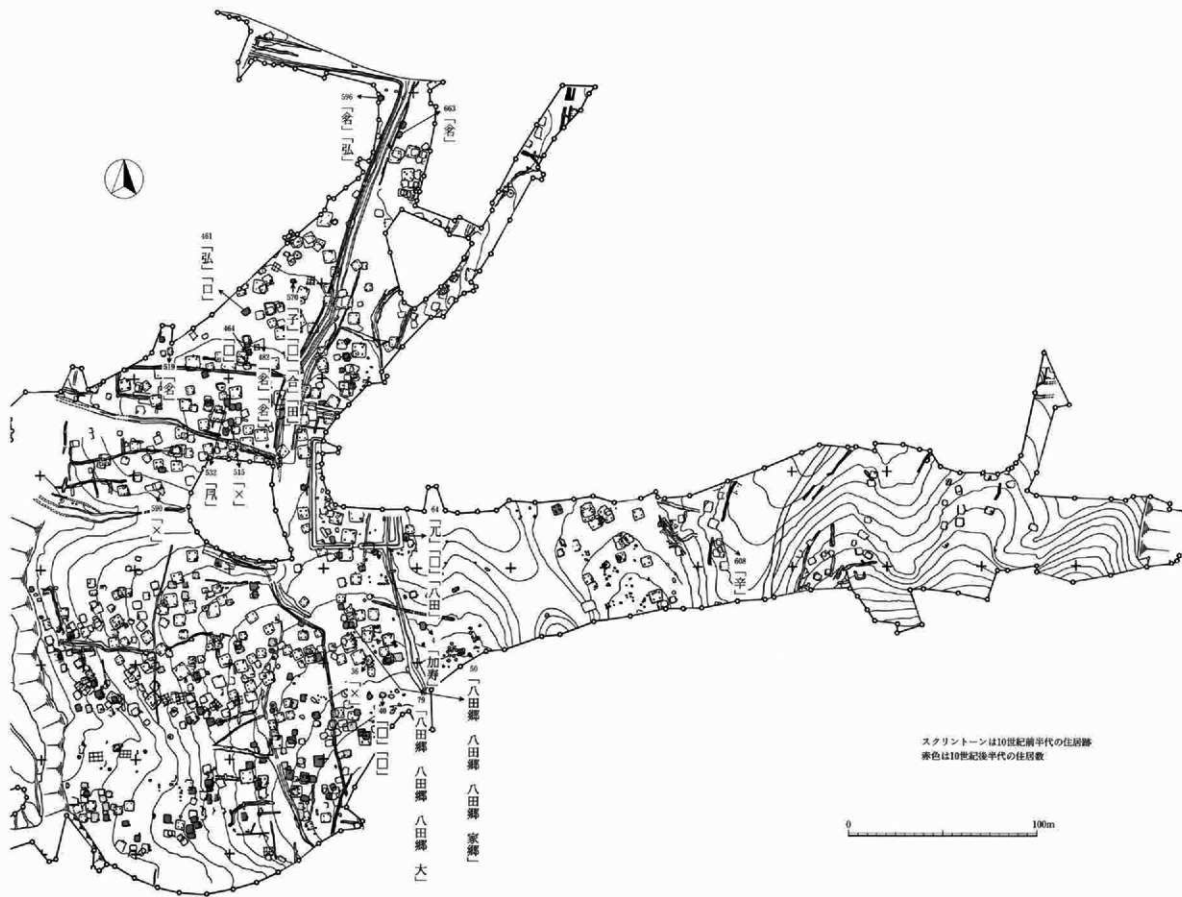
以上、甚だ雑駁な行論に終始したが、各地の多様な事例との比較検討を経ることによって更に議論が深まり、より具体相が明らかになることを願うとともに、諸賢の御叱正を併せてお願いして、今はひとまず纏筆することとした。

(1991年12月3日 成稿)

第4章 若干の考察及びまとめ

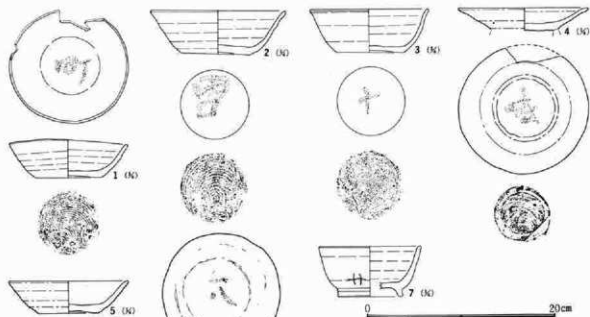
註

- (1) 井上唯雄「縁刻をもつ紡錘車」(『古代学研究』115 1987年)、内木真琴・中沢晋・鬼形芳夫「吉井町矢田遺跡出土の文字資料について」(『群馬文化』209 1987年)、中沢晋・香山秀幸・関口功一「古代布生産と在地社会」(『群馬の考古学』1988年)、同「矢田遺跡」とその周辺」(『信濃』41—3 1989年)など。
- (2) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「矢田遺跡」1990年、同「矢田遺跡II」1991年。
- (3) 平川南「天野野・黒田正典「古代集落と墨書土器」(『国立歴史民俗博物館研究報告』22 1989年)。
- (4) 平川南氏註(3)前掲論文。
- (5) これらの墨書きの土器には、墨書土器と同様、1文字のみの記載が多く、中には文字の体を全くなきものも少なくない。一般的にはこれらの文字や記号がそれらの生産集団や生産組織、工人などの目印であったと考えられるケースが多い。
- (6) 須田茂「吉井町・滝ノ前窯跡の探査遺物とその性格」(『群馬文化』220 1989年)、ほか。
- (7) 群馬県教育委員会「史跡上野国分寺跡発掘調査報告書」1989年。
- (8) 前沢和之「史跡上野国分寺跡出土の文字瓦について」(『日本歴史』454 1986年)、同「文字瓦と記号瓦」(註7前掲書)など。
- (9) 須田茂氏註(6)前掲論文。
- (10) 多胡郡大家郷の郷名を記した文字瓦の出土例も多く、この49もその略号とも考えられるが、この大家郷の略号と思われるもの以外にも、「大」字を記したものは各種みられるので、そのように通断することはできない。
- (11) なお、文字瓦50・51を含めた188号住居跡出土の瓦は、吉井町大字多比良字諏訪前所在の滝ノ前窯跡出土の瓦に、よく類似した質感をもつということである(須田茂氏註(6)前掲論文)。
- (12) 井上唯雄氏註(1)前掲論文。なおこの研究の発表以降も資料はさらに増加しつつある。
- (13) 本遺跡と布生産との関係については、中沢・香山・関口註(1)前掲論文を参照されたい。
- (14) 註(1)の諸論文、および関和彦「物部群長」の世界」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「矢田遺跡II」1991年)。
- (15) 上野国分寺跡出土の文字瓦(註7前掲書233頁112—18・19など)や、佐波郡埴町所在の西今井遺跡出土の墨書土器(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「西今井遺跡」1987年、210頁1285・1286)や、前橋市荒砥洗機遺跡出土の刻書土器(同「荒砥洗機遺跡・荒砥宮西遺跡」1989年、35頁10—10)にもみられる。
- (16) 関和彦氏註(4)前掲論文。
- (17) 註(6)に同じ。
- (18) 井上唯雄氏註(1)前掲論文。
- (19) 註(6)に同じ。
- (20) 関和彦氏註(4)前掲論文。
- (21) 徳江秀夫「荒砥洗機遺跡出土の文字資料の様相」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥洗機遺跡・荒砥宮西遺跡」1989年)に簡単にまとめられており、筆者も多くの教示をうけた。
- (22) 印影の大きさは5.0×4.9cm(1寸6分—7分)である(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「日高遺跡」1982年 104頁50図—8)。また同書436—437頁にはそれに関する若干の考察が掲載されている。
- (23) 石井剛孝・竹花宏之「東京・多摩ニュータウン遺跡群」(『木簡研究』12 1990年)。
- (24) 太政官符
 定 二百姓私馬牛印事^律ニテ、画一す五分以下、
 石、得 二上野国解 一、部内百姓等私馬牛印、過 二官印大 一、
 新益之徒監 二取官馬 一、幾 一私其印 一論 二亡明職、
 若 不^レ加 二嚴制 一、新為難 一斬者、(以下略)。
- (25) 筆者は最近、各種の出土文字資料を取り扱う機会に恵まれているが、特に墨書・刻書土器や刻字紡錘車について言うならば、今日、それらの出土事例は全国的にみてもまさに莫大に量に上っているにもかかわらず、記された文字の種類や内容・記載の仕方等については相当限定できるように見受けられる。言わば、古代村落内においてはどれほど文字としての本来の意味を有していたかは甚だ疑問であり、村落内の識字率を高くみることに、決して肯定的な材料を提示するものではないという印象を抱いている。本遺跡出土の文字資料の様相から総合的に判断するならば、本集落内で文字を取り扱うことができた人々はごく限られていたと想定できる。
- (26) 平川南「東国の村落」(『日本村落史研究』2 景観—一原始・古代・中世) 1991年)。

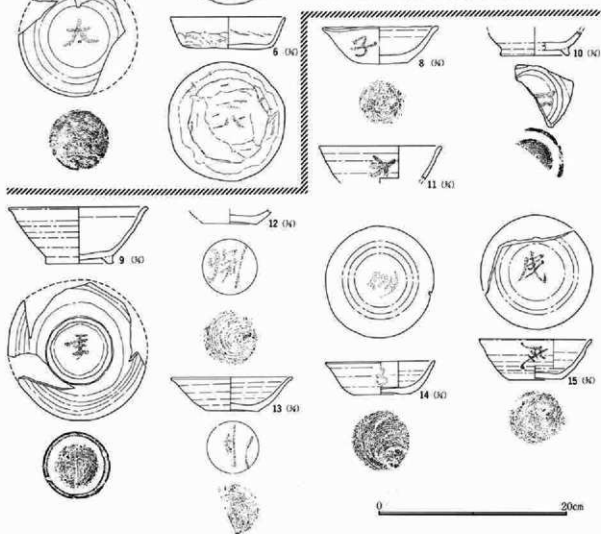


第227図 10世紀前半・後半代の集落

第3節 矢田遺跡出土の平安期における文字資料について

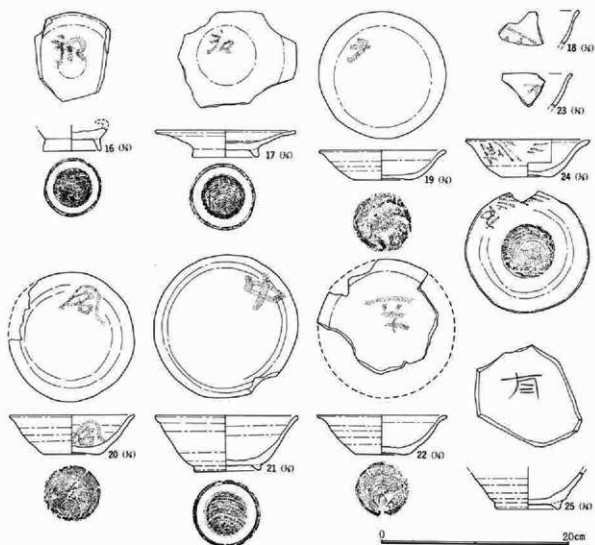


第228図 9世紀前半代出土文字資料

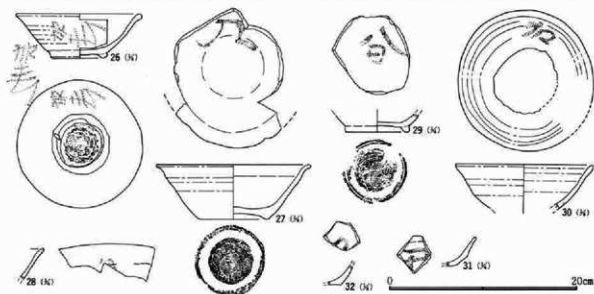


第229図 9世紀後半代出土文字資料(1)

第4章 若干の考察及びまとめ

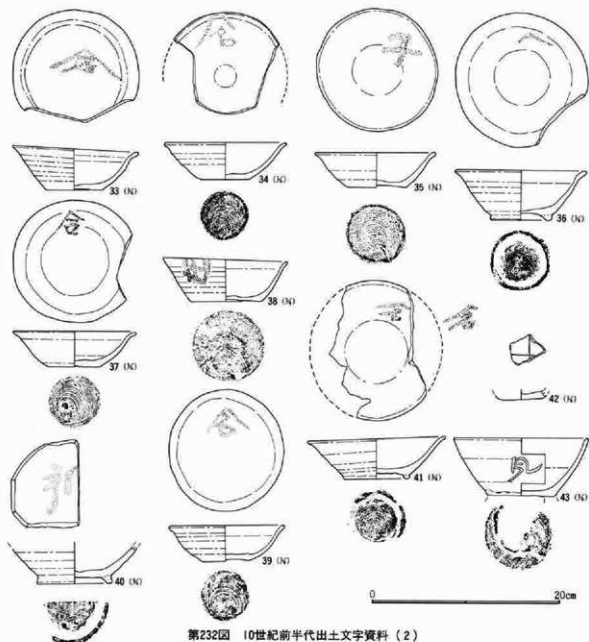


第230図 9世紀後半代出土文字資料(2)

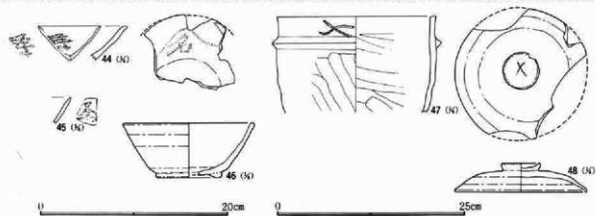


第231図 10世紀前半代出土文字資料(1)

第3節 矢田遺跡出土の平安期における文字資料について

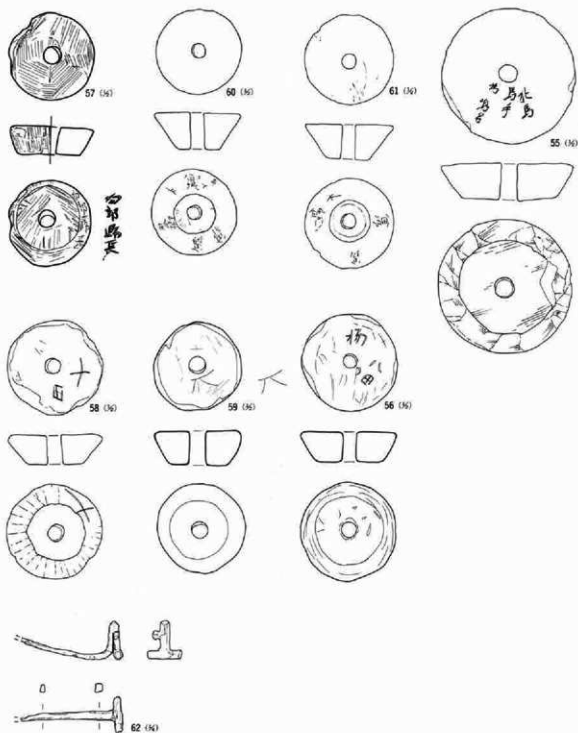


第232図 10世紀前半代出土文字資料(2)



第233図 10世紀後半代出土文字資料

第3節 矢田遺跡出土の平安期における文字資料について



第235図 刻字紡錘車・焼印

第4章 若干の考察及びまとめ

第92表 矢田遺跡出土 平安時代文字資料一覧

墨書・刷書土器

時期	番号	出土遺構	釈文	器種	部位	方向	種別	報告書
9世紀前半	1	75住12	「町」	須恵器 坏	底部内面		墨書	I
	2	145住5	「田口」	須恵器 坏	底部外面		墨書	I
	3	331住8	「十」	須恵器 坏	底部外面		墨書	I
	4	513住3	「口」・「口」	須恵器 高台付皿	底部内外面		墨書	III
	5	600住6	「太」	須恵器 坏	底部外面		墨書	III
	6	679住6	「八」・「八」	土師器 坏	底部内外面		墨書	III
	7	331住10	「井」	須恵器 高台付埴	体部外面		刷書	I
9世紀後半	8	42住3	「子」	須恵器 坏	体部外面	正位	墨書	I
	9	51住5	「口」	須恵器 高台付埴	底部外面		墨書	III
	10	51住8	「主」	須恵器 高台付埴	底部外面		墨書	III
	11	51住13	「口」〔方カ〕	須恵器 坏	体部外面	正位	墨書	III
	12	263住3	「測」	須恵器 坏	底部外面		墨書	I
	13	309住3	「測」	須恵器 坏	底部外面		墨書	I
	14	415住3	「口」	須恵器 坏	体部外面		墨書	II
	15	418住4	「成」・「成」	須恵器 坏	縁内面・縁外側	横位	墨書	II
	16	563住5	「弘」	須恵器 高台付耳皿	底部内面		墨書	III
	17	563住7	「弘」	須恵器 高台付皿	底部内面		墨書	III
	18	595住3	「口」	須恵器 坏	体部内面		墨書	III
	19	647住14	「子」	須恵器 坏	体部内面	横位	墨書	III
	20	675住3	「尙」	須恵器 高台付埴	体部内面	正位	墨書	III
	21	711住9	「中」	須恵器 高台付埴	体部内面	正位	墨書	III
	22	711住10	「口」	須恵器 坏	底部内面		墨書	III
23	711住21	「尙」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III	
24	716住10	「加 口」〔寿カ〕	須恵器 坏	体部外面	横位	墨書	III	
25	963住6	「有」	須恵器 高台付埴	底部内面		墨書	III	
10世紀前半	26	4住9	「加 寿」	須恵器 高台付埴	体部外面	横位	墨書	II
	27	64住7	「兀」	須恵器 高台付埴	体部内面	正位	墨書	III
	28	64住10	「口」	須恵器 坏	体部外面	正位	墨書	III
	29	64住11	「八田」	須恵器 高台付埴	底部内面		墨書	III
	30	461住7	「弘」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III
	31	461住13	「口」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III
	32	464住10	「口」	須恵器 坏	底部内面		墨書	III
	33	482住5	「尙」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III
	34	482住6	「尙」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III
	35	570住7	「子」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III
	36	570住8	「口」	須恵器 高台付埴	体部内面	正位	墨書	III
	37	570住9	「合」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III
	38	570住10	「田」	須恵器 坏	体部外面	正位	墨書	III
	39	596住6	「尙」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	III
	40	596住7	「弘」	須恵器 高台付埴	底部内面		墨書	III
41	663住5	「尙」	須恵器 高台付埴	体部内面	正位	墨書	III	
42	515住9	「×」	須恵器 坏	底部内面		刷書	III	
43	532住10	「凡」	須恵器 高台付埴	体部外面	正位	刷書	III	
10世紀後半	44	49住6	「口」	須恵器 坏	体部内面	正位	墨書	I
	45	40住7	「口」	須恵器 坏	体部外面	正位	墨書	I
	46	519住6	「尙」	須恵器 高台付埴	体部内面	正位	墨書	III
	47	36住7	「×」	須恵器 羽釜	口縁部外面		刷書	I
	48	590住10	「×」	須恵器 蓋	つまみ部		刷書	III

第3節 矢田遺跡出土の平安期における文字資料について

文字瓦

時期	番号	出土遺構	釈文	器種	部位	方向	類別	報告書
9世紀後半	49	1住17	「大」	丸瓦	凸面		瓦書	II
	50	188住7	「八井」	丸瓦	凸面		瓦書	I
	51	188住8	「八中寸真」	平瓦	凸面		瓦書	I
	52	189住9	「口」	平瓦	凸面		瓦書	I
	53	425住6	「口浄庵口」	平瓦	凸面		瓦書	II
9世紀	54	608住10	「卒」	平瓦	凸面		瓦書	III

訪 鋪 車

時期	番号	出土遺構	釈文	材 質	部位	方向	類別	報告書
9世紀前半	55	83住5	「牝馬 馬手 為嶋名」	滑石質蛇紋岩	下面		刻書	I
	56	679住23	「八」・「物」 八田」	滑石片岩	上面・下面		刻書	III
9世紀後半	57	12住16	「物部郷長」	滑石片岩	側面	横位	刻書	II
	58	189住11	「× 田」・「×」	滑石質蛇紋岩 (片岩的)	下面・側面		刻書	I
	59	526住11	「八」	蛇紋岩	下面		刻書	III
	9世紀	60	50住1	「八田郷 八田郷 八田郷 家郷」	滑石質蛇紋岩	側面	逆位	刻書
9世紀	61	79住17	「八田郷 八田郷 八田郷 大」	滑石質蛇紋岩	側面	逆位	刻書	I

焼 印

時期	番号	出土遺構	釈文	報告書
9世紀	62	647住37	「上」	III

第93表 墨書土器の部位・方向別の点数

部位	方向	点 数	
底部	内面	17	
	外面	8	
	内外面二ヶ所	7	
体部	内面	26	
		17	
	外面	正位	15
		横位	1
		正位	5
	横位	3	

※ 体部外面と底部内面の二ヶ所に墨書するものが1点(15)あるので、総点数は1点増しとなる。

第94表 時期別の墨書土器の部位とその点数

時期	部 位	点 数 (方向)
9世紀前半	底部 内面	1
	底部 外面	3
	底部 内外面	2
	体部 内面	0
	体部 外面	0
9世紀後半	底部 内面	4
	底部 外面	4
	体部 内面	5 (うち正位3、横位1)
	体部 外面	5 (うち正位2、横位2)
10世紀前半	底部 内面	3
	底部 外面	0
	体部 内面	10 (うち正位10)
	体部 外面	3 (うち正位2、横位1)
10世紀後半	底部 内面	0
	底部 外面	0
	体部 内面	2 (うち正位2)
	体部 外面	1 (うち正位1)

第95表 古代焼印出土例一覧

番号	遺跡名	県名	遺構	印面	印面の規模 縦×横(mm) 縦×横(寸)		材質	年代	備考
1	向原	神奈川県	竪穴住居	瓦	37×32	1.1×1.0	鉄製	9世紀後半	柄を含めた全長は187mm。
2	中原上宿	神奈川県	不明	井	33×22	1.0×0.7	鉄製	不明	柄を含めた全長は230mm。 「井」の墨書土器が出土。
3	北坂	埼玉県	竪穴住居	中	51×34	1.5×1.0	鉄製	9世紀後半	柄の末端は欠損している。残存長は97mm。 印面は鏝による打ちぬき鍛造。 「中」の墨書土器が出土。
4	落川	東京都	土坑	土	57×81	1.7×2.5	鉄製か	不明	「土」の墨書土器が出土。
5	上村田小中	茨城県	竪穴住居	土	77×82	2.3×2.5	鉄製	9世紀以降	全長330mm。柄は袋状を呈する。
6	荒砥洗橋	群馬県	竪穴住居	土	58×52	1.9×1.7	鉄製	10世紀前半	柄の末端は欠損している。残存長216mm。 「大上」「大穂長」などの墨書土器が出土。
7	八木瀬荒畑	群馬県	竪穴住居	?	約30×30	約1×1	鉄製	8世紀末～ 9世紀前半	「水」「連」などの墨書土器出土。寺院跡。 残存長132mm。
8	矢田	群馬県	竪穴住居	土	40×35	1.3×1.2	鉄製	9世紀後半	残存長108mm。

■徳江秀夫 「荒砥洗橋遺跡出土の文字資料の標相」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』1989年)所収の表の一部加筆

第4節 小 結

「甘葉の谷」あるいは「かぶらの谷」と呼ばれる鍋川流域に発達した河岸段丘上、殊に矢田遺跡の立地する上位段丘上は県内でも有数の遺跡地帯とされていた。今回の間越道上越線の建設に伴う発掘調査は、その遺跡地帯に巨大なトレンチが設定されたと言え、埋蔵文化財に関する情報量を飛躍的に増大させ、多くの成果が報告されつつある。

矢田遺跡の調査対象面積は約9万㎡におよび、発掘調査は昭和61年度より開始され平成3年度まで、一時中断はあるものの、都合六年度にわたって行われた。その間、「矢田遺跡」平安時代住居跡編(1)として95軒、「矢田遺跡II」平安時代住居跡編(2)として85軒が報告され、今回の91軒を加えると平安時代の竪穴住居跡に関しては報告が完結した。集落全体の考察については、該期の掘立柱建物跡、溝、土壇等が未整理であるので、整理が終了した段階で検討する予定であるが、そうした中で、昨年度に引き続き玉稿をお寄せ頂いた諸先生方にまず感謝したい。

今年度も、土器への墨書・刻書、瓦への刻書、石製紡錘車への線刻、焼印等各種の文字資料の出土が認められるが、顕著な遺物としては、679号住居跡から出土した石製紡錘車があげられる。広面に「物Ⅱ(部)・八田」、狭面に「八」と刻まれており、特に12号住居跡出土の「物部郷長」(昨年度報告)と地点を異にして「物Ⅱ(部)」が発見されたことは、集落の居住者に関する情報を補強するとともに、鍋川流域を中心に濃密に分布する奈良・平安時代の「物部」に関する資料を、更に積み重ねる形となった。また同じ住居跡から出土した土師器環の底部内・外面に「八」という墨書が認められるが、紡錘車との共伴により、「八」が単なる記号ではなく、何らかの意味をもつ文字である可能性もでてきたのである。なお、線刻紡錘車は未報告3点を含め合計で10点を数える。

整理途上で、気付いた点について列記してみよう。

◎遺構の確認されない地域について

矢田遺跡では、支谷などの地形的な制約を受けたと思われる地域以外に、各時代を通じ遺構の認められない地域が存在する。境界あるいは、立木・畑等様々な可能性が考えられるが、注意を要する。

◎生産域について

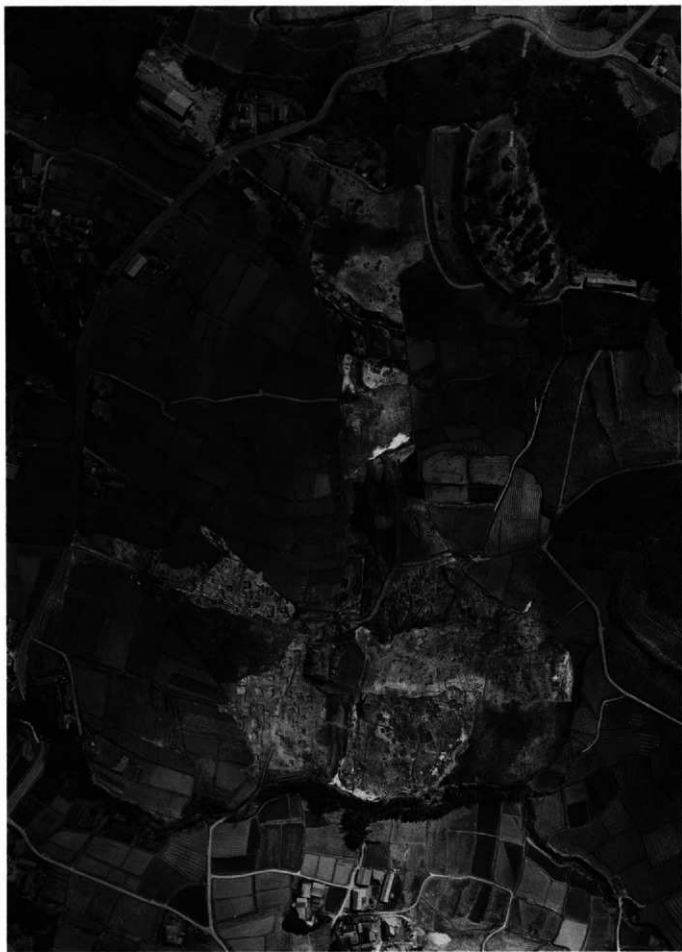
上越線開通でも、条件の揃った地域では、水田遺構が確認されているが、ほぼ同じ地形を呈する矢田遺跡において確認されていない理由はなぜか。集落内部での畑作地も含め、別途その意味を考える必要がある。これらの事は、既に指摘されている事ばかりであり、今後の整理にあたっては、より慎重な遺構・遺物の分析は勿論、蓄積された資料をもとに当時の地域の様相と、広大な台地上で生活した人々の姿を正しく導き出して行く責務があると考える。

最後に、関係各機関はもとより、酷暑や極寒の中で実際の調査に従事した発掘作業員及び、遺構・遺物の整理作業に携わった整理補助員等多くの方々の協力を謝意を表しまとめたい。

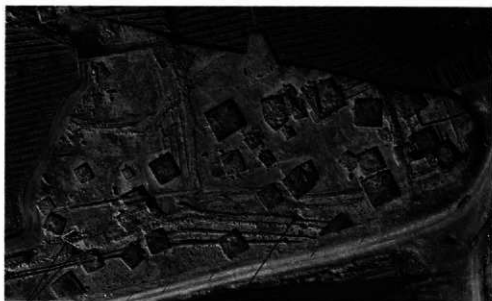
矢田遺跡関係出版文献

- ・鬼形芳夫 中沢啓 内木真琴「吉井町矢田遺跡出土の文字資料について」『群馬文化』209 群馬県地域文化研究協議会 1987
- ・中沢 春山 関口 功一「古代布生産と在地社会—矢田遺跡出土紡錘車の分析を通して」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- ・中沢 春山 関口「矢田遺跡」とその周辺—天平十三年に多古郡に居た【上毛野朝臣】の領土 41-3 1989
- ・「矢田遺跡」平安時代住居跡編(1) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- ・「矢田遺跡II」平安時代住居跡編(2) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991

写 真 图 版



矢田遺跡全景航空写真 (天は東)



第7次調査区航空写真(天は東)



第8次調査区航空写真(天は東)



第9次調査区航空写真(天は北)



51号住居跡全景 (西から)



51号住居跡竈 (西から)



52号住居跡全景 (西から)



52号住居跡竈 (西から)



52号住居跡竈セクション (西から)



55号住居跡全景 (西から)



55号住居跡掘り方全景 (西から)



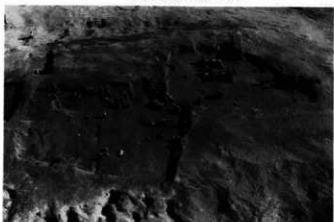
57号住居跡全景 (西から)



57号住居跡窟 (南から)



57号住居跡窟 (西から)



63号・64号住居跡全景 (西から)



63号住居跡窟付近遺物出土状況 (西から)



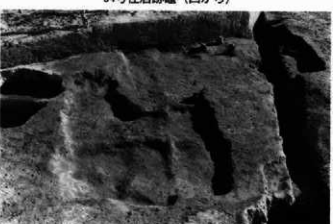
63号・64号住居跡掘り方全景 (西から)



64号住居跡窟 (西から)



64号住居跡貯蔵穴 (西から)



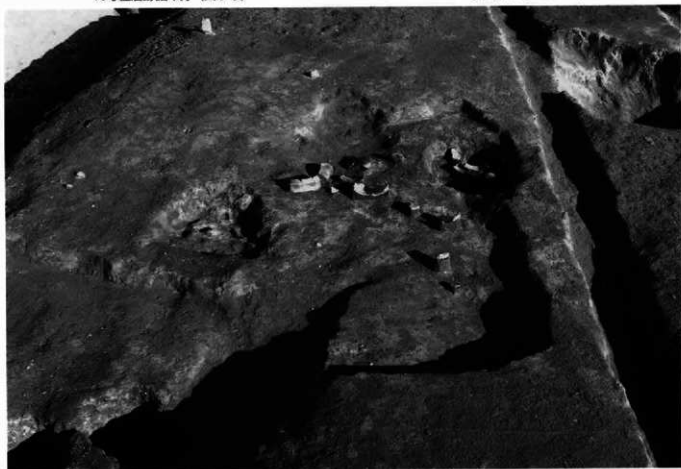
66号・69号住居跡全景 (西から)



70号住居跡掘り方 (西から)



71号住居跡竈 (西から)



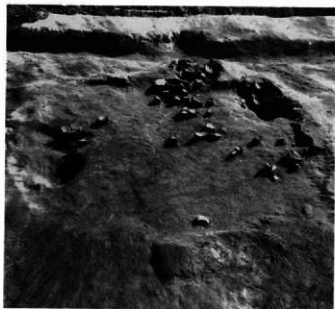
72号住居跡全景 (西から)



72号住居跡竈 (西から)



72号住居跡貯蔵穴 (西から)



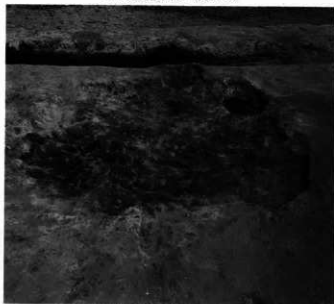
151号住居跡全景 (西から)



151号住居跡竈 (南から)



151号住居跡貯蔵穴 (西から)



151号住居跡掘り方全景 (西から)



154号住居跡全景 (北西から)



154号住居跡竈 (西から)



154号住居跡竈（西から）



154号住居跡掘り方全景（南から）



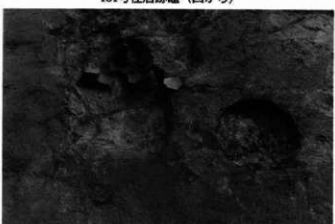
181号住居跡全景（西から）



181号住居跡竈（西から）



223号住居跡竈、貯蔵穴セクション（西から）



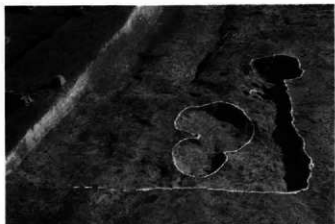
223号住居跡竈、貯蔵穴（西から）



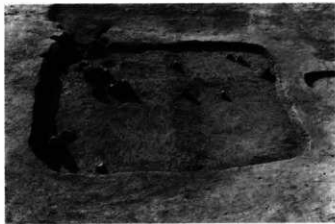
244号住居跡全景（西から）



244号住居跡貯蔵穴（西から）



244号住居跡掘り方全景 (西から)



313号住居跡全景 (北から)



318号住居跡全景 (西から)



398号住居跡竪断セクション (西から)



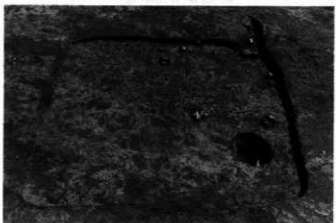
398号住居跡竪断セクション (北から)



398号住居跡竈 (西から)



397号・398号住居跡掘り方全景 (西から)



428号住居跡全景 (西から)



428号住居跡竈 (西から)



428号住居跡貯蔵穴 (西から)



430号住居跡全景 (西から)



430号住居跡竈セクション (南から)



435号住居跡全景 (南から)



435号住居跡電セクション (西から)



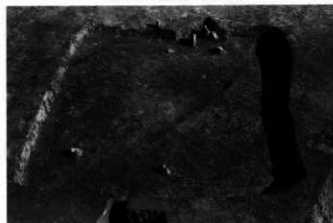
435号住居跡掘り方全景 (南から)



449号住居跡全景 (西から)



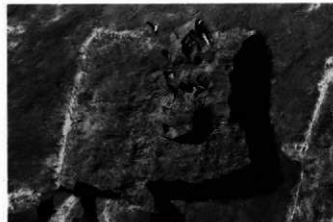
449号住居跡竈 (西から)



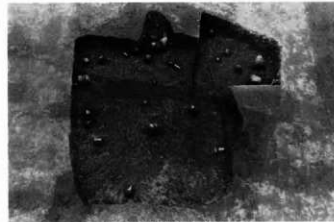
451号住居跡全景 (西から)



451号住居跡竈 (西から)



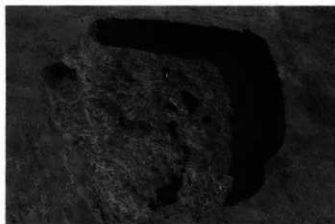
451号住居跡掘り方全景 (西から)



454号住居跡全景 (西から)



454号住居跡竈（西から）



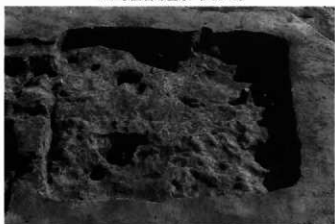
454号住居跡掘り方（西から）



457号住居跡全景（西から）



457号住居跡竈（西から）



457号住居跡掘り方全景（西から）



459号住居跡セクション（西から）



459号住居跡竈（西から）



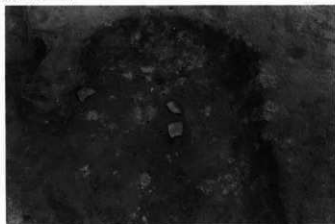
459号住居跡掘り方全景（西から）



461号住居跡全景（西から）



461号住居跡遺（西から）



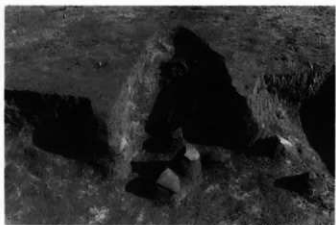
461号住居跡黒書土器出土状況（西から）



461号住居跡黒書土器出土状況（西から）



464号住居跡全景（西から）



464号住居跡竈 (西から)



464号住居跡掘り方全景 (西から)



465号住居跡全景 (西から)



465号住居跡竈 (西から)



465号住居跡遺物出土状況 (東から)



465号住居跡掘り方全景 (西から)



475号住居跡全景 (西から)



475号住居跡窟 (西から)



475号住居跡窟 (北西から)



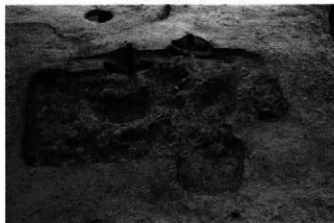
475号住居跡窟 (南から)



476号住居跡全景 (西から)



476号住居跡窟 (西から)



475号・476号住居跡掘り方全景 (西から)



477号住居跡全景 (西から)



479号住居跡全景 (西から)



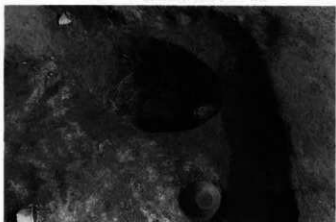
479号住居跡竈 (西から)



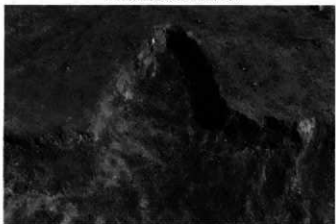
482号・483号住居跡全景 (西から)



482号住居跡竈 (西から)



482号住居跡貯蔵穴 (西から)



483号住居跡電掘り方 (西から)



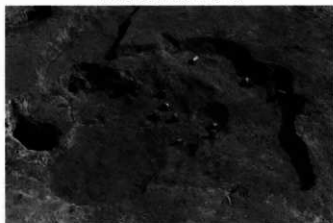
482号・483号住居跡掘り方全景 (西から)



495号住居跡全景 (西から)



495号住居跡電 (西から)



512号住居跡全景 (西から)



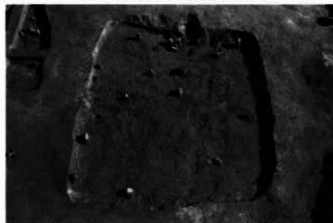
512号住居跡電セクション (西から)



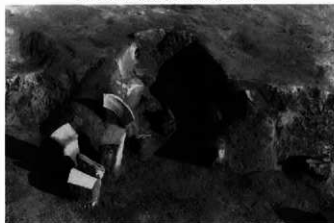
512号住居跡遺物出土状況 (東から)



512号住居跡掘り方全景 (西から)



513号住居跡全景 (西から)



513号住居跡電 (西から)



513号住居跡遺物出土状況（南から）



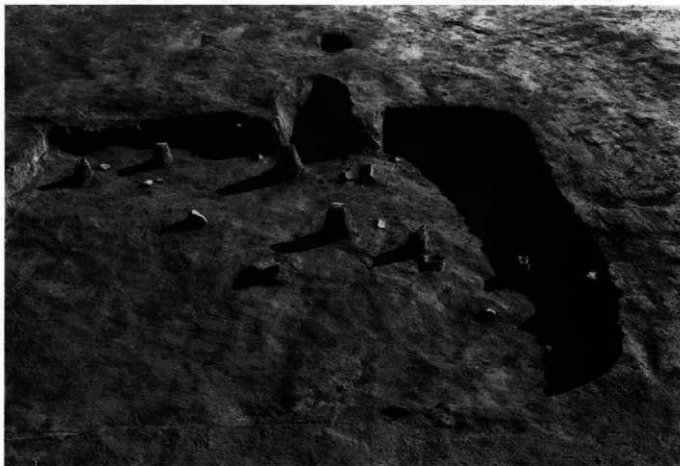
514号住居跡全景（西から）



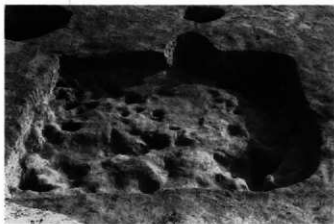
515号住居跡縦断面（西から）



515号住居跡縦断面（南から）



517号住居跡全景（西から）



517号住居跡掘り方全景 (西から)



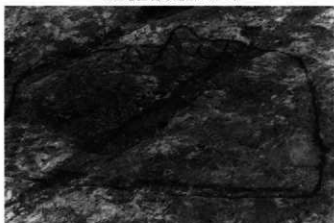
519号住居跡全景 (西から)



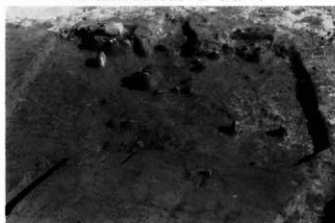
519号住居跡竪 (西から)



519号住居跡竪セクション (西から)



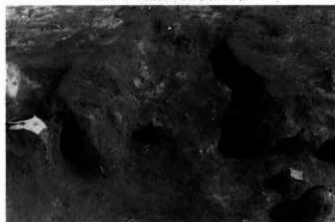
525号住居跡全景 (西から)



526号住居跡全景 (西から)



526号住居跡遺物出土状況 (北から)



526号住居跡竪全景 (西から)



530号住居跡全景（西から）



530号住居跡電振り方（西から）



530号住居跡掘り方全景（西から）



531号住居跡全景（西から）



532号住居跡全景（西から）



532号住居跡遺物出土状況（北から）



532号住居跡窟（西から）



535号住居跡全景（西から）



535号住居跡遺物出土状況（南から）



535号住居跡旧竈セクション（西から）



535号住居跡旧竈掘り方 (西から)



535号住居跡新竈 (西から)



535号住居跡新竈掘り方セクション (南から)



535号住居跡掘り方全景 (西から)



549号住居跡全景 (西から)



549号住居跡竈 (西から)



549号住居跡貯蔵穴 (南から)



549号住居跡掘り方セクション (南から)



554号住居跡全景 (西から)



563号住居跡全景 (西から)



563号住居跡旧竈 (西から)



563号住居跡新竈 (西から)



563号住居跡掘り方全景 (西から)



568号住居跡全景 (西から)



568号住居跡竈 (西から)



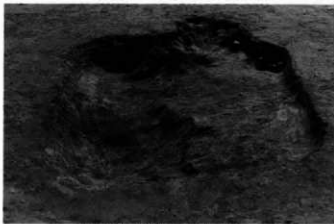
570号住居跡全景（西から）



570号住居跡遺物出土状況（東から）



570号住居跡貯蔵穴（西から）



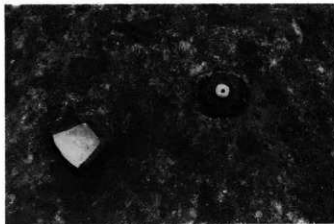
570号住居跡掘り方全景（西から）



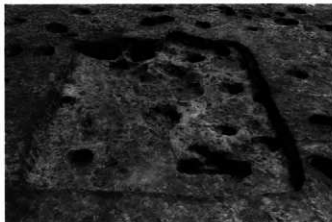
585号住居跡全景（西から）



585号住居跡竈 (西から)



585号住居跡遺物出土状況 (西から)



585号住居跡掘り方全景 (西から)



586号住居跡掘り方全景 (西から)



590号住居跡全景 (西から)



590号住居跡竈 (西から)



590号住居跡電セクション (西から)



590号住居跡掘り方全景 (西から)



595号・596号住居跡全景（西から）



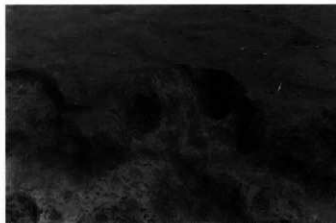
595号・596号住居跡遺物出土状況（南から）



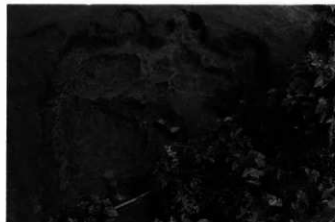
595号住居跡竈（西から）



596号住居跡竈付近（西から）



596号住居跡竈掘り方（西から）



595号・596号住居跡掘り方 (西から)



600号住居跡全景 (西から)



600号住居跡竪 (西から)



600号住居跡竪掘り方 (西から)



600号住居跡掘り方全景 (西から)



600号住居跡全景 (西から)



621号住居跡全景 (西から)



622号住居跡全景 (西から)



622号住居跡竈（西から）



622号住居跡掘り方全景（西から）



624号住居跡全景（西から）



624号住居跡竈セクション（西から）



646号・647号住居跡全景（西から）



646号住居跡掘り方（西から）



647号住居跡竈付近遺物出土状況（西から）



647号住居跡竈（西から）



651号住居跡全景（西から）



651号住居跡竈（南から）



652号住居跡全景（西から）



652号住居跡竈（西から）



652号住居跡掘り方（南から）



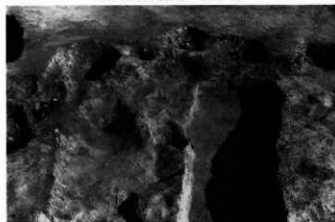
653号住居跡セクション (南から)



654号住居跡全景 (西から)



654号住居跡遺 (西から)



654号住居跡掘り方全景 (西から)



656号住居跡全景 (西から)



656号住居跡竈（西から）



656号住居跡竈付近遺物出土状況（北から）



656号住居跡掘り方全景（西から）



656号住居跡全景（西から）



657号住居跡竈セクション（南から）



661号住居跡全景（西から）



661号住居跡竈付近（北から）



661号住居跡竈（西から）



662号住居跡全景 (西から)



662号住居跡竈全景 (西から)



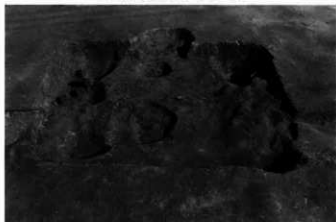
662号住居跡貯蔵穴 (西から)



663号住居跡全景 (西から)



663号住居跡竈 (西から)



663号住居跡掘り方全景 (西から)



664号住居跡掘り方全景 (西から)



664号住居跡竈セクション (南から)



667号住居跡全景（南から）



667号住居跡窠（南から）



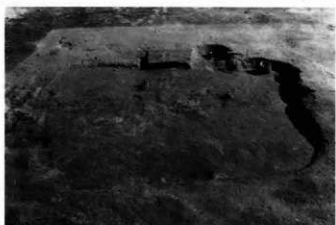
670号住居跡全景（西から）



670号住居跡窠付近遺物出土状況（西から）



670号住居跡掘り方全景（西から）



675号住居跡全景（西から）



675号住居跡電（西から）



676号住居跡電セクション（南から）



675号・676号住居跡掘り方全景（西から）



679号住居跡全景（西から）



679号住居跡新旧窟 (西から)



679号住居跡新窟 (西から)



679号住居跡掘り方全景 (西から)



684号住居跡全景 (西から)



684号住居跡窟 (西から)



684号住居跡掘り方 (西から)



684号住居跡遺物出土状況 (南から)



684号住居跡掘り方全景 (西から)



697号住居跡全景 (西から)



697号住居跡全景 (西から)



697号住居跡縦セクション (西から)



704号住居跡全景 (南から)



711号住居跡全景 (南から)



711号住居跡竈 (南から)



711号住居跡竈 (南から)



711号住居跡竈掘り方 (南から)



711号住居跡遺物出土状況 (北から)



716号住居跡全景 (西から)



716号住居跡竈 (西から)



716号住居跡竈 (北から)



720号住居跡竈 (西から)



716号住居跡掘り方全景 (西から)



720号住居跡全景 (西から)



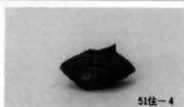
747号住居跡竈セクション (西から)



747号住居跡竈セクション (北から)



747号住居跡全景 (西から)

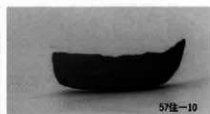




57住-1



57住-6



57住-10



57住-8



57住-11



57住-9



60住-1



63住-1



64住-2



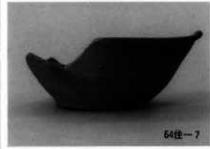
60住-5



63住-8



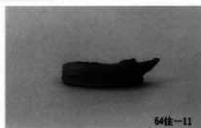
64住-3



64住-7



64住-9



64住-11



64住-8



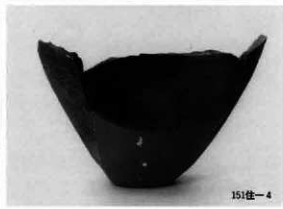
66住-1

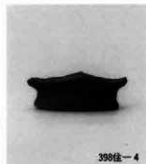
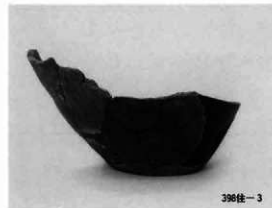
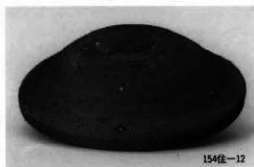


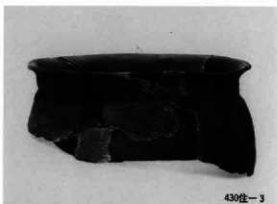
69住-1

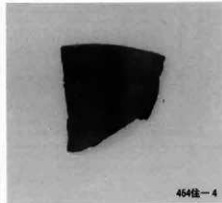
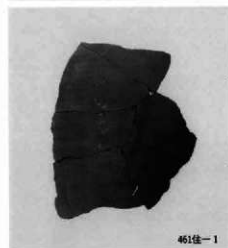
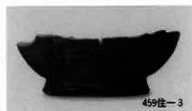
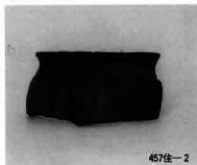


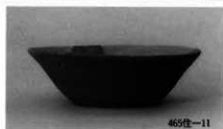
71住-1

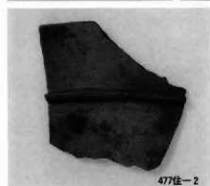
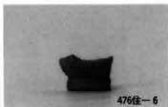
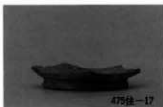


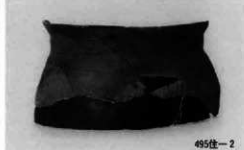
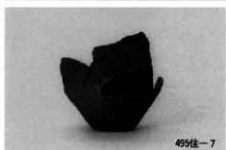
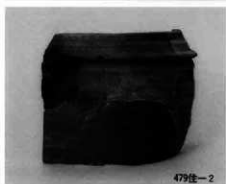
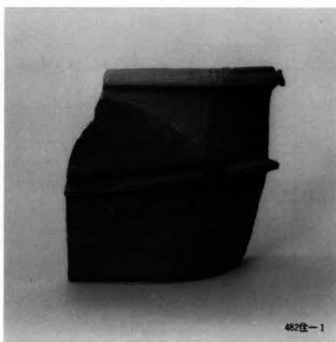














495住-1



495住-10



495住-11



495住-12



495住-14



495住-18



495住-16



495住-19



512住-7



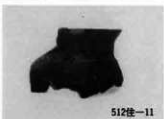
512住-8



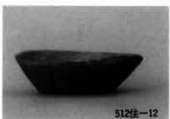
512住-1



512住-4



512住-11



512住-12



512住-15



512住-16



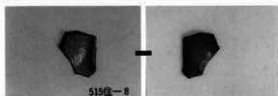
512住-17

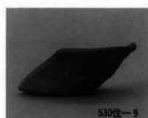


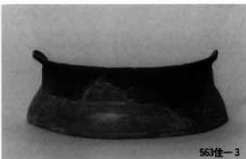
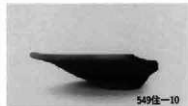
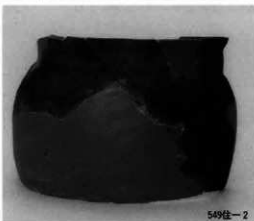
512住-18



512住-21









563住-17



563住-18



563住-21



563住-20



570住-3



568住-3



568住-4



570住-1



570住-7



570住-11



570住-22



570住-8



570住-12



570住-18



570住-9



570住-13



570住-23



570住-10



570住-14



570住-24



570住-25



585住-3



585住-4



590佳-2



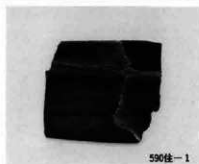
590佳-6



590佳-3



590佳-4



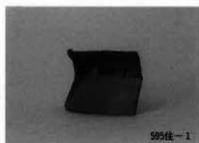
590佳-1



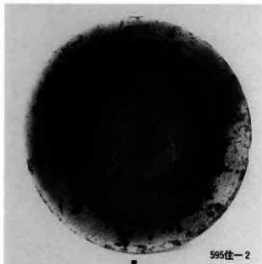
590佳-7



590佳-10



595佳-1



595佳-2



596佳-2



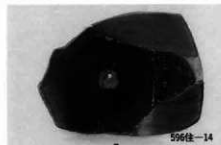
596佳-3

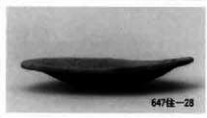
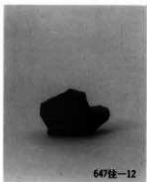
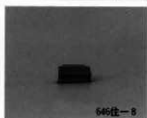
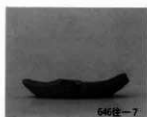


595佳-4



596佳-4







651佳-1



651佳-2



651佳-4



651佳-6



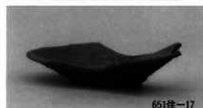
651佳-7



651佳-8



651佳-15



651佳-17



651佳-18



651佳-19



652佳-1



653佳-1



653佳-2



652佳-3



653佳-4



654佳-2



653佳-5



654佳-5



656佳-6





663住-1



663住-3



663住-5



664住-1



664住-9



664住-7



664住-10



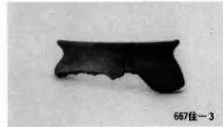
664住-11



667住-1



667住-2



667住-3



667住-4



667住-5



667住-7



667住-11



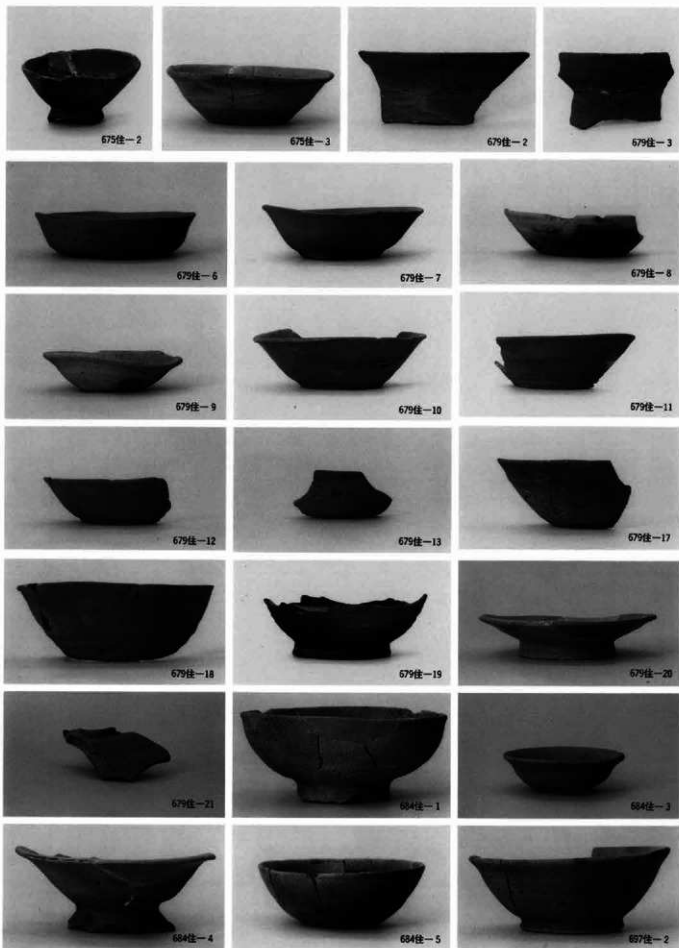
667住-12



670住-1



670住-2





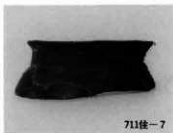
711佳-1



711佳-2



711佳-4



711佳-7



711佳-5



711佳-9



711佳-10



711佳-11



711佳-12



711佳-13



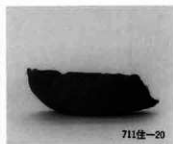
711佳-14



711佳-16



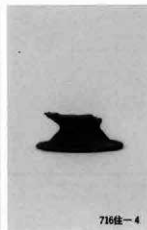
711佳-18



711佳-20



716佳-3



716佳-4



716佳-6



716件-1



716件-2



716件-5



716件-7



716件-8



716件-9



716件-10



716件-11



716件-12



716件-13



716件-14



716件-18



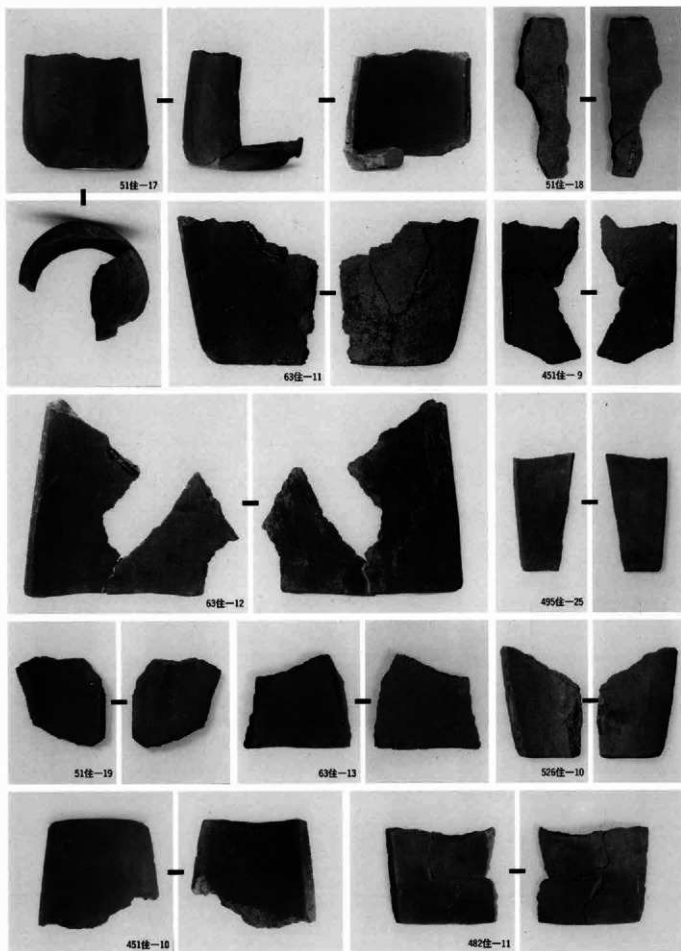
716件-20

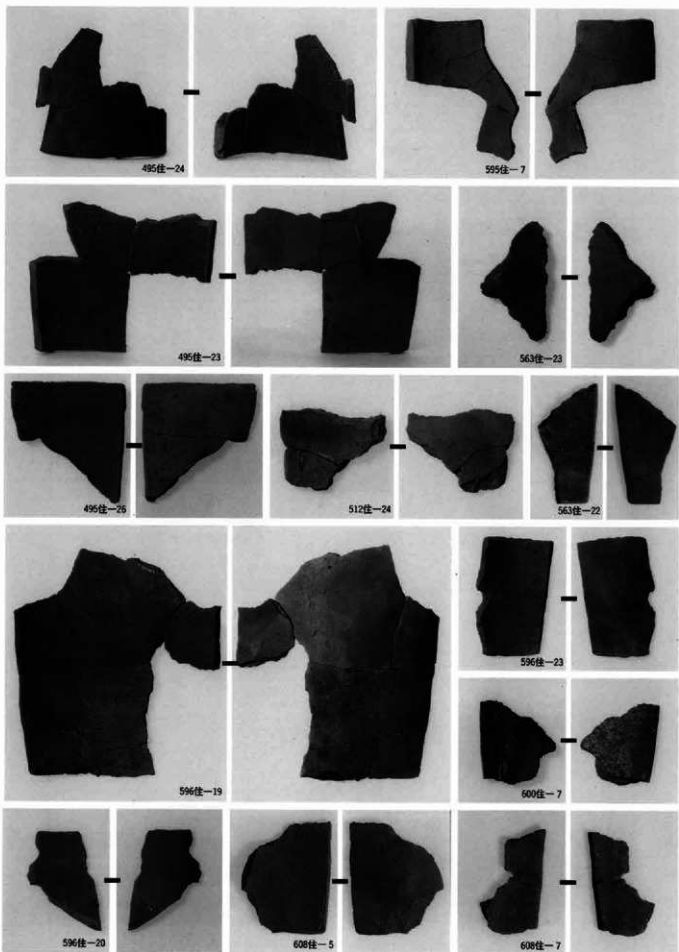


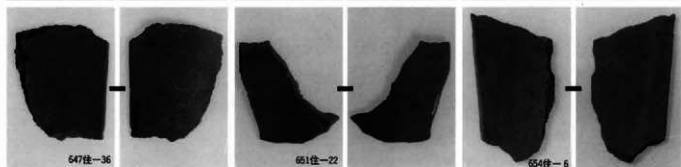
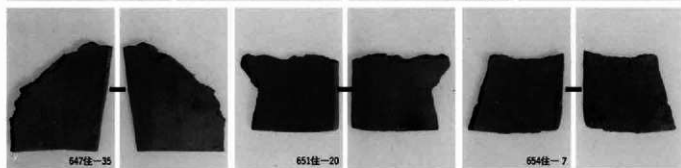
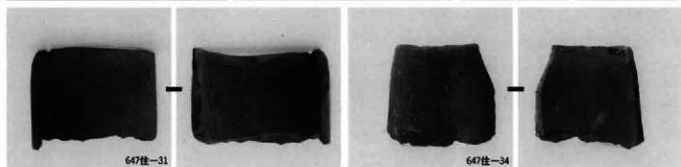
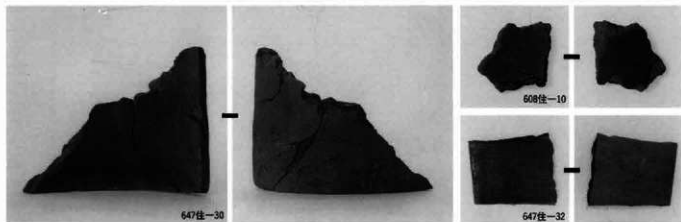
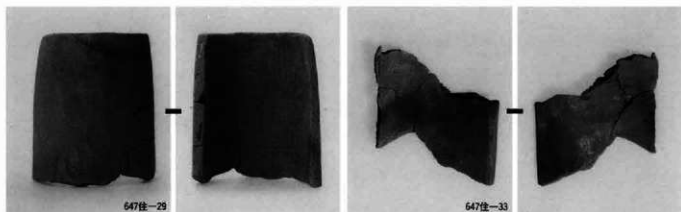
747件-2

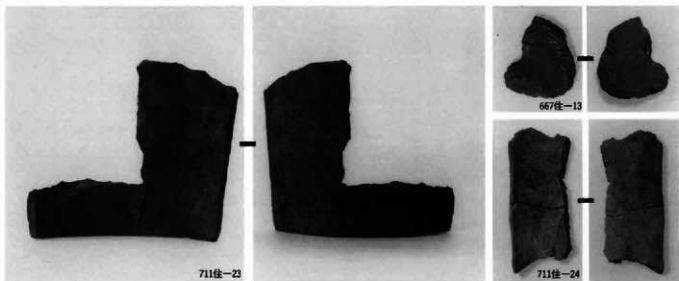
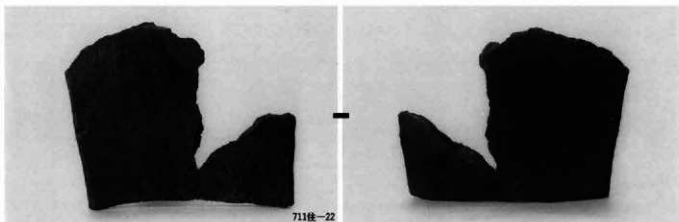
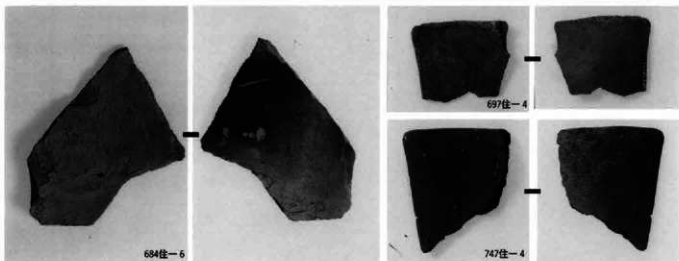
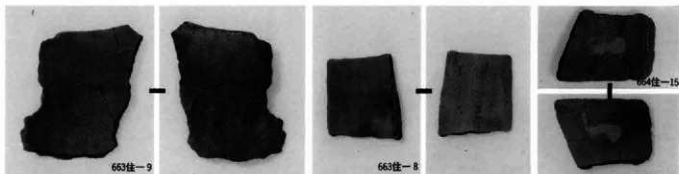


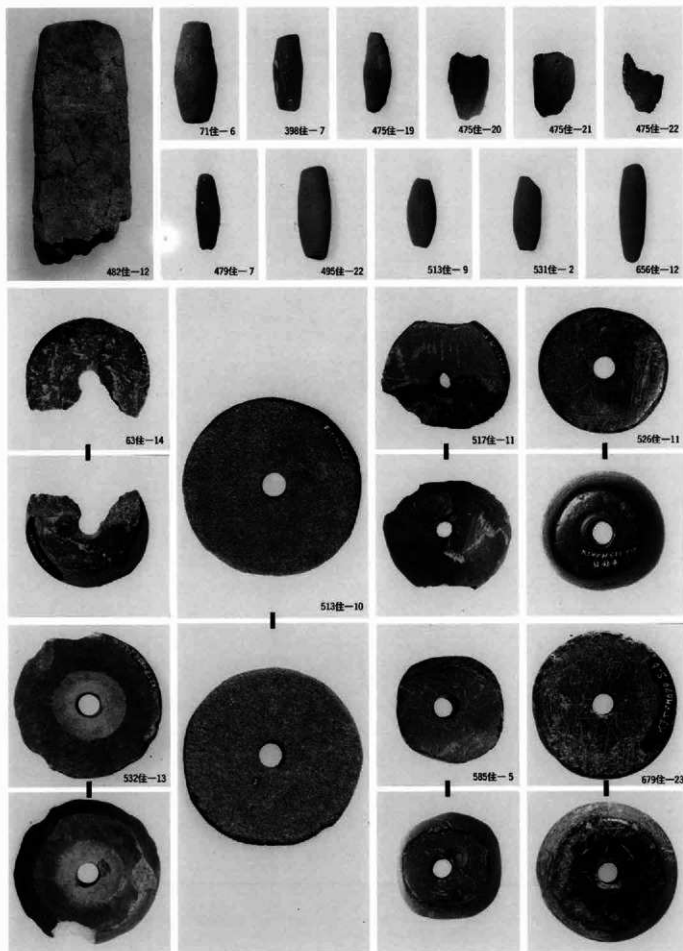
747件-1

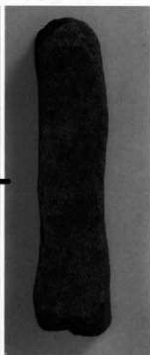
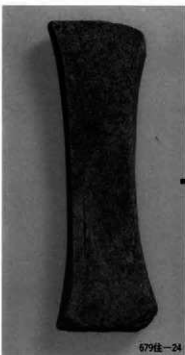


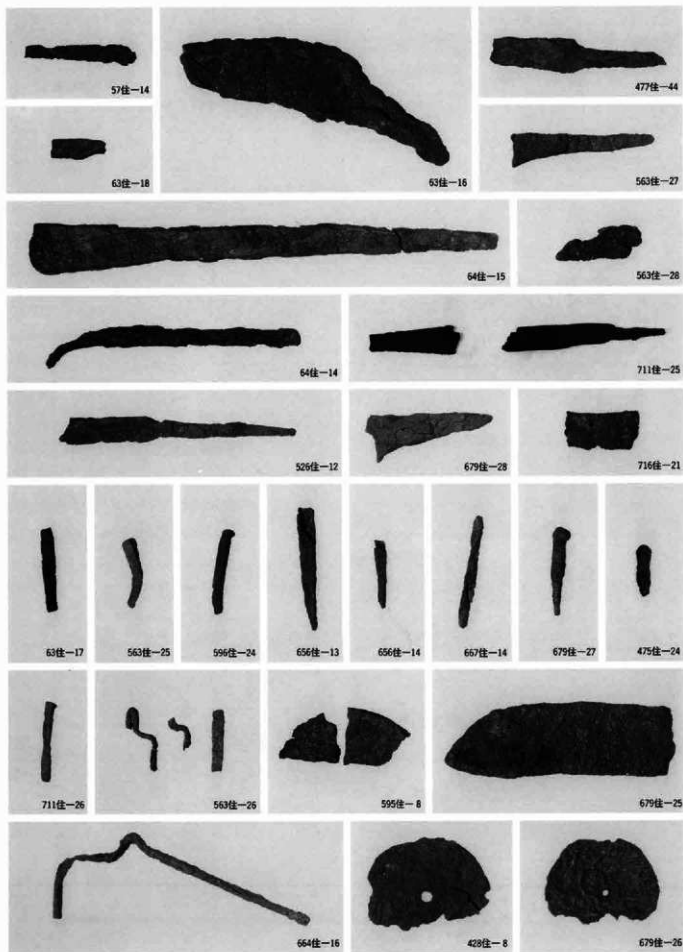


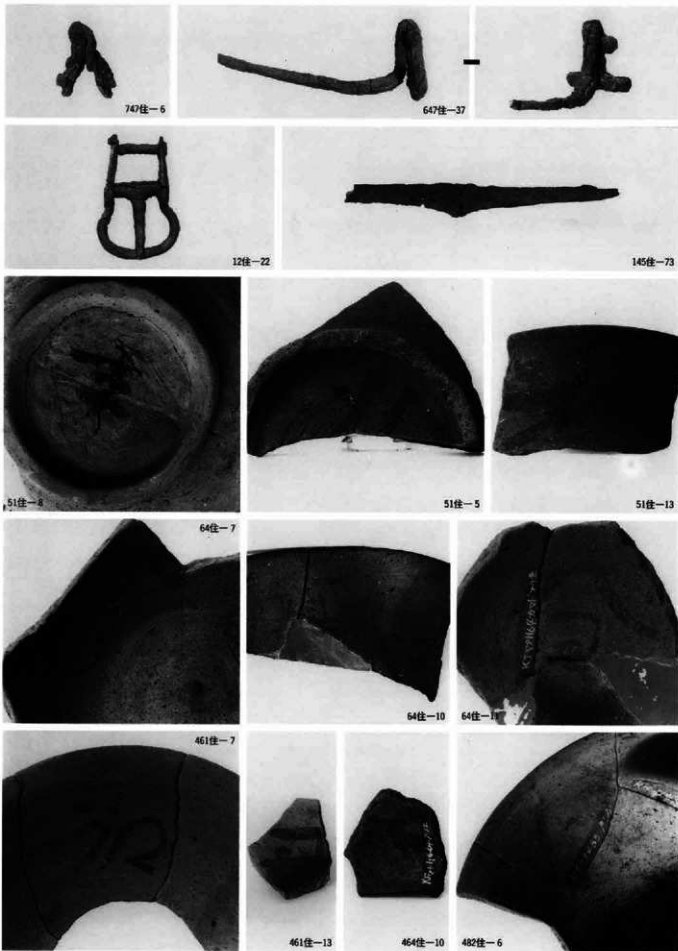


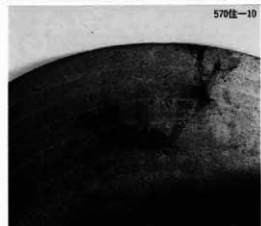
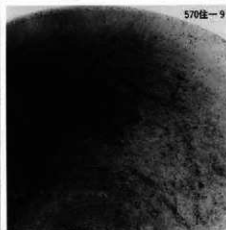
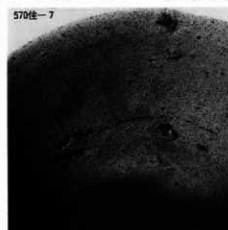
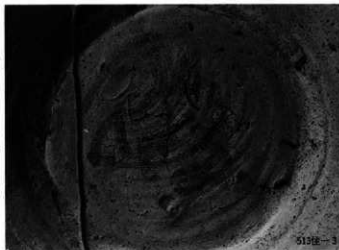










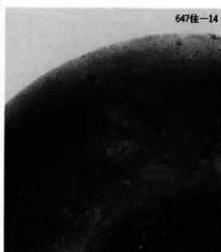




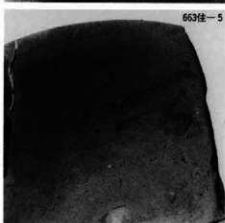
596住-7



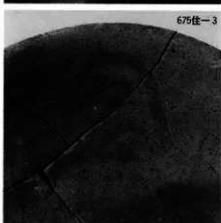
600



647住-14



663住-5



675住-3



711住-21



679住-6



711住-9



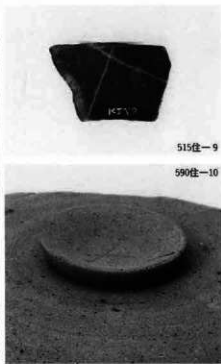
711住-12



716住-10



608住-10



515住-9

590住-10



532住-10



563住-6



526住-11



679住-23



647住-37



群馬県埋蔵文化財調査事業(正)
調査報告第133集

矢田遺跡Ⅲ

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第9集

平成4年3月21日 印刷

平成4年3月27日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北碓村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北碓村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



矢田遺跡遺構分布図(1/1000)平成2年12月末現在



矢田遺跡遺構分布図(1/1000)平成3年12月末現在